front mission 3 PERFECT WORKS スクウェア公式 フロントミッションサード 設定資料集

DigiCube

front mission 3

スクウェア公式 フロントミッション サード 設定資料集

PERFECT WORKS



front mission 3
フロントミッション サード

The structure of the weapon,
Stage background,
Hidden story,
Other side of the person,
The world of [front mission 3] complemented now.

ISBN4-925075-66-7

C0076 ¥3500E

9784925075664

1920076035005



DigiCube

株式会社デジキューブ 定価(本体3,500円+税)

ISBN4-925075-66-7
C0076 ¥3500E
9784925075664
1920076035005



SQUARESOFT

DigiCube
株式会社デジキューブ 定価（本体3,500円＋税）

front mission 3 PERFECT WORKS スクウェア公式 フロントミッション サード 設定資料集

DigiCube

front mission 3

スクウェア公式 フロントミッション サード 設定資料集

PERFECT WORKS



front mission 3
フロントミッション サード

The structure of the weapon,
Stage background,
Hidden story,
Other side of the person,
The world of [front mission 3] complemented now.

front mission 3 PERFECT WORKS スクウェア公式 フロントミッションサード 設定資料集

DigiCube


02



SQUARESOFT

DigiCube

ISBN4-925075-66-7



SQUARESOFT

DigiCube

ISBN4-925075-66-7

front mission 3 PERFECT WORKS スクウェア公式 フロントミッションサード 設定資料集

DigiCube

front mission3
PERFECT WORKS



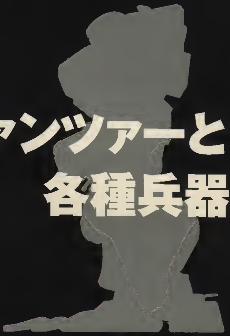


人類は何も学ばない

CONTENTS

Ema & Alisa





ヴァンツァーと各種兵器

概念と構造

プレイヤーが操るユニットであるとともに
物語、世界観の大きな要ともなっている
ヴァンツァー（WAP）
この兵器はいかにして生まれ
いかにして戦い
どこへ向かおうとしているのか
他の兵器の現状を探ると同時に
考察していく

人型機動兵器の開発と誕生

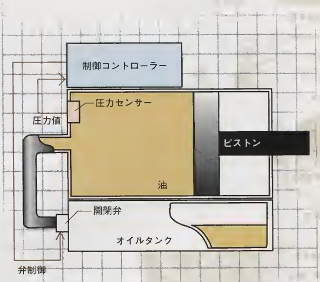
基礎技術の発展

映画やアニメーションなどで登場する人型ロボットは技術的に不可能と思われがちだが、現在ある技術を発展・応用すれば十分実現可能なレベルにまできているといっても良い。実際に自動車メーカー最大手の本多技研では、まだまだぎこちない動きではあるが、2足歩行ロボットを既に完成させてしまっている。また、ソニーでも4足ながら自律行動のできる小型ロボットを市販するまでに至っている。今から10年前までは実現不能と思われた人型ロボットだが、1990年代以降のコンピューター技術と人間工学(ロボット工学)の急速な進歩により、空想物語は現実のものになろうとしている。雛型さえできてしまえば、あとはそれを発展させて信頼性などを向上させていけば良い。人間の動きを再現する各部の部品は、基本概念は概ね完成の域に達している。例えば工業用アームは人の腕と同様の動きをし、5本指のマニピュレーターは研究段階だがピアノを弾けたり、カップを持ち上げたりするものが存在する。脚部に関しては腕の機構の応用で対処できるが、ヴァンツァーの場合は上半身の重量に耐える構造などが大きな課題であった。

■間節と筋肉の機能を持つアクチュエーター

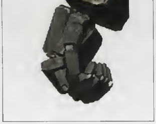
アクチュエーターとはセンサーが取り込む情報(信号)により、電子制御によってモーターを動かしたりバルブを開閉する駆動機構のことをいう。コンピューター処理によって細かく、かつ正確に機械的動作を行えるところから高い評価を受けて、ハードディスクのヘッド駆動や自動車のサスペンションと、我々の生活に密着した製品に使われている。

ドイツ国立ヴァレンシュタイン大学ロボット工学科教授のランドルト教授は、ロボットの間節として有望なアクチュエーターの性能に注目し、自身の研究課題をアクチュエーターの機能洗練に絞った。時を同じくしてドイツの作業機器メーカー「シュネッケ社」は、「人間と同じ動きをする作業機械」という構想を掲げた。学会でランドルト教授の論文を聞いたシュネッケ社の社長は、教授に対して同社の理念を熱く語り資金援助を約束した。それから数年後の西暦2000年に、博士はアクチュエーターに革命的性能向上をもたらす、新しい特殊素材と新機軸構造の研究成果を世界に発表した。





[作業用ヴァンツァー]
建設資材やコンテナを運ぶ程度の作業には簡単な構造で充分。ひとつだけ関節を設けて、複雑な作業に対する余裕をもたせている。



[戦闘用ヴァンツァー]
細かい作業や様々な動作ができるよう、人間の手と同じ構造を採用している。関節が多く強度の点で多少の問題が残っている。

■5本指を再現するマニピュレーター

マニピュレーターは人間の手(指)の機能を代用するものである。マニピュレーターと言えば人間と同じ5本指を想像しがちだが、使用目的が限定されているのであれば、何も構造が複雑な5本指にする必要はない。たとえば物を"つかむ"だけであれば指は2本あればよく、工業用アームや深海潜水艇では、関節のない指が2本のみのマニピュレーターを使用している。細いものを"つまむ"のであれば、構造上は関節を1ヶ所でも設ければ良い。機材運搬など単純作業用ヴァンツァーは細かい作業を要求されないことから、指は2~3本程度で無関節か単関節のタイプを装備している。

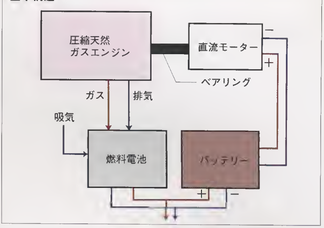
人間の手はその多指多関節ゆえに、あらゆる作業を行えるようになっている。戦闘用ヴァンツァーの多くが5本指タイプを採用しているのは、戦場で故障・損傷した場合に、自己もしくは僚機が修理・整備できたり、武器の分解・整備・組み立てなど、精密な作業を行えるようにしたためだ。もちろん土木・建設も作業用ヴァンツァーと同等か、それ以上の働きを見せる。

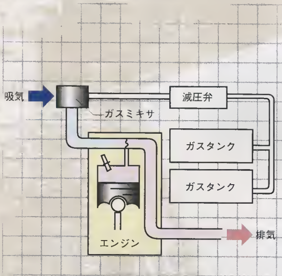
■消費と生成を繰り返す半永久機関

ヴァンツァー用のエンジンには、ガソリンエンジン、ハイブリッドエンジン、天然ガス(水素)エンジンが使われている。設計段階ではバッテリーのみという機種もあったが、出力不足・持続力不足で採用されなかった。20世紀末からの先進各国におけるガソリン機関の排ガス規制により、メーカー各社は新時代のエンジン開発に乗り出し、ハイブリッドエンジンなどを次々に商品化していった。ヴァンツァー用としても採用されたが、燃料タンクに割ける容積に制約があり、航続距離の不足という問題が常につきまとっていた。

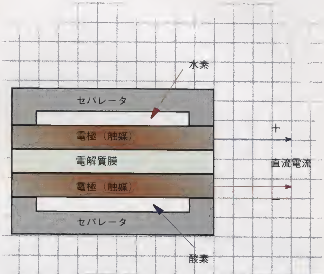
そこで従来の技術を使いながらも、それらの構造をうまく利用して造り上げられたのが半永久機関だ。主機関として圧縮天然ガスエンジンが使われ、モーターを回転させて発電し、電力をバッテリーに充電。同時に燃料から水素を抽出、外気の酸素とともに燃料電池にて電力を発生させる。普段は後者の電力を使い、燃料がなくなると前者の電力を使う。バッテリーの電流は燃料電池内で水素を生み出し、これを使って再びエンジンを回す仕組みになっている。しかしその水素量に限界があるために半永久なのである。

基本構造





[圧縮天然ガスエンジン]



[燃料電池]

WAWの誕生

先進的アクチュエーターの開発に成功した、ランドルト教授とシュネッケ社はこれに自信を持ち、西暦2020年にいよいよ「人間と同じ動きをする作業機械」の製作に取り組み出す。国の内外を問わず関係者からは失笑を買っただけだったが、5年の歳月を費やして遂にヴァンツァーの前身であるWAW(ヴァンドルングヴァーゲン)を完成させた。ところが今度はその多額の研究開発費がシュネッケ社の財政を圧迫。同社は各国政府に売り込みと資金援助を求めたが、WAWの性能が低いために思うようにいかなかった。しかしUSNの軍需メーカー「ディアブルアビオニクス社」だけは、WAWには絶対的な将来性があると評価して、シュネッケ社に対して協力を申し出た。このときディアブルアビオニクス社は、軍より地雷処理目的の極限作業用車両の開発を依頼されており、WAWの技術が応用できるのではと考えていたのである。

西暦2027年には両社の共同開発で地雷処理用試作機が完成。軍の評価試験において完璧な作業を行い絶大な評価を得たが、1機あたりのコストが軍の要求を超過しており、これが問題となり導入計画は先送りとなった。

[地雷処理用WAW]



◀世界初の軍用ヴァンツァー（WAW）となったLW-16。地雷の破裂片から防護するため装甲が厚い。

軍用への歩み

■統一規格の策定

生産コスト超過の問題に対してシュネッケ、ディアブルアビオニクス両社は、 WAWを胴・腕・脚・コンピューターのパーツに分割して、それぞれのインターフェイスを完全に統一する規格を提案。世界の有力工業メーカーに発表した。両社の狙いはインターフェイスの統一により、異なるメーカーのパーツを組み合わせても正常に動作できるようにし、各メーカー間の競争による市場原理で、パーツあたりのコストを下げようというものだったのだ。

この呼びかけに対してECセンダー社とOCUジェイドメタル社も参画して、統一規格の策定作業が進められた。仕様のそこかしこに各社の思惑が多少見え隠れするものの、西暦2029年には世界共通規格「MULS(Multi Unit Link System」が策定・発表された。4社が分担開発したパーツを持ち寄り、MULS規格初のWAW「シケイダ」がロールアウトされた。この規格によりWAWは互換性を得ると同時に、多数の企業がその開発・生産に乗り出すようになり、当初からの懸念であったコスト高は次第に解消されるようになった。

低価格の生産が可能になったおかげで、各国軍はある程度まとまった数の戦闘用WAWを導入できるようになった。西暦2034年にはアフリカ紛争が続出し、OCUは史上初の戦闘用WAW部隊を実戦投入した。この紛争によりEC軍WAW部隊との初のWAWどうしによる戦闘も発生したのだが、貴重な実戦データの収集と同時に、戦闘用WAWの弱点が次々と露呈した。

当事国の軍はメーカーに対して弱点の改修と、軍用WAW専用の規格策定を指示。これに応じる形で参入各社は軍用WAWの世界共通規格「MULS-P」を策定。この規格のおかげで大幅なコストダウンが実現し、さらなる性能アップにも成功した。MULS-P規格によって製造された機体は、WAWと区別するためにWAP(ヴァンドルングパンツァー)と呼ばれるようになった。これを境にWAP は各国軍の主力兵器として歩み始めたのである。



[MULS]
▲MULS規格はWAWを胴・腕・脚・コンピューターと4つのパーツに分けて、各メーカーに大量生産させることで製造コストを下げた。性能競争・価格競争もありコスト問題は解決した。

ヴァンツァーの系譜

[MULS規格]



初期WAW
▲シュネッケ、ティアブルアビオニクス両社が開発した地雷処理WAWこそが、実用人型機動兵器の始祖といえるだろう。



作業用WAW
▲1メーカーがWAWのすべてを製造したのでは莫大な費用がかかる。コスト削減を実現した MULS規格は民生用WAWに適用された。



戦闘用WAW

■大型・重武装化

ヴァンツァーは両手・両肩に武装が装備できるので、それだけで重武装と言えるのだが、各国軍はこれでもまだ火力不足と判断しているようだ。そこで長大な航続距離と強力武装の装備を実現した、大型機動兵器の開発に乗り出している。開発は段階的に進められ、まずは前線に展開したヴァンツァーの作戦を支援するべく、長距離砲撃戦能力のみに機能を限定し、多数の大口径グレネードを装備したヴァンツァーを開発した。これは面制圧・火力支援としてそれなりの評価を得たものの、やはり絶対的火力は不足していた。そこで新規に大型の足回りを製作し、その上に上半身だけのヴァンツァーを2体載せたものなどが次々と開発されていった。

大型機動兵器開発のノウハウが蓄積されていく過程で、火力を強化させるだけでなく強襲揚陸艦のような機能を盛り込むようになった。これは巨体を活かして小隊程度のヴァンツァーを収容でき、補給・修理が行えるようにしたものだ。それらはヴァンツァーの活動範囲を飛躍的に拡大したと言える。



[MURS]
▲大漢中軍も大型機動兵器を開発している。写真は大漢中軍の最新型「壁虎1型」で4発の大型ミサイルを搭載する。

[MULS-P規格]



戦闘用WAP
MULS規格を採用した民生用WAWと戦闘用WAWのノウハウを集結したMULS-P規格により、戦闘用WAP（ヴァンツァー）が生まれた。

ヴァンツァー開発歴

2000	アクチュエーター技術の完熟
2010	半永久機関の実現
2020	ランドルト教授が WAWの開発に着手
2025	世界初のWAW誕生
2026	USN軍需メーカー ディアブルアビオニクス社がWAWに注目
2027	ディアブルアビオニクス社が 地雷処理WAWを製作
2028	ECシュネッケ社とディアブルアビオニクス社がWAW統一規格を提案
2029	WAW世界共通規格 「MULS」の開発・発表
2034	アフリカの紛争にOCUが介入 戦闘用WAWを投入
2040	戦闘用WAW共通規格 「MULS-P」の開発・発表
2090	OCU日本サカタインダストリィが 生体コンピューター「BD」を開発

ヴァンツァーの各部構造

ボディ

ヘッド

ヘッド(頭部)には外部の様子を知るための光学カメラや各種センサーが備えられている。ヘッドを上下左右に振ることで広い視野が得られる。機種によってはヘッドが無いものもあり、そういった機種はカメラやセンサーはボディに直付けされている。

コクピット

パイロットが乗り込みヴァンツァーを操作する。コンピューターを内包するなどコアとなる部分だけに、致命的ダメージを被るとヴァンツァーは行動できなくなってしまう。パイロットの安全も考えて堅牢なフレームと十分な装甲を施している。

アーム

腕

肩から手首までの部分に相当し、武器を使うためには無くてはならないパーツだ。肩の部分にはミサイルとグレネードがセットでき、小手の部分にはパイルバンカーと防盾をセットできる。腕の性能は武器の命中率を左右する。

マニピュレーター

マニピュレーターには人間と同じ動きのできる5本指が多く採用されている。これにより武器を握ったり、マシンガンやライフルなど銃器のトリガーを引いたりすることが可能だ。戦闘以外にも細かい作業を行うことができる。

レッグ

エンジン

ヴァンツァーを動かすための電力はすべてこのエンジンで発生させている。エンジンの出力が高ければ、それだけ力強い動きができる。つまりその優秀性が機動力に直接結びつくのだ。エンジンには燃料電池や充電バッテリーを組み立てた半永久機関を採用、長時間の行動を可能としている。

脚

ヴァンツァーが移動するのに密接に関わってくる脚部。性能の良し悪しが移動距離・機動力・回避力に影響する。ローラーダッシュ機能の有無も重要な要素のひとつ。2足・4足・ホバーと3タイプがあり、タイプごとに重量や出力による機動力の優劣が決まっている。

ヴァンツァーの基本構成

ヴァンツァーの世界共通規格であるMULS-Pによって、ヴァンツァーはボディ・アーム・レッグ・コンピューターと、4つのパーツに分けて製造されるようになった。ボディ・アーム・レッグは、走ったりジャンプしたりと各部に相当な負担を強いる上に、直撃弾にもある程度耐えられる強度が要求される。さらに間節機構などは外気にさらされることも多く、水害・砂害・塩害による障害や故障に対する配慮が必要となる。メーカー各社はコストとの兼ね合いを考慮に入れ、様々なアプローチでパーツの設計・開発に取り組んでいる。



ボディ部の構造

■肩と腰の構造

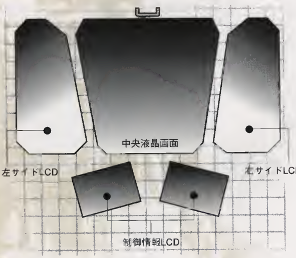
ボディは人間の上半身にあたる部分で、ヴァンツァーでは腕を除いた頭部と胴体から構成されており、コクピットとコンピューターを内包している。ここにはヴァンツァーを制御する重要システムが集中していたり、パイロットが搭乗するコクピットがあるだけに、ボディ前面から側面にかけては特に装甲を施しているが、さらに一部の機体では緊急時に背中からコクピットを射出する脱出装置を備えている。また背中にはバックパックを装着できるよう、懸架機構と各種接続コネクタがある。

アームを装着する肩と、レッグを装着する腰のジョイント部分には、それぞれを挿入するための穴があいている。穴の内部には、アームやレッグから突き出たオス型ギアと組み合うように、大口径のメス型ギアが鎮座している。ギアのさらに内側には電動モーターがあり、アームと腰を駆動させる。

アームも腰も可動範囲に制限がなく360度回転させることができる。この構造はヴァンツァーに人間以上の動きをさせることが可能となる。例えば人間なら後退する際に射撃しながらジリジリ後ずさりするところを、ヴァンツァーでは上半身は前方に射撃しつつも、レッグだけを後方に向けて全速力で後退させるといった芸当ができるのだ。さらにアームだけを真後ろに回して後方射撃することも可能だ。



▲全周回転する肩と腰の動きは、人間には絶対に不可能な動きを実現してくれる。これによる可能性は無限大に広がるだろう。



■コクピット内部

コクピットの内部は、シートを取り巻く形で配置された3面の大型液晶表示画面、膝元の2面の小型液晶表示画面、アーム制御のコントロールスティック、レッグ制御のフットペダルから構成されている。

3面の大型液晶画面は頭部の光学カメラや各種センサーが捉えた映像を、火器管制システムのコンピューターでフィルタリングして映し出している。機種によって異なるが180～270度の視界をカバーする。そして移動物体や赤外線を放射する物体があれば、火器管制システムが自動的にレティクル（画面上の対象表示）をマークして、敵味方・形式識別を行って得た情報を同時に表示する。液晶画面にはタッチパネル機能が付加されており、目標選定とロックオンは画面上のレティクルを指先で押すだけで良い。使用武器の選択や残弾表示もこの画面上で行う。またヴァンツァーの中には統合型ヘルメットを装備した機種もあり、瞼の動きと音声入力で一連の動作を行えてしまう。小型液晶画面にはエンジン出力や状態、燃料・バッテリー残量、各パーツの状態表示を担当している。

コントロールスティックとフットペダルには、指や足の動きを伝える圧力センサーが取り付けてある。インターフェイスはデジタル式を採用する向きがあるのだが、パイロットは緊張するとついつい人間らしい動きをとってしまう点を考慮して、インターフェイスにはアナログ式を採用している。

■頭部の種類

製造されているヴァンツァーの頭部を見ると、実に多種多様な形状をしているが、大きくグループ分けすると独立型と一体型の2つに絞れる。

独立型はカメラやセンサーを搭載した頭部を持っている点が特徴で、頭部を上下左右に動かすことで左右360度と上下100度の視界を得られる。首にあたる部分の構造は左右にはモーターを使い、上下には油圧シリンダーを使っている。そして頭部は非常に軽装甲で駆動部の強度も弱く、至近箇所に直撃弾を受けると破損しやすい欠点がある。高価で繊細なセンサー類を失ってしまっては、ヴァンツァーの行動力は大きく削減されてしまい、兵器としての価値は無くなってしまう。そこでカメラ・センサーはボディに直付けして、視界の悪さは腰を細めに動かすことで補おうとしたのが一体型である。

一体型にはセンサー類が剥き出しのタイプと、装甲にて防御している防御力重視タイプがある。前者は最低でも左右180～270度の視界があるが、後者は装甲のスリットから覗く感じになってしまうため、左右にも上下にも視界が制限されてしまう。お互いに得手不得手はあるものの、戦場の状況や運用形態によりボディパーツを使い分けられるので、現場レベルではさして問題にはなっていないようだ。



[独立型]
▲頭部が回転することによって、ほぼ全周の視界が得られる。



[一体型]
▲構造的に脆い独立型よりもボディと一体にして堅実性を重視。



[防御重視型キャプ]
▲頭部を一体型にし重要なセンサーを装甲板でカバーしている。

アーム部の構造

■関節機構

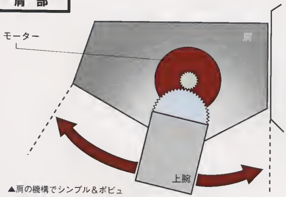
人間の腕は肩から指の先まで多数の関節が存在しているが、それはヴァンツァーも然りで肩・肘・手首・指などの構造は酷似している。

まず肩には腕全体を前後に回す関節と、外側に開く関節がある。前者はボディ部が担当しているが後者はアーム部の担当で、図下のようなモーターとギアを噛ませて腕を内側・外側に動かす方式がある。ここでは紹介していないが脇の内側に2本のシャフトを設けて動かす方式もある。その方式では上腕が細いタイプなら、腕に捻りを効かせることもできる。

肘部分の関節は人間の肘の構造を参考に構成された、シャフト伸縮方式が主流となっている。人間の肘は、骨を軸に肘の内側にある筋を伸ばしたり縮めたりして腕を屈伸させている。ヴァンツァーの場合は油圧サスペンションを筋代わりに使い、人間と同様の動きを実現している。また軸にあたる部分にモーターを内臓して下腕を動かす、モーター直駆型も少数ながら採用している機種がある。こちらの方が前後の可動範囲が広くとれ有利である。

手首の関節はマニピュレーターを360度回転させるモーターと、手全体を内側に曲げるモーターの組み合わせを採用しているが、一部のヴァンツァーでは回転だけの機能しか持たない機種もある。

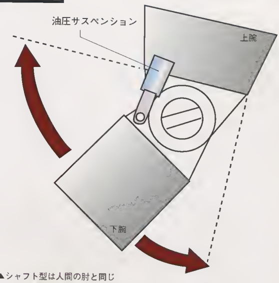
肩部



▲肩の機構でシンプル＆ポピュラーなのが肩のモーターと腕のギアを組み合わせたタイプだ。

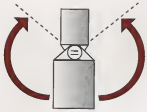
［モーター＆ギア型］

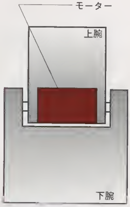
腕部



▲シャフト型は人間の肘と同じように内側の筋（シャフト）を伸び縮みさせる。可動範囲も人間と同じように決まっている。

［シャフト伸縮型］





▲モーター型はシャフト型の3倍の可動範囲があり、ボディは前を向きつつも腕を後方に向けて攻撃することが可能だ。

［モーター直駆型］

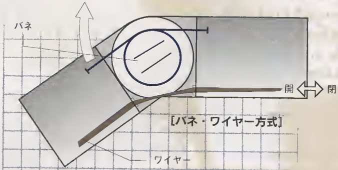
■マニピュレーターの機構

マニピュレーターは離れた場所から人間の手に代わって操作する装置という意味のとおり、人間の手と同じ動作が行えるようになっていなければならない。現在のマニピュレーターは深海探査船のアームのように、指が2本しかなく物を挟むことしかできないが、ヴァンツァーの場合は5本指となっており、完全とまではいかないまでも人間並みの作業が行える。

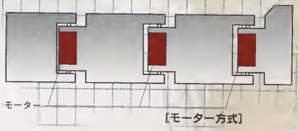
マニピュレーターの構造は、ワイヤーとバネの組み合わせやモーター駆動の簡単なものや、小型油圧シリンダーの集合体で構成された複雑なものが考えられている。ここではワイヤー・バネ方式とモーター方式のマニピュレーターの構造について解説していく。

ワイヤー・バネ方式の構造はいたって簡単なもので、関節部の強力なバネの反発力とワイヤーの引っ張りで指を屈伸させる。バネを指部分の外側寄りに図のように固定し、ワイヤーは指部分の内側寄りを通す。ワイヤーを緩めれば指はバネの反発で伸びた状態になり、ワイヤーを引っ張れば指は内側に握るようになる。問題はバネが次第に緩くなってしまうことだ。

モーター式も簡単な構造で、指の関節ごとにモーターを配置することで屈伸させている。この方式の利点は関節単位で指を曲げられることと、内側に握るだけでなく外側にも握る動作が行えることだ。人間にはできない指の動きをモーター方式は実現してくれるのである。



［バネ・ワイヤー方式］



［モーター方式］

レッグ部の構造

■関節機構

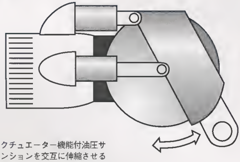
腰から下のレッグ部にも多数の関節があるが、ヴァンツァーの重量を支えたり過酷な機動を要求されるために、特に気を使って設計されるパーツとなっている。実際に各社が製造しているヴァンツァーのレッグ部を観察してみると、大型の油圧サスペンションや肉厚のベアリング、極太の関節軸など、かなり堅牢な造りになっているのがわかる。

レッグ部で最も重要な箇所は股の関節で、"脚"という形態をしたレッグパーツでは必ずボールジョイントという部品を使っている。ボールジョイントは球状のベアリングの上に被された半球状の覆いを、股の付け根にある3～4本の油圧サスペンションで滑らせることで、人間の股関節とまったく同じ動きを実現している。このボールジョイントがあってはじめてヴァンツァーは歩行できるようになったといっても過言ではない。

膝はアームの肘と同じように人間の筋の動きを応用した油圧サスペンション方式を使用している。膝の構造は各社様々なアプローチを行っていて、衝撃を考えてがっしりとしたものもあれば、細くすっきりしたものもある。

足首部分は一番負担の掛かる場所だけに、衝撃を緩和させる努力が払われている。ここの関節も駆動には油圧サスペンションがほとんど使われているが、油圧だけでなくスプリングを使ってさらに衝撃を吸収している。

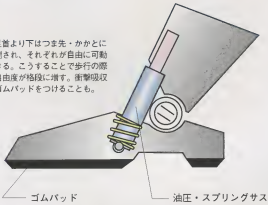
股 部



▲アクチュエーター機能付油圧サスペンションを交互に伸縮させると脚が前後へと動く。組み合わせを変えれば内股や大股も、しゃがむこともできる。

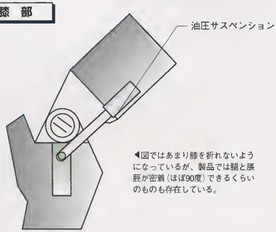
[ボールジョイント]

足首部



▶足首より下はつま先・かかとに分割され、それぞれが自由に可動できる。こうすることで歩行の際の自由度が格段に増す。衝撃吸収にゴムパッドをつけることも。

膝 部



◀図ではあまり膝を折れないようになっているが、製品では腿と脛が密着(ほぼ90度)できるくらいのものも存在している。

■ホバーの構造

ヴァンツァーのレッグには様々な製品が開発されている。2足・4足・車輪・キャタピラ、そしてホバーである。ホバーは圧縮した空気を下方に噴射することで空中に浮くことができ、浮いた状態で地上のみならず水上をも移動してしまう画期的移動手段である。ホバーを利用した兵器としてはエアクッション艇(LCAC)があり、これは沖合いのドッグ型強襲揚陸艦から車両や兵員を満載して出撃、一気に砂浜まで移動してそれらを上陸させることが目的である。

基本的なホバーには2つのエンジンが搭載されており、ひとつは浮上用の大型ファンを回転させるもので、もうひとつは前方への推進用だ。出力は浮上用1に対して推進用5以上の比率になっている。ホバーは普通、底部に溜めた空気に圧力を生じさせ、その圧力でもってプラットフォームを持ち上げる(浮上させる)。しかしヴァンツァーのホバーは、前と後ろが大きくあいているので、大きな圧力を生み出せない。そこで航空機で使われているターボファンエンジンを改良したものを使っている。前部のスリットから大型のファンで空気を大量に吸い込み、半分をそのまま後部から噴出して推力を得て、残りの半分を圧縮機に送り圧縮して下方に噴出して浮力を得ている。ヴァンツァー用ホバーは浮力の出力比を大きくとらなければならない点が、通常の



▲ヴァンツァー仕様のホバーは横滑り機能を重視してサイドに噴出口を設けている。通常は左右同じ割合で噴出しているが、左右移動の際は割合を変えるようにする。

姿勢制御コンピューター

制御系統の構造

人間は立ったり歩いたりするとき平衡感覚をフルに使って行動している。平衡感覚とは、耳石による加速度の検知・三半器官による角度の検知・筋肉や皮膚などで関節動作角度や筋力、足裏の圧覚や皮膚触覚の深部知覚による検知などを総合したものを言い、視覚の補助・代償機能と併わせスムーズな動作を助けている。2足歩行のヴァンツァーには歩行するために、これらの情報を一気に処理しアクチュエーターに伝達する、高性能コンピューターの搭載が求められるのだ。

ヴァンツァーの運動状態を知る手段として、加速度を測定する加速度センサー・空間直角座標 XYZ軸方向の力3成分と、トルク（回転力）3成分を分離して測定する6軸力センサーを使い、姿勢を知る手段として球形磁石を使った2軸傾斜計・アクチュエーター内の油圧値情報を使った関節角度センサーを用いている。さらに戦闘時に受ける衝撃と圧力を測定する、衝撃センサー・圧力センサーがある。これらセンサーの情報は出力電圧が低いためアンプで増幅される。センサー情報と同時にパイロットが操作するコントロールスティックやフットペダルからのアナログ情報もアンプにより増幅される。

センサーやコクピットからの情報はアナログなので、デジタル情報しか扱えないプロセッサ類のあるコンピューターにて処理できるよう、A/Dコンバーターを介して、アナログデータはデジタルデータに変換される。多数のセンサーや操縦デバイスからの情報を逐次高速に処理できるよう、姿勢制御コンピューターのスペックは非常に高く、4個以上のDSP（デジタル・シグナル・プロセッサ）と4個以上の128ビットマイクロプロセッサが使われている。処理されたデジタルデータをアクチュエーターに伝えるには、アナログデータにしなければならないので、D/Aコンバーターを介して再びアナログ情報に変換する。

こうして得られたアナログ情報は、各パーツのアクチュエーターに伝えられて油圧サスペンションの油量を調節したり、モーターを駆動させてアームやレッグなどを動かす。またコントロールスティックやフットペダルの情報はパワーパックへと伝達され、エンジンへの燃料噴出量を制御したり、バッテリーや燃料電池の電力出力を制御する。制御されたアクチュエーターやパワーパックからの情報は、さらにコンピューターへとフィードバックされることになり、一連の動作はヴァンツァーの電源が完全にカットされるまで続けられるのである。

アナログデータをデジタルデータに変換し、コンピューターで処理しアクチュエーターに伝える操縦機構は「フライバイワイヤ方式」と呼ばれており、最新の戦闘機やジャンボジェット機に採用されている。

現在のロボット技術①

ロボット工学の分野は今日ではかなり進歩しており、簡単なロボットはすでに市販されている。ここで紹介する日本電機の「パーソナルロボットR100」も市販を狙って目下開発中である。

「R100」は2輪式移動を採用しているため、姿勢制御には気を使っていない。しかし、センサーには人の声に反応するマイクを3つ内蔵し360度の範囲をカバー、物に衝突しないように超音波センサーを本体前部に備えている。さらに頭部のカメラで人の動きを捉えることもできる。これらのセンサー類で得た情報をコンピューターで処理し、頭部や車輪のモーターを駆動させている。

もうお分かりだと思うが、ヴァンツァーの動作制御技術と理念は、現在では市販ロボットという形ですでに完成の域に達しているのである。





火器管制（射撃統制）システム

システムの流れ

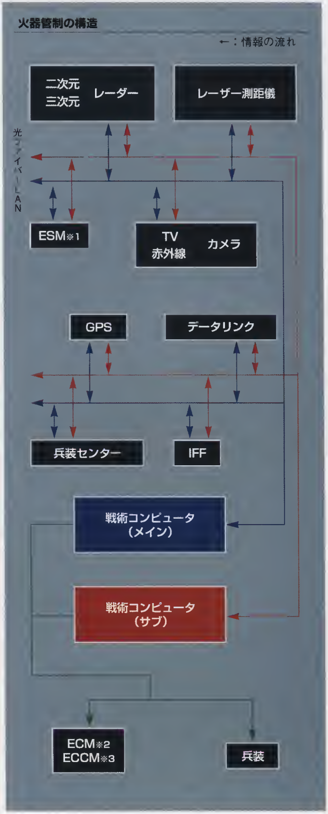
火器管制システム(FCS)とは、目標を捕捉して最適な攻撃方法を算出して射撃する、コンピューターと各種機器の組み合わせを指す。「攻撃は最大の防御」という言葉があるように、一連の行動を敵よりも的確かつ迅速に行うことで、目標を撃破して自分は生き残れるのである。そのシステムの中核を成すのがセンサーとコンピューターだ。

右図は最新の火器管制システムの構造図で、レーダーやカメラなど各種センサー類を2重の光ファイバーLANに接続し、2台の戦術コンピューターへと情報を送っている。コンピューターはセンサーデータの照合・敵味方識別・脅威評価・武器割当・武器管制を行う。センサーデータ照合前には赤外線カメラやレーダーなど各々の独特な特性を持つ映像を、パイロットにわかりやすい情報として伝えるため戦術画面編集も行わせている。それでは敵を発見して攻撃するまでのプロセスを説明していこう。

まず2次元／3次元レーダーが目標を捜索し、目標を捕捉したらIFF(敵味方識別装置)によって敵味方識別が行われ、コンピューターで脅威評価が行われる。次いで追跡照準レーダーが目標の動きをロックオンし、レーザー測距儀が目標との距離を計測する。レーザー測距儀に使用されるレーザーは赤外線に近い波長を持つYAG(イットリウム ・アルミニウム・ガーネット)方式を採用している機種が多い。YAGの特徴は可視光でないため隠密性に優れ、雨天などでレーザーが拡散されることが少ない自然対処力だ。距離の計測後は、さらに光学カメラや赤外線カメラを目標方向にスイープさせ、コクピットの大型液晶表示装置に映像を表示させる。ここまでの目標の捜索から距離の測定までが第1段階となる。

第2段階は目標を攻撃するための作業となる。搭載兵器から残弾数・砲弾温度・主砲内部摩耗度・主砲湾曲度などの砲口照合の情報が送られる。これは射撃時に砲内部と砲弾が擦れ合い内部が磨耗したり、連続射撃時による熱で砲身が歪んでしまうことを考慮に入れて、射撃の際に砲弾が目標に着弾するよう修正するものである。兵器からの情報と同時にウインドセンサーから風速・風向・大気温度・大気圧の情報を得る。風速・横風は砲弾の軌道に影響を与え、大気温度・大気圧は発砲時の初速や砲弾の速度に影響を与える(装薬の爆発力が変化してしまう)。これら情報をまとめて大型液晶表示装置に表示するのである。

最後の射撃段階では、目標へ身体を向けさせたり射撃時の反動を抑えるよう、戦術コンピューターから姿勢制御コンピューターへ情報がリンクされ、各部のアクチュエーターのコントロールが行われるのだ。

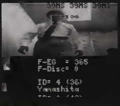


現在のロボット技術②

姿勢制御コンピューターで紹介した日本電機の「パーソナルロボットR100」には、初歩的ではあるが目標を認識・追尾する画像認識技術が使われている。

「R100」は頭部に2つのカメラを搭載しており、マイク(音響センサーにあたる)で音のするほうを向き、2つのカメラのデータを照合しながら目標を捕捉しつづける。この画像認識装置は本体内には収められておらず、データは無線LANにてホストのコンピューターに送られ、そこで処理を行っている。ホスト側の画面上では、目標の顔にレティクルを合わせているのが良くわかる。

音声認識もホスト側で行われており、ダウンサイジングが今後の課題となっている。





(※1) ESM：電子検索手段の一つ。電波を傍受して発信源のタイプ・位置を特定する。
(※2) ECM：敵のレーダーを無力化するための対策・装置。(※3) ECCM：ECMへの対抗措置。

ヴァンツァーと現用戦車の比較

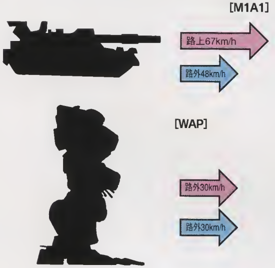
『フロントミッション』世界において、陸上兵器の主役となっているヴァンツァーだが、どのような性能を持っているのかがイマイチはっきりしていなかった。そこで主人公の和輝がゲーム初期に搭乗している、ジェイドメタル=ライマン製のゼニスレヴという形式のヴァンツァーを例にとり、構造や形状から性能と数値を考察してみたいと思う。ただし推察や憶測の範囲から抜け出せないために、数値などには疑問が残るであろうことを、あらかじめご了承願いたい。

またヴァンツァーの性能や数値を考察するにあたり、現代の陸上兵器の主役であるアメリカの主力戦車M1A1の性能と数値を比べてみた。比較項目は最大速度・航続距離・乗員・登坂力・超堤高・超壕幅・渡渉水深・火力・防御力・シグネチャー・汎用性の全11項目である。

これらの項目でヴァンツァーと現用戦車の性能を比較してみることで、どちらが兵器として有効なものであるかや、ヴァンツァーの優れている点や問題点などが見えてくる。

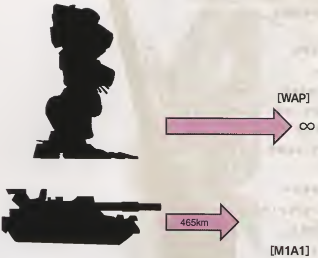
■最大速度

最大速度には道路上での最大速度を表す路上最大速度と、道路外での最大速度を表す路外最大速度のふたつがある。まずM1A1は1500馬力のガスタービンエンジンを搭載しており、路上なら67km/h・路外なら48km/hまで出せる。ヴァンツァーの場合はエンジン出力は関係無く歩幅で速度が決まる。脚の長さを4mと仮定し、人間の脚の長さを80cmとして歩幅を計算。これに人間の歩く速度(3km/h)を掛けると、ヴァンツァーの歩く速度は15km/hとなる。最大速度はダッシュ時の速度と考えると、単純に2倍として時速30km程度しかない。多めに見積もって50km/hがいいところだろう。ヴァンツァーは2足歩行なので路上も路外も同じになる。



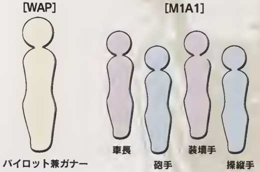
■航続距離

航続距離は燃料タンクを満タンにして、一番経済的な燃費で走らせた場合に、どこまで走れるかを表している。M1A1は車内タンクに1907リットルもの燃料を積載できるが、ガスタービンエンジンの燃費が悪く、燃料消費量が非常に多い欠点を持っている。おかげで路上でも465kmまでしか走ることができない。ヴァンツァーには圧縮天然ガスエンジンと燃料電池を組み合わせた半永久機関が搭載されており、航続距離の上限は無いに等しいといえる。そのために無限大と表記したのだが、半永久とあるように必ず限界はおとずれる。限界がどこかは判断しかねるが、ゲーム中では1日中、戦闘や移動を行っても動き続けていたのは確かだ。



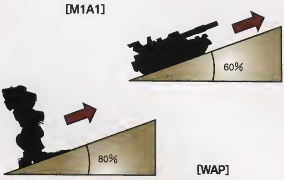
■乗員

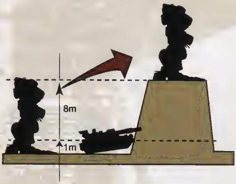
M1A1では操縦を受け持つ操縦手、砲弾を砲に装填する装填手、目標を定めて砲を発射する砲手、指揮や目標の選定を行う車長の4名が乗り込み、それぞれの作業を分担している。エレクトロニクスの発達と戦争形態の変化で、戦場での作業量は増加しつつあり、この4名というのは効率が良い人数である。最近では自動装填装置の登場により3名に減ってきているが、仕事量は従来のままで逆に1人あたりの仕事量が増えてしまい、現場の評価はよろしくない。ヴァンツァーにはパイロットが1名だけなのだが、180度以上の視界を監視し、操縦や攻撃を同時に行わなければならないため、その負担は相当なものであることが伺える。



■登坂力

登坂力とはどれだけ急な坂を登れるかである。まずヴァンツァーであるが、2足歩行を行えるので人並みに急な勾配を登ることができる。脚部の構造によって登坂力は変わってくるが、股・膝・踝の遊びが十分に確保されているタイプであれば、最大で80%程度の坂なら登坂が可能だ。人間と同じように走って余力を付ければ、さらに急でも登れるかもしれない。腕を使えば垂直に近い坂でも登れなくもない。ローラーダッシュ時の登坂力は大幅に下がってしまい、半分より少し上くらいの勾配までしか登れないだろう。M1A1は高出力エンジンにも関わらず装甲重量が災いして60%が限界となっている。M1A1に関わらず現用戦車・装甲車ともに60%が上限のようだ。登坂力に関しては2足歩行形態が有利なのがわかる。



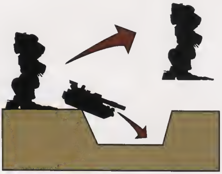


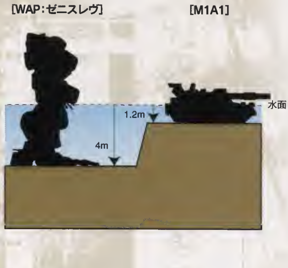
■超堤高

戦場では戦車や装甲車の侵攻を妨害すべく土手を盛り上げることがあり、超堤高はその土手がどの程度の高さなら乗り越せるかどうかを示す数字である。実戦において無理やり土手を乗り越える車両は、装甲の一番薄い底面をさらけ出してしまい狙い撃ちされ撃破される恐れがある。通常はドーザーで土手を崩してから戦車などが通るようにしている。車両は超堤高能力が非常に弱く、キャタピラやタイヤの高さ程度しか乗り越せないでいる。実際にM1A1ではたったの１ｍである。これに対してヴァンツァーは標準装備のバーニア能力を発揮して、自分の身長くらいの高さなら登れてしまう。また人間が高いところに跳びあがるような動作を真似できるので、胸の高さほどであるならバーニアに頼らずとも登れる。超堤高の点でも人間と同じ動作が行えるヴァンツァーに軍配が上がった。

■超壕幅

戦場では土手の他にも壕を掘って車両や歩兵の妨害をすることがある。壕は車両が落ちたら自力で這い上がれないくらい深く、そして幅広く掘られている。超壕幅は車両が壕に差し掛かって、何mまでなら水平を保っていられるかの車体長を表している。M1A1は車体長7.92mだが、前に突き出した砲身などの重さが圧し掛かってしまい、2.743m以下でなければ乗り出せない。壕を超える場合はドーザーが壕を埋めるか、工兵のトラクターがパイプをまとめた束を落とすまで待つしかない。ヴァンツァーなら自慢のバーニアを使った長ジャンプで難なくクリアできる。幅跳びの要領で加速をつければ、さらに距離を稼げるので、ちょっとした河川も渡れてしまうだろう。超壕幅もバーニアを装備するヴァンツァーが､その有位性を照明したと言える。





■渡渉水深

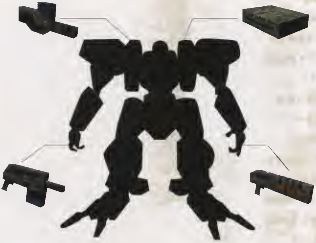
渡渉水深は河川を渡航するときや海岸から強襲上陸するときに、どれだけの深さなら行動できるかを意味する。装甲の軽い装甲車ならフロートを取り付ければ深さを気にせず渡航が可能だし、戦車もシュノーケルを付加させれば4〜5mまでの水深での走行が可能だが、ここでは特殊装備無しの通常状態で比較する。まずM1A1は1.2mと、車体の高さよりも少し下までの水深までしか潜れない｡これ以上ではエンジン冷却用吸気口から浸水してしまい、エンジンに致命的ダメージを与えてしまう。現用戦車の最近の動向はコンパクト化の傾向が強く、渡渉水深はこれよりも浅くなりそうだ。ヴァンツァーの場合はエンジンの位置が高く、かなり深い水深でも行動できる。パイロットの大きさから比較して、ヴァンツァーの身長は約8m近くあり、エンジンは中間の腰のあたりにある。つまり足の長さ分までなら渡航が可能だろう。

性能比較

■火力

M1A1もさることながら大概の戦車の火力は、大口径の主砲1門と機銃が2丁程度の火力しか持ち合わせていない。確かに主砲の威力は凄まじいが、数の上では1門だけしかない。湾岸戦争の折には自衛用に携帯対空ミサイルを1基搭載していたが、これは必要に迫られての措置であって標準装備ではないのである。

ヴァンツァーもロールアウトされてきた時点では何の武装も無いが、両肩と両腕に武装を施すアタッチメントがあり、様々な武器を装備することができる。機体全体に十分な重量許容量があるのなら、両肩にミサイルランチャーを装備し、両手にマシンガンといった組み合わせも可能だ。またキャノンやライフルを装備すれば、戦車砲並の威力を持つ火力を得たことになる。数の上でも威力の上でもヴァンツァーは戦車を圧倒できると言えるだろう。





■防御力

M1A1などの現用主力戦車は、戦車をメインターゲットとした様々な武器の脅威から身を守るため、重装甲化が加速している。装甲の強化は重要な要素ではあるが、それに加えてミサイルや砲弾を避ける機動性と、敵に発見されにくくするステルス性も、総合的な防御力の要素として考慮しなければならない。M1A1の装甲強化型では劣化ウランを用いた複合装甲を採用しており、さらに装甲板に傾斜をかけて砲弾を反らす工夫が成されている。機動性でも加速に優れたエンジンを採用してミサイルの回避に一役買っている。ヴァンツァーは露呈面積が多くステルス性に疑問がある上に、重量制限から装甲もあまり強化できない。機動性の点でも加速力や最高速度の遅さが問題となる。ヴァンツァーの防御力に関しては、任務や局面によって装甲の強いパーツを使ったり防盾を装備するなどして対処するしかないだろう。

■シグネチャー

シグネチャーとは等価形状のことで、シグネチャーの低減はステルス性の向上と残存性を高めることから、現代の兵器開発においては必須条件となっている。シグネチャーの主な項目には、レーダー反射面積（RCS）・レーザー反射面積(LCS)・赤外線放射・可視光(目視)・磁気・音響がある。航空機ではRCSの低減が行われ、艦船ではRCSと赤外線放射の低減に努めている。それでは陸上兵器はどうかというと、M1A1を含めてほとんど考慮されていないのが現状だが、とりあえずRCSと赤外線放射の低減の研究は始まっている。ヴァンツァーについてはシグネチャー低減を積極的に行わなければならないのだが、形状的にはM1A1同様に考慮されていない。ただ少しでもRCSと赤外線放射を抑制すべく、電波吸収材を塗布したりエンジン排気熱を冷却するなどの対策は行っているようだ。



[WAP] [M1A1]

[レーダー反射面積]
ヴァンツァーと戦車の正面からレーダーを照射するとこれだけの差が現れる。比較すれば戦車のほうがステルス性が高いことになる。



▲脚部の変更だけであらゆる地形を踏破できる能力を得られる点は特筆に価する。



▼設計・製造規格の統一は、様々な形態のヴァンツァーの登場を助長させた。

■汎用性

「人間と同じ動きをする作業機械」という考えはヴァンツァーの基本理念であり、また最大の強みでもある。ヴァンツァーは何も戦闘に特化されたものではなく、前身は作業目的で開発されたものなので、土木・建設作業なら難無くこなせる。人間の手の動きを再現した5本指のマニピュレーターは、ヴァンツァーどうしの修理や武器の分解・組み立てができるほどだ。全身と構成するパーツを使用目的に応じて変更可能な点も優れたところで、脚部ならば2本足だけでなく、4本足にしたりキャタピラ車体にしたりホバー車体にしたりできる。腕部にしても土木作業にドリルアームを使ったり、建設作業に溶接機器の付いたアームを使うこともできる。M1A1などの戦車は戦車としての能力しかないが、ヴァンツァーには用途に応じてパーツを組み替えられる汎用性の高さがあるのである。

ヴァンツァーの戦術

■開けた土地での戦闘

現在の主力戦車と比べて、全高・全幅が大きく非常に目立つ存在のヴァンツァーにとって、砂漠や平原といった開けた土地での戦闘は敵に狙われやすく、かなり不利な立場に追い込まれることだろう。このような土地での戦闘でヴァンツァーに要求される能力は、機動力と防御力であるが、どのような任務を課されるかによって、どちらに重点を置くかが決まってくる。

例えばその地域が戦略・戦術的に重要な地点であるのなら、確保するための防衛戦となり防御力重視となる。この場合は現用戦車と同じように穴を掘り、ヴァンツァーは伏せた状態になって、敵に対する露呈面積を最小にして防御力を高める。防盾を装備して更なる防御力の強化に努めるのも良いだろう。また敵が侵攻を諦めるほどの強力な火力を持つことも重要になる。

敵後方に回り込んでの包囲戦や、側面を突く作戦など迅速な行動を要求される場合は、機動力重視の装備にしなくてはならない。ヴァンツァーは火力と防御力を求めると重量がかさみ機動力が低下してしまう。奇襲などの電撃戦を任務とするときは、最低限の火力と防御力にして機動性を確保することだ。ローラーダッシュ機能を持つレッグに換装しておくのが得策だろう。



▲味方機すべてに長距離攻撃武器を装備して、遠距離戦で片をつけてしまうのも手だろう。



▲このような谷間での戦闘は、迅速な行動で死角に潜り込むことが勝利の鍵となる。

■狭隘（きょうあい）で起伏のある土地

渓谷や山岳などの起伏の激しい土地での戦闘は、従来の戦車や装甲車がもっとも苦手とする戦場であるが、ヴァンツァーにとってはジャンプやバーニア噴射などによる優れた踏破性をいかんなく発揮できる場所である。

渓谷のように高低差の大きいところでは、搭載兵器の俯角・仰角に制限の無い点が有効となるだろう。戦車や装甲車の備砲は、仰角にはある程度の角度がつけられるものの、俯角に関してはわずか数%しかつけられない。これは4足ヴァンツァーも同じことが言える。これらが相手ならば、相手の俯角・仰角外にある崖の上や下から攻撃を加えれば、反撃されることなく撃破できるだろう。

自分が敵よりも高所の位置に戦闘前から居たのであれば、敵の展開が一望できて優勢となるので、防御力や機動力よりも火力を重視して圧倒的火力で敵を殲滅しよう。逆に麓から登っていく攻略戦となるのなら、火力と機動力両面に重きを置くようにする。要所に配置された敵に対しては、グレネードやミサイルなどの長射程武器でダメージを与えつつ、死角に潜り込んでとどめを刺す戦法が有効だ。なるべく敵に攻撃されないよう、距離を保つか死角に張り付くかするよう心がけること。

■障害物の多い場所

ジャングルや市街地など車両の行動が大きく制限される土地において、人間と同じ動きのできるヴァンツァーは、自由な行動が行えるうえに大量かつ強力な火力を持ち込めるようになっている。

市街地における戦闘では機動力を活かし、バーニア噴出でビルの上にジャンプして、敵の上方から攻撃を加えることが可能である。装甲車両のほとんどは上面装甲が薄く、上からの攻撃に脆いという弱点を持っているので、上に位置することは何においても重要なことなのである。さらに歩兵と同じくビルの影から腕だけ出して攻撃することも可能だ。これは全身を露呈することがないために被害を被ることなく、防御力を考えなくて済む利点もある。ビルに飛び乗るという芸当は戦車などの車両には到底できないことで、これを簡単にやって見せてしまうところがヴァンツァーの強みである。

また、ジャングル戦の場合はどうしても樹木などに邪魔されて行動力を奪われてしまう。身を隠す障害も皆無なので、火力と防御力に重点をおいた装備を施すと良いだろう。



▲素早く高い位置に登り敵の動きを把握することが重要。そうすれば狙い撃ちも可能となる。

ヴァンツァー製造メーカー

ここで作中に登場するヴァンツァー製作メーカー（一部例外あり）を紹介する。21世紀末の乱立期に急増した関連メーカーも現在はあらかた淘汰され、成熟の時期に入りつつある。激しい競争の時代を生き残ったメーカー各社の、それぞれの特徴と業界内外での貢献度などから、ヴァンツァー兵器の現在、および未来の姿が想像される。



OCU

Oceana Community Union

OCUには、その歴史においてたびたび戦禍の中心となった経験からか、メーカーが数多く存在する。業界トップシェアの「ジェイドメタル=ライマン」を始め、各社の果たす役割はOCU各国へのヴァンツァー供給だけにとどまらず、業界全体の未来を左右するといえるだろう。

EC

Euro Community

ECにおける主だったメーカーといえば、業界の重鎮であり、ヴァンツァー誕生の立役者でもある「シュネッケ社」がまず筆頭として上げられる。しかし、その他のメーカーに関しては、規模縮小や他社への合併が進み、有名どころでは「センダー」が気を吐いているくらいである。

❶シュネッケ
：ECドイツ ……………………P28

❷センダー
：ECイギリス ……………………P36





USN

United States of New Continent

USNのメーカー事情は、ある一社の巨大企業にその行く末を握られていると言っても過言ではない。その「ディアブルアビオニクス」社は、シュネッケ社との共同開発でヴァンツァーを世に生み出したことで知られ、その後も軍の強力なバックアップを受けて業界に君臨している。

❶ディアブルアビオニクス
……………………P26

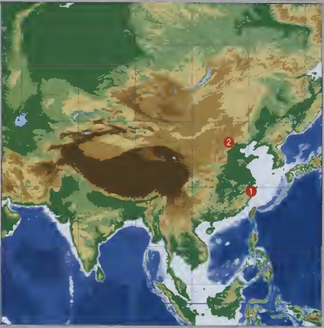
大漢中

DaHanZhong

大漢中人民共和国にも、以前からヴァンツァーメーカーは存在していたが、対外輸出量の関係もあってあまり知られていなかった。今回、事件の舞台となったことでようやく一般の知るところとなったメーカーは2社。いずれも国内を中心としたマーケットで実力を蓄えている。

❶上海鋼鉄公司
……………………P32

❷鉄武帝重工公司
……………………P34



Jade Metal-Lyman
JADE METAL-LYMAN CO. LTD.

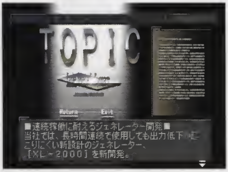
ECシュネッケ社と並ぶ しにせWAP開発企業

ジェイドメタル＝ライマン

OCUオーストラリア



◀ジェイドメタル＝ライマン社のフォーラム。金属系の画像素材を使った､スマートなイメージである。



▶トピックでは、業績報告や新製品の開発報告などが取り上げられている。

基本ソフトウェアの開発から 技術設計まで一手にになう

OCU加盟国内の軍需産業を常にリードする形で発展を続けてきたジェイドメタル社は、軍用ヴァンツァーの開発のみならず、軍用・民間用航空機や対空兵器などの製造も手がけている。その歴史の長さに裏打ちされた技術陣の豊富な実績と緻密なデータは、世界最高レベルの研究成果として結実し、製品に反映されている。中でもヴァンツァー開発については、各国から多大なる評価を受けており、10年間連続で世界一位のシェアを獲得するほどのその安定した実力はさすがだ。さらに、近年では陸運業にも進出するなど、多角的かつグローバルな企業展開に意欲を燃やす。

企業全体の業績は、アジア圏におけるOCU各国軍内のヴァンツァー再編の影響を受け、2112年度全期の業績も大幅な黒字計上が見込まれている。新規参入後に急成長を遂げた軍用・民間用航空機の部門も、前年度と比較して40%の増収となった。同社の業界内における地位は今後さらに確固なものとなっていくことであろう。

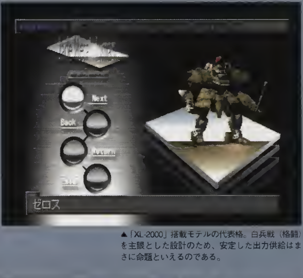
これらの業績はひとえにOCU軍需産業界の牽引役たらんとする同社の努力と、それに寄せられる期待と信頼が生んだものだが、それは同時に「需要」という名に置きかえられた、紛争などを含めたOCU内の微妙に緊張した情勢が呼びこんだと言えなくもないのだ。

性能追及に表れる古参メーカーの意地

軍用ヴァンツァーは、かねてよりジェネレーター（発電機）の稼動時間と出力の点で問題を抱えていた。そこに注目していたジェイドメタル社は、長時間連続で稼動させても出力低下が起こりにくい、ヴァンツァー用ジェネレーターの研究に着手する。そして長年の思考錯誤の末ようやく開発までこぎ着けたのが、新設計のヴァンツァー用ジェネレーター「XL-2000」である。

このジェネレーターは、出力低下率が大幅に抑えられており、同社のフラグシップ機「ゼニスレヴ」を使って行われた「100時間連続稼動実験」において、従来モデルの「XR－600」の出力低下率40%に対し、その5分の1の8%という驚くべき数値をたたき出した。しかもこれは実験による数値であり、実戦ではその差がさらに広がるというシミュレーション結果も報告されている。また、出力の比較実験でも、同クラスのレオノーラ社製ヴァンツァーを「XL-2000」搭載のジェイドメタル社製ヴァンツァーが、圧倒的に上回ったというデータが残されている。

「XL－2000」はゼロス以降のジェイドメタル社製ヴァンツァーに搭載され、高い評価を得た。しかし同社では、まだまだ改善の余地が残っているとしてさらなるジェネレーターの効率最適化と、出力のチューニングを煮詰め続けている。



▲「XL-2000」搭載モデルの代表格。白兵戦（格闘）を主眼とした設計のため、安定した出力供給はまさに命題といえるのである。

主力製品ラインナップ

軍用航空機産業への取り組みが始まったばかりのジェイドメタル社だが、ヴァンツァー開発部門の充実はOCUでもトップクラスである。そして同社が自信を持って売り出しているのが、下の3機種。安定した性能でロングセラーとなっているゼニスレヴを筆頭に、ベーシックな人型スタイルのヴァンツァーが揃っている。



ゼニスレヴ

ジェイドメタル社が現在の地位を築くきっかけを作ったとも言える、同社の代表的なヴァンツァー。「やや」格闘戦向きの特徴的な設計は、現在はあまり見られないものだ。

Detail パーツ：重量／HP
BODY ：42／452
ARM ：20／284
LEG ：55／372







ジーニ

ゼニスよりも1世代進んだ設計思想の下製作された、汎用タイプのパッケージ。アームの命中制度の高さと高出力エンジンが売りだが、装甲の薄さが難点となっている。

Detail パーツ：重量／HP
BODY ：60／292
ARM ：45／184
LEG ：18／240



ゼロス

完全「格闘戦」用特化タイプの機体。機動力の高いレッグと装甲の厚いボディがコンセプトである。さらに、ヘッドに鶏冠状の「威嚇目的（？）」の突起をあしらっている。

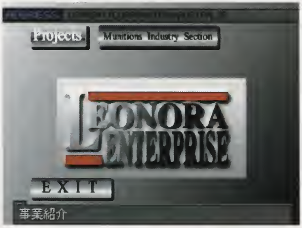
Detail パーツ：重量／HP
BODY ：39／464
ARM ：15／292
LEG ：59／384

ECやアフリカ諸国までも
見据えた国際展開へ

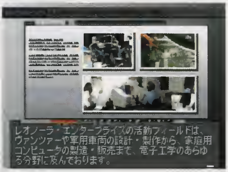
LEONORA ENTERPRISE

レオノーラ・エンタープライズ

OCUオーストラリア



◀同社のフォーラム。社ロゴの鮮やかな赤のラインが印象的な、すっきりしたページである。



▶単なる多角経営だけでは生き残れない厳しい時代。だからこそ、レオノーラの努力が報われたと考えることもできる。

得意とするコンピューター技術のフィードバックで躍進を狙う

レオノーラ・エンタープライズは、他の多くの開発メーカーと同様に多角経営を営んでおり、軍用車両の設計・製作や家庭用コンピューターの製造・販売まで、その活躍分野は実に幅広いものがある。だがOCUオーストラリアには、ヴァンツァー生産の最大手「ジェイドメタル＝ライマン社」という強大なライバルが存在しており、その業績維持の苦労たるや並大抵のものではない。

そこでレオノーラ社は、自社の製品開発にある方向性を打ち出し、ジェイドメタルの脅威に対抗している。同社はもともと、コンピューター技術に秀でたものを持っており、オフィス向けに販売されている［LEORA］シリーズはなんとOCUでシェア40%を確保していた。そしてそこで培った超高密度演算処理テクノロジーを、ヴァンツァーの姿勢制御演算処理に応用したのである。その試みは見事に実を結び、同社のヴァンツァーは各方面で高い評価を得ることに成功している。

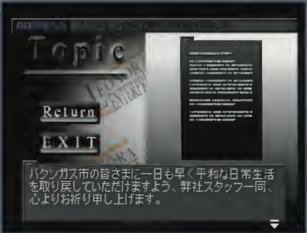
またレオノーラ社は市場開拓にも意欲的である。ECやアフリカといった諸外国への売りこみの際には、砂漠での機動を考慮してレッグパーツを中古品と安価で交換するサービスを行い、また極地や温度差の激しい地域用に、凍結による劣化を防ぐ「特殊ポリセラミックコーティング」を施した機体まで開発。それら「気配り」を根底とした営業・開発努力は同社の大きな武器となっていると言えるだろう。

国際展開をにらんだ企業イメージアップ戦略

OCUフィリピンのバタンガス沿岸に投下された新型爆弾MIDASにより、バタンガスの街はその沿岸部を中心に壊滅的な被害を被った。もっとも、対外的な発表ではそれは「災害」として扱われたが。ともかく、翌日からその被害の大きさはOCUはもちろんのこと世界各地に伝えられることとなった。

バタンガスの壊滅的被害の一報を受けたレオノーラ・エンタープライズでは、早急に援助を検討する会議が召集され、全会一致で「積極的援助」の方針が決定された。そして、徐々に本格化していく復興作業に呼応する形で、作業に駆り出されていたOCU軍に向けて「作業用ヴァンツァーを100機無償供与」するという思いきった大規模援助内容を発表するのである。

これは本当に被災者の立場に立って考え、決定された意義のある処置なことはもちろんであるし、また単純に復興作業に対する「貢献度」という点でも非常に効果的であったと言えるだろう。だがしかし、非常に穿った見方ではあるが、一連の行動は利他的であると同時に（またはあるがゆえに）、結果的にレオノーラ社のイメージアップに一役買ったこともまた事実なのである。



▲フォーラムにおいても、その援助内容の決定について大きく発表された。もちろん、それは至極当然のことなのだが。

主力製品ラインナップ

自慢の最新マイクロチップ「PRX−2」が搭載されたキャセルシリーズのニューモデルを筆頭に、3タイプのパッケージが用意されている。全体的に「直線」の多いシャープなイメージのデザインが貫かれているようだ。



キャセルM2

ヘッド部分のカメラ及びセンサー類を保護するバイザー型装甲が特徴の、格闘戦向きの機体。極地での任務に対応するため機体表面に特殊コーティングが施されている。

Detail パーツ：重量／HP	
BODY	：39／464
ARM	：15／292
LEG	：59／384

メレディンM1

「鎖かたびらを身にまとった忍者」っぽいイメージのヴァンツァーである。アームの命中精度が高く、戦場の後方に待機するミサイラー及びスナイパー向きの機体と言える。

Detail パーツ：重量／HP	
BODY	：60／292
ARM	：45／184
LEG	：18／240





フォーラMI2A

大きく肩が張り出したアームパーツが目立つ汎用型機体。性格的なものはメレディンM1に近いが、修得スキルによって格闘戦にも十分対応できる潜在能力を秘めている。

Detail パーツ：重量／HP	
BODY	：60／292
ARM	：45／184
LEG	：18／240

ヴァンツァー誕生の後押しをしたUSN工業界の雄

DIABLE AVIONICS

ディアブル・アビオニクス

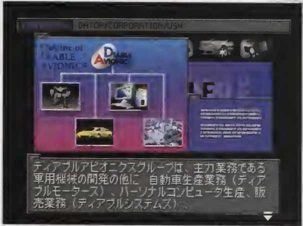
USN

USNの発展とともに歩んだ巨大グループ

ディアブルアビオニクス社（以下DA社）は、ヴァンツァー開発の黎明期からその巨額な資本を武器に、工業製品の生産・販売を中心に第一線を走ってきた。その経営母体などについては一般に詳しく知られていないが、専門家筋の間では軍及び政府、もしくは国自体が何らかの形で経営に参加しているのではないかという見方が強い。

それというのも、現在DA社の主力製品となっているヴァンツァーの誕生・発展における同社の関わり方が、常にUSN軍の依頼に基づくものと思われるからである。周知の通り、ヴァンツァーは当初現ECのシュネッケ社の資金援助の下、同社主導で開発が進められていた。しかし、資金不足が深刻化し開発が停滞し始めた頃、それまで事態を静観していたDA社が突然動くのである。その理由については「研究の有用性に研究者達が着目していた」のが第一と言われているが、実際は当時DA社が軍より依頼されていた「地雷処理用極限作業車両」の開発が行き詰まり始めていたことが大きいと考えるのが自然だろう。

シュネッケ社と共にヴァンツァー開発に大きく貢献したDA社は、その後2090年の「第2次ハフマン紛争」において溢れる開発力を見せつけ、メーカーとしての地位の確立に成功する。現在それはより強固となり揺らぐことを知らない。



◀フォーラムはわりとカラフルな構成。提供されている情報については、どうも表面的なものが多い印象を受ける。



▶主な関連企業だけ見ても、その力の大きさが分かる。ラーフヌイ共和国の投資会社による出資が何を意味しているのかについては、数々の憶測が飛んでいる。

主力製品の配備先に見えるUSN政府の影響

DA社の生産する製品は、USN国内はもちろんのこと今や世界中で目にすることができる。同社は軍用機械のほかに自動車・コンピューター・重工業向け生産用機器など、「ディアブルアビオニクスグループ」と呼ばれる異業種による一大コングロマリットを形成しており、別事業のグループ各社がそれぞれ新たな市場開拓に取り組んでいるのである。ことヴァンツァーに限った場合でも、USN国防軍をはじめとして、意外なところでは大漢中へもDA社製品は渡っている。その大漢中における一番の取引先は、反政府ゲリラ組織「華蓮団」だと言われている。

20世紀末の国交正常化以来、友好的な関係を続けていた両国だったが、現大漢中国家主席ジエがその座についたのを境に大漢中の政策は資本主義路線から一転、USNとの国家間の関係もギクシャクし始める。そしておよそ半年前、ジエ政権打倒を旗印に「華蓮団」が結成されると、USNはさっそくその支援に乗り出したのである。もっとも、これは公式発表が成されているわけではない、いわゆる噂に過ぎないのであるが。しかし、実際現地では肩に「華」のマーキングと真紅のペイントを施されたDA社製ヴァンツァーが確認されており、DA社、ひいてはUSN政府がその支援にあたっているとの考えはもはや公然の事実なのである。



◀FAIの抱える実行部隊においても、DA社のヴァンツァーが採用されている。



▶華蓮団所属の「レクソンM4F」。このほかにも大漢中各地で同様の機体が確認されている。

主力製品ラインナップ

DA社のヴァンツァーは、その設計コンセプトが「見た目に」わかりやすい。機動力重視、防御力重視、汎用タイプと、それぞれのフォルムで一目瞭然である。中でも格闘戦ヴァンツァーの代名詞とも言える「グラップルM1」は、その極厚の胸部装甲がひときわ異彩を放っている。



レクソンM4F

高機動力を活かして偵察任務などに従事することが多い機体。アームの命中精度の高さから、スナイパーにも好まれる。

Detail	
パーツ	重量／HP
BODY	38／276
ARM	51／172
LEG	38／228



グラップルM1

装甲厚、設定スキルともに格闘戦にうってつけのマシン。その一見鈍重そうな見かけに反してレッグの機動力も十分確保されている。

Detail	
パーツ	重量／HP
BODY	39／464
ARM	15／292
LEG	59／384



ドレーグM2C

後方支援型汎用機体。潜在するスキルを活かして、遠距離からの攻撃で敵パイロットにダメージを与えることができる。

Detail	
パーツ	重量／HP
BODY	60／292
ARM	45／184
LEG	18／240



ドイツの職人気質を伝える最古参メーカー

シュネッケ

ECドイツ



◀伝統を重んじつつも、それにとらわれることなく新たな可能性を追求していくシュネッケ社。簡潔にまとめられたフォーラム内容は、そんな同社の姿勢を感じさせる。



▶人型にこだわることなく、必要とあらば特異な機体設計にも対応。日防陸軍向けにカスタマイズされたこのストラクなどは、その良い例である。

ヴァンツァー生造業界の現在を支え未来を見据える

ヴァンツァー誕生前夜、もともと建設・土木および一部農耕用など、総合作業機械の生産を中心事業としていたシュネッケ社は、そこでメーカーとしてある程度の評価と地位を得ることに成功していた。だがトップ、および開発研究者たちは決してそれに満足することなく、どんな作業も1台でまかなえる、いわば「究極の汎用作業機械」とでも言うべき製品の実現を模索しつづけていた。それは、当時ヴァレンシュタイン大学で行われていた「人工関節」研究への人的・金銭的援助という先行投資を見ても明らかである。この研究は責任者のランドルト博士による、駆動系の制御に重要な役割を果たす「アクチュエーター」における新素材の発見を機に、ついに完成へ向かう。その後の本格的なヴァンツァー研究では、結果的にUSNのDA社の協力に頼らざるを得なかったが、それでもヴァンツァーの誕生に関して、その前段階の基礎研究から携わってきたシュネッケ社の果たした役割は計り知れないほど大きいと言えるだろう。

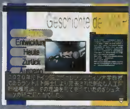
2090年の「第2次ハフマン紛争」での、初のヴァンツァー大量投入をきっかけに過渡期へ突入した開発競争も、現在ほぼ成熟の域に達した。しかし、シュネッケ社は開発初期、いやそれ以前から受け継がれてきた開拓者精神を忘れることなく、これからの時代に則した「新たな」ヴァンツァー開発へ向けて今も努力を続けているのである。

ヴァンツァー開発史を紐解く博物館の建設へ？

先に述べたように、ヴァンツァー開発はまさにシュネッケ社の参加に始まり、同社と共に成功・停滞・成熟、その他さまざまな時期・時代を歩んだと言っても過言ではない。そして、その過程において蓄積された膨大なデータは、シュネッケ社の貴重な財産であると共に、ヴァンツァー開発史を紐解く上での非常に有益な資料として注目されている。

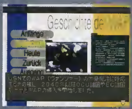
現在、その一部を一般に向け公開する「博物館」の建設計画が協議中である。これは2120年を完成のめどとし、同社に限らず開発史の全てを包括した展示内容を目指しており、関係者の期待も大きい。

～誕生～



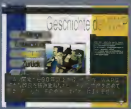
▲同社フォーラム内「ヴァンツァーの歴史・誕生」より。ここでもそのおおまかな歴史を知ることができる。

～発展～



▲ヴァンツァーの開発史は、同時に世界の「紛争の歴史」と言っても良い。その意味でも博物館建設の意義は大きいと言える

～完成～



▲すでに爛熟期に入ったと言われているヴァンツァー開発。その未来を同社がどう捉えているのか、興味のわくところである

主力製品ラインナップ

質実剛健を第一とする伝統をもつ、ECドイツの工業製品。シュネッケ社の生産するヴァンツァーにもその伝統は連綿と受け継がれている。しかし、それと同時に、武骨さの中にきらりと光る独自のデザインセンスは、一部マニアを中心として広く認知、評価されているのである。



グリレゼクス

その筋では有名な「呉龍」の隊長機として愛用されている機体。高機動型レッグと命中精度に信頼の置けるアームが特徴。

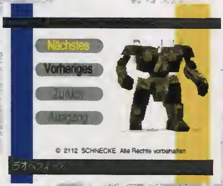
Detailパーツ：重量／HP
BODY：38／276
ARM ：51／172
LEG ：38／228



ビーネドライ

厚装甲をコンセプトにしたように見えるが、実際は遠距離からの敵の無力化を第一として設計された機体。敵のアームを破壊するスキルは、スナイパーの間で重宝されている。

Detailパーツ：重量／HP
BODY：42／340
ARM ：36／212
LEG ：43／280



ラオペフィーア

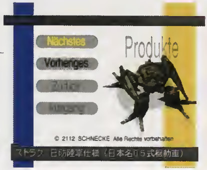
完全に格闘戦用に特化されたパッケージ。アームの取りつけ位置が相対的にかなり高所に設定された形状は、ヘッド位置の特異さを生み、敵の感覚をずらす効果を生んでいる。

Detailパーツ：重量／HP
BODY：39／464
ARM ：15／292
LEG ：59／384

ストラク

大火力をコンセプトとした、移動砲台的意味合いの強いヴァンツァー。低い姿勢による射撃安定性と隠密性は、ジャングルなどにおいて最大限に活かされると評価されている。

Detailパーツ：重量／HP
BODY：unknown／965
ARM ：unknown／579
LEG ：unknown／772



WAP開発メーカー

OCU日本の技術成長を支えた日本産業界のパイオニア

霧島重工

OCU日本



◀メーカー間でも有数のコンテンツ数を誇る霧島重工フォーラム。特にIR情報が充実しており、広報活動への力の入れようがわかる。



▶巨大産業らしく複数の事業部を内包するため、事業部を紹介するコンテンツも多い。取り扱う内容も懇切で、良心的な印象を受ける。

地域密着・環境保護を強調したスタイル重視の社風

そもそも内燃機関の開発・製造会社からスタートし、自動車に端を発してジェネレーター、船舶、重機と、製造技術の向上と共に事業の裾野を広げてきた歴史ある企業だ。近年では得意分野である重工業にとどまらず、電子部品やソフトウェア産業にも着手している。加えて次世代シャトルのメインエンジンの開発、高度なリモートセンシング技術の導入による人工衛星など、最新技術への取り組みも盛んだ。こういったテクノロジーサイドの企業努力からも、霧島の技術水準の高さが垣間見えるだろう。

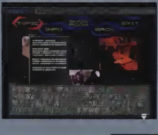
ハイテク企業の顔を見せる一方で、地域に対する密着性を重視しているのも霧島重工の特徴だ。特にOCU日本国内におけるデモンストレーションに精力的で、自社管理による「霧島技術博物館」では定期的に各種展覧会などを行っている。その場ではヴァンツァーのシミュレータを出展し、一般客に体験操作をさせるなど、「地域とのふれあい」をアピールするさまがうかがえる。

また、霧島重工はエコロジー面でも著名である。廃棄物再資源化プラントの開発や、地熱発電を中核とするクリーンエネルギーの創出など、環境への配慮に余念がない。先の地域密着へのデモなどとあいまって、企業イメージを非常に重視する企業だといって良いだろう。

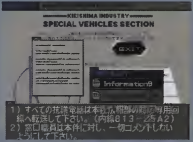
クリーンなイメージの陰に見え隠れする政府癒着疑惑

霧島重工というと、そのイメージ戦略が功を奏しているため、国内では一般的にクリーンなイメージで知られている。しかし、近年になって立て続けに黒い噂が立ち上った。この件に関しては各メディアが連日のように報道し、また霧島重工自身も自社フォーラムで弁明するに至り、大衆の耳にも新しいところである。

噂の内容は、まず閣僚に対する贈収賄疑惑だ。日防軍の次期主力ヴァンツァーに霧島製品が採用されるにあたり、田端大臣に賄賂が渡ったという声がまことしやかに流れている。また、日防軍のクーデターに関しても、霧島重工がこれに加担したものとする声が後を絶たない。これ以前にも政府と霧島重工の癒着を匂わせる事象がいくつか報告されており、霧島のイメージ戦略も青息吐息を隠せないところだ。 こういった声が挙がるに至った背景に、内需拡大を図るうえで共同体が企業を庇護した産業界の現状がある。世界を襲った不景気からの建て直しを、もっとも効率よく、スマートに成功させるのは「国内開発・国内生産のヴァンツァー（＝最大シェアを誇る“商品”）を自国で大量登用する」ことに他ならない。アナリストでなくとも、そこに着目して政府と大企業の癒着につなげるのは難しくないだろう。一部では、霧島のイメージ偏重戦略は隠れ蓑であると揶揄する声も根強い。



◀フォーラム内のトピックでは、各種疑惑に対する弁明が取り扱われることが少なくない。



▶これは特車事業部の社内フォーラム。社員への連絡事項からも、首脳部が明らかに事実隠蔽を意識しているさまがうかがえる。

主力製品ラインナップ

従来からの技術力の高さに日防軍研究部門との技術提携を加え、霧島重工の開発レベルは国内随一を誇る。次世代のOCU日本主力ヴァンツァー春陽を筆頭に、特殊車両、艦艇の分野でもその実力を発揮している。



111式春陽

陣陽をベースに大幅な改良を施し、次世代の主力兵器となることを宿命付けられて誕生した高位機。開発は極秘裏に進められ、実線投入後は期待に違わぬ実力を見せた。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：38／276
ARM ：51／172
LEG ：38／228



109式炎陽

優れた出力を持つ、重装備に適した機体。ミサイル系の装備を得意とする。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：60／292
ARM ：45／184
LEG ：18／240



110式陣陽

スタンダード機として、永く第一線で活躍してきた霧島重工のエース格だ。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：42／340
ARM ：36／212
LEG ：43／280



12式装甲車

自動車工場が前身なだけに、特殊車両は霧島の得意分野である。

Detail パーツ：重量／HP
BODY ：unknown／681
WHEEL ：unknown／590



MMG3号艇

日防軍も採用している高速戦闘艇。30ノットを超える機動力と強力な火力を備える。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：unknown／907

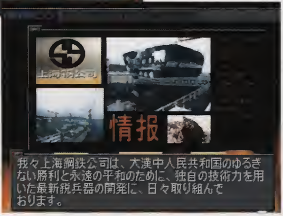
ローコストで勝負する
大漢中最大の重工企業

上海鋼鉄公司

大漢中人民共和国



◀燃え上がる炎をモチーフにした上海鋼鉄公司フォーラム。ちなみに「公司」は中国語で会社の意。



▶いささか大仰ともとれるアピールの姿勢に、大漢中ナンバー1の矜持と、強い国家的性質がうかがえる。

大漢中陸海軍が採用した兵器の90%を手がける大メーカー

企業が技術力を前面に押し出しているのはどこも同じだが、上海鋼鉄公司は技術力と同様にコストパフォーマンスの高さを重視しているヴァンツァーメーカーだ。その「低価格で良質なものを」という企業理念は広く一般にも浸透している。公用としても、大漢中の陸海軍が採用した兵器群のうち、実に90%を超えるシェアを獲得した。その評価は他国にも定着しつつあり、近年の東南アジア諸国への輸出数は増加の一途を辿っている。経営状況の良化とともに技術力も目覚しい進歩を遂げた、成長著しい注目株といえるだろう。

技術面では、水中での作戦行動を可能とする新型ヴァンツァーの開発にいち早く着手した。ヴァンツァーの構造的な問題から、これまで同業他社が手をつけていなかった分野である。この新開発の成功により、海底から直接ヴァンツァーを上陸させる作戦を展開できるという多大なメリットを大漢中軍にもたらした功績は大きい。

また、ヴァンツァーを格納できる大型潜水艦の開発でも抜きんでた成果を見せた。従来の「ヴァンツァーは輸送機や艦船で運ぶもの」という常識を打ち破り、レーダーに捕捉されにくい海中輸送を実現させたのである。こういった独自の着眼点からの研究力、またそれを実用に至らしめた開発力を鑑みても、上海鋼鉄公司の技術力がいかに優れているかがわかるだろう。

主力製品ラインナップ

中核をなすのはもちろんヴァンツァーだが、取り扱い品目は車両、艦船など幅広い。多足歩行型の大型ヴァンツァーが主力製品の中に見えるあたりも、ラインアップのバリエーションの広さを物語っている。



天動3型

機動力に長け、高いHPを誇る典型的なファイター型。機体フォルムも力強い。

Detail パーツ：重量／HP	
BODY	39／464
ARM	15／292
LEG	59／384



鉄騎4型

バランスを重視したオールマイティなタイプが鉄騎系。どこを見ても平均的な能力だ。

Detail パーツ：重量／HP	
BODY	43／312
ARM	44／196
LEG	44／256



青花魚1型

上海鉄鋼公司の珠玉の1作である、水陸両用機。舟艇を思わせるボディに、あらゆる足場を想定した逆円錐形の4本足という極めて独特のフォルムが個性的だ。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：60／500
LEG　：50／400





20式装甲車

戦車としては軽装だが装甲車として分類するには強力な火力を持つ。兵員輸送も可能。

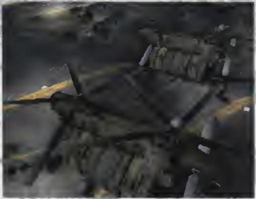
Detail パーツ：重量／HP
BODY　：38／200
WHEEL：37／170



気旋6型

水上での作戦展開を視野に入れた中型ヘリ。装甲は薄めだが侮れない火力を備える。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：39／276



上風5型

輸送ヘリとしては大型の部類に入る。補給物資はもちろん車両・WAP輸送も可能。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：70／340



39式雷号艇

大漢中海軍を代表する哨戒艇。小型ながら火力に優れ、戦車ばりの単装砲を備える。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：42／340

職人気質で良質な製品が光る
総合兵器メーカー

鉄武帝重工公司

大漢中人民共和国



▶自社運営によるフォーラムは、常時一件のトピックと製品紹介のみというシンプルなもの。必要な要素以外を取り払った潔い構成に実直な企業姿勢が見える。



◀車両開発に力を入れている鉄武帝重工らしく、事業内容の紹介写真は車両が中心。

車両開発のノウハウを応用した充実多彩なバリエーション

軍事用・民間用車両の開発・製造会社としての歴史は長いが、兵器メーカーとしては比較的新参の部類に入る。近年になってミサイルランチャーなどの兵器開発に着手し、これが軍部の好評を得て、ここ数年で急激に兵器部門が成長してきた企業だ。なみいる古参の大メーカー群の中に割って入る格好になったわけで、並の技術では他社に蓄積された知的資産の前に及ぶよしもない。そんな状況下での成長劇である。その実力たるや推して知るべし、といえよう。

鉄武帝重工公司の特徴は、自社が培ってきた車両開発ノウハウの応用にある。ヴァンツァーであれば機動力に長けた2足歩行を作り、装甲車であれば優れた索敵用カメラ、ナビゲーションシステムを搭載するなど、その技術は広く活かされている。最近発表された新型軍用車両では、新型エンジンによる大幅な消音化を実現し、同じく最新技術による外装強化でステルス性を一層高め、「車両の鉄武帝」健在をアピールしている。

また、退役兵に対して政府が貸与する、特別仕様車の開発も担当している。これは一方の上肢・下肢のみで操作可能、かつ自動操縦機能があるなど最新鋭技術を注いだハイテク車だ。政府の信頼厚く、確かな技術力を有することを裏付けている。

主力製品ラインナップ

取り扱い品目のバリエーションの広さは有数のもの。ヴァンツァーはもちろん、戦車に輸送車、移動砲台など幅広い。大型の多足歩行機の開発にも意欲的だ。実用性を最重視する社風からか、デザインは武骨な印象を受ける。



永塞3型

鉄武帝ブランドの実用1号機にして、ベストセラー機。汎用ヴァンツァーの代表格だ。

Detail パーツ：重量／HP	
BODY	：44／364
ARM	：33／228
LEG	：48／300



来迎1型

大出力の遠隔攻撃機を意識して設計されている。屈強そうな外観だが装甲は薄め。

Detail パーツ：重量／HP	
BODY	：60／292
ARM	：45／184
LEG	：18／240



上帝1型

オールマイティなタイプで、多彩な用途に活用できる機体。やや装甲が薄い感は否めないが、卓越した命中精度と優秀なスキルで補っている。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：38／276
ARM　：51／172
LEG　：38／228



54式兵車

長大な主砲を構える戦闘車両。地形適応力は低いが、火力と移動速度に長がある。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY　：42／340
CATER：43／280



59式輸送車

大量の歩兵輸送を可能にする、キャタピラを採用した輸送車。火力・装甲は低い。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY　：42／340
CATER：43／280



アーバレン20

2門の主砲が目を引く、固定式大型砲台。基地や要塞で効果を発揮する。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY：40／300



42式複装銃

連続射撃に優れ、小型で設置場所を選ばない。オーソドックスな砲台だ。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY：40／300



太塔4型

偏平なフォルムが特徴的な大型4足歩行兵器。正面の大口径砲の威力は絶大。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY：60／500
LEG　：50／400



黒洞3型

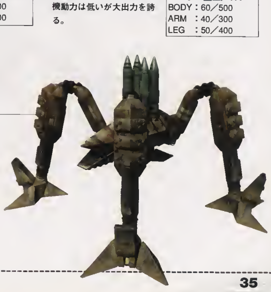
他社製品に類を見ない、ずんぐりしたボディの個性派。機動力は低いが大出力を誇る。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY：60／500
ARM　：40／300
LEG　：50／400

壁虎1型

タカアシガニを彷彿させる大型ヴァンツァーだ。2足歩行機より安定度が高いのはもちろん、より大規模、大量の火器を装備できる。部隊の主力級である。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：60／500
LEG　：50／400



SENDER

シュネッケとの技術競争で大きく成長した英国企業

センダー

ECイギリス

宇宙開発から日用品まで ECの代表的ヴァンツァーメーカー

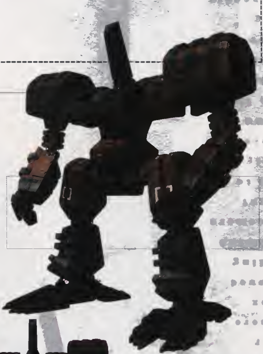
ECイギリスに本社を構え、シュネッケと共に世界のヴァンツァー産業を支えてきた大手メーカー。設立は2012年で、当初は航空機部品を製造する会社として立ち上げられた。計器類から始まり、やがてエンジンの開発に事業を拡大する頃、同時に軍事産業への参画に向けて空対空ミサイル兵器などの開発にも取り掛かるようになる。この航空事業に関してはその後も順調に業績を伸ばし、現在ではトップクラスのメーカーとしてその地位は不動のものとなっている。そして確実に事業の拡大発展を進める中、同社は2035年に本格的な航空機を製造し、2050年の春には、ついにヴァンツァー開発に着手した。この部門においては世界に先駆け[大型機動兵器]の分野を開拓し、USNを始めとする世界の国々へ輸出して、業界の大きな発展を促した。

兵器開発の一方で、同社は家庭用調理器具なども販売している。また近年では特に宇宙開発にも意欲的に取り組んでおり人工衛星やシャトルの製造までその手を伸ばしている。その技術力は高く、OCUオーストラリアのフランネル社と共同開発した気象衛星は高拡大率、高解像度の画像処理性能において他の追随を許していない。ちなみに、衛星の名称である[アキュート]は、先鋭的な感性などの意味を持ち、センダーの社訓から由来している。遠大な宇宙開発事業から日常生活に密着した製品開発まであらゆる工業製品に取り組む、まさに時代の先をゆく企業である。

ウィスク

現在のセンダーを代表するヴァンツァー。他社に比べると肩や頭部に大きな特徴が見られる。デザインコンセプトは数世紀前の「騎士」の再現とのこと。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：60／292
ARM　：45／184
LEG　：18／240







ゲイティ

4足歩行が特徴的なヴァンツァー。多足のマシンにこだわり開発してきたセンダーの技術が、移動性能よりも機動性を重視して生み出した高性能機。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：42／340
ARM　：36／212
LEG　：43／280





トーラ

大漢中軍名：兆竜4型

大型機動兵器の第一人者である同社の最新型。頭部の旋回により全方位をカバーする攻撃能力を発揮する。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：60／500
LEG　：50／400

VELDA

世界の道を制覇した
車両にかける魂

ヴェルダ

OCUオーストラリア

車両製造で右に並ぶものなし「何人も我が社の前は走らせない」

OCUオーストラリアの自動車メーカーで、一般車両から軍用車両まで幅広く開発を手がけている。設立は2045年で、数年後には軍事産業に事業を拡大した。当時から車両関係にこだわり、ヴァンツァーの類は一切開発しておらず、製品は今も変わらずトラックや装甲車が大半を占めている。その技術が生み出す車両類は総じて高い評価を受け、世界のモーターシーンで多大な影響力を持つ。おかげで世界の国々で同社の車が走っていない公道はないほどで、毎年のようにカー・オブ・ザ・イヤーを受賞している。

また一般車で培ったノウハウはこれまでにも優れた戦車や装甲車を生み出しており、自動車類を追い越す勢いで軍事産業も需要を広げている。現在の目標では[ビーム兵器搭載戦車開発]が掲げられているが、これはまだどこも成しえていない画期的な兵器だ。ビーム兵器は出力と廃熱処理等の問題により、従来は小型の車両には搭載不可能だった。だがヴェルダ社の開発陣は廃熱を出力に変換する新型ジェネレーターの開発に着手し、ある程度の形にするところまでこぎつけている。このようにヴェルダは最新鋭の武器の開発にも人力を尽くし、波に乗って好調な発展を続けているのだ。



フィールドトレイ

ヴァンツァー開発は行っていないが、その運搬目的の大型車両は専門中の専門。兵器は搭載されていない。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY　：30／250
WHEEL：34／250



BT02クアラベ

120mm砲が搭載されている戦車で、最高速度は時速120kmを記録する。OCU軍の標準車両兵器。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY：42／340
CATER：43／280



40mm高射砲

OCUの基地や重要防衛ラインなどに設置されていることの多い固定砲台。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：40／300



レトリーバー

超長距離射撃が可能な160mm砲を搭載した大型機動兵器。一般にはまだ発表されていないマシン。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：60／500
LEG　：50／400



カデンザ

運搬物の護衛目的で造られた車両兵器。ヴェルダ社の目標は、これらにビーム兵器を搭載することである。

Detail パーツ：重量／HP
BODY（ヘッド）：60／500
BODY（カーゴ）：60／500
LEG　　　　　：50／500

堅実な製品で支持を得る中堅メーカー

イグチ

OCU日本

兵器と製薬の垣根を越えた新商品の開発に挑む

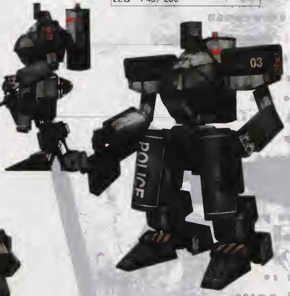
イグチ社はOCU日本で霧島重工とシェアを2分する大手ヴァンツァーメーカーである。組織的には、ヴァンツァーを含む周辺兵装の開発をメインとする重工業部門と、製薬部門に分かれている。

主な取引先はOCUとUSNだが、日本国内では、明らかに霧島重工にシェアを奪われ苦戦気味である。これは一時世論を騒がせた霧島重工と日防軍との癒着問題が影響しているものと思われる。またUSNでの販売成績不振のあおりを受け、関連部門の売り上げ・利益が激減している。

しかし、その安定した技術力には定評があり、イグチ社のメイン・シリーズの「108式強警」は日本警察機構で採用されている。また、飛躍的にエネルギー密度を向上させた光空気二次電池「LC－1」シリーズや、ドライブレコーダー「IDR」シリーズも、好調に売り上げを伸ばしており総合収益に貢献している。

製薬部門は、2092年にサカタインダストリィとの合併で生まれた新しい事業分野。世界トップレベルの分子設計技術を活かし、重工業部門の誘導機器開発部門と共に、部門の垣根を越えた新世代の製品の開発に重点を置いている。





108式強警

日本警察機構で採用されている「108式強警」は、独自にカスタマイズされたMHX－12という機体で、黒と白のツートンカラーに警視庁のロゴが入った盾が付属している。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：40／340
ARM　：25／212
LEG　：45／280







107式強盾

丸みを帯び暖かみのあるデザインの「108式強警」とは正反対の、ソリッドでアグレッシブな印象が強い「107式強盾」。見た目にも解る俊敏な機動性が人気の秘密である。

Detail パーツ：重量／HP
BODY：42／340
ARM　：36／212
LEG　：43／280



09式装甲車

主に日防軍の施設内で運用されることが多いオーソドックスな装甲車両。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY　：38／200
WHEEL：37／170



12mm自動機銃

小規模な基地の防衛用に設置したり、戦艦の艦首にも搭載可能な自動連射砲。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY：40／300



8式支援車

4つ脚分離型駆動車輪でどんな悪路もラクラク走破。その敏捷性は主にゲリラ戦で発揮される。

Detail
パーツ：重量／HP
BODY　：60／500
WHEEL：50／400

地道な努力で成長を
続ける根性系企業

パペール

OCUシンガポール

周辺兵器の開発から OCU屈指の大手に

ヴァンツァー技術においては発展途上のOCUシンガポールの中で、ヴァンツァーを自社開発できる数少ないメーカー。その生い立ちは企業努力の歴史でもある。

パペール社は2000年代初頭、フィリピンを代表する重工業会社ソンクラー重工の子会社として設立。ソンクラー重工から引き継がれた歩兵用銃器の弾丸や、OCU軍が使用する兵器の徹甲弾などの生産からスタートした。2042年にOCUがヴァンツァーの運用を始めてからは、ヴァンツァー用銃器の開発も兼ねるようになり、2072年にはOCUのシェアを大幅に占める兵器メーカーに成長。

2109年になり、ついに親会社であるソンクラー重工からの独立を果たしたパペール社は、本社をシンガポールに移転。さらには周辺兵装だけにとどまらず、長年の悲願であったヴァンツァー開発に業務を拡大する。

ちなみに社名はフィリピン語で紙を意味する。紙は現代社会において、「無くてはならないもの」であり、そして兵器も弾がないとただの鉄のカタマリ。つまりこれは兵器が求められる「戦争」の絶えない世の中に対してのジレンマ、またはアンチテーゼとしての意味が含まれているのである。

PAW2 プロウブ

下半身部に大容量のホバーを使用したパペールならではの重厚モデル。銃器の弾を知り尽くした同社ならではの分厚い装甲が特徴だ。

Detail パーツ：重量／HP

BODY：44／364
ARM　：33／228
LEG　：48／300





PAW1パーレイ

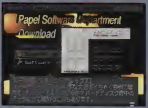
プロウブとは対照的に、不要な贅肉をスッパリ落とし、機敏さに重点を置いたシリーズ。

Detail
パーツ：重量／HP

BODY：38／276
ARM　：51／172
LEG　：38／228

ソフトウェア部門

ネット上のパペールのサイトには、ソフトウェア部門のコンテンツが存在する。ここでは「レストレックス」という、ハードディスク上の損壊データを修復するユーティリティがダウンロードできる。だがハードディスクに限らずあらゆるデータを修復できるルーチンを使用しているため、スペンダー用ツールとして主に流通している。



▲ケーム攻略上、損壊ログなどを修復するための重要アイテムとなる。

ヴァンツァーの主力兵装

ヴァンツァーは汎用人型機動兵器と呼ばれるだけあって、使用する武器のほとんどは現代歩兵が使っている武器と形状も運用方法も非常に酷似している。ここではヴァンツァーが装備可能な各種武器・兵装について解説していく。

銃弾・砲弾の直進運動弾頭で相手を破壊する「直接照準武器」

武器から撃ち出される弾体自体に誘導能力がなく、標的に直接武器の照準を合わせなければならない武器のことを直接照準武器という。

現代の武器でいえばピストルやマシンガンなどが代表であり、『フロントミッション』世界においてもそれは変わらない。ヴァンツァーが装備できるものとして、ショットガン・マシンガン・ライフル・火炎放射器・荷電粒子砲の5タイプが存在し、荷電粒子砲を除けば、現代の歩兵が使用している武器となんら変化がないことがわかる。

直接照準武器は基本的には薬莢に詰めこまれている火薬（炸薬）に衝撃を与え、その際に生じる爆発エネルギーを利用して弾丸を発射する形態を採っている。火薬の爆発エネルギーは弾を秒速1000m以上に加速するほどの運動エネルギー量を誇り、経済性や効率比率を考えると今後もこの形態は変わることがないと思われる。火薬技術も日々進化しており、火薬材質の改良や材質の配合の最適配分により、発砲時に必要なエネルギー効率は徐々に向上している。

しかし一方で火薬エネルギーに代わる技術の研究も進められており、最新の戦車砲の研究では、液体装薬を燃焼させてプラズマを発生させ、プラズマエネルギーで砲弾を発射するプラズマ砲や、電磁石で金属弾を加速・発射する電磁砲（レールガン）なるものが考えられているという。

また、推進技術とは違う側面からも研究が行われている。それは銃弾（砲弾）の構造を工夫することで、運動エネルギーを助長させようというものである。これまでのずんぐりした弾頭では衝突面積が広く、対象物に衝突した際にエネルギーが拡散してしまい貫通できないでいた。そこで弾頭を針のように細くすることで、エネルギーが1点に集中できるようにして貫徹性を高めているのである。

直接照準武器は直進性・高速性・連射性・破壊力のいずれも優れており、しかも構造が簡単で信頼性が高く安価に製造ができるため、いつの時代になっても主流武器として使われ続けることだろう。実際にヴァンツァーがそれを証明してくれている。



▲連射性に優れるマシンガンは直接照準武器の代表格。連射による反動で命中率は悪いが、そこは弾数でカバーしている。



▲マシンガンに次いで歩兵の信頼が厚いショットガン。散弾の威力も忠実に再現されている。

長射程火器で遠方の敵を攻撃する「スタンドオフ武器」

見出しにもあるように、スタンドオフ武器とは見通し範囲外の敵に対して攻撃を加える遠距離攻撃武器のことをいう。砲弾自体は無誘導タイプもあれば誘導能力をもったタイプもある。実際にどのようなものがあるかというと、現代兵器ではミサイル・野砲・迫撃砲・グレネードが代表的なものだが、『フロントミッション』ではミサイルとグレネードがこれに当てはまる。また遠距離の敵を狙うという概念からいけば、直接照準武器に分類したライフルと荷電粒子砲もスタンドオフ武器のひとつといっても良いだろう。

ミサイルはスタンドオフ兵器の代表格で、固形燃料などの推進薬により直線軌道を描きながら飛翔する。推進薬があるかぎり飛びつづけることが可能な上、慣性飛行を利用し推進薬を必要なときにだけ燃焼させれば、かなりの射程距離を稼ぐことができる。弾頭には成形炸薬を使用しモンロー効果によるジェット噴流で装甲に穴をあけ、砲塔内部の乗員を高熱で殺傷したり砲弾を誘爆させるHEAT弾が主流である。音速域の高速度による運動エネルギーと、大口径弾頭のジェット噴流による化学エネルギーは、ヴァンツァーの装甲をたやすく貫通してしまう。

ミサイル以外のスタンドオフ兵器は、自身の持つ推進薬か装薬の火薬の爆発エネルギーを利用して砲弾を発射する形態をとっており、撃ち出された砲弾は放物線を描いて落下する性質を持っている。敵上空で破裂し破片にて加害する砲弾は、対装甲目標にはあまり効果は望めないが、歩兵やトラックといった対ソフトスキン目標には大きな効果を望める。これまで単発の炸裂弾だけしかなかった砲弾だが、対装甲用に特化された砲弾や、敵上空で多数の小型爆弾を散布する砲弾が開発されている。ちなみにヴァンツァーが使用するグレネード砲弾は、目標周辺にも影響を及ぼすところから後者タイプを使っているのがわかる。

スタンドオフ武器は長射程力と面制圧力に優れており、反撃される恐れが極めて少なく、先制攻撃の有用な手段として重宝する。ヴァンツァー戦においても同様の効果があるのは確かだ。



▲肩に装備したミサイルランチャーからミサイルを発射。地面を這うように飛翔し、複雑な軌道を描きながら目標に突進する。



▲グレネードから発射された砲弾は、ボールを投げたように円弧を描き目標に落下する。

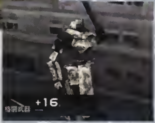
直接打撃武器

直接打撃武器とは棍棒などの殴りかかる武器のことで、ヴァンツァー用にはロッド・ナックル・パイルバンカーの３種類が存在する。この手の武器は人間と同じ動きのできるヴァンツァーならではのもので、現在の歩兵に同じようなものはなく、あるとすれば白兵戦において銃で殴るかナイフで切りつけることぐらいだろう。

ロッドには棍棒と斧とがあり、前者は相手に強烈な衝撃を与え、後者はヴァンツァーのパーツを切り落とす要領で使われる。ナックルは構造的に脆いマニピュレーターを保護する形になっており、炭化タングステンなどの高硬度材質を用いた装甲板で相手に殴りかかり、強力な衝撃を与えてヴァンツァーのアクチュエーターなどを破壊する。パイルバンカーは鋭い突起で装甲を貫通し、ヴァンツァーの内部構造にダメージを与えるべく開発されたものだ。



◀斧型ロッドは鋭利な刃先によって敵のパーツを切り落とす。



▶殴り倒し降伏させることを目的に考え出されたロッド。警視庁所属ヴァンツァーの基本装備だ。

防御盾

ヴァンツァーは人型という構造状、どうしても露呈面積が広くなってしまい、戦闘では発見される確率が非常に高い。発見されやすいということは狙われやすいということに繋がり、おのずと装甲は強化され続け、それに比例して重量は増大していく。重量が増えると機動力は低下してしまうが、エンジン出力にも限界があるので、どこかで線引きをしなくてはならない。現用戦車は装甲で重量が増大しすぎてしまい、60トン近くにまでなろうとしている。

そこでヴァンツァー自身には必要最低限の装甲で機動力を重視したり、新素材装甲板の開発による強度向上で、重量あたりの出力比を確保しようとしている。さらに腕部に防御用の防盾を持たせることで、不足しがちな防御力を補っている。盾の装備は防御を強化してくれる反面、火力の低下を招くという矛盾をはらんでいる。



▲防盾は構える角度と敵弾の侵入角によって、敵弾をあらぬ方角に反らすこともできる。うまく反らせればダメージは少なくてすむ。

ショットガン SHOT GUN



◀半自動ショットガンの特徴は、銃身部にある多数の穴だ。発砲時のブラストを排出し、反動の抑制とシェルの排莢・装填機構を駆動させる。

▶大半は人間用ショットガンと同じ形をしている。長銃身にするなどして、さらに威力を向上させている。

散弾に詰め込まれた小型の鉄球が飛散し、人や物を殺傷・破壊するショットガンの基本概念は、ヴァンツァーの武器としても適用されており、標準装備のひとつとなっている。銃口より発射された瞬間に飛び散った鉄球は、ヴァンツァー全身の各パーツにヒットし、まんべんなくダメージを与える。

有効射程距離は短いものの、近距離においては絶大な威力を発揮する。散弾の鉄球の飛散範囲は銃身の長さで決まり、短いと集弾性が悪く、長いと集弾性は良くなる。

ショットガンの種類としては単身・水平2連・上下2連の3タイプがあるが、ヴァンツァー用には単身タイプが多く使用されている。シェル（散弾）の装填・給弾・排莢機構は従来のショットガンと同じく、コッキングにて一連の動作を行うポンプアクション機構のものが多い。

ヴァンツァーサイズに合わせて武器自体も大きくなり、内部構造に余裕ができた。兵器開発メーカーの一部はこの点に注目、発砲時の反動（ガス圧）を利用して排莢、同時にマガジンからシェルを装填する、マシンガンに似た機構を開発した。少数ながらこれを導入したタイプは、ポンプアクションよりも連射性に優れ、各国軍隊から引き合いがきている。

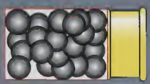
ショットシェルの種類と特徴

ショットガンには散弾以外にスラグ弾・HSA弾と2種類の弾丸が存在する。

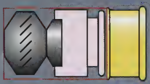
散弾（図左）は弾頭に詰めこまれた鉄球の大きさにより規格があり、番径と呼ばれる型番で表記され、1番＝1ポンドの鉛玉の直径長／12番＝1/12ポンドの鉛玉の直径長などがある。番号の大きい場合は鉄球が大きく数は少ない、番号が小さい場合は鉄球は小さく数は多くなる。狩猟や競技などでは12番と20番が使われている。

スラグ弾（図中）は散弾とは違い1発しか弾頭が入っていない。そのため1発弾とかシシダマと呼ばれている。飛翔時の弾頭の横反りを低減するために弾頭内部に回転機構を設けたライフルスラグ弾や、特別にライフリングの施されたショットガンでしか使えないサボット弾かある。

HSA弾（図右）は弾頭内部にタングステンなどの硬鋼で作られた多数の針（フレシェット）が収められており、弾頭か命中すると飛び出して貫通するようになっている。軍隊仕様のみで都市戦闘や対装甲戦闘の際に使われる。



［散弾］



［スラグ弾］



［HSA弾］

マシンガン

MACHINE GUN



▶片手での運用が可能なサブマシンガン。威力は弱いが銃身が短く取り回しがきき、屋内戦闘で有利だ。

◀6本の銃身がモーター駆動で回転しながら20mm砲弾を撃ち出す。威力は高いが、重力がかさむ上に高価。

▶21世紀の歩兵用アサルトライフルに似たデザイン。口径を大きくしつつも安定性を追及。

連射性に優れるマシンガンは誕生以来、歩兵の主力武器としての地位を確立しており、マシンガンの大型発展形である機関砲も、歩兵戦闘車（装甲車）や攻撃ヘリコプターの主武装として使われている。ヴァンツァーにおいてもマシンガンは同様に主力武器として重用されている。

マシンガンは口径（弾頭直径）により機関銃と機関砲に分類され、形状や有効射程によっていくつかの種類に分けられる。通常は口径20mm以下のものを機関銃と呼び、ヴァンツァー用には7.7mm～17.5mmがある。機関銃には形状によって、サブマシンガンやアサルトライフルというものがある。

一方口径20mm以上のものを機関砲と呼び、ヴァンツァー用には20mm～32mmがある。20mm銃身を6本束ねたアークバレル4はバルカン砲とも呼ばれ、1分間あたりの発射弾数も数千発。その威力のほどは計りしれず、ヴァンツァーパイロットにとっては、相手にしたくない存在だろう。

マシンガンは発射時の反動で命中率の低下が激しいが、連射によりヴァンツァーの各パーツに命中するため、単発のショットガンやライフルと比べて確実に攻撃できる利点がある。

21世紀の歩兵用マシンガン

人口の高齢化と少子化にともなう成人年齢層の低下と、全世界的な人命尊重の風潮、さらには冷戦終了に伴う軍備縮小により、今や歩兵はいかなる装備よりも貴重な存在になりつつある。一人前の歩兵に育て上げるまでに膨大な国家予算を費やすこともあり、戦闘による歩兵の損失に各国軍隊は頭を痛めている。そこで先進国の軍隊では、個々の兵士に多任務対処能力の追加と、攻撃力・防御力・残存性の強化を目指し次世代の装備を研究開発中だ。

現在米軍では「ランド・ウォリアー計画」のもとに、より一層の情報化を進め戦闘効率の向上を狙っている。攻撃力の強化では、開発名OICWと呼ばれる新型アサルトライフルを開発中で、5.56mm小銃の射程500m以上の目標に対する攻撃手段として、擲弾（グレネード）発射機をアサルトライフルに組み込み火力の増大を図っている。さらには赤外線照射装置やレーザー測距儀を追加し、そこで得た情報をフィードバックして、照準動作と命中精度を上げるようにしている。



ミサイル MISSILE



▼威力は落ちるものの小型ミサイルを多数搭載したポッド。発射時のブラストを斜め後方に排出する構造になっている。

◀大口径ミサイルを収容するポッドは、少ないスペースに多くの弾頭を入れるべく円筒状になっている。

自身が持つ推進装置と誘導装置により、高速度で目標まで弾頭を運ぶミサイル。スタンドオフ兵器の代表格であるミサイルは、攻撃した相手から反撃される確率が限りなく低いという性格を持っている。ヴァンツァー戦でもその有用性を遺憾無く発揮している。

現代では攻撃する対象物ごとにミサイルを開発しているが、この時代のミサイルは戦車やヴァンツァーを攻撃する対装甲ミサイル、ヘリコプターや低速低空域航空機を攻撃する対空ミサイルの、両方の機能を兼用する能力を有している。

対装甲にはモンロー効果を利用した燃焼ジェット噴流で装甲を貫徹するエネルギーを得るため、対空目標には爆発時の破片により致命的ダメージを与えるため、弾頭に近接信管付き破片効果型成形炸薬を用いている。

誘導方法は敵目標に照準・追跡を悟られぬように光学TVを使用した光ファイバ誘導方式が主流となっている。この方法はミサイルを迂回させることが容易で、ミサイルの接近をも欺瞞することが可能だ。従来の赤外線・レーザー・電波誘導方式は、ヴァンツァー側のセンサーの発達や、チャフなどの電子的妨害（ソフトキル）によって戦術価値が失われつつあるのだ。

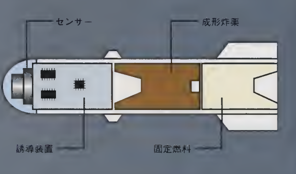
現用ミサイルの最新技術

ここでは現用ミサイルでも進歩の早い対戦車ミサイルを取り上げる。

対戦車ミサイルはその名の通り戦車や装甲車輌を攻撃するものだが、戦車・装甲車は戦車砲弾や対戦車ミサイルの威力向上に対して、複合装甲や爆発反応装甲などの新技術で対処している。こういった戦車の重装甲化にミサイル側も手をこまねいているわけではなく、従来のミサイルに様々な工夫をこらしてきている。

戦車の装甲は上面が薄く、その弱点をつく形で炸薬を下向きにして、戦車砲塔上面部にミサイルがくると下方にジェット噴流を発射し装甲に穴をあける、BILL対戦車ミサイルが開発されている。追加装甲に対する手段としては、成形炸薬弾頭を前後に並べ、1段目で爆発反応装甲を吹き飛ばし2段目で主装甲に穴をあける手段を用いたミサイルを、ドイツ・フランスが共同研究・開発中である。米軍ではミサイルをマッハ4.5という超高速で飛翔させ、そこから得られる膨大なエネルギーで敵戦車の装甲を打ち砕くKEMを開発・評価中である。

ミサイルの構造



グレネード GRANADE



◀マガジンと自動装填機構を装備して、グレネードの弱点である連射性を克服している。

▶まさしくグレネード砲といった形だ。2連装の砲身から発射される大口径弾頭の威力はすさまじい。

ヴァンツァーに装備できるグレネードの製品ラインアップを見ると、その形状から砲弾を使用する迫撃砲タイプと、ロケット弾を使用するロケット砲タイプの2種類が開発されていることが分かる。

前者は銃器の構造を応用しマガジンに最大4発まで砲弾を装填、自動装填装置を用いて再装填・発射を行うものから、大口径・長砲身にして威力増大を図った2連装砲まで幅広い。後者は2連装ポッド型で内部に4発の大型ロケット弾を内包しているものが代表的だ。

砲から発射された砲弾は円弧を描き飛翔、ヴァンツァー上空で複数の子弾をばら撒き周辺を爆撃する。2足歩行型ヴァンツァーは上面から見ると露出面積が少なく、無誘導では命中率が格段に下がる。そこで砲弾に多数の子爆弾を収容し、広い範囲に子爆弾を散布して命中率の悪さをカバーしているのである。中には高精度誘導装置を使用してピンポイント攻撃可能な砲弾も存在する。

長射程かつ広範囲へ攻撃できる性質から、味方部隊の火力支援や敵部隊の侵攻を阻止する阻止砲火といった運用形態が多い。グレネードは空高く放物線を描くので遮蔽物の影響を受けない利点がある一方、屋内では発射自体が不可能である。

現用グレネードの種類と砲弾

グレネードには「投擲」するという意味があり、投擲するものの代表はやはり手榴弾だ。手榴弾にはパイナップルと呼ばれる破片飛散弾、爆発時に高熱を発し機材や家屋の破壊を目的とするテルミット、位置を知らせるスモークや信号弾がある。

クレネートの大型版は迫撃砲で、時間あたりの発射速度や地点制圧で絶大な威力を誇り歩兵からの人気が高い 現在では歩兵支援ばかりでなく、迫撃砲の特徴を生かし戦車の上部を狙うストリスクなどの誘導弾か開発されている。

さらに延長として榴弾砲と地対地ロケットがある。榴弾砲は制圧力・破壊力ともに強力で、155mm榴弾砲が主流を占めている 砲弾は地上数m上空で破裂し、破片を飛散させ被害を与える榴散弾がほとんどだ。最近では対装甲目標の攻撃に誘導能力を持ったSADARMやBONUS砲弾か開発されている。地対地ロケットといえば湾岸戦争の際にニュースで何度か登場したMLRSが有名。MLRSより発射されたM26ロケット弾は、目標上空で弾頭に収容している644個のM77子弾をばらまき一帯を制圧する。

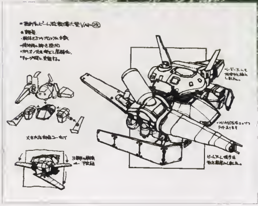


荷電粒子砲

PARTICLE PROJECTION CANNON



◀陽電子などの粒子を光速にまで加速する必要性から、どうしても銃身は長くなってしまう。



◀荷電粒子砲を実際に装備したヴァンツァー。砲の後部には円筒状の粒子加速器が見える。

荷電粒子砲は俗にビーム砲とも呼ばれている。その構造は陽電子を光速に加速し相手に照射、加速による運動エネルギーでもって破壊する。エネルギーが減衰するまで光速で飛翔するので、ミサイル並の射撃距離とミサイル以上の命中率を誇る。弾数という概念がなく無制限に発射可能だ。

荷電粒子砲は陽電子に強力なエネルギーを与えるために十分な加速が必要となり、どうしても粒子加速器が大きくなってしまう。しかし、ヴァンツァーの武器となると、おのずとそのサイズは限定されてしまう。この点に関して各技術者は、エネルギーの低下はやむを得ずという結論に達している。

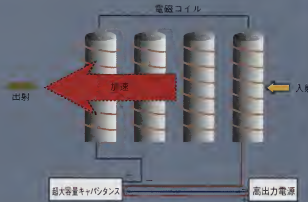
かわりに最低限必要なエネルギー値を確保すべく、後述の発電機関の開発に注力した。粒子を加速するには磁力が必要で、その磁力を発生するには膨大な電力が必要となる。高出力の電力を生み出す機関としては、原子力発電が最も適した機関であるが、従来の技術では原子力発電装置の小型化は安全性の点で困難が多すぎた。

しかし物理学の進歩と核弾頭設計技術を採り入れることで、原子炉の小型化は実現された。同時に研究が進められていた小型超大容量キャパシタンスの開発も成功し、ここにヴァンツァー用ビーム兵器がついに完成した。

荷電粒子砲の原理と現行技術

荷電粒子砲を簡単に説明すると、電子や陽子（陽電子が一般的らしい）などの電荷を帯びた粒子に磁気をかけて、光速近くにまで加速し強力な運動エネルギーを粒子に与える、物理学研究用の粒子加速器を兵器に応用したものだ。荷電粒子砲の構造は、まず銃床上部に円形加速器を配置し陽電子を光速近くに加速し、次に銃身部分の直線型加速器で陽電子を直線の動きに制御し目標に指向させる形状になる。

この加速で一番の問題となるのが粒子を光速まで加速し、照射目標を破壊するのに必要なエネルギーを得るための電力だ。現在の加速器では数百億ボルトもの電力を消費するという。これだけの電力を生み出す発電機関を兵器サイズに縮小するには、かなりの困難を要することだろう。粒子加速器の構造は、粒子を加速する際に必要な超電磁力を発生する電磁コイルを円状もしくは円環状に並べて、粒子を円軌道上で運動させるサイクロトロンという方式を採用しており、筑波研究学園都市にある文部省管轄のトリスタンなど多くの研究機関の大型加速機で利用されている。



防盾 SHIELD



▼USN軍内で広く使われている防盾は、先端の突起で攻撃することも可能。攻撃的性格も備え持つ。

避弾経始性重視
▶急角度で構成されたこの防盾は、敵弾を反らす避弾経始に優れている。

モジュール性重視
▶装甲板を繋ぎ合わせるだけの構造だが、徹底したモジュール化のおかげで修理・換装が容易に行える。

全長・全幅・全高とも大きく発見されやすいヴァンツァーは、防御面を強化しなければ戦場で生き残れない。しかしエンジン出力や重量との兼ね合いで、あまり重装甲にすることができない。必然的に防御力が低くなるために、増加装甲の要領で厚みのある装甲板を手に持たせて防御力の不足を防いでいる。

防盾の形状を注意深く観察すると、メーカーそれぞれの設計思想が窺い知れる。設計の基本的アプローチは使い捨てではなく、破損した部分に新しく装甲を継ぎ当てて何度も使えるようにしている。またフレームのそこかしこにペリットを設けて、戦場の脅威度合いや運用用途に応じて厚みの異なる装甲を貼り付け、機動力を重視したり防御力を重視したりと、使い分けできるようにしている。さらにこの構造は装甲を2重にすることも可能で、戦場で装甲を強化しなければならない必要に迫られたときなど、迅速に増設作業を行えるよう工夫されており、極端なものではチョコレートのように装甲を並べた製品もある。

また、中には攻撃的防盾も存在し、防盾先端の鋭い突起を相手にぶつけてダメージを与える。これは防盾の持つ'守り'のイメージを覆す設計思想といえる。

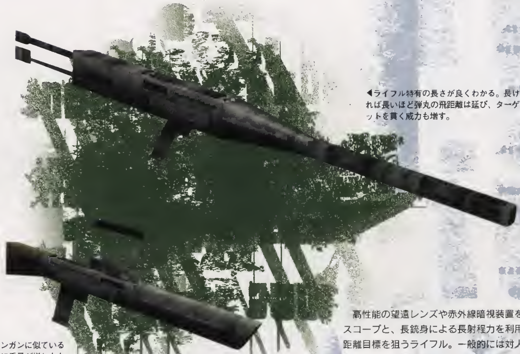
現用装甲の構造と技術

現用主力戦車は一般的に、複合装甲と中空装甲という装甲技術を採用している。複合装甲とは防弾鋼板の間にセラミックやプラスチックを挟み、APFSDS弾の運動エネルギーやHEAT弾の化学エネルギーを拡散させて、貫徹力を奪ってしまおうという装甲だ。また中空装甲は防弾鋼板の間に隙間を設けた、HEAT弾に特に有効な装甲方式なのである。ちなみに最新の主力戦車は外側に複合装甲を配し、中空を介して内部に通常の防弾鋼板と、万全の装甲防御力を備えている。1世代前の戦車や装甲車などには ERA（爆発反応装甲）という増加装甲が使われていた。ERAは砲弾やミサイルが命中した瞬間に、装甲板に仕込まれた火薬が爆発し、爆風によって砲弾やミサイルの方向を反らしてしまおうという発想で開発されたものだ。

最新技術としては、複合装甲の充填材に超硬質の炭化タングステンや劣化ウランを使ったり、高圧電流を装甲板間に流しておき、砲弾などの導通体がこの間を結ぶと、電流が流れて砲弾の貫徹体などを変形させる電磁装甲などが研究されている。



ライフル
RIFLE



◀ライフル特有の長さが良くわかる。長ければ長いほど弾丸の飛距離は延び、ターゲットを貫く威力も増す。

▶形状的にはマシンガンに似ているが、長銃身がゆえに重量が増したため、運搬用の把握が付いている。

高性能の望遠レンズや赤外線暗視装置を使ったスコープと、長銃身による長射程力を利用し、遠距離目標を狙うライフル。一般的には対人ライフルが多いが、軍用には大口径にして威力を高め、装甲目標を破壊する対物ライフルがある。

ヴァンツァー用にはヴァンツァーの装甲を打ち砕く威力と射程を得るべく、80mm前後の口径と貫徹力の高いHV弾を使用している。

火炎放射器
FLAME THROWER



▶放射器下部の燃料タンクと、そこから伸びるパイプがいかにも火炎放射器といった感じだ。

▲先端の火種にノズルから燃料を吹き付ける。対人戦などソフトスキン目標には有効な攻撃武器のひとつ。

火炎放射器はガソリンなどの揮発性の高い燃料を勢い良く噴射し、火炎を数m離れた目標に浴びせる火器だ。構造は簡単だが高熱の炎による威力は高い。弱点は放射器も高熱になって暴発する恐れと、そのために長時間放射ができない点。

ヴァンツァーにとって厄介なのは、高熱により精細なセンサー類を破壊されることと、パイロットが蒸し風呂状態になってしまうことだ。

キャノン
CANNON



▲隣接攻撃では反撃は不可能だが、有効射程内であれば威力・命中率ともにライフル以上の性能を示す。

キャノン砲は高射砲や戦車砲のように砲身が長く、長距離攻撃に適した火砲である。直進する砲弾で敵を撃破する性格から、ライフルの延長にあるといってもよい。実際にライフルより口径は大きく80mm～160mmまで存在する。

ヴァンツァーを一撃で破壊すべく、砲弾には高初速のHEAT（化学エネルギー）弾と、APFSDS（運動エネルギー）弾の2種類が使用されている。

ナックル・ロッド・パイルバンカー
BRASS KNUCKLES/ROD/PILE BUNKER



▼パイルバンカーの特徴は中央の大きなモリ。相手を串刺しにして破壊する。

▶ロッド（棍棒）で相手を殴りつけると、強力な衝撃でパイロットの大半は気絶する。

▶ロッドの変形として斧の形状をしたものもある。鋭い刃で装甲を分断してしまう。

▲分厚い装甲で殴りかかり衝撃を与える。中には鋭利な突起で攻撃力を増したものもある。

これらは隣接攻撃でのみ使用可能となるが、それゆえに反撃されてしまう宿命と、銃器相手では後攻攻撃になる不利な点がある。そのかわりに命中率はピカイチで攻撃力も非常に高い。

ナックルは重量が大きくなると威力が増し、ロッドは長いほど命中率が高くなる。パイルバンカーはモリで相手の装甲を貫通しダメージを与える武器で、攻撃力・命中率は他の中間あたりだ。

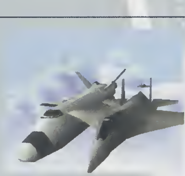
ヴァンツァー以外の各種兵器

『フロントミッション』ではヴァンツァーが陸上兵器の主役として活躍しているが、戦車や装甲車もまだまだ現役にある。また戦闘機やヘリコプターなどの航空機、空母や護衛艦といった艦船も脇役ながらヴァンツァーを支援している。ここではこれら既存兵器を紹介していく。

航空機

これまで航空機には固定翼機とヘリコプターの2つしかなかったが、近年では互いの利点を組み合わせたハイブリッド機が開発されている。

20世紀初頭に誕生した飛行機は、2度の世界大戦と多数の紛争を経て急速に進歩、様々な派生を輩出しながら20世紀末には、固定翼機としては完成の域に達した。第1次大戦ではプロペラ推進の複葉機が主流であったが、第2次世界大戦になるとプロペラ推進は変わらないが、現在の基本形である単翼機が主流となった。第2次大戦後期のドイツではジェット機が開発され、終戦後には戦勝国によって技術が洗練された。音速飛行が可能なジェットエンジンは、制空戦闘機や攻撃機など高速機動を求められる機種には標準の機関となっている。またジェット機関は推力もあることから輸送機にも多く採用されている。これから設計・開発される戦闘機や攻撃（爆撃）機には、音速での巡航飛行と推力変向能力・ステルス性能が要求されている。従来の丸みを帯びた構造から、多数の面からなる角張った構造になったり、垂直尾翼のないブーメランのような機体だったり、飛行中の機体が垂直に立ち上がったりと、今までの常識が通用しない航空機が続々と誕生しようとしているのだ。



▲地上から宇宙へ打ち上げられ、宇宙から地上へ滑空するスペースシャトルも立派な航空機だ。

航空機のもう一方の雄はヘリコプターで、特徴はなんといっても機体上部のメインローターと機尾のテイルローターだろう。これにより垂直離着陸が行え、ローターにピッチとヨーをかけることで、前進後退と左右横滑りが行える。ヘリコプターが本格的に戦場に投入されたのは朝鮮戦争からだが、当時のエンジンはディーゼル機関を使っており、機動性能や運搬能力に不満が残るものだった。エンジン機関の改良は随時行われ、ベトナム戦争ではタービン機関を使ったターボシャフトエンジンが搭載されるようになり、ヘリコプターの能力は格段に向上した。

固定翼機に真似できない機動性能を持つヘリコプターは、地形を問わずにいかなる地域へも歩兵や軽火砲を空輸可能で、瞬く間に主力装備として広まった。その後もヘリコプター固有の性格を活用して輸送用だけでなく、対戦車戦など陸上攻撃を専門とする攻撃ヘリコプター、潜水艦を探知・攻撃する対潜ヘリコプターなどが生まれている。



▲ヴァンツァーと対峙することの多い攻撃ヘリコプター。長射程ミサイルによる攻撃は厄介このうえない。

艦　艇

地球の表面は7割近くが海洋となっており、島々や大陸間の移動には太古の昔から船が使われていた。現在では航空技術の発展によりジャンボジェット機が登場し、大量の物資や人員を短時間で目的地まで輸送することができる。ならば船による海上輸送は皆無なのかというと決してそんなことはなく、今でもタンカーや貨物船で資源や食料などが運ばれている。軍隊においても同様で、100トン以上の大型輸送機がありながら、大規模な部隊の輸送には揚陸艦や輸送艦を使用している。迅速な展開が要求される軍隊がなぜいまだに海上輸送に頼っているかというと、輸送機で最大100トンほどの積載重量なのに対して、輸送艦では数千から数十万トンを一度に積載できる点が最大の理由だろう。航続距離でも倍以上の開きがある。さらに大型輸送機が味方支配下の空港しか使えないことに対して、強襲揚陸艦であれば敵支配下でもLCACや上陸舟艇を使って揚陸が可能なことも海上輸送の大きな利点である。

空母や護衛艦などの大型戦闘艦艇は、シーレーンの防衛に必要不可欠な存在だ。現在ではアメリカ海軍のみだが、空母を中心としたバトルグループを常に世界の要所に配し、不安定地域への抑止力として示威活動を行い、紛争勃発の際にはいかなる部隊よりも真っ先に当地に赴き、空母艦載機や艦載巡航ミサイルによる地上攻撃で制裁を加える体制を整えている。フリゲート艦・駆逐艦・巡洋艦などの護衛艦はその名の通り、空母や輸送船を敵機や対艦ミサイルの攻撃から守るのが主任務で、そのためにイージスなどの高性能レーダーと、高性能対空ミサイルを装備している。最近では洋上戦よりも陸上戦の重要性が増したことと輸送艦隊の上陸支援も兼ねて、大口径の艦載砲や巡航ミサイルなどを護衛艦に装備するようになっている。これからの戦闘艦艇は対空・対水上・対潜・対地上すべてをこなせる多目的性能を求められているのだ。

潜水艦は今も昔も変わらず静粛性・隠密性を活かして、輸送船団の攻撃や商船破壊工作に活用される。また優れた残存性から核ミサイルを搭載した戦略原潜が就役しており、核大国の抑止戦力として今日でも世界の海のどこかに潜航してパトロール任務に就いている。



▲揚陸艦の作戦を支援する護衛艦。護衛艦の存在なくしては揚陸艦も輸送艦も洋上を自由に航行できない。



▲浜辺にビーチングを行う上陸用揚陸艦。リスクは高いが奇襲で敵前上陸を行える価値は高い。

陸上車両

戦車は優秀な機動力と戦車砲の強力な火力で、他の陸上兵器を圧倒している。実戦において歩兵は敵戦車を最も恐れるが、逆に味方戦車の存在は最も頼りにするということからも、それがうかがえる。しかしヴァンツァーの登場によって、結局戦車は支援車両的性格になってしまった。

その一方で、元々支援的役目の車両は今なおその本分をまっとうしている。歩兵を輸送する装甲車はトラックと違って充分な装甲が施されており、歩兵の戦闘を支援する火力として機関砲を有している。ゲーム内では快速性を発揮する装輪式装甲車の登場する割合が多い。偵察車や軍用ジープは小人数ながら歩兵を輸送でき、中規模の火力を保有するところから、装甲車の配備数を補う効果を持っている。また、新車両としてはヴァンツァーを輸送するトランスポーターなどがある。



◀火力・防御力・機動力の3拍子が揃った戦車。火力の強さと防御力の高さは健在で厄介な相手だ。



▶歩兵を乗せて疾走し、降車した歩兵を援護射撃する火力を装備する装甲車。未来の戦場でも欠かせない車種と言えよう。

要　塞

要塞は防衛上重要な地点の自然の要害を巧妙に使い、コンクリートで補強しながら構築される強固な軍事拠点で、フランスのマジノ要塞が有名だ。歩兵と迫撃砲用の塹壕を掘り戦車をハルダウンさせ周辺に地雷や障害を設置するといった、戦場に構築される野戦陣地も立派な要塞のひとつだ。

要塞は地上からの侵攻に対しては強力なのだが、空からの攻撃には非常に脆いことと、長い時間と巨額を投じて構築した要塞を、敵が避けて通った場合は無用の長物と化してしまう宿命がある。哮天雷閃とダガト・アハスは自ら移動能力を備えている上に、強力な対空・対地武装を装備しているので、空から攻撃するのは至難の技となる。強力な火力を必要とする地点に駆けつける移動能力は大きな意義を持っており、要塞を守備的性格から攻撃的性格に転換させているのだ。

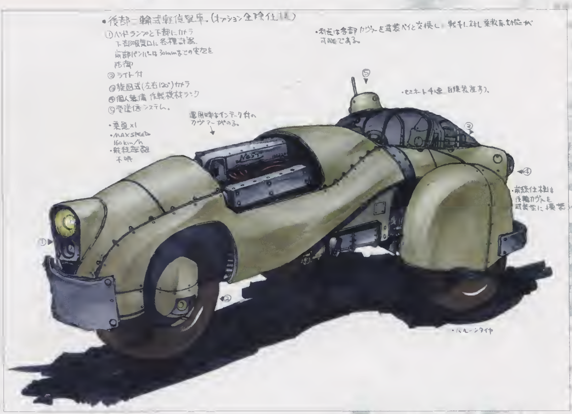


◀哮天雷閃は多数の部隊を収容し補給・修理を行える。移動要塞と補給基地の能力を兼ね備えているのだ。



▶大型空母が存在するだけに、海上要塞の必要性と存在意義については疑問が残る。

偵察車・軍用ジープ



▲エンジンを前部に配置し防御力を上げ、乗員の残存性を配慮している。問題は前方視界が狭いことだ。



▶車体後部2ヶ所のオプション取付部にセンサー類を取り付ける。武装は前輪カウルに機関銃程度の軽武装を装備する。

偵察車は敵前線よりも敵地奥深く侵入し、敵情報を逐次収集・味方に伝えるという任務を帯びている。その性格上から高性能な偵察・通信機材の充実、高速な路上・路外速度能力、長期間の潜伏行動能力を要求される。ここで挙げた偵察車2葉はどちらも速度性能を要求した結果、3輪形態となっているのが良くわかる。おかげで路外最高速度が時速120km以上にもなった。偵察能力としては、本部との連絡用に衛星通信機能も兼ねた通信アンテナと、偵察用の光学カメラを装備する。

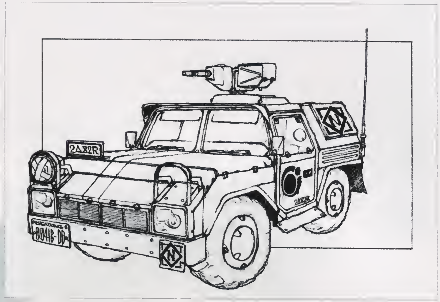
上葉の偵察車は後部2輪・前部1輪とし、時速160kmの最高速度を達成している。エンジンとトランスミッションにはセミオート4速を使用。偵察用カメラは前部ライトの下に大型のものを、操縦室後部に限定的ながら旋回式小型カメラを備えている。装甲防御力はバンパー部で30mm機関砲弾に耐えられる装甲厚となっている。

下葉の偵察車は前輪2輪・後輪1輪となっている。偵察カメラは後部1基のみで、標準装備での偵察能力はあまり高くないが、各部のオプション取付部に各種機材を設置することで、能力不足をカバーするようにしている。胴体中央には大型の格納スペースを設けて、乗員用の食料を詰め込むなど、長期間の行動を支えるのである。

ここに挙げた軍用ジープは、OCU加盟国軍内で一般的に使われているタイプである。軍用ジープは軍用だからといって新規に設計されることはなく、民間製品として市販されている4輪駆動車に軽装甲を施し、それに伴う重量を相殺するため、高出力エンジンに変更しているだけである。形状から見てもわかるように、エンジンルーム周辺と運転席周辺に軽く装甲を強化している以外は、市販RV車そのものである。タイヤは不整地走行を考慮し、肉厚ゴムタイヤになっている。

車体後部に指揮車として利用できるよう、大型通信機材を搭載している指揮車タイプと、分隊程度の歩兵を輸送できるようスペースを確保した輸送車タイプがある。

武装は運転席上部のターレットに取り付けられるが運用形態により内容は様々だ。通常は軽機関銃か重機関銃だが、安定したプラットフォームを活かして歩兵支援火器のグレネードランチャーを装備したり、対戦車・対ヴァンツァー戦に対装甲ミサイルを装備したりもする。



軍用ジープ
▲市販車の優秀なシャーシやサスペンションをそのまま継承しつつ、兵器のひとつとして細かな改造を施している。

現用偵察車と軍用ジープの動向

現代の偵察車は装甲（歩兵戦闘）車からの流用が多く、キャタピラを使った装軌式装甲車と大型タイヤを使った装輪式装甲車の2タイプが採用されている。

装軌式偵察車の代表はアメリカのM3A2騎兵戦闘車と、イギリスのウォリアー偵察車だろう。どちらも元のコンパートメントは歩兵戦闘車なのだが、装備武装の予備弾を多く搭載したり、通常は6名前後の歩兵を乗せるところを2名の偵察員にしたりと、偵察車仕様に特化した改造を行っている。最近の動向としては、武装を強化したり増加装甲などで防御力を強化して、積極的な威力偵察任務を行うことを主眼におきつつある。さらには敵地深く侵入する上で敵に発見されないよう、ステルス性能の付加もされつつある。ステルスで最先端を走るのがウォリアー偵察車で、当車は特殊な装甲構造で赤外線放射とレーザー・レーダー波反射を抑制している。これには側面装甲を内側に傾斜した稲妻状の断面にし、レーザー・レーダー波を地面方向に反射させる技術を採用。また要所に電波吸収剤を塗り効果を高めている他、音響センサーに対してもゴム性サイドスカートやキャタピラにゴムを貼り付けたりと、騒音発生率の低減にも腐心している。

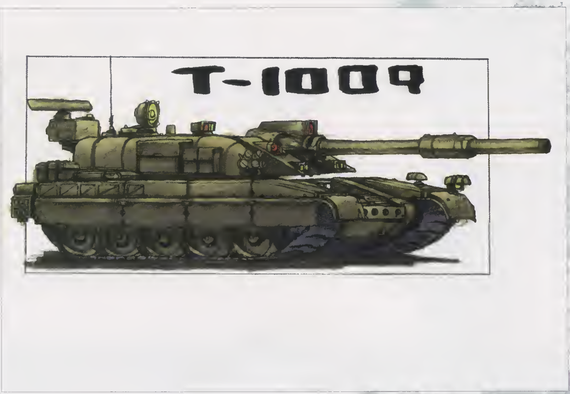


装輪式偵察車の代表にはフランスのパナールと、スイスのピラーニャがある。装輪式の特徴はタイヤ走行による乗用車なみのスピードにある。現在では4輪から12輪まであるが、輪数が少ない車両は重機関銃か携帯対戦車ミサイル程度の武装が限度なため、限定した偵察任務しかできない。そこで輪数を多くして、機関砲装備や戦車砲並の105mm～120mm砲を装備したタイプも作られているのである。最近の動向は、装軌式と同じように威力偵察を行えるよう重装甲・重武装化にある。これに伴う重量増加を相殺すべく、輪数を多くして速度の維持・向上を図っている。

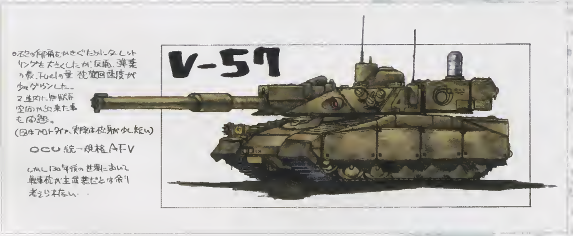


軍用ジープに関してはゲーム中の軍用ジープ同様に、市販の4輪駆動車を導入する傾向にある。有名なところではアメリカのHMMWV（通称：ハマー）がある。最近になって陸上自衛隊でも、三菱パジェロの基本仕様をそのままに、多少の改造を施したものを導入している。軍用ジープの構造はモノコックボディやフロントミッドシップなど、新規技術ではなく既存の技術が使用された堅実な設計になっているのが特徴だ。人員輸送や指揮・通信を主な任務にしているが、機動力の高さから偵察任務に用いられることもしばしばある。

主力戦車・軽戦車



大漢中軍戦車　T-1009
▲大漢中軍が開発したプロトタイプ主力戦車。砲塔の丸味や砲身が特徴的である。



OCU軍戦車　V-57
▲OCU統一規格で製造されOCU加盟各国軍にて導入されている主力戦車。砲塔も車体もコンパクト。

ヴァンツァーの出現により、陸上兵器の主力の座から引きずり落ろされてしまった感のある大型主力戦車だが、敵方にヴァンツァーの存在しない小規模な紛争においては、その威圧感で歩兵を圧倒し、まだまだ主力として使われている。

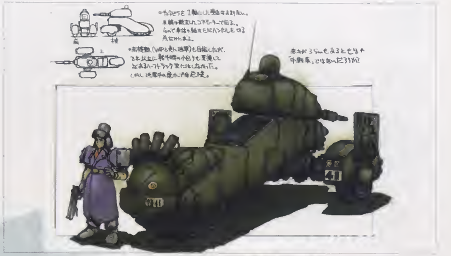
さてここに掲載した主力戦車2車種。砲身基部の形状から推察するに口径は120mm以上と非常に大きく、砲塔は薄くコンパクトな仕上がりだ。装甲にはかなりの傾斜をかけており、避弾経始性に優れている。内部には自動装填機構が導入され、乗員は車長と砲手のみ（通常は装填手込みの3名）。砲塔のそこかしこには照準用レーザー測距儀などの各種センサーと、スモークディスチャージャー（煙幕弾発射機）が配置されている。そして最も特徴的なのは砲塔後部の捜索レーダーだ。これにはミリ波レーダーなどが使用され、高精細の解像度で敵影を映し出すと同時に、敵味方識別を行ってくれる。

車体は砲塔のターレットリングを大きくし、備砲の仰角を稼ぐ構造にしている。リングを大きくした反面、車体にしわ寄せがきてしまい、燃料・弾薬量が減少し、砲塔の旋回速度も遅くなってしまった。サイドスカートにはモジュール式装甲を採用し、破損した場合は簡単に取り換えられる。

大漢中軍の快速反応部隊の要請により開発・製造された小型戦車。快速反応部隊の要望は終始、ヴァンツァーと同伴しうる高機動性の確保で、メーカーはこれに戦闘時の小回りの良さも併せて、快速反応部隊の要求に応えた。

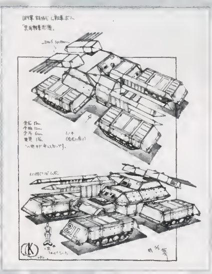
小型戦車はヴァンツァーの数を補う形で戦線に投入され、火力支援や占領拠点の維持に使われることが多い。その形状は実に奇抜で、長めの車体にはキャタピラを装備し、前方左右にはふたつの駆動輪、という構造になっている。キャタピラも左右タイヤも独立して駆動するために、整地・不整地を問わずに高速性を発揮できるところが強みだ。乗員は1名のみで運用できるのだが、居住スペースが極端に狭く、乗員からはひどく不評を買っている。

中口径の備砲を搭載した砲塔は、自動装填機構と簡易火器管制装置と簡単な構造である。



高機動小型戦車

▲キャタピラによるダッシュ力と高速機動は、快速反応部隊との行動を可能にした。



日防軍試作ビーム戦車

主力戦車・小型戦車とは違う形態だが、戦車という区切りで日防軍試作戦車をここで紹介する。この戦車はOCU日本の霧島重工と日防軍技術研究本部との共同開発で、CWDSという独自技術を装備した日本初のビーム兵器搭載兵器だ。

車体後部の対になっているアンテナ状のものがCWDSで、システムの機構は、レーダーや音響センサーなどを使用する兵器の電子機器（主にコンピューター）に侵入し、処理に誤差を生じさせるなどして、ヴァンツァーの行動を混乱させる電波を発生するシステムだ。ヴァンツァーはセンサーとコンピューターの集合体であるために、CWDS影響下では著しく行動を制限される。陸戦兵器の主力となったヴァンツァーへの対抗兵器としてその存在価値は計り知れない。

主力武装のビーム砲は、極めて波長の短い高出力レーザーを目標に照射し、レーザーの持つ高エネルギーによって破壊する。ビーム砲が巨大になってしまったのは、必要なエネルギーを得ると同時にエネルギーを集束するためだ。

ビーム砲もCWDSも電力をたくさん消費するため、必要な電力を発生する発電機関を搭載している。それゆえに全体的に大型のフォルムになってしまった。また消費電力の大きさから、ビーム砲と CWDSの併用は不可能となっている。今後はこれらの小型化が研究課題となるだろう。

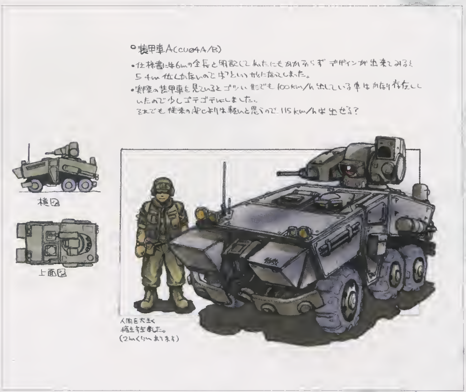
現用戦車の技術と動向

主砲である戦車砲の大口径化と砲弾の洗練、歩兵携帯用対戦車ミサイルの進歩、上空から襲いくる各種誘導兵器の台頭、攻撃ヘリコプターの発達により陸上兵器の雄として幅を利かせていた戦車も、今や数多くの脅威に怯えながら行動しなければならないが、各国軍は様々な改良でこれに対処していこうと努力している。

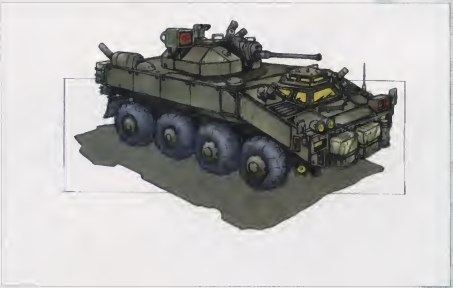
戦後以来世代交代を繰り返してきた戦車は、現在では第3世代にあると言われている。サイクルからいくと第4世代が出現する頃だが、冷戦終結に伴う大幅な軍縮と予算削減で先送りされている。ただ新技術の研究は続けられており、140mm戦車砲や液体装薬が研究中と伝えられている。しかしこれらはまだまだ研究段階で実用化のメドはたっておらず、やはり画期的戦車が登場という世代交代の波はしばらく起きそうも無い。そこで今ある戦車に新開発の装甲や砲弾、搭載コンピューターの改良などを加え、しばらく使っていこうというのが各国軍の考えだ。増加装甲については強烈な運動エネルギーで装甲を貫くAPFSDS弾と、化学エネルギーで装甲に穴をあける HEAT弾の両方に対処すべく、セラミックなどを挟んだ複合装甲を中空装甲にする方法が一般的になっている。戦車砲弾には薬莢部分を紙製のものにした燃焼性薬莢を使い、搭載弾数を少しでも多くする努力が払われている。また射撃統制システムの更新も行われ、これらを合わせて改造した戦車を第3.5世代と呼んでいる。



装甲車



日防軍装輪装甲車
◀乗員と比較すると全高の低さが際立っている。搭乗員はさぞ難儀していることだろう。



大漢中軍装輪装甲車
◀砲塔には大口径の機関砲を搭載。支援火力及び対装甲車戦闘用としても有効な威力を持っている。

一昔前まで装甲車は完全武装の歩兵を戦場に送り出すためだけの車両であったが、ここ数年では戦車に同行できるだけの機動力を与えられ、車内に収容した歩兵が降車戦闘を行う場合に十分な火力支援ができるよう、強力な武装を与えられた歩兵戦闘車と呼ばれるタイプが主流を占めつつある。もちろん従来の装甲車も存在し、装甲車は2つの流れに分かれるようになった。

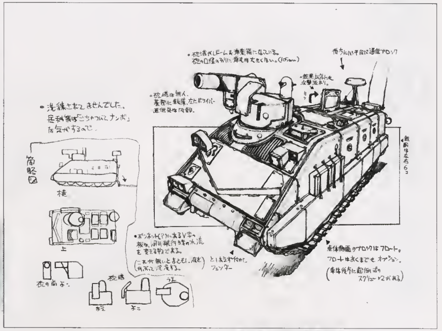
上に挙げた装輪式装甲車はこれまでの装甲車に分類されるもので、最大の特徴は前頁で紹介した偵察車と同じ考えで開発されたことである。

上は日防軍装甲車で6輪仕様なのがわかる。乗員は車長と操縦手の2名のみで、車長が上部ターレットの機関砲を操作する。ボディを左右から見るとハの字のようになっているのだが、これでは後部兵員室は狭く、6名程度の歩兵しか搭乗できないだろう。エンジンはフロントに配置し防御力を強化。乗員の残存性が高くなっている。高出力エンジンのおかげで路上最高速度は100km/h以上を叩き出す。装甲はアルミ溶接装甲を採用しているものの、これでは防御力が心もとなく、追加装甲を取り付けられるリベットが要所に設けられている。

下葉と右ページ上は大漢中軍装甲車。前者はフ↗

↘ランスが基本設計を行い、その後に大漢中軍首脳部が自国の用兵思想に合わせて、細部の設計を行った。走行時の安定性と高速性を追求し8輪式としたことにより重量増加にある程度の許容量を追加し、追加装甲を取り付ける余裕を与えた。さらに車体長も長くなり、収納できる歩兵は8名までで、1人あたりのスペースにもゆとりがあるようだ。運転席は防弾ガラスに守られているものの、露出面積が広すぎて残存性に問題が残る。

右の装軌式装甲車の特徴はいかにも装甲車といった感じで、米軍のM113を模範に設計されたようだ。特徴は側面の銃眼と、フロート機能を兼ねたサイドスカート。銃眼は乗車した歩兵が小銃を挿し入れ、車内から外部の敵を攻撃するもの。銃眼は防御力に問題があるところから各国軍が廃止しているのだが、大漢中軍は頑なにこの方式を採用している。フロートは河川を渡航する際に車体に浮力を与える役割を担い、車体前部のV字形のもので波を切り、車体後部の起倒式スクリューで推進する。備砲は超小型の105mm無反動砲で、突発戦闘時の自衛用や歩兵の支援火力として使われる。対装甲戦闘にも有用な火器だ。



大漢中軍装甲兵員輸送車
▲兵員室後部の4名は銃眼だけでなく上部ハッチから身を出して偵察・攻撃が可能である。

現用装甲車の動向

歩兵を戦場まで運ぶだけの単なる戦場タクシー的存在から、機関砲や対戦車ミサイルを備え、戦車に随伴し戦車と共に積極的に戦闘に参加する歩兵戦闘車へと進化した装甲車。これを装甲車の進化の第1段階とすると、装甲車の第2段階目の進化は重武装化と重装甲化ということになるだろう。



初期の歩兵戦闘車は、搭乗した歩兵が車内でも戦闘を行えるように、銃眼を装備したものが一般的だった。実際にアメリカのM2ブラッドレーや、ドイツのマルダーはそうであった。しかし湾岸戦争において、激しく揺れる車内から正確な射撃は困難なことや、銃眼部分の装甲圧が薄く防御力の面で不利なことが判明した。

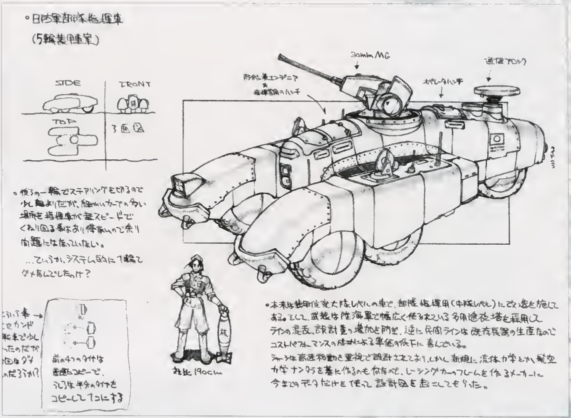
そこで銃眼は廃止して、増加装甲を追加して防御力を強化しているのが、最近の歩兵戦闘車の流行になっている。増加装甲も初期は防弾鋼板やスペースドアーマー(中空装甲)が使われていたが、こちらも最近ではERA(爆発反応装甲)を装着するようになり、戦車のHEAT(化学エネルギー)弾をも防ぐところまで来ている。さらには発達した戦場レーダーや各種センサーから身を隠す、ステルス技術も考えられている(詳しくは偵察車ページのコラムを参照)。先進各国軍ではこのような流れにあるにも関わらず、陸上自衛隊の最新歩兵戦闘車である89式装甲戦闘車は銃眼を有しており、若干流行から遅れている感がある。



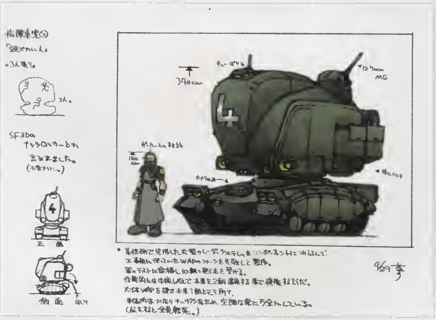
歩兵戦闘車の搭載する武装も逐次強化されつつある。歩兵戦闘車の中で最も重武装なのが、先ほどの陸上自衛隊の89式装甲戦闘車だろう。大型の砲塔に35mm機関砲と2基の対戦車ミサイルランチャーを装備。35mm機関砲は発射速度を落としているものの、元は対空機関砲なので対攻撃ヘリ戦闘にも有効な火器となっている。そのレーザーによる誘導は正確無比で、目標を破壊するまで狙いつづけるという。こうした機関砲の大口径化のほかに対戦車ミサイルも進化しており、現在では10kmもの射程距離を誇るミサイルが開発されている。また高度化する戦車の装甲を打ち砕く技術も研究中だ(詳しくはミサイルページのコラムを参照)。

重武装化・重装甲化の一途をたどる装甲車は、それに伴う搭乗兵員数の減少やコストの高騰を招き、配備に必要な最低数を確保できない問題が深刻化している。

指揮通信車



▲装輪式車両には珍しい5輪を採用した日防軍指揮車。武装の30mm機関砲は3軍共用の多目的砲塔を使っているらしい。



▲決められたサイズ内で大型レーダーや各種機材を詰め込んだ結果がこれ。機銃はあくまで自衛用といったところか。

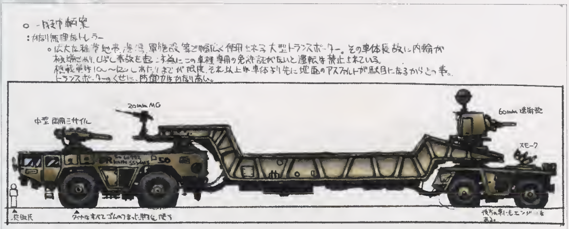
20世紀末になり、ようやく軍にも情報化・デジタル化の波が押し寄せてきた。軍事技術といえば先進的技術が使われているのだろうと想像されると思われるが、実際にはどれも枯れた技術が使われている。信頼性と確実性が一番に重視されるため、民生では数年前の製品が、軍用では最先端なことが日常茶飯事なのである。これは誇張ではなく、歩兵のハンディコンピューターのプロセッサは8ビットであるし、戦車の火器管制システムには16ビットが主流であり、最近になってようやく32ビットプロセッサが使われ出した。

航空機であろうと戦車であろうと、最近の兵器はどれもがコンピューターを搭載しており、先端の部隊から本部へ送られる戦場データの量は日増しに増大の傾向にある。通信量の多さは以前から問題になっていて、デジタル通信機器への転換はすでに逼迫している情報処理量を、更に圧迫しようとしている。指揮通信車は先端部隊からの情報・通信をその場で処理して、本部に伝達したり前線部隊に送り返すことで、情報を流動的かつ効率的に運用する能力を持っている。

大型トレーラー



▲軍利用とはいえ元は民間トレーラーなので、塗装で偽装すれば敵国内での隠密行動の安全度が増すだろう。



トランスポーター

▲運搬中の襲撃に備えて火器を備えているが、ミサイル発射機や60mm速射砲とトランスポーターにしては過剰な強武装。

大型トレーラーや輸送トラックなどは縁の下の力持ち的存在で、あまり表舞台に登場する機会がない。これら支援車両は軍において装備更新されることもほとんど無く、それこそ数十年単位でしか更新されないことがザラである。ここで紹介する大型トレーラーとトランスポーターも、民間で使われていた過去の車種を使用している。

まず大型トレーラーに関しては、ここまで大型ではないが、高速道路などでこの様な車種を目にしたり、イベントの簡易ステージとして使われているところを見たこともあるだろう。トレーラーは自身の最大積載重量を支えるために、多数のタイヤが必要となるが、ヴァンツァーを3機も搭載するとなると、サスペンションなどに大きなダメージを与えることになる。

トランスポーターは、民間なら建設用大型重機を、軍用では戦車などを運搬する際に使われる。戦車や重機といった高重量車両がアスファルトを走ると、あまりの重さにアスファルトがボロボロになってしまう。トランスポーターはそれを防ぐために存在しているのである。その車体が前方車・荷台・後方車と3ブロックに分割されているのは、交差点などでの旋回をスムーズにするための配慮である。

哮天雷関





大漢中軍装輪装甲車

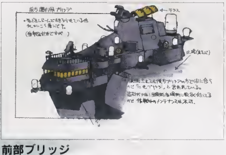
▲哮天雷関はヘリコプター・STOL機の運用までできる小型空母としての機能も備えている。内部にはかなりの数のヴァンツァーを収容することも可能だ。

要目
全長：約100m
全幅：約70m
全高：約45m
乗員：固有乗員70名前後

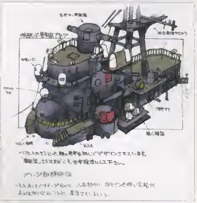
大漢中軍に所属する陸上移動要塞。人民共和国軍部隊および快速反応部隊の収容とその整備が主任務である。どちらかというと補給基地的性格が強く、前線での戦闘は極力避けるようにしている。とはいえ防御（自衛）上必要として装備された兵装はかなり強力で、火力だけなら第2次世界大戦時の巡洋艦並となっており、陸上戦艦としての性格も持ち合わせている。大漢中軍内部の機種分類では「陸上艦」と呼ばれているところからも、多少ながら陸上戦艦を意識して設計・建造されたことがうかがえるだろう。移動手段は底部に装備された大型で幅広のキャタピラだが、総重量があまりに重いため速度は極めて遅い。サイズも並大抵な大きさではなく走行できる場所が限られてしまうが、戦略上の要所間を結ぶ防衛ライン上に専用ルートを設けて、迅速な移動を行うことにより、長大な要塞線を形成しているのである。

哮天雷関には2つのブリッジ（アイランド）があり、前部ブリッジは運行を担当し、後部ブリッジは航空機管制を担当している。前部ブリッジは陸上移動の際の視界を得るために、どうしても船体前に設置しなければならない。レーダードームには前方監視レーダー・衛星航法用レーダー・各種通信アンテナが収められている。前方監視レーダーのおかげで専用ルート以外でも自由に行動ができ、哮天雷関が入り込める地域であれば、どんな戦場へも部隊を送りこめる。

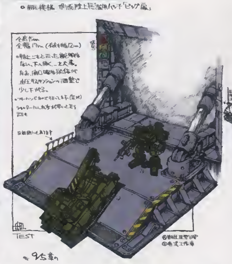
通常は前部ブリッジで操艦を行うのだが、船体正面だけあって被弾することが多く、後部ブリッジにも同様の機能を持たせている。後部ブリッジは後方からアプローチする航空機の管制を行うため、船体後部に位置している。また高さもあることから、対空レーダーや露天甲板など、監視に必要な機能を持たせている。さらに前部ブリッジが破壊された場合に、最低限専用ルート上を移動できるように、衛星航法用レーダーをブリッジ前面に装備している。



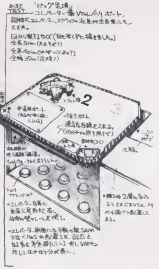
前部ブリッジ
▲操縦を行う前部ブリッジは便宜上から設置されているだけで、後部ブリッジでも操縦が行える。



後部ブリッジ
▲後部ブリッジには大型レーダーマストと、使用目的が不明の8mの光学式測距儀が装備されている。



側面ハッチ
▲船体側面のハッチから降車する工兵車両とヴァンツァー。ヴァンツァーなら8機までの重量に耐えられる構造だ。



船体左右には、ヴァンツァーや車両などを搭乗・降車させる大型ハッチがある。ハッチ部は構造上防御に問題があるのだが、このハッチはかなり厚みがあり、防御上の問題を解消している。幅17m・高さ15mもの大きさがあるハッチは下方に開くランプ式を採用し、大型の油圧サスペンションで開閉。搭乗・降車時の安全管理のため入り口に3色信号灯を設けている。また、試験評価段階ではスロープの角度が急すぎて、車両やヴァンツァーの移動に問題があったが、これは後に緩やかな傾斜に改修した。

右舷甲板と船体後部にはヘリコプター・VTOL機ポート兼用のエレベーターがある。4機ほどの機体を扱えるところから、空母のものよりもかなり大きいことがわかる。そして自身に動力があるので、エレベーター表面端には昇降を制御する管制室があるのである。格納庫は2層になっており、1層あたり4機まで格納し、左右あわせて16機もの航空機を収納できる。

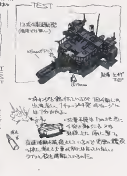
武装は35mmCIWS・105mm4連装速射砲・8連装ミサイルポッド。艦首両舷に4基が配置された近接防空兵器CIWSは、本来は対空武装なのだが、35mmバルカン砲の威力を活かして地上攻撃にも使われている。

105mm4連装速射砲は105mm戦車砲を４本束ねたもので、放物落下運動を利用した地上攻撃用の武装だ。速射砲とはいうものの、4発を撃ち出すと装填しなければならず、どちらかというと4点バースト砲といった方が近いかもしれない。装填は戦車と同じく自動装填装置を使い、リボルバー式拳銃のように1発づつ順番に装填していく。105mm徹甲弾はヴァンツァーに致命的ダメージを与えるほどの威力である。

8連装ミサイルポッドは普段は船体内サイロに収容され、使用時にはサイロのハッチがガス圧でスライドして、中からポッドがせり上がる。これには直立するだけの仰角があり、対空ミサイルとしても使用可能である。

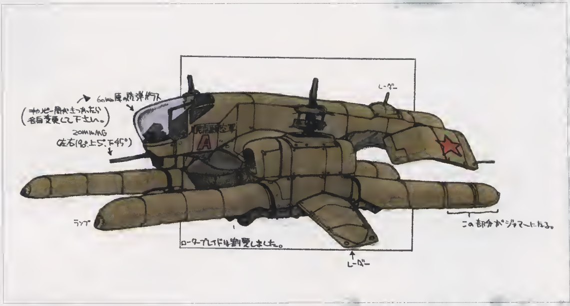


ミサイルポッド
▲ミサイルポッド内のミサイルを全弾発射した後の再装填は、サイロ内の自動装填機構で行っている。

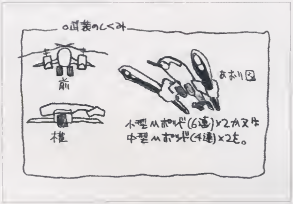


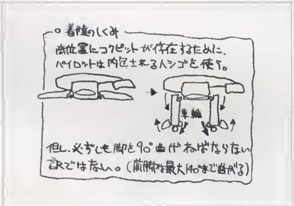
速射砲
▲速射砲の砲身は使われなくなった旧型戦車の105mmライフル戦車砲を転用して使っている。

攻撃ヘリコプター



▲この機体の特徴は前後に大きく張り出した降下装置だ。着地するときにはこの“脚”を下に折り曲げて、先端に収められた車輪を使用する。利点としては“脚”の長さほどある深さの河川に着陸可能なこと。難点は平地に着陸するにも降下装置を下げなければならず、パイロットがそのたびにハシゴでもって降りるしかないことだ。





攻撃ヘリコプターといっても、機関砲かロケット弾を備えただけの機体から、機関砲・対戦車ミサイル・ロケット弾を備えた本格的攻撃ヘリコプターまでさまざま。単に攻撃という括りで言えば、潜水艦や水上艦攻撃能力を持っている対潜ヘリコプターもその範疇に入ってしまうだろう。

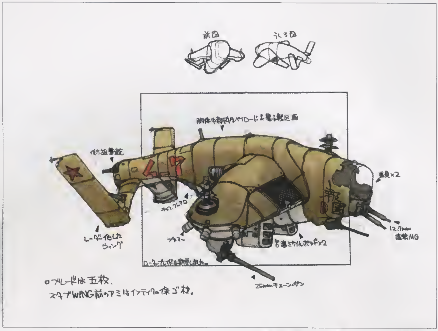
攻撃ヘリコプターの誕生はベトナム戦争においてで、ヘリボーン部隊のエスコートや着地地点を制圧支援を目的に開発された。このときは歩兵相手だったので、6銃身機銃・グレネード・ロケット弾のみを装備していた。しかし戦争後期に北ベトナム正規軍のソビエト製戦車が戦場に多数出現すると同時に、ワルシャワ条約機構軍の膨大な戦車や装甲車への対処を迫られたため、対戦車戦闘を主眼においた本格的攻撃ヘリコプターと、対戦車ミサイルが開発されたのである。

ここで紹介する2機種は大漢中軍所属の攻撃ヘリコプターである。2者の共通点は、テイルローターがなくメインローターを左右の大型スタブウイング上に配していることと、対ヘリコプター戦闘及び対空ミサイル探知用にレーダーを装備していることだ。

メインローターを2つにすることで、飛行速度や機動性を高められる。またローターを左右に配置することで、お互いのトルクを打ち消しあうので、機体自身が回転することは無い。だがこれでは駐機スペースを広くとってしまい、ハンガーあたりの収納機数が限られてしまうだろう。

攻撃ヘリがレーダーを標準装備しているのは、対ヘリコプター戦闘やミサイル探知を想定してのことである。もともと、地上スレスレを飛行するヘリコプターは戦闘機による撃墜が困難な標的である。そこでその任務は現在同じ攻撃ヘリに遂行させることが主流となっているのだ。また、近年のミサイル技術の発達により、戦闘機・攻撃ヘリはもとより歩兵や車両まで、対空ミサイルを装備するようになっている。レーダーは、それらの現状を前に必要不可欠な装備なのである。

武装は機首に機関砲、胴体下に対空・対戦車兼用ミサイルポッドと、攻撃ヘリコプターの基本型となっている。ただし右に掲載している機体はかなりの重武装で、機首には12.7mm連装機関銃、左右スタブウイング先端には25mmチェインガン(機関砲)、機尾には追跡機牽制や対空ミサイル迎撃用の7.62mm機銃、胴体下に6連装ミサイルポッドを2基を装備している。防御面も充実しており、胴体後部下にチャフ・フレアディスペンサー、エンジン排気口にはIR(赤外線)サプレッサー、レーダージャマーを装備。TVカメラ誘導以外の誘導ミサイルに対応して残存性を高めている。



▲こちらの機体で気になるのは着陸する方法だ。見渡す限りはギアなどの降下装置がないようだ。

現用攻撃ヘリコプターの動向

ベトナム戦争で産声をあげた攻撃ヘリは、ソビエトを中心としたワルシャワ条約機構軍の大機甲師団に対抗しうる攻撃ヘリコプター計画（AAH）によって、現在の形ができあがった。AAHでは攻撃ヘリに対して次のような要求をした。昼夜間を問わず悪天候下でも行える戦闘力、高速での匍匐飛行（NOE）、対戦車戦闘時のホバリング性能、ミサイル発射時の上昇率を含めた高い運動性と機動性、23mm機関砲弾の直撃に耐えられる生存性、被弾時の最低2時間の飛行保障、戦車や装甲車を撃破できる攻撃力などである。そしてAAHの要求に応えて開発されたのが、アメリカ陸軍における主力攻撃ヘリとして採用されているAH-64アパッチだ。夜間でも戦闘が行える全天候性能は、後に開発される攻撃ヘリには必須の項目となっている。

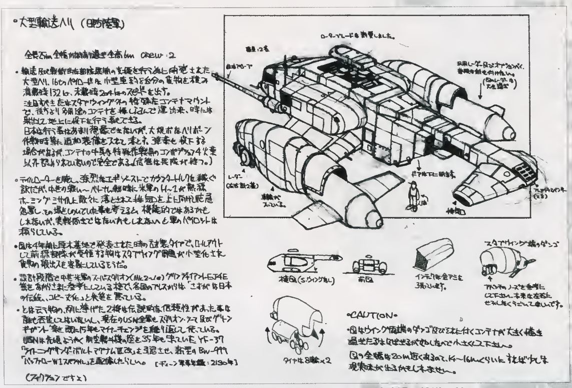


現用の攻撃ヘリは十分な運動性・機動性を有しており、これ以上の性能向上は必要はないと判断されている。目下チューンアップを行っているのは、攻撃力を含めた戦闘力の向上である。アパッチを例に取ると、機首下面にあるTADSターレット（目標の探知・照準を行う）に収めている、赤外線暗視装置・光学望遠鏡付カメラ・レーザー測距儀兼追尾装置を、逐次近代化することで能力アップさせている。またアパッチの標準武装である、レーザー誘導対戦車ミサイルAGM-114Aの射程を6kmから8kmに延長し、誘導方式に赤外線誘導装置とIRシーカーを追加して命中精度を上げている。レーザー誘導は目標を破壊するまでレーザーを照射し続ける必要があり危険性が高い上に、雨などではレーザーが拡散されてしまうことがある。そこでこの問題を解決し戦闘力・攻撃力をさらに向上させるために、ミリ波レーダーの搭載とミリ波誘導ミサイルが開発された。両者の組み合わせは完全な撃ちっぱなしを可能とし、相乗効果として残存性が一段と増した。



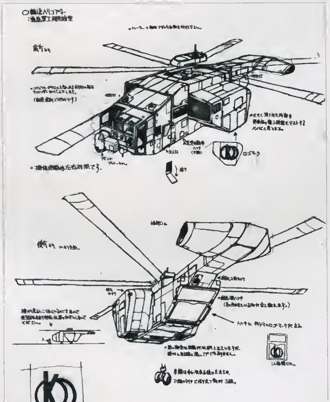
次世代の攻撃ヘリコプター計画はすでにスタートしており、要求項目としてはステルス性能と対ヘリ戦闘能力・大幅なコンピューター化が挙げられている。ステルスはレーダー反射面積・赤外線放射・空中放射騒音の低減研究を推進。対ヘリ戦闘に関しては攻撃ヘリの最大の敵は攻撃ヘリと想定し、対空ミサイルの運用能力付加とフライバイワイヤ操縦方式を採用している。そしてコンピューター化は、操縦制御や武器管制を数個の液晶表示装置上で行うものに変更、これまでのメーターばかりのコクピットから、液晶画面ばかりの近代的なコクピットになっている。

輸送ヘリコプター



日防陸軍　輸送ヘリ

▲このヘリの特徴は両サイドの装置。この装置にはレーダーとギアが組みこまれており、着陸時には片側８輪のタイヤが着陸時のショックを和らげる。



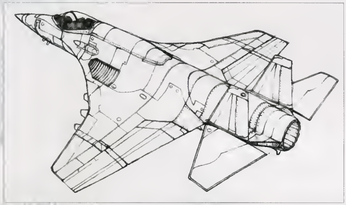
霧島重工　輸送ヘリ（民間用）

▲民間仕様には不必要な給油プローブや仰々しい着陸装置はない。後部カーゴ内には膝を抱えたヴァンツァーが2機まで収容できるスペースがある。

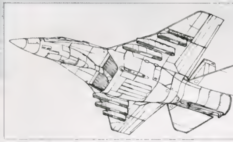
輸送ヘリは物資や人員を大量に運搬できるところから、輸送任務はもちろん空挺など戦術的な部隊展開に絶大な威力を発揮する。さらに固定翼機では無理な地形への離着陸も可能な点から、米軍や陸上自衛隊などの空挺部隊は、従来の固定翼輸送機から大型輸送ヘリに機種変更を行った。迅速な展開をモットーとする空中機動部隊として、空挺部隊は形態を変えようとしつつある。空陸一体のエアランドバトルは現代版電撃戦術であり、ヘリボーンにて敵地後方に兵員・機材を投入して、包囲殲滅作戦を行うのである。

ここで挙げた2機体はどちらも同じ機種からの派生であり、どちらもテイルローターがない。テイルローターの無い機体は一般的に「ノーター」（NO Tail Rotar）と呼称する。普通ヘリコプターはテイルローターが無いと、メインローターの強力なトルクにより機体まで回転してしまう。そこでエンジン排気を圧縮して、テイルブームを経てテイル左側面から排出することで、メインローターのトルクを打ち消しているのだ。日防軍タイプは排気の赤外線に照準する赤外線誘導ミサイルに対する策として、テイル後端にフレアディスペンサーを設けている。それでもパイロットは安心できないようで、従来のテイルローターに戻して欲しいとの要望が上層部に多数寄せられているそうだ。

戦闘機



▲機体を左上後方から見たところ。キャノピーの左下後方にあるのが20mm機関砲の発射口だ。



▲ギア格納部の様子が良くわかる。インテークには金網を張り、鳥の飛び込み対策としている。

戦闘機には戦闘目的別に2つのタイプが存在する。ひとつは純粋に敵航空機を撃墜し、戦場上空の制空権を確保する制空戦闘機。代表的なところでは米軍や自衛隊が採用しているF-15イーグルがそれである。イーグルは第1号機が配備されてから30年近く経ち、新型機が何機も開発されているが、現在でも最強の制空戦闘機としての評価は色褪せていない。もうひとつは戦闘攻撃機で、対空戦闘も可能だが主任務は対地攻撃となっている。最近の動向としては対地攻撃に主眼が置かれるようになり、ここ数年に開発・配備された新鋭機はマルチロール(多目的)機として設計されている。こちらの代表は米軍のF-18E/Fや仏軍のラファール。

左の戦闘機は単発エンジンなところから空軍機であることが推察される。翼下のパイロンが合計で6ヶ所もあるところから、対地攻撃を目的に開発された戦闘攻撃機ということが判断できる。垂直尾翼やエアインテーク以外の形状は米軍のF-16に酷似しており、設計にあたって参考にしたと思われる。ステルス設計は21世紀から全盛期に入ろうとしているが、当機に関してはなぜか配慮されていないのが気になるところだ。

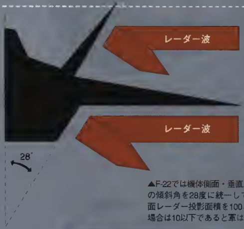
現用最新戦闘機とステルス技術

各国の軍隊は冷戦の終結による軍縮の煽りを受けて、新型戦闘機の新規開発もままならないというのが現状のようだ。ソビエトの崩壊後、唯一の超大国で軍事大国であるアメリカも例外ではなく、現行機種のエレクトロニクス機材を高性能のものに換装するなどして延命措置を施し、新鋭機の登場まで繋いでいく方針を立てている。空母搭載機の主力であるF-14やF-18は、対地攻撃可能なマルチロール機としての能力を付加し、しばらくは一線に留まらせる予定らしい。

真の最新戦闘機といえば、アメリカ空軍の次期主力戦闘機として正式に配備の決定したF-22ラプターだろう。徹底したステルス設計と高性能レーダー・センサーで敵の先制捕捉・先制攻撃・先制撃破を可能にしている。超音速での巡航や推力可変ノズルを装備したF-22は、他の追随を許さない制空戦闘機となるだろう。アメリカではさらに空軍・海軍・海兵隊の3軍とイギリス空軍が導入予定のJSFを開発中で、近々プロトタイプが登場の予定である。JSFもまたステルス性を持ち、短距離離陸や垂直着陸ができるよう設計が行われている。フランスには、つい先日正式に配備が決定され、空母シャルルドゴールで運用試験を始めたラファールがある。ラファールは海軍と空軍の多様な要求を1機種でまかなおうという意欲作で、全天候下で様々なミッションをこなせる高機動マルチロール機として設計・開発された。

ステルス技術はこれといって難しいことではなく、要は照射されたレーダー波をそのまま返さないで、あらぬ方向に反射してしまおうということなのである。湾岸戦争で一躍有名になったF-117ナイトホークや、映画で登場するB-2スピリットが角張った構造なのはそのためなのである。17度や33度と同じ角度で構成してやると上手いことレーダー波を反らせる。これだけでは心もとないので、フェライトを混合したレーダー吸収材を何重にも塗付し、レーダー波を吸収し熱に変換している。

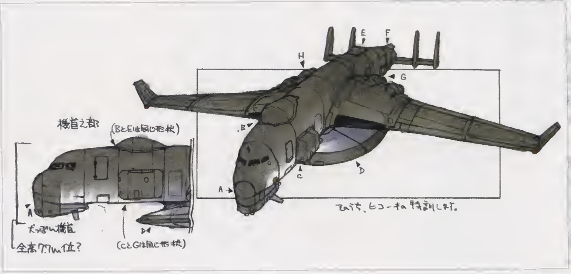
21世紀以降の戦闘機のトレンドはステルスと超音速巡航となるだろう。



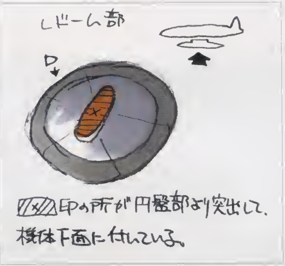
▲F-22では機体側面・垂直尾翼・キャノピーの傾斜角を28度に統一している。F-15の側面レーダー投影面積を100とすると、F-22の場合は10以下であると軍は発表している。



早期警戒機・偵察機



早期警戒機
▲パルスドップラー方式のレーダーが収められたレーダードームを機体下面に装備することで、地上目標を索敵・監視する能力を高めている。機首下・機尾・背面2ヶ所には対空レーダーが収納されており、レーダードームと併せて上下左右前後の空中物を索敵することができる。



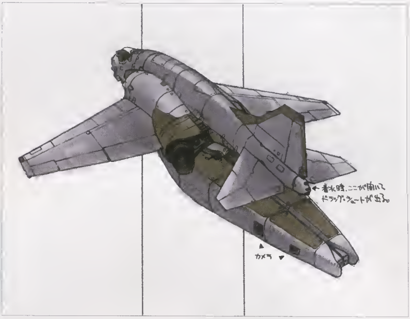


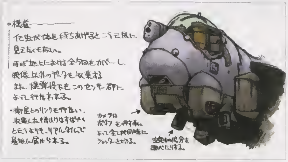
早期警戒機（AEW）の任務は機体に装備した円形の巨大なレーダードームにより、当該地域上空周辺の敵機を索敵警戒し、索敵情報を味方迎撃機や基地に提供することだ。有名なところではアメリカ海軍空母に搭載され、日本でも採用されたE-2Cホークアイがある。早期警戒機の発展型が早期警戒管制機（AWACS）と呼ばれる機種で、索敵情報を迎撃機に提供すると同時に迎撃機を誘導する能力も備えている。

大漢中軍空軍偵察機は機体下のレーダードームから、早期警戒機もしくは早期警戒管制機どちらかの能力を有していると思われる。レーダードーム内には下方監視能力を向上させ、地上目標を捕捉できるようにした索敵レーダーと、敵味方識別アンテナが収められている。レーダーの索敵距離は地上目標なら半径250km、空中目標なら半径500kmの範囲。400個の目標を探知でき、150個までの識別と追跡が行える。機体内に搭載された電子機器は、多目標情報を同時かつ高速に処理できる高性能コンピューター・気象レーダー・ジャイロ及び慣性式航行装置・衛星通信機器・UHF/VHF通信機器などだ。4発のターボファンジェットエンジンにより最高速度900km/h を出せるが、偵察任務時には2発のみを稼動させて、低速飛行によって索敵精度を高めている。また翼内と機体内の大型燃料タンクにより、双発飛行の経済巡航速度で飛行すれば、6時間以上の作戦飛行が可能となっている。

偵察機には超高高度の対空ミサイルの届かない安全な空域を飛行するタイプと、戦場上空の低高度という危険な空域を飛行して、精密な偵察を行うタイプがある。高高度タイプは専用に設計されるが、低高度タイプは既存の戦闘機や攻撃機を改造して偵察機材を装備させたものが多い。偵察機器はフィルム使用の高性能カメラ・高画素 CCD使用のデジタルカメラが基本だが、TVカメラや赤外線カメラなどの動画として記録できる機器も搭載されている。さらに高高度偵察機には、合成開口レーダー（SAR）を装備していることが多い。合成開口レーダーの仕組みは、機体を移動させながら電波を送受信することで、移動した距離分の長さがあるレーダーと同じ能力を持たせるというものだ。

右の飛行艇型偵察機は低高度偵察機に分類されており、機首各部に取り付けられた各種センサーと、機体下部のフロート内部のカメラにより偵察任務をこなす。翼下にも偵察ポッドを吊り下げられる。固定武装はないが、機体内部に4000ポンド爆弾を格納可能で、それは発見した目標を早期に破壊する必要がある場合に使用される。







偵察機
▲機首にはセンサーが所狭しと配置されている。キャノピーやや右斜め前のものは前方赤外線監視装置で、空中・地上の赤外線を放出する物体を捕捉する。下部前方の4台と奥に1台あるカメラにより、前方の左右120度と上下 90度の範囲を撮影できる。その際シャッターは全台同時に切られる。下部中央の左右方向に出ているものは、空気中の成分を分析するセンサーだ。

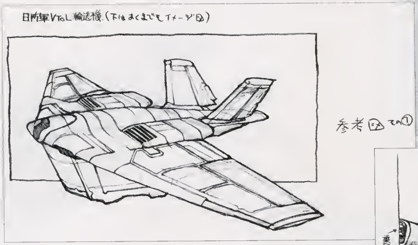
現用AWACS・偵察機の動向

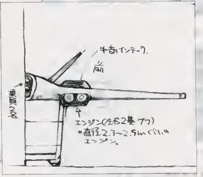
早期警戒管制機（AWACS）は戦場の状況・情報を自前のレーダーで捉え、味方部隊に情報の提供や管制を行えるため、多数の航空機が展開する場合や、陸海空一体の大部隊が展開する戦闘では必要不可欠な存在となった。最近では空中目標の監視を得意とするAWACS（アメリカ空軍のE-3Cセントリーなど）に対して、地上目標の監視を得意とするAMACS（アメリカ空軍・陸軍共同運用のE-8Aジョイントスターズ）が就役しており、お互いに連携をとりながら監視と支援を行っている。

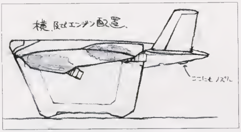
こうしてAWACSが進化していく一方で、戦術偵察の任務は、戦闘機などに偵察ポッドを装着した即席の偵察機を用いることが多くなってきている。ここ数年の流れでは戦術偵察機の人的損失を考慮して、偵察機材と機体誘導機材のみを積んだ無人の戦場監視機（UAV）が開発・配備された。戦略偵察機となると、一昔前では高高度をマッハ3で飛行する、SR-71Aブラックバードなどの有人専用偵察機が配備されていたが、最近では地上物を10cm以下の解像度で表示できてしまう合成開口レーダーが開発されており、これを搭載した軍事偵察衛星に戦略偵察任務を引き継いでいる。



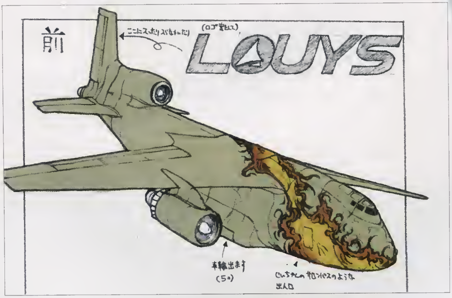
輸送機







日防軍VTOL輸送機
機体下部のカーゴは脱着可能な構造になっている。事が起きてから物資を積むのでは時間が掛かるが、脱着式にしておけば事前集積されていたカーゴを装着するだけで済み、迅速な部隊の展開が可能となるためだ。



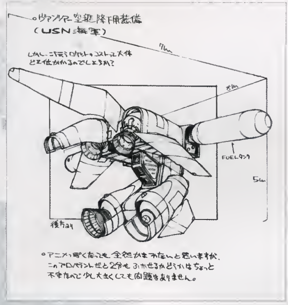
ルイス家輸送機
ヴァンツァーを背中合わせで搭載する構造になっているので幅広な胴体となっている。全長も短いために全体的にずんぐりしている。

第2次世界大戦後の輸送機はジェット機化が急速に進み、航続距離・積載能力が飛躍的に向上した。現在では戦車が積める中型以上の輸送機なくしては、陸軍部隊の展開はありえないとまで言われている。輸送機が使用される作戦は空挺作戦と戦域輸送作戦で、前者は戦場近辺まで飛行していき、空挺部隊を降下させる作戦だ。後者は特殊部隊や空中強襲部隊が確保した戦線後方の飛行場まで、車両や機材を空輸する。ちなみに輸送機には頻発する紛争に対して迅速な部隊展開を目的に開発された比較的小型の戦術輸送機と、重装備の機甲師団を大量に輸送する戦略輸送機とがあるが、アメリカでは戦略輸送機並の積載能力を持ちつつも、戦術輸送機並の短距離離着陸が可能な性能を持った機体を配備している。

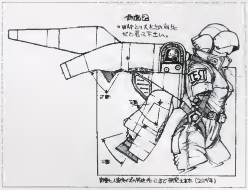
ここで紹介している輸送機は、前述の分類ではどちらも戦術輸送機クラスである。日防軍のVTOL輸送機は垂直離着陸を可能とした輸送機で、輸送ヘリコプターと同じ運用ができながら、それ以上の輸送力を持っている点で戦術的アドバンテージが高い。重積載で垂直離陸が可能な推進力を得るために、ターボファンジェット(エンジン)は実に8基もあるのが特徴的だ。なおアメリカでは新型VTOL輸送機の開発を急いでおり、これまでよりもより短時間での大量の重武装部隊の投入・展開を狙っているという。

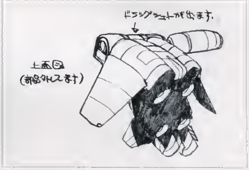
対してルイス家の輸送機は、OCU軍で広く使われているタイプを買い上げたものだ。機体の基本設計は民間機からの流用で、安価に製造できる上に補修部品の調達が容易となっている。機体内部にはヴァンツァーを多数格納できるだけの容積とペイロードが確保されている。高出力の大型ターボファンと、面積が広く揚力を大きく発生させる角度の主翼により、1000m以下の滑走路でも離着陸が可能だ。後部ハッチはランプ式扉と観音開き扉のハイブリッドとなっている。

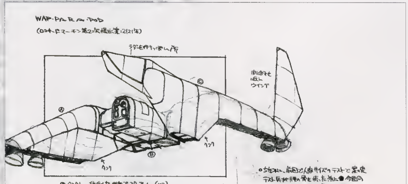
空挺降下装備



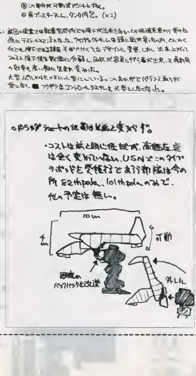
USN海軍で採用されているヴァンツァー空挺降下装備。開発する際には人間サイズのプロトタイプまで製作してデータの収集を行った。これによって得られたデータはヴァンツァー仕様の設計に役立てられた。







こちらはUSNロッキードマーチン社が提案した空挺降下装備。2足ヴァンツァー以外の形態をしたヴァンツァーにも装着できるよう設計されている。脱落後は数個に分解するため回収作業が容易で、再利用性にも優れている。

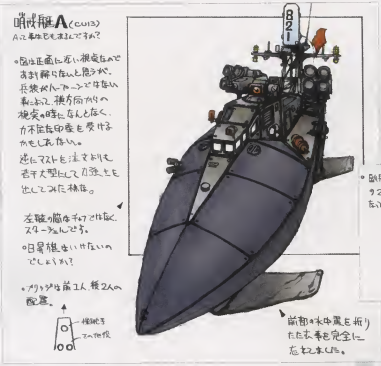


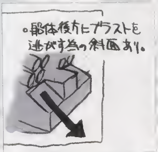
空挺降下装置を航空機というジャンルに分けるのは難があるが、限定的ながらヴァンツァーに飛行能力を付加させているのでこちらに分類した。

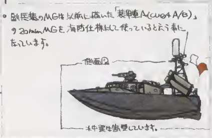
従来は歩兵も車両も機材もパラシュートで降下していたが、歩兵以外のパラシュートは制御が不能で、ただ落下するに任せていた。歩兵のみが左右に旋回できたり軟着陸のできるパラグライダーでもって、降下の際に自由な行動ができたのである。そこで各国の軍技術部は、ヴァンツァーも人間と同じ動きができることから、見合ったサイズのパラグライダーが使えるだろうと考えた。しかし実験段階においてヴァンツァーをパラグライダーで降下させたところ、着陸時に高い確率で脚部が破損してしまうことが判明する。パラグライダーを大型化してみたが根本的解決にはならず、ヴァンツァーには専用の降下装置が必要と判断された。開発にあたってはヴァンツァーのバックパックを利用し、パラグライダーと同じように空中での自由度と、短時間ながら滞空・飛行できる性能を実現している。

空挺降下装備の基本構造は、多数の小型ロケットバーニアと燃料タンク、非常用ドラッグシュートといたって簡単な造りになっている。通常の空挺降下の場合は、輸送機から降下して地上200〜300mあたりでバーニアを断続噴射。100mを切ったところで持続噴射して、加速度を一気に減少させて着陸する。着陸と同時に降下装備は自動的に脱落する。飛行性能を求める場合は、降下と同時にバーニアを断続的に噴射することで、滞空時間を稼ぐことができる。ドラッグシュートは燃料切れやバーニアの故障などの非常時に展開するが、着陸時に降下装備の重量まで加味されてしまうので、脚部は確実に使い物にならなくなってしまう。あくまで乗員保護としての役割しかないと考えた方がいいだろう。

哨戒艇







日防軍哨戒艇

▲日防軍が配備しているミサイル艇はミサイル発射筒を8基も装備している。20mm機関砲は小型舟艇相手の水上戦や対空戦に使われる。



大漢中軍哨戒艇

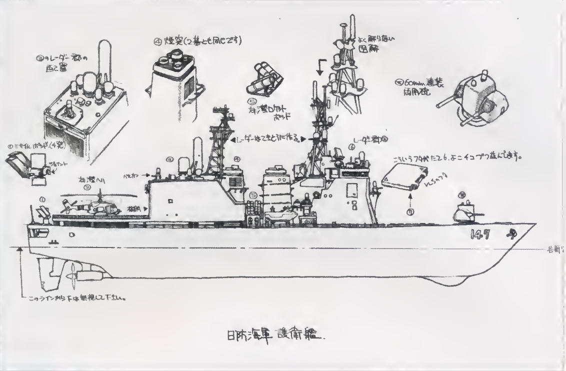
◀戦車の砲塔のような形状をした50mm単装砲は、対水上・対装甲戦においても、ジャングルに潜むゲリラ相手の戦闘においても有効な武装だろう。

哨戒艇にはコルベット艦・ミサイル艇・魚雷艇・河川砲艇などがある。一般的にはミサイル艇と魚雷艇を哨戒艇としているが、ミサイル技術の発達によって魚雷艇の価値は失われており、すっかり影が薄くなってしまった。哨戒艇は船体長50m程度で排水量500トン前後と小型ながら、対艦ミサイルを装備する重武装と30ノット以上の速力を備えるのが特徴だ。この高速性から、現在では高速戦闘艇と呼ばれている。小型ながら重武装を施せるメリットは大きく、小国にとっては安価で十分な戦力として期待できる存在だ。

日防軍の哨戒艇は20mm機関砲1門と4連装ミサイル(対艦ミサイルと思われる)発射機を装備するところから、ミサイル艇に分類できる。水中翼を装備した船体と2軸ウォータージェットにより、最大速力50ノットを達成した高速艇だ。高度な新システムの導入で、思い切った省力化が実現し、乗員はわずか3名となっている。

大漢中軍の哨戒艇は第2次大戦のヨーロッパ戦線でロシア軍が使っていた、河川砲艇を彷彿させるものがある。河川砲艇は河川もしくは沿岸部を警戒航行し、会敵した場合には自身が持つ重武装で攻撃・制圧することが主な任務となる。

護衛艦



レーダー類の多い護衛艦。レーダーもさることながら、上部構造物の側面が垂直なことやラティスマストなところを見ると、ステルス性は完全に捨てているようだ。エリアディフェンス及び個艦防御に絶対的自信がある証拠か？

護衛艦とは、輸送艦や空母を敵の攻撃から護衛することを主任務とした駆逐艦もしくは巡洋艦のことを指す。有名なところでは米海軍と海上自衛隊が保有しているイージス艦がある。イージスシステムは、艦橋側面4方向に張り巡らしたフェイズドアレイレーダーで、飛来する多数の脅威(対艦ミサイルや航空機)の探知・捕捉・追尾・攻撃を行うシステムで、同時に12〜16目標を攻撃できる最強の防空システムだ。ここで紹介する日防海軍護衛艦もイージス艦の延長にあたる艦で、ブリッジ前方にある24門のVLS(垂直発射システム)が搭載されている。遠距離目標に対してはVLS内の対空ミサイル、中距離では艦首の60mm速射砲、近距離では艦尾のミサイルポッド、至近距離では35mmCIWSで対処と、4段構えの防御体制が個性的だ。艦首底の出っ張りには潜水艦探知のバウ・ソナーが収められており、艦尾にはヘリコプター発着甲板と、対潜ヘリコプターを2機まで収納できる格納庫がある。このあたりの構造は米海軍のアーレイバーク級イージス艦のフライトⅡAと酷似しており、設計の際に考慮されたのであろ

現用護衛艦の動向

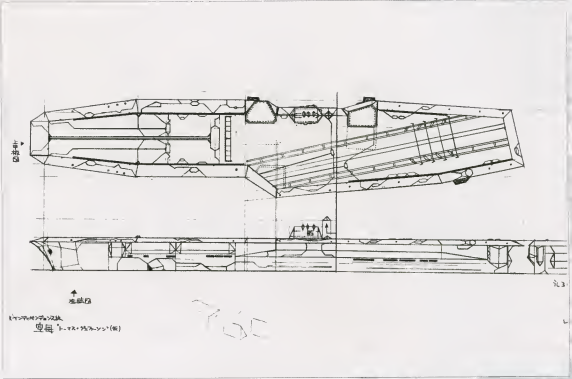
兵器の中では戦闘機に次いで積極的にステルス性を求めているのが水上艦艇であり、米海軍では今までの戦闘艦の概念を大きく変えてしまう艦を計画している。

艦船のステルス化は敵に発見されなくするのではなく、レーダーに映る大きさを実際よりも遥かに小さくして商船や大型漁船と思わせたりすることと、対艦ミサイルに狙われた場合は電子妨害と併用して回避率を高めることに意義がある。最近の戦闘艦は上構にテーパー(傾斜)をかけたり、RAM(電波吸収剤)を塗布するなどしてシグネチャーの低減に努め、ステルス性を高めているのが特徴だ。RCS(電波反射面積)の多いマストも取り除かれ、レーダーやアンテナ類は多角体型もしくは円錐型のレーダードームに収めるタイプが多い。搭載火器にもステルス対策が施されており、ミサイル発射機は船体内に収めるVLS方式が一般的になりつつある。

武装のほうに目を向けると、これまでの洋上戦闘から地上攻撃戦闘に主眼が置かれるようになり、トマホークなどの地上攻撃ミサイルが重要視され、誘導砲弾が発射可能な大口径艦載砲の必要性も高まってきた。また、昨今流行の戦域弾道ミサイル防御用のミサイル開発も急がれている。



航空母艦



空母の完全なステルス性を求める上で最大の障害となるのが、艦載機を昇降させるエレベーター。構造上どうしても垂直となってしまいレーダー波を反射してしまう。

空母の持つ最大の戦力は艦載している航空機にあり、自身には少数の個艦防御用武装しか施されていない。ゲーム中に登場する空母はUSN(主体はアメリカ)軍第3艦隊旗艦の「トーマス＝ジェファーソン」だが、現在でも未来でも超大型空母を保有するのはこの国だけだろう。

空母の最大の特徴である飛行甲板は、現用空母と同様にアングルドデッキ(斜め飛行甲板)を採用。飛行甲板端は全周に渡り下方へと傾斜して、船体と一体化しており、さらに先端には搭乗員の落下防止ネットが張り巡らされている。傾斜部分には何ヶ所かミサイルハッチが設けられ、個艦防御ミサイルや巡航ミサイルを搭載。空母が巡航ミサイルを装備しているというのは珍しく、驚きである。カタパルトは軌道だけしか判別できず、推進力に何を使っているか判断しかねるが、現在検討されている技術から推察するに、電磁カタパルトが実用に至っているのだろう。

アイランド(艦橋)は正面・上面から見ると三角体で構成されており、RCSに限っては十分なシグネチャーの低減が図られている。突起部分も少なく、飛行甲板端の傾斜とあわせて、当艦のステルス性が非常に高いことがうかがえる。

現用空母の動向

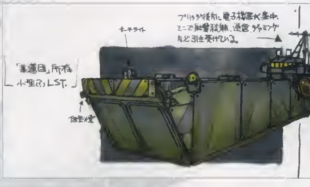
空母保有国は99年現在9カ国あるが、艦載機数が70機以上の大型空母を保有しているのは米海軍だけで、洋上航空兵力に関しては独壇場といえる。米海軍は冷戦後の緊縮国防費にも関わらず、世界戦略上から空母の12隻体制を維持しているのだ。

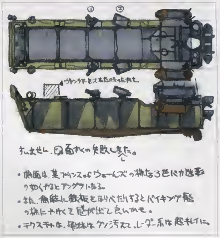
米海軍の中核を為す大型空母は3タイプ存在するが、隻数がもっとも多いのはニミッツ級だ。1975年就航のニミッツから2002年就航予定のロナルド・レーガンまで9隻が建造されているが、10番艦CVN-77の就航を最後にニミッツ級の建造は終了する。まだ10番艦の建造が開始されていないというのに、海軍内では革新的技術を導入して設計する次期空母CVXの計画を進めているわけで、なんとも気の早い話だ。

CVXのニミッツ級空母を凌駕する技術として、飛行甲板の融通性・低効率の蒸気カタパルトに代わる電磁カタパルト・シグネチャーの低減・情報システムの向上・ダメージコントロールの自動化・省力化によるトータルコストの削減、などが挙げられる。CVXへの橋渡し的役割を任されたCVN-77では、飛行甲板とシグネチャー低減を取り入れて設計するという。次のCVNX-1では電磁カタパルトと先進情報システムを採用し、段階的に新技術の導入と洗練を行っていくとのことだ。

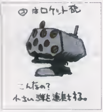


揚陸艦・LCAC

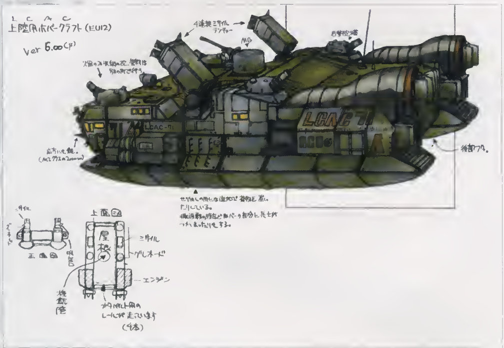








揚陸艦となっているが形状は現在の上陸用舟艇とそっくり。船体後部両舷には15名程度が乗れる脱出艇が吊るされている。脱出艇ながら25mm機関砲を1門装備している。



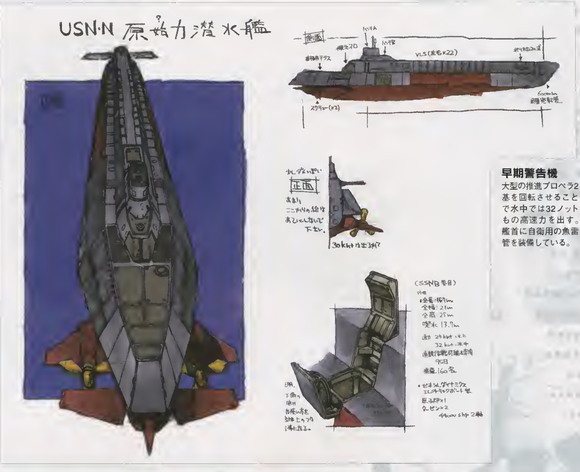
LCAC
4連装ミサイルランチャー2基に迫撃砲4門など、揚陸後は支援火力として使えるようになっている。

敵地近くまで歩兵・車両・機材・物資を輸送する揚陸艦には、積載物を揚陸する方法で2つのタイプが存在する。ひとつは港湾施設が破壊されて使用できない状況を想定して、艦自らが砂浜に乗り上げて（ビーチング）揚陸を行う通常揚陸艦。弱点は港湾と砂浜でしか揚陸できないことと、無理矢理座礁させるために喫水が浅くなり低速度なこと、さらに座礁した艦を別の艦で沖合いまで引かなければならないことだ。もうひとつは上陸用の小型舟艇やエアクッション艇(LCAC)を搭載し、これらをビーチングさせて揚陸を行うドッグ型揚陸艦。弱点は一度に大量の物資を揚陸できない程度で、高速性や艦の大型化など利点のほうが多い。

大漢中反政府勢力「華蓮団」が所有している揚陸艦はビーチングを行うタイプだ。まずは両舷に装備されたガトリングガンとロケット砲で上陸地点を制圧し、ビーチングと同時に歩兵・車両・ヴァンツァーを揚陸する。揚陸艦としては小型ながら、4機のヴァンツァーを積載可能だ。

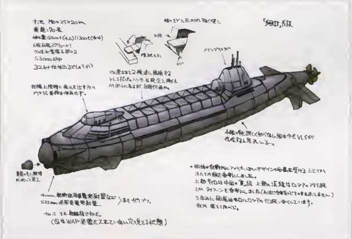
LCACはホバークラフト型揚陸艇でエアクッション艇とも呼ばれる。外気を取り込み、圧縮して下方に噴射することで浮くため、水面でも地上でも滑るように移動が行える。揚陸場所を選ばないうえ、速度があるところが強みだ。

原子力潜水艦



早期警告機
大型の推進プロペラ2基を回転させることで水中では32ノットもの高速力を出す。艦首に自衛用の魚雷管を装備している。

要目			
水上排水量	：不明	主機	：原子炉1基／蒸気タービン2基／1軸
水中排水量	：不明	出力	：49,000馬力
全長	：167m	速力	：水中32ノット／水上24ノット
全幅	：21m	乗員	：160名
全高	：25m	兵装	：600mm魚雷発射管4門／VLS22基



要目			
水上排水量	：8,600トン	主機	：加圧水型原子炉2基／蒸気タービン2基／1軸
水中排水量	：11,300トン	出力	：53,000馬力
全長	：140m	速力	：水中30ノット強
全幅	：25m	乗員	：70名
全高	：20m	兵装	：400cm魚雷発射管4門／533mm魚雷発射管4門

潜水艦が一躍表舞台に踊り出たのは、第2次世界大戦時のドイツ海軍が配備していたUボートからであろう。敵領海内奥深くまで侵入し、輸送路上に配置されたUボートは、連合国輸送船団を中心とした商船破壊行動を積極的に行い、連合国をおおいに悩ませたという。

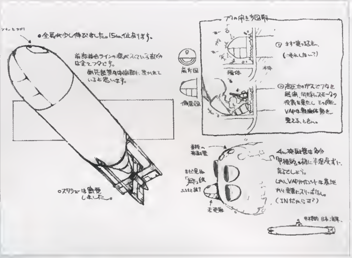
現代の潜水艦にはディーゼル・バッテリーを推進力に使った通常動力潜水艦と、原子炉を推進力に使った原子力潜水艦（原潜）があり、原子力潜水艦には核ミサイルを搭載した戦略原潜と、対水上艦、対潜水艦攻撃を主任務にした攻撃原潜とがある。核保有大国のアメリカでは、地上発射のICBM、空軍の戦略爆撃機・戦略原子力潜水艦と、核の3本柱（トライアド）を確立している。冷戦終結後はICBMと戦略爆撃機は大幅な削減を強いられているが、戦略原潜は潜水艦が持つ隠密性・残存性から削減数は少なく、抑止力戦力の要として重要なポストに君臨している。

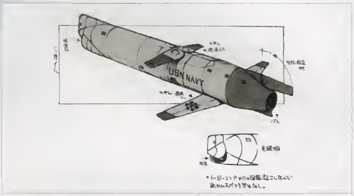
ここで挙げたUSN海軍と大漢中海軍の原子力潜水艦は、整然と並べられた弾道ミサイル発射管から戦略原潜だということがわかる。しかしこの時代では核戦力はご法度となっているため、USN原潜のミサイル発射管は通常弾頭の巡航ミサイルが発射可能なように改修された。大漢中原潜は戦略原潜からヴァンツァーの搭載も可能な輸送潜水艦へと運用形態を転換しており、ミサイル発射管部分は揚陸用ハッチとなっている。

潜水艦の主な武装には、対潜水艦・対水上艦の魚雷(短魚雷と長魚雷)と各種ミサイルがある。ミサイルの種類は、通常動力潜水艦や原子力潜水艦の魚雷発射管を利用して射出する対艦ミサイル、戦略原潜であれば潜水艦発射型弾道ミサイル、攻撃原潜のVLSから発射する巡航ミサイルなどだ。

USN海軍の原潜は攻撃原潜で、艦首の600mm魚雷発射管からは魚雷と対艦ミサイルを発射可能。艦橋前部に並んだ22基の垂直発射システム(VLS)には、図右下の巡航ミサイルが4発収められている。ミサイルは専用のカバーで覆われており、水中発射の際にエアインテークやノズルからの浸水を防ぐ仕組みだ。海面に踊り出るとカバーが外れ、同時に水平尾翼と垂直尾翼を展開してノズルを噴射する。亜音速で飛行し射程距離は3,000キロにも及び、弾頭には地中施設を破壊可能な貫徹型タイプ、事前に入力された地域上空で小型誘導子弾を散布するタイプがある。

図右上の魚雷ポッドは大漢中海軍の原潜のみが装備している特殊なもので、直径4mもの大口径魚雷内部にはヴァンツァーを2体まで収めることができる。この魚雷の主な使用目的は、敵勢力圏の沿岸部ぎりぎりまで侵入してきた原潜が、特殊任務を帯びた部隊(ヴァンツァーも含める)を密かに揚陸させることにあるが、応用として大型空母などの側面に撃ち込んで、強襲・制圧する攻撃的な使用方法も可能だ。





現用潜水艦の動向

ディーゼルとバッテリーを併用する通常動力潜水艦は、原潜よりも静粛性に優れており探知が容易ではない。それゆえに水上勢力を展開する地域に潜水艦がいると判明した場合、水上勢力側の行動はかなり制限されてしまう。また通常動力潜は原潜と比べて非常に安価に建造できるので、軍事費にあまり予算を割けない国でも抑止力として期待でき、調達・整備が急がれるケースが多い。実際にタイなど東南アジア各国では、水上艦よりも潜水艦の購入を最優先にしているという。

通常動力潜水艦は静粛性に優れるが、船体が小型ゆえに燃料積載量に限界があって、航続性が弱点となっている。敵支配海域での行動ともなると、さらに静粛を求めることからバッテリーを使っての行動となるのだが、速力を絞っても2〜3日しか行動できない。最近では燃料電池などを用いたAIP技術を導入して、電機推進時での航続距離を延ばす努力が払われている。

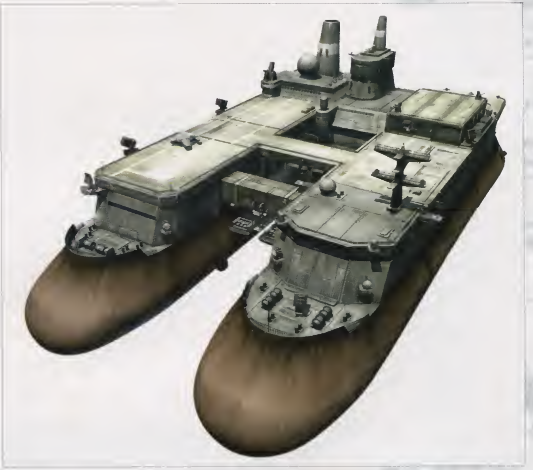


原子力潜水艦は原子炉の核燃料が減衰するまで行動ができ、核燃料精製技術の進歩により炉心寿命は10年以上になろうとしている。原子炉とタービンからなる動力源も改良が加えられ続け、最新のものでは原子炉1基で60000馬力を発揮する程だ。原子力機関は構造上どうしても振動が発生してしまうため、動力源全体を制振機構で支えて水中放射音を極力抑えて、ソナーによる発見率を下げようとしている。

世界最大の戦略原潜を保有しているアメリカでは、戦略原潜に核抑止力を依存しているが、ロシアと交わした戦略兵器削減条約により、少数ではあるが隻数を減らさなければならない状況にある。そこでこれらの艦を有効活用するべく、トマホーク発射機能を持たせて陸上攻撃任務仕様にしたり、ミサイル発射管を改造して特殊部隊員を収容できるようにした。他にも背中に特殊部隊員を揚陸させる小型潜水艇を載せるなど、様々な改造を行い現役にとどめている。



ダガト・アハス



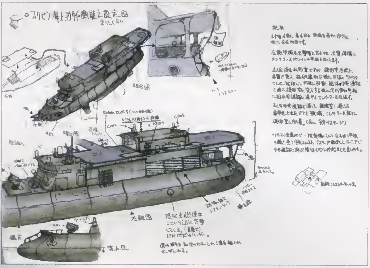
民間の大型タンカーの船体を利用することで喫水を極限にまで上げている。こうすることでフィリピン海峡の浅い水路も航行可能となっている。島から島へ飛び石作戦で部隊を展開させられる戦術的意義は計り知れない。



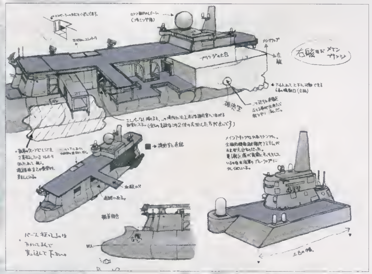
要目
全長：約175m
全幅：約80m
全高：約30m

OCUフィリピン海軍に所属する大型揚陸母艦。大型タンカーを2隻並べた大きな形状から「海上要塞」と呼ばれている。OCUフィリピンは大小の島々と浅く狭い海峡からなり、軍部はこのような地理でも、大規模な戦力を投入するのに適した揚陸母艦をというコンセプトの元に当艦を建造。内洋のみならず外洋でも要塞としての機能を発揮する。歩兵・車両・上陸用舟艇を1900トンまで積載でき、左右両舷の飛行甲板でヘリコプターやVTOL機の運用が可能となっている。荒天時の船体の動揺によって車両が横転しないよう、車両はワイヤーでしっかりと係止。航空機を格納できるスペースは左舷中央の格納庫のみとなっており、多量の航空戦力を運搬するには露天駐機するしかない。船内は乗組員が快適に過ごせるよう、住環境の充実が図られている。また負傷兵の治療・手術を行える医療施設も完備している。

左舷船体は操艦用ブリッジ・艦載機格納庫・ヘリポートから構成されている。左舷だけを良く見てみると、艦首の対空ミサイル(SAM)からブリッジ直前の25mm近接防空機関砲(CIWS)を経て艦橋へという流れや、船体後部の格納庫とその上のCIWSなど、現用護衛艦の構造と酷似しており、左舷だけ切り離しても護衛艦として充分に機能しそうである。格納庫では艦載機の燃料・武器の補給や、修理・整備といったメンテナンスを行う。後部のヘリポートからも前部の甲板からも出入りできるよう、完全吹き抜け式としているが、荒天時にはシャッターが降りる仕掛けだ。艦底には3枚のスタビライジングフィンを装備しており、広い面積もあって横揺れを軽減している。大きく前に張り出した艦首は凌波性・耐波性が良好で、荒天下での航行安定性は折り紙付きだ。武装はSAM1基・CIWS・対潜水艦ロケットのアスロック発射筒4基となっている。



多少は高さがあるものの、まるで護衛艦そのものといった感じの左舷船体。格納庫下のインテークは主機冷却用。

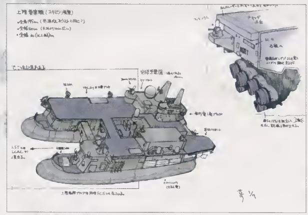


現状の飛行甲板では艦首よりのアイランドと、舷側のSAMや艦首のレーダーがVTOL機の滑走発艦を制限している。

右舷船体はヘリコプターとVTOL機が離発着を行う飛行甲板がメインとなっており、VTOL機が少しでも滑走できるように、左舷よりも艦首方向に若干ながら上部構造を延ばしている。とはいえ甲板後部に幅一杯の航空管制用アイランドが鎮座しているのは、VTOL機を運用する上で構造的に失敗しており、パイロットたちから不評を買っている。OCUフィリピン海軍ではアイランドを撤去し、完全な全通甲板にして艦首に12度前後のスキージャンプを設け、本格的なSTOVL（短距離離陸垂直着陸機）化計画を予定している。右舷に着艦した機は中央やや手前の連絡甲板を渡り、左舷の格納庫で武器と燃料の補給と機体の点検を行い、また連絡甲板を渡って甲板後部に移動し発艦する。両舷の間には、前部に上陸用舟艇を2隻まで懸架可能な通路と、艦尾には航行及び航空管制の機能をまとめたメインブリッジがあり、左右舷側を結び付けている。武装は8連装地対空ミサイル2基・25mm近接防空機関砲2基。

ダガト・アハス最大の特徴は船体を横に2つ並べた双胴式船体にある。多胴式の利点は、プラットフォームとなる船体の数だけ重量を分散できるために、多量の物資を積載可能なことだ。また、船体の中央部分を空けておくことで、航行時に水の流れをスムーズにし、単胴船と同等の速度を出すことができる。なお、この構造は揚陸艦に最も適した船型で、中央前部から部隊・物資を満載した上陸用舟艇やLCACを出発させると同時に、中央後部から空になったこれらを収納でき、迅速で効率の良い揚陸作戦を行えるのである。

推進機関はメインブリッジ下部にジェットノズルを装備している。ターボファンで発生する高圧ガスを6基のノズルから噴射し、35ノットもの速力を発生。ノズルは前方向へ角度を変更でき高速での後進も可能だ。しかしこの推進機関は非常に燃費が悪く、経済航行でも10日間しか行動できない点が海軍内で問題となっている。



ジェットノズルと双胴船により見掛けによらず高速を発揮する。ただ、あまりに巨大なので格好の攻撃目標になりやすいのが欠点といえるだろう。

M.I.D.A.S.

M.I.D.A.S.の概要

M.I.D.A.S.(Matter Irradiation Type Dissociate Acceleration System：以下MIDAS)は物質放射型分離加速システムと呼ばれるもので、金原子核線という新種の放射線を分離加速して発生させ、加速によって生まれる膨大なエネルギーを抽出する、新世代の高エネルギー発生装置のことを指す。

この金原子核線という放射線理論を発表したのは、USN軍科学研究所所員のエミール・クラムスコイ(当時18歳)だ。金原子核線の未来に目をつけたアメリカ政府はカリフォルニア、アーカンソー、アラスカに専門の研究所を設立して、彼女をアラスカ研究所の所長としてむかえた。それから数年後に彼女たちの研究グループはMIDASを開発したのである。

金原子核線は金と同じ数の陽子と中性子を有する放射線で、発生したばかりの高運動エネルギーを持っている状態では、あらゆる物質の分子結合を切断してしまうため、放射線を浴びたものは分子崩壊をおこし消滅する。それゆえに金原子核線の制御は難しかったのだが、エミールたちの開発チームは小型核融合炉発電施設で実験が繰り返されていた中性子ビームによる放射線封じ込め技術に注目。理論的には金原子核線にも応用できるとして改良を加え、世界で初めて金原子核線の封じ込めに成功し、MIDAS技術を実用レベルにまで高めた。

金原子核線は非常に膨大なエネルギーを持っており、放出されると原子にエネルギーを与えながら光速で直進するが、大気中の水素を取り込み続ける性質を帯びていて、次第に安定元素へと変化してエネルギーを失う。つまり放射能の後遺症を残さない、無公害の核兵器に転用できるわけだ。MIDASはエミールたちの思惑をよそに、核エネルギーと同じ轍を踏もうとしている。



金原子核線理論提供者

エミール・クラムスコイ



分離加速システムの構造

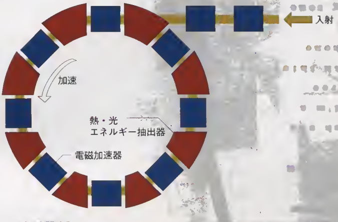
原子力発電ではウラン235の割合を高めた濃縮ウランや、ウラン238に中性子を吸収させたプルトニウム239を燃料に使っている。この燃料にさらに中性子を当てて核分裂を連続的に起こさせ、そこから得られる膨大な熱エネルギーでもって発電しているのだ。現在各国で研究中の核融合発電では、水素の仲間である重水素と三重水素を燃料に使い、レーザーや磁力を用いて圧力を加え、重水素と三重水素の原子を衝突させたときに発生する熱エネルギーで発電する。核分裂も核融合も毒性の強い放射能を生み出すが、核融合のほうが放射能の薄れる時間が早く比較的クリーンだ。物質放射型分離加速システムは核融合と同じく、放射能の少ない金を原料としている。

ではどのようにしてエネルギーを抽出するかというと、まず金の微粒子をイオン原でイオン化させる。その粒子をイオンビームでイオン化した原子を照射してはじき出し、後段の直線型粒子加速器側へ粒子を入射。粒子加速器は円筒の電磁コイルを直列に並べた構造になっており、高電圧をかけることで円筒内に強力な磁場を発生させる。さらに円筒内を真空状態にして粒子の加速を円滑に行うのである。

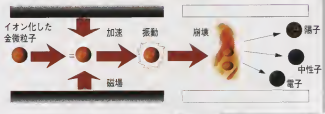
直線型粒子加速器である程度加速された粒子は、円形に並べた粒子加速器内(シンクロトンとかサイクロトロンと呼ばれている)をぐるぐる回りながら徐々に加速。光速に近い早さで運動する電子は磁場で軌道を曲げられると、軌道の接線方向(遠心力で外に飛ばされるような形)に放射光を発する。金原子の場合はX線に近い波長の強い光を放射するが、この波長の光は分子レベルの物質を透過してしまうほどの威力があるのである。

その後さらに加速された粒子は高エネルギー状態となり、強磁場により高周波化して粒子が振動を始める。振動が極限にまでくると金原子核が崩壊(核分裂)を起こし大きな熱エネルギーを発生、同時に陽子・中性子・電子を放出する。加速により生み出された両エネルギーは、粒子加速器間に設けられた抽出機(蒸気タービンや光電変換装置)により電力に変換されるのである。

[M.I.D.A.S.　加速器構成]



[加速器内]



金原子核線とは

金原子核線を放出する原料である金原子(元素記号Au79)は、原子核の中に 79個の陽子と中性子を保有している。原子核とは物質を構成する最小単位である原子の中核となる粒子で、陽子と中性子が結合したものだ。

金原子核線は莫大な運動エネルギーを持っており、移動直線状のあらゆる物質の分子結合を切断する最も強力な放射線である。放射線とは原子が崩壊する際に放出されるもので、物質を通過するときに電磁相互作用によって物質を電離する。電離とはプラスやマイナスの電気を帯びた物質に変えることである。

放射線は粒子の種類や発生源によって主に3つの種類に分類される。

アルファ(α)線：重くて不安定な原子核から放出されるヘリウムの原子核のこと。ウランなど質量が重い原子核の多くは、原子核内の陽子と中性子のバランスが崩れたりすると、アルファ崩壊を起こして安定的な原子核に変化しようとする。このアルファ崩壊を起こしたときに、アルファ線を放出するのである。アルファ線は電荷が大きいので電離能力が大きく、物質を電離してすぐに消失する。空気中でも数cm、紙ならば1枚で遮蔽可能だ。

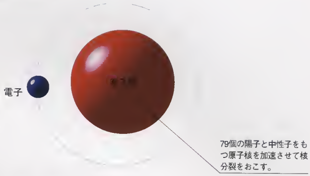
ベータ(β)線：不安定な原子核から放出される高エネルギーの電子。原子核内の陽子数と中性子数のバランスが崩れている場合、中性子が多いと電子を放出して安定した原子核に変わる。逆に陽子が多いと原子に束縛されている電子を捕まえるか、電子の反物質である陽電子を放出する。ベータ線はアルファ線ほど電離能力はなく、空気中を1m程飛ぶが、アルミ板で防げる。

ガンマ(γ)線：α線やβ線を放出し崩壊した不安定な状態にある原子核が、さらに安定した状態に移ろうとする際に放出される光子のことを指す。ガンマ線の電離能力の大きさはエネルギーに強く依存するが、ほとんどのガンマ線は電離能力が弱いため遮蔽は困難となっている。遮蔽には原子番号の大きい物質である鉛などを使うしかない。またガンマ線自身のエネルギーは非常に高く、大量に浴びると遺伝子を傷つけられる危険性がある。

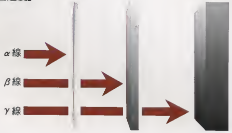
この他の放射線としてX線・中性子線・宇宙線・陽子線・電子線があるが、前者2種はガンマ線並かそれ以上に人体に危険な性質を持っている。

また、ウランやプルトニウムを使った核爆弾が爆発すると、危険な放射線を発すると同時に猛毒性の放射性物質ストロンチウム90やセシウム137をばら撒く。ストロンチウム90の半減期は29年・セシウムの半減期は30年もあり、核実験や原子力発電所事故時など核分裂爆発の起きた地域一帯は、60年以上もの間人間の立ち入れない場所となってしまう。一方の金原子核は空気中に放出されると同時に、次々と水素原子を取り込む性質を持っており、重13金という安定元素になるとエネルギーを消失してしまう。重13金とは54パーセントの金原子を含有する物質で、残りの46パーセントは重水素原子となっている。重13金になった金原子核は有毒な放射能物質を残さないため、理論上は生物や環境に一切の影響を及ぼさないと言われている。

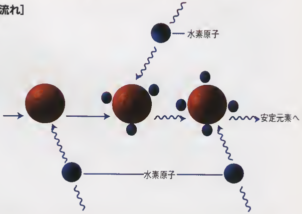
[原子構造]



[放射線の透過度]



[減衰の流れ]

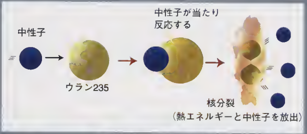


現代の高エネルギー・原子力の仕組み

現代日本の発電量の約20%をまかなう原子力発電。原子力発電は原子炉内でウランが核分裂するときに発生する熱で高温・高圧の蒸気を作り、大型タービンを回して発電する仕組みになっている。日本では核燃料の冷却水に水を使う軽水炉を使っており、軽水炉には沸騰水型と加圧水型がある。

ウランは天然にある物質で、中性子が当たると簡単に核分裂を起こす。天然ウランにはウラン235とウラン238が混合されているが、核分裂を起こしやすいウラン235は1%も含まれていない。そこでこれを濃縮して3%程度にしたものを燃料として使っているのである。ウラン235に中性子が当たると分裂するのだが、分裂した原子核(クリプトンなど)は大きな運動エネルギーを持っており、これが原子炉の中で熱に変わって水を沸騰させ蒸気となる。一方、核分裂によって新しく放出された2～3個の中性子は別のウラン235の原子核に当たり核分裂を起こす。このように核分裂で放出された中性子のうち1個が次のウラン235の原子核に当たって核分裂を起こし、増えもせず減りもせず核分裂が持続する状態を臨界と言う。臨界になって始めて原子力発電所は稼動を始めるのである。

[核分裂の流れ]



▲原子炉内の制御棒で中性子の数を調整すれば、臨界状態を保てて一定の電力出力を維持できるのである。核分裂をさせ続けると核爆発と同じことになってしまうので、制御棒のコントロールは非常に重要なのだ。

M.I.D.A.S.兵器の価値

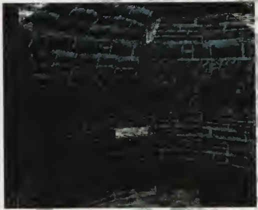
横須賀地下やフィリピンでその威力のほどを見せ付けたM.I.D.A.S.(以下MIDAS)。本来は次世代のエネルギー機関として開発されたものだが、USN軍でもOCU軍でも MIDASの持つ莫大なエネルギーを軍事利用できないかと考えていた。安全性に問題が残る制御方法ではあるが、兵器として使えるよう、金原子核線を中性子線ビームで一定空間に密閉することに成功。後に大型の投下型爆弾サイズにまでまとめ上げられた。

MIDASはまだまだ若い技術であるために、現段階では従来の核兵器より効果範囲が狭いが、制御技術などが進歩すれば戦略核兵器を上回る威力が期待できる。威力も金原子核のエネルギー出力を簡単に調整できるため、戦略核・戦術核を用途に応じて選別が可能だ。このため生産や運用のコストを核兵器よりも低く抑えられる。また、核分裂による質量消滅エネルギーを利用しているMIDASは金原子核線という放射線を発生するが、金原子核線は空気中の水素と結合することで安定原子線となり、核兵器のような放射能汚染の心配がない。核兵器は使用することで国土が放射能で汚染されることを互いに恐れて、抑止力という形でしか意味をなさないでいた。しかしMIDASの場合は、放射能汚染の心配が無く通常兵器として使えながらも、核兵器と同じ威力を持っており、安全な制御技術が確立されれば最強の戦場兵器として君臨することになるだろう。

余談ではあるがクリーンな核兵器をアメリカとロシアが研究中である。核融合核兵器としては水素爆弾があるのだが、水爆は原爆の爆発を利用しているため、どうしても放射能をばらまいてしまう。そこでレーザー核融合や磁場核融合で水素原子の核融合を起こす「純粋水爆」が考えられているのだ。



◀▼M.I.D.A.S.の放出する金原子核線は土地を抉り海水の分子結合をも切断してしまう。



核弾頭の種類と基本構造

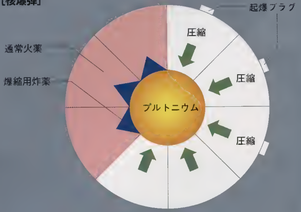
現在までに核兵器が実戦で使われたのは、太平洋戦争末期に日本の広島と長崎に投下された、2発の原子力爆弾（リトルボーイとファットマン）だけである。アメリカの原爆開発プロジェクト「マンハッタン計画」により、ニューメキシコのロスアラモス研究所に集められた大勢の科学者が核分裂の連鎖反応を確認、1945年7月15日には世界初の原子爆弾がアラゴモード実験場で炸裂した。

原子爆弾には15キログラム程度の濃縮ウランか8キログラム程度のプルトニウムを、臨界質量よりも少なく分散させたペレットを使っている。核物質は臨界質量を超すと急激に中性子が増殖し核爆発が起こる。ここで問題となるのは爆弾が四散してしまう前に、すべての核物質を反応させなくてはならないことと、いかに臨界質量を超えさせるかである。核分裂を起こさせるには、火薬を爆発させて瞬間的に力を核物質に集めれば良いのだが、どうしても爆発にバラツキがあり反応が起きなかった。この問題を解決したのが天才数学者フォンノイマンで、爆弾の中心に核物質を配置し、周囲に火薬を詰めたブロックを8つ設けた。さらにブロック内の火薬に高速反応火薬と低速反応火薬を用いて、核物質にかかる圧力を均一になるようにしたのである。薬室の8分割方式は今でも核弾頭の基本構造となっている。

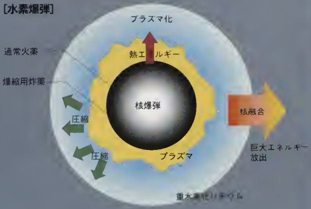
原子力爆弾をより強力にしたものが水素爆弾である。原爆が核分裂反応時の質量消滅のエネルギー変換で爆発するのに対して、水爆は核融合反応時の質量消滅のエネルギー変換を利用して爆発する。水爆は原爆の周りに重水素化リチウムを配置し、原爆の熱と爆発時の反動で収縮する作用（爆縮）にて、水素とリチウムのプラズマを作り出し核融合反応を起こす仕組みになっているのだ。

現存する核兵器には戦略核弾頭と戦術核弾頭とかあり、戦略核のほうはTNT火薬換算で400トン前後の威力がある。この弾頭を4発搭載した大陸間弾道ミサイル弾(ICBM)や潜水艦発射型弾道ミサイル（SLBM）は、アメリカ・ロシア・イギリス・フランスが保有しており、各国の核抑止戦力として機能している。TNT換算で10トン前後の威力を持つ戦術核は、155mm榴弾砲弾やトマホーク巡航ミサイルに搭載されていることで知られている。

[核爆弾]



[水素爆弾]





ストーリー
完全補完記録

氾濫、錯綜する
情報を総括

2112年

微妙な緊張状態を続ける世界を舞台に

エマ、アリサそれぞれに独立しつつ

複雑に絡み合い進行するストーリー

断片的に浮上しては消える伏線

事件の背後に暗躍する人、組織

今改めて情報の全てをまとめなおすことにより

「あの事件」が何だったのか

その全体像を浮き彫りにする

世界設定紹介

国家連合の

国際共同組織

緊張が続く2大国家を中心とした各共同体の来歴

　国際共同組織とは、国家という現存の枠組みを脱して地域的な枠組みを興し、経済力の違いによる各国間の格差をなくした「共同体」が立つことで、平和と安全を得るための組織である。

　最初にこの共同体への転換を実践したのはヨーロッパであった。20世紀後半、第二次世界大戦の後遺症から経済的な世界の盟主をアメリカ、日本へ譲ることとなった欧州各国は、世界的競争力の強化のため地域統合を目指した。国を単位とするこれまでの経済構造を捨て、自由貿易地域、関税同盟、共同市場、経済通貨同盟など、地域を単位とする世界経済を作り上げていく。そして2005年、ECの誕生を迎えたのである。

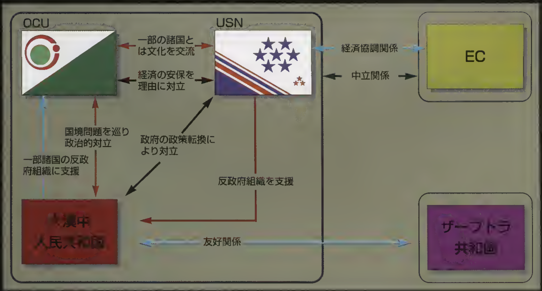
　その後、同理念のもとアメリカ、カナダを中心に南米各国を吸収したUSN、旧CIS諸国の再統合によるザーフトラ共和国、バンコク経済帯に日本とオーストラリアを加えたOCUが誕生した。こうして世界の歯車は、USNとOCUという二大勢力の対立によって動いていくことになる。

　もともと太平洋の利権に対する強い意欲を見せていたUSNは、OCUの成立に強く反対した。それは、自国の発展と利権の確保には、環太平洋の経済圏が安定していることが絶対的な条件だったからである。特に同盟国の日本やフィリピンの存在は、対ユーラシア大陸の政策には欠かせなかった。しかし、両国はOCUに加盟し、USNへ対抗する勢力となることを選択する。そのような緊張下において、決定的な紛争がUSN、OCU間に発生した。それが第一次ハフマン紛争である。その後、両国はハフマン島を巡り再度対峙している。直接的な紛争は以後発生していないが、両国の緊張は極度に高まり、今日を迎えていた。それが2112年現在の、共同体を中心とした国際情勢である。では、それぞれの共同体の特徴を検証してみる。

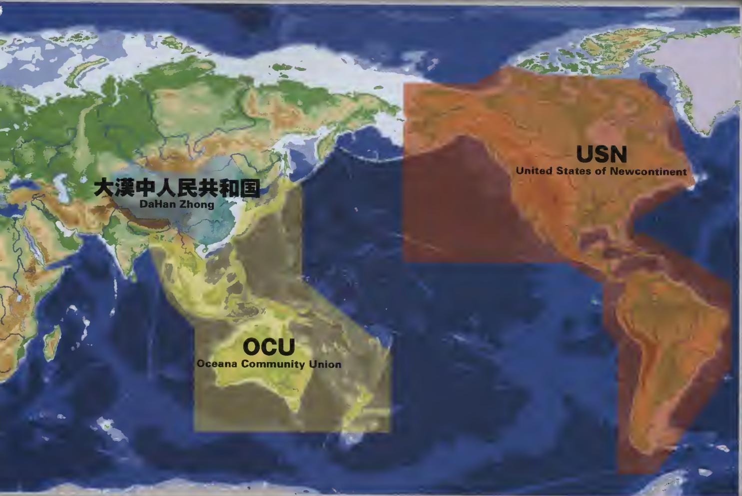


■各国の関係（2112年）

　大漢中人民共和国が成立し、新たな大勢力として名乗りを挙げた2112年。新勢力の動向は、各国に新たな緊張を生んだ。一方でOCU、USNの内部では、加盟国が独自の動きを見せ始め、新たな国際関係を模索している。果たしてそれは、新世界の呼び水となりうるのだろうか…。



状況を暴く





不安定な国際関係下で頻発する紛争

共同組織内における経済力の停滞は対外的な国際関係を不安定にし、各地に紛争を呼んだ。特に経済の発展が遅れていた地域では属する共同体に対し大きな不満を抱き、いつその不満が噴出してもおかしくないような状況であった。

東南アジア、南アフリカ、旧東ヨーロッパ、南アメリカなどの各地域は、前世紀からすでに諸問題を抱えており、紛争もすでに各国で発生している。その多くは、加盟する共同体の軍事力によって制圧されてきた。

世界情勢

21世紀に出現した共同組織は、今までの国際関係を著しく変化させた。そしてこの変革はゲームの舞台となる22世紀において新たな局面を迎えようとしている。ここではマスメディアの報道を通して、この世界にどんな組織があり、どんな問題を抱えているのかを解析する。

この世界の歴史を踏まえ、現在の状況を解説

21世紀の潮流…

新しい経済帯の成立

■経済帯による世界の分極化

産業と科学の発展がさまざまな利便性と多くの悪しき遺産を産み出した20世紀を越え、人類は21世紀に協調と融和を求めた。それは世界に経済的な共同体を誕生させる。ECを皮切りにUSN、ザーフトラ共和国、OCUと巨大な共同体が次々に姿を現すと、経済面も含む対立図式は個別的な国家単位から共同体による分極化へと移り変わっていった。特にUSNとOCUの対立は、世界を二分するほどの影響力を現出させる。

しかし、こうした共同体化への動きは人類を融和へと導くものではなく、あくまでも自由経済主義というイデオロギーにおける競争原理の産物でしかなった。世界経済は分極化されたが、共同体内部での経済競争は激しさを増していく。それは後に大きな問題となる「弱者は切り捨てられる」という構造を、より極端なものにしていくのである。



2005年。この年は長く人類の記憶に留められ続ける年です。近代国家が設立されて以来、初めての国家連合がヨーロッパに誕生したのが2005年。人類が新しい国の形を目指し始めた画期的な年と言い換えてもいいでしょう。域内では通貨単位も統一され、経済グローバル化を決定づけた年でもありました。現在でもECは、世界の一極を担い続けています。　——JBNNグラフ

多方面にわたる慎重な準備と、さまざまな葛藤を乗り越え、2026年ついにOCUは正式に国家として成立した。前身である［バンコク経済帯］の成立から数えて21年。オシアナ共同連合の名称が決定してから数えても7年の歳月が、この新国家が産声を上げるまでに必要であったということになる。

記念すべき第1回のOCU中央会議はオーストラリアのキャンベラで開催され、加盟各国の首脳が一堂に会してOCU成立を喜び、連帯と協調を高らかに宣言した。　——DNCグラフ





南北アメリカ大陸を統一してUSNが成立したのがこの年です。経済システムが崩壊して、為す術がなくなった中南米諸国が、北米の2国へ併合を申し入れたことがUSN成立のきっかけでした。しかし、中南米諸国の経済崩壊は、北米2国の経済援助打ち切りにあることも事実です。USNは巨大な消費人口を有し、現在でもなお世界のリーダーたりえようとしています。　——JBNNグラフ



2000　2010　2020

2005　EC正式統合

2006　バンコク経済帯の成立

2011　トリニダット号拿捕事件

2015　オーストラリアと日本
バンコク経済帯加盟準備

2019　新連合名称がOCUに決定

2020　ＵＳＮ成立

2021　ザーフトラ共和国成立
反OCU運動盛んに

ヴァンツァーと紛争

■新しい世界紛争の形

巨大な共同体の登場は、世界の勢力図を書き換えていった。共同体間の交渉は外交的な力のみでは解決できず、武力による物理的な接触にまで発展していく。その過程で生み出されたのがWAP技術である。

二足歩行による高機動兵器は作戦可能領域を拡げ、戦略的な幅を広げていくことになった。戦場でのWAPの有効性は、初めて投入されたアフリカ戦線で即座に示される。しかしそれは戦闘力の優劣を決定する際に、工業力や技術力の格差が顕著に現れることをも示した。つまりWAP開発・購入能力がない組織に対して、戦闘に臨むことすら出来ないという現実を突きつけたのである。これは、主な工業力を独占する共同体に対抗できる小国家など存在しないことを見せつける結果となった。事実、WAP投入後の紛争には、必ず強大な共同体の影が蠢くことになるのである。

この年、ヴァンツァーの共通規格に則った初めての機体が開発されました。これはボディやレッグなどパーツを組み合わせるための規格で、MULS（註）と呼ばれるものです。この規格は、ヴァンツァーの価格低減に貢献しました。ヴァンツァーが軍の主な装備になったのは、アフリカで起こった独立戦争に投入されたヴァンツァー部隊の活躍がきっかけとなっています。 ——JBNNグラフ

ハフマン島にあったUSNの軍需工場で、USNとOCUの部隊が衝突。これをきっかけに発生したのが第二次ハフマン紛争です。表向きには領土拡大紛争とされていますが、実際には両軍上層部とサカタインダストリィ（後にイグチ社に合併）とが人間の脳をコンピュータとして利用した兵器の実験を行うために引き起こされたものです。後にこの実験には、ザーフトラ共和国も関与していたことが明らかになりました。 ——JBNNグラフ

註
JBNNの報道ではMULS規格によって作られた機動兵器をヴァンツァーと呼んでいるが、正確にはヴァンドルングワーゲン（WAW）となる。ヴァンツァーという名称は、シュネッケとディアブロアビオニクス社が共同開発したMULS-Pという規格が作られた後に生まれた言葉。ただ現在ではMULS-Pを単純にMULSと呼ぶのが通例となっており、WAWという言葉も忘れ去られている。

そして、22世紀へ…

経済と独立運動

■経済格差が生む歪み

巨大な共同体による体制の確立を経て22世紀に足を踏み入れた人類は、共同体内の経済の停滞と、経済格差の拡大という歪みに直面する。

そもそも共同体とは、地域内の経済の安定と発展を目的に結成されたものだ。しかしその実、共同体は一部の大国のみに潤いをもたせ、技術後進国が先進国に依存する形を強いた。大半の小国家は経済的に他国資本に頼らざるを得ず、かつ国内技術でも先進国に及びようがない。経済的にも技術的にも国家間の格差は広がる一方であり、経済的に支配する側とされる側の位置づけが明確になっていったのである。

こういった体制の歪みは、やがて発展途上国の不満を爆発させた。22世紀初頭のOCUアロルデシュ軍部によるクーデターを皮切りに、各地で共同体からの独立運動が誘発され、世界情勢は混迷していくのである。

国家主席に就任した介博了氏は、［自由経済の集権］を骨子とする新たな政策を発表。同時に国名を［大漢中人民共和国］に改めた。

介主席の［自由経済の集権］とは、従来の私企業を中心とする自由資本主義政策から、企業の経営管理を政府が負担し、国家そのものをひとつの大きな［国際企業］と位置付ける政策である。この政策は内外から反発を受けたが、民主化の波にのまれつつあった大漢中社会を、社会主義国家が本来あるべき姿に引き戻す契機となった。 ——大漢日報

2102年。2094年にOCUへ加盟したアロルデシュで、軍事クーデターが発生しました。OCU加盟以前から経済援助を受けていたアロルデシュは、第二次ハフマン紛争が終結したころから経済は停滞。その後OCUへ正式加盟するものの経済状況は好転しませんでした。軍部はOCUが同国から富をすい上げているとして、OCUからの独立をかかげてクーデターを起こしました。 ——JBNNグラフ

2030 2040 2050 2060 2070 2080 2090 2100

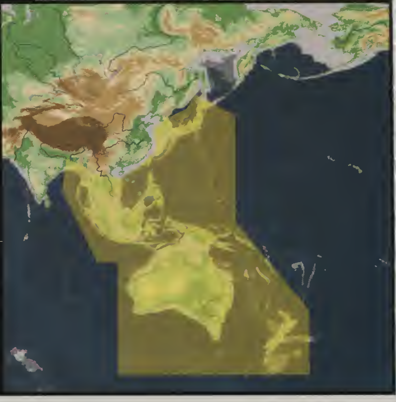
2023 OCU共同準備部隊編成
2026 OCU成立
2028 韓国、OCU加盟
2029 ヴァンツァー実戦配備
2045 前大漢中、USNと経済協力
2070 第一次ハフマン紛争
2071 世界的核軍縮始まる
2078 福台トンネル完成
2090 第二次ハフマン紛争
2093 沖縄海洋都市の完成
2096 前大漢中、ヴァンツァー配備
2090 前大漢中、政府専用機墜落
2012 アロルデシュ人民共和国クーデター事件
2112 前大漢中、白主席死去
大漢中人民共和国の成立
華蓮団の結成



OCU

Oceana Community Union

オシアナ共同連合



オシアナ共同連合ことOCUは、東南アジアを中心にオセアニア、東アジアを加えた地域を統べる連合体である。首都はオーストラリアのキャンベラに置き、OCUの最高決定機関である中央議会をはじめ、連合の主要施設が集中している。加盟国には独自の自治が許されているが、あくまでもOCU憲章に準じるもので、連合体の利益が優先されている。

アジア圏の発展と、経済的自立を目指して

21世紀初頭の情報革命により加速した経済の国際化に、各国は自国の産業の保護に限界を感じていた。それが国際共同体成立への動きとなる。その中で旧東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟国を中心にして、2005年に成立した経済共同体が「バンコク経済帯」であった。新しい経済の形を模索する広域経済帯である。

すでに経済ブロックとしては、欧州連合（EU）から発展した国際共同体ユーロ・コミュニティー（EC）が存在していた。バンコク経済帯はそんな先駆者のECを手本に、さまざまな国際共同体の有り様を模索していく。そしてオーストラリア国籍のタンカーがアメリカ合衆国に拿捕された事件をきっかけに、共同体が大きく動き出した。オーストラリア政府がバンコク経済帯に加盟することを決定したのである。

その後、日本も加盟を決意し、バンコク経済帯はこれまでの経済連合を超え、より緊密な連合国家という枠組みを目指すことになる。新たな連合国家の名称は、旧加盟国が面していたインド洋と、日本と豪州が浮かぶ西太平洋の二つの大洋を抱くという意味で、オシアナ共同連合（OCU）と決定された。こうして、東南アジア地区の経済的な発展と自立を目指し形成されたバンコク経済帯を中心に、独自の経済圏を成立させるためにOCUが建国されたのである。

■OCU加盟国

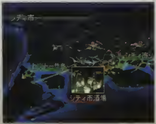
- ●オーストラリア
- ●日本
- ●旧バンコク経済帯諸国
  - タイ
  - シンガポール
  - マレーシア
  - インドネシア
  - フィリピン
  - ベトナム
  - 他
- ●ニュージーランド
- ●韓国
- ●アロルデシュ
- ●他

トリニダット号拿捕事件

2011年、パナマ運河を航行中のタンカー「トリニダット号」がアメリカ合衆国（当時）海軍の軍艦に拿捕されるという事件が発生した。アメリカ側は調査のための停船命令をトリニダット号が無視したと発表したが、同船がオーストラリア船籍であったため事態は混迷。当時オーストラリアは「バンコク経済帯」への加盟を検討すると表明していたため、この拿捕はオーストラリアに対するアメリカの圧力とみなされた。オーストラリア政府はアメリカ政府に強く抗議し、以後両国間の関係は急速に悪化する。

■発展する加盟国





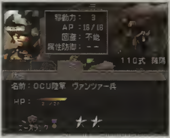
▲OCU成立後、各加盟国は日本と豪州という強力な牽引者のもと、めざましい経済発展を続けていく。加盟国は急激に近代化、ハイテク化していき高度成長を達成する。（写真：左がOCU日本の横須賀。右がOCUシンガポールのシティ。）

OCU DF OCU Defence Forces

オシアナ共同連合防衛軍
(OCU軍)

OCU軍はOCU憲章に基づき、OCUの権利と国民の財産を守るために、また世界平和に貢献するために構成された組織である。憲章には、組織された力を国権の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使による国際紛争の解決手段として用いてはいけないことが、明記されている。あくまでも防御のための軍隊であり、国民の平和と人命を守護することがオシアナ共同連合防衛軍の役割であり、使命なのである。

■主要起動兵器



▲OCU軍の主力ヴァンツァーは、オーストラリア企業のみならず日本企業の製品も多く使用されている。（写真：オーストラリア内の基地に配備された霧島重工の110式陣陽）

加盟国の治安と主権を維持するために…

OCUが国家として成立するためには、独自の防衛構想が不可欠であった。その認識のもとで2023年にはじめて編成され、試験的に配備されたOCU共同準備隊がOCU軍の母体となっている。その後、装備や人員の補充を繰り返し、指揮系統の整備や補強を経てOCU軍は現在の組織体制になったのである。

OCU加盟国では、原則的に各自の軍隊を所有している。そしてOCU軍は基本的に全加盟国に駐留しており、その国情により組織体制は大きく変化するが、その大半は経済的なものに起因する。経済力が高く国力のある国では、独自の軍隊への軍事費を多く割く事が可能なためOCU軍の駐留規模は小さく、逆に発展途上の国へは軍事費が国力を圧迫しないよう、大規模な軍隊を派遣している。この政策はOCU加盟国の経済的発展を第一に考え、加盟国の治安と主権を効率よく維持するという発想から生まれたものである。

■OCU軍指令系統・並びに駐留軍の規模

OCU連合国防省
（本部：シンガポール）

OCU軍総司令部
（オーストラリア）

加盟各国独自防衛軍

OCU加盟各国駐留軍

●オーストラリア
OCU軍の総司令部が置かれるオーストラリアには、最大規模の部隊が配備されている。メインベースも8ヵ所を数え、陸海空三軍の主力がここに常駐する。この部隊は豪州の防衛だけでなく、加盟国の有事に即座に対応するための軍隊である。

●日本
OCUの北端に位置する日本は、防衛構想上最重要地点である。OCU軍も豪州に次ぐ数の部隊が配備され、防衛に当たっている。また、日本には日防軍という世界でも有数の軍隊が存在し、防衛拠点の戦力としては十二分であるといえる。

●韓国
韓国にはもともと強力な自国軍が存在するため、OCU軍は最低限しか配備されていない。しかし、クワンジュ基地に配備されている第35機動中隊はOCU屈指の精鋭部隊である。

●フィリピン
フィリピンは可能な限り自国軍による防衛を望む現政権の政策により、最小限の部隊だけが配備されている。しかし反政府運動が頻発している国情を踏まえ、現在OCU駐留軍の増強が検討されている。

●ベトナム
配備された4つの基地を中心に、ベトナムの国土を踏まえ多くの海兵隊とその支援部隊を配置している。

●アロルデシュ
2102年のクーデター以降、治安が安定するまでの名目でOCU軍の駐留を増強していた。しかし、2108年の中央議会で治安の回復が了承され、現在の駐留部隊はクーデター以前の規模にとどまっている。

●マレーシア
OCU内の中央部に位置するマレーシアには、防衛の優先度の低さから最小限の部隊のみが駐留している。

●インドネシア
数多くの島々で構成されているインドネシアでは、海軍が多くの比率を占めている。そのためOCU軍は、陸軍を中心にした部隊を配備している。

CIU
The Central Intelligence Service of Union

CIU The Central Intelligence Service of Union

連邦中央情報局

根拠法令	情報機関法、中央情報局法
所属	首相府
任務／権限	国外の政治、経済及びその他秘密情報の収集 海外エージェントによる情報工作
職員総数	3万5000人（公式データ）

巨大国家の成立は、新たな情報戦を生み出す結果となった。かつてオーストラリア政府に属していた国家保安局情報部と、日本内閣調査室のメンバーを中心に、各国の優秀な情報員を集めて組織されたのが連邦中央情報局（CIU）である。CIUは本部を日本の東京に置き、OCU内外の諜報活動である情報の収集、並びに情報工作にあたっている。

CIUは首相府直属の組織であり、中央政府を含む政府機関に対し中立な立場をとることが原則である。また、他の省庁の内部捜査を行い、必要に応じて告発できる権限を持つ。特にその存在意義を示したのはUSNとの関係が緊迫化して以降であり、冷戦の真の主人公はCIUであるともいえるだろう。

■OCU内組織関係

- ●政府機関に対し中立
- ●OCU軍には対抗的
- ●司法当局への告発権を所持
- ●議会への上申権を有する組織



CIU Headquarters Office (Tokyo)

■CIU指示系統・職員数

OCU首相府（キャンベラ）
OCU首相

↓

連邦中央情報局本部（東京）
ピープルCIU局長

↓

加盟各国、並びに全世界の支部
32ヵ所（公式データ）
一般事務職員 ・・・・・2万3000人
所属エージェント ・・・1万2000人

↓

非公式支援事務所
3711ヵ所（推測データ）
非公式職員 ・・・・・・・・・・3万7000人
非公式エージェント（ガード等）・・1万2000人

G.D.F.I.A

OCU Ground Defence Forces Intelligence Agency

OCU陸軍情報部

▶陸軍情報部は、CIUとの接触を極端に避けている節がある。これは、その旨の局長命令の指示書である。本来なら協調すべき組織であるはずなのだが、さまざま利害関係を含む情報戦を行う両者にとって、利害を一致させるのは難しいのかもしれない。

もうひとつの情報機関

OCUの広域諜報組織としては、OCU軍直属の組織が存在する。特にOCU陸軍の情報部は、その規模は劣るものの能力や諜報活動の実績を見てもCIUに匹敵する組織であるといえよう。しかしOCU陸軍情報部は極秘機関であり、公式にはその存在すら否定されている組織である。

主にその活動は軍事的な側面を担うものであるが、敵対国だけでなくOCU国内のさまざまな組織の動向を探っているのも事実である。そこで得られる情報がどのように活用されているかは、現在判明していない。

TOP SECRET

東京在住の局員が、先日街頭でCIU関係者とおぼしき人物を目撃したとの報告があった。検査の結果、該当人物はCIU所属のエージェントと確認。なお該当人物の活動目的および具体的な活動内容に関しては、専任のチームがすでに調査を開始している。（局長より各員）CIUエージェントの活動調査に関しては、前記した通り、専任の局員及びエージェントが従事している。他のスタッフはこの件に関しては一切介入しないこと。わが方とCIUの関係は非常に微妙である。軽率な行動は厳禁する。日本国内の局員・エージェントは絶対に該当人物と接触してはならない。この命令は他 のすべての命令より優先される。

OCUの現状と問題

■経済の停滞と貧富差の拡大

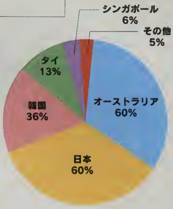
形式的には一つの国家であるとしているOCUであったが、その実態は加盟国間に経済格差をもたらしめる、非協調的な側面を併せ持つ共同体であることがアロルデシュのクーデターによって露呈した。そしてこの内紛は結果的に個々の国力の疲弊を招き、その後OCUの加盟国内に深刻なインフレを呼んでいる。特に東南アジア諸国の被害は甚大なものとなった。

この事態にあたりOCU経済協力会議は、経済的危機に直面した一部の加盟国に対し、経済援助案を提案した。援助総額は180億円を予定し、主だった国が分担してその義務を負うことになっている。

こういった各国の連携による救済措置は、インフレに国庫を破壊された国々にとって有益であることは言うまでもない。しかし一方で、一部の国が経済大国にも増した実害を被っている、という事実も見逃せないだろう。今日の困窮を招いたのは、OCU内の先進国による経済的な支配制度に他ならないのだから。こういった歪み、諸国間のわだかまりを内包したままで、OCUは現在も経済の低迷に頭を抱えている。肥大した巨大国家は経済的飽和状態を迎えているのである。

OCU緊急援助額

OCUは加盟国内で蔓延している経済不振を打破するため、アロルデシュにおいて緊急経済会議を開催。これにより総額180億円に上る緊急経済支援が決定した。その負担額の各国の割合は右の通りである。



■低迷する経済の立て直し

経済の停滞はOCUの経済帯というコンセプトを崩壊させた。当然OCUの存在意義に疑問を投げかける動きが活発化してくる。その大きなうねりの中でアロルデシュのクーデターが発生したのである。当然他の地域でもその影響を受け、反政府組織や反OCU組織の活動が盛んになっていった。

内乱、反政府勢力の蜂起、過激派の暗躍、民族主義運動の台頭。OCU内にはさまざまな問題が生じ始めていた。中央議会をはじめとするOCU政府機関はその対処に奔走する。緊急経済支援や公共事業拡大などの経済的な政策から、OCU軍の派遣といった直接的な行動も展開した。

しかし、OCU政府に対して蓄積した不満は計りしれず、抗議行動は一層拡大していく一方である。特にOCU軍の増強を決定した後は各地域での反対運動が熱を帯びており、各国でデモが多発している。

このような情勢下、内乱を始めさまざまな問題をどのように解決するかが急務となっている。OCU内の加盟国においては独自に軍隊を派遣する意向を示す国もあり、OCU存続にも関わる大きな問題に直面しているといえよう。

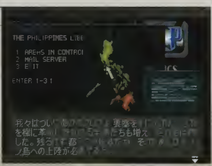
OCU内危険情報

日本政府外務省による海外危険情報では、フィリピンは入国制限対象国となっている。当地への各国航空会社の運行は停止しており、日本政府は在住の邦人に対して退去勧告の発布も検討中であるとのことであった。もし退去勧告が発せられれば、OCU内では2度目の事件となる。



反フィリピン政府勢力

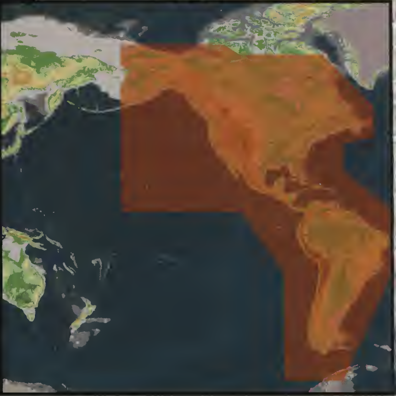
バマラム前フィリピン副大統領をリーダーとした反政府組織は、OCUからの脱退を名目に活動を行っている。彼は少数民族の出身でもあり、問題は単なる政治的な対立から民族対立の様相を見せ始め、複雑化している。





USN

United
States of
New Continent



ニューコンチネント合衆国

北米大陸のアメリカ合衆国、カナダを中心に中南米諸国を取り込んで形成されたのがニューコンチネント合衆国（USN）である。基本的にはアメリカ合衆国時代の制度を拡大化した集合国家であり、旧国家は独自の自治権を持った州に細分化され存続している。国家の主義もアメリカ合衆国時代を踏襲したものだ。

新大陸の自由の旗の下、民主主義の新たな番人として…

コンチネント（Continent）とは大陸のことを指す単語だが、欧州大陸のことだけを指す意も持っている。つまりニューコンチネント（New Continent）とは、新大陸という語意に新たな欧州という意味も含んでいるわけだ。アメリカ大陸はそのような背景を持ち合わせた大陸である。

20世紀後半。ECの連合を受けて、当然のごとく北アメリカにおいても広域経済圏を作る動きが強まった。1994年にアメリカとカナダ、メキシコによって発足した北米自由貿易地域（NAFTA）がそれである。その結果、この3国に渡る広域経済圏が形成される。これがUSNの直接的な母体となった。その後、中南米の経済システムの崩壊により、経済的救援策の一環として中南米諸国の北米国への併合が進められ、2020年に南北大陸を統一した巨大国家USNが誕生したのである。

国家の基盤はアメリカ合衆国であり、多くの政治システムが継承された。また、USN成立と共に民主主義の番人であり、世界の警官であるという旧世代的なイデオロギーも復活する。世界のリーダーたらんとする意識がUSNには根付いているわけだ。そして、実際に巨大な消費人口と生産能力を有するUSNは、明らかに世界の盟主なのである。

■USNを構成する旧国家

- ●アメリカ合衆国
- ●カナダ
- ●メキシコ
- ●コロンビア
- ●ブラジル
- ●ペルー
- ●アルゼンチン
- ●チリ
- ●パナマ
- ●他



■USN会議場

USNの議事堂もUSA時代の建物を継承している。その外観は建設された当時の面影を今に伝え、民主主義の殿堂たる風格はその純白の外観に湛えられている。

US NAVY　United States NAVY

USN海軍

USNには陸海空の三軍と、各州直属の州軍が存在している。しかし、大規模な作戦以外に陸軍は海外に派遣される事はなく、また空軍は長距離支援攻撃以外は防衛が主である。そのため対外的な防衛や軍事行動はUSN海軍が担当することが多い。必然的に海軍がUSN軍の主力になるわけだ。その構成部隊にはさまざまな艦船を中心に、艦載機による航空兵力、陸上作戦を展開する海兵隊が存在している。

緊迫する太平洋 国防の最前線で担う重責

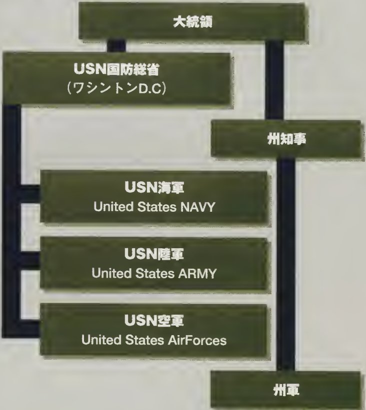
2008年、OCU成立以前のバンコク経済帯や日本との関係を悪化させたアメリカ合衆国は、これらの国々からアメリカ軍を撤退させる方策を打ち出し、それ以後の軍事力の行使を示唆した。これが要因となって現OCU側は団結を固め、連合発足への動きに拍車がかかったのである。

このとき、当時アメリカ領であったミクロネシア連邦の一部を、バンコク経済帯が支援し独立させようとする動きがあったのだが、そこは軍事的な重要地点でありアメリカの抵抗は必至であった。しかしUSN成立時の内政的な混乱の中、後のOCU加盟各国の一戦も辞さずという態度に押し切られ、これらの島々はバンコク経済帯が管理する独立国家となり、駐留軍は撤退に至っている。

ところが、海軍はこの独立国家への寄港を強行し、強引に寄港権を確保した。この寄港を巡る条約はOCU並びにUSNが成立した後も継続されたため、ミクロネシア諸島は両軍がにらみ合う緊張地域となっている。

また、日本海域からフィリピン、そしてミクロネシアを結ぶラインは対OCUへの防衛線であり、USN海軍が担う国防の最前線なのである。

■USN軍指令系統



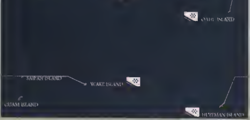
■USNの太平洋展開

ミッドウェイ諸島

大型艦が入港可能な港と海兵隊航空師団が駐留する飛行場が存在する。また常時2万人の海兵隊が駐留し島の防衛に当たる、太平洋の要となる前線基地である。

ウェーク島

大型艦船が入港可能な港が存在する、最もOCUに近い基地。常駐の陸上部隊は存在していないが、海兵隊の戦闘航空部隊1個師団が駐留している。



ハフマン島フォートモーナス

ハフマン島東部の都市に隣接する基地であるフォートモーナスは、USN全軍を包括し南方の重要拠点となっている。ハフマン紛争時はフォートモーナスを含む主要都市に90万人以上の将兵が配備されていた。

オアフ島パールハーバー

USNが太平洋に保有する最大の軍港。海軍を中心に8万人あまりの将兵が駐屯し、近隣の飛行場には空軍の戦闘航空団を含む6個の航空師団が存在する。

FAI Federal Agency of Intelligence

連邦情報局

根拠法令	情報機関法、中央情報局法
所属	首相府
任務／権限	国外の政治、経済及びその他秘密情報の収集 海外エージェントによる情報工作
職員総数	3万7000人（公式データ）

USNの成立時、USNに併合される予定国からアメリカが抱える諜報機関の一本化が要求されていた。当時のアメリカには中央情報局（CIA）をはじめ、国家安全保障局（NSA）、国防情報局（DIA）が存在していた。この要求に対しアメリカはCIA、NSA、DIAを統合し、連邦情報局（FAI）を開局したのである。その組織構成は国外の諜報活動を行う外報部と、国内を担当する内報部が存在している。

■FAIの業務内容

国内の犯罪全般、解決が困難とされる事件の調査を主とする。しかしその業務の性質上、歴史の表舞台の立つことは極めて稀といってよい。これは諜報活動に従事する外報部に特に顕著だ。海外に派遣され、国際的犯罪者の検挙にあたり、時に重要機密の保持・入手にも携わる部署なだけに、それも当然というものだが。

■FAIとFBIの業務区分と権限

■FAI ―― 国家安全保障局

- ●合衆国の安全保障に関与する事例に対しての情報収集
- ●特記すべき権限はなし

■FBI ―― 司法局

- ●連邦法違反事件など国内治安に関する情報収集
- ●逮捕権、違反行為で得られた権利の剥奪権、団体への解散命令、反政府組織員の公職禁止令、旅券発給拒否、他



FIA HeadquartersOffice (Washington D.C)

■犯罪撲滅特化機関FBI

USNにはアメリカ合衆国時代より諜報機関とは別に、FBI（Federal Bureau of Investigation）と呼ばれる捜査機関が存在する。このあまりにも有名な組織も、USN成立時にFAIへの統合が加盟国より要求されていた。しかしFBIはあくまでも捜査機関であり、州ごとに認められている警察権を凌駕し、合衆国レベルで犯罪の撲滅に当たる組織である。その趣旨の違いから合併は見送られ、現在でも単独機関として存続しているのである。

F.A.I Special Force

FAI直属実行部隊

FAIはその特殊性から、諜報員などのエージェント以外に独自の作戦行動を行うための実行部隊を保有する。この実行部隊は情報の収集活動のみならず、戦闘をともなうミッションや強硬手段に訴える時にその力を発揮する。つまり軍隊に匹敵する戦闘能力を持つ部隊なのである。その行動はFAIの作戦に基づき、陸海空軍のバックアップを得て世界各国に展開される。当然危険度も高い部隊であり、この部隊に所属する人材はエリート中のエリートであるといっても過言ではない。USNの外交戦略の切り札であるともいえよう。





FAI6847特殊部隊
PURPLE HAZE

第6847特殊部隊、通称パープルヘイズは今まで幾多の重要な任務をこなし、USNを救ったといえる実戦を繰り返してきた部隊である。メンバーは8人で構成され、任務の内容によってメンバーが選抜される。

USNの現状と問題

■錯綜する対大漢中関係

USNにとって太平洋の対岸に位置するOCUの存在は、まさしく死活問題であった。特にかつての同盟国である日本の離反により環太平洋の経済圏がもろくも崩壊し、USN自体の経済動向に大きな影響を与えている。そこでUSNが着目したのが大漢中であった。

大漢中は20世紀後半から推し進めてきた解放路線を維持し、また白泰栄国家主席の絶大なる指導力のもとで着実に国力を増していた。USNにとって大漢中は10億の市場であり、また対OCU政策のための切り札となり得た。なぜなら、大漢中との共闘によりOCUを経済圏的に挟み込むことが可能となるためである。

21世紀後半からは、USNは政府のみならず国内の企業に対しても積極的な資本投下を開始した。その結果、大漢中は経済成長に成功し、USNやOCUにひけを取らない経済圏を確立した。しかし白国家主席の死去に伴い、事態は急変する。

新たな国家主席に就いた介博了は海外企業を排除し、国家の経済を政府による支配下に置いた。つまりUSNは自国の利益を破棄されたのである。しかし、USNは大漢中に抗議するまでには至らなかった。それは、利権と対OCUの切り札である大漢中の役割との狭間に、外交政策が混迷していたからである。

■経済の低迷と対OCU対策

USNは北米地区の経済的優位が持続できてこそ、その国家形態を維持できるといえよう。南米諸国は埋蔵された資源を基に、北米地区からの援助によってその経済を維持している。だが、この地域には併合時から治安の維持に懸念があった。そのためテロリストやマフィアの資金源となっており、この危険地帯の改善が果たせぬ限り、合衆国の全体的な発展は望めなかった。そして当然のように南米の経済的な停滞は北米諸国を圧迫し、ひいてはUSNの経済そのものに大きな打撃を与えるに至っている。

さらに太平洋を挟んでのOCUとの対峙が、国防費を中心に国庫に負担をかけるだけでなく、経済活動にも大きな影響を与えていた。経済活動が低迷すればUSN自体の政治体系にも影響を及ぼしかねず、一刻も早い諸問題の打破が必要となっている。特にOCUとの関係の改善は急務であり、和平が達成できぬ場合は、最悪な手段を用いてでも解決せねばならない問題であった。

現時点では、旧同盟国であった日本を中心に文化交流をはじめ、民間団体クラスでの接触がスタートしている。これがOCUとの関係の改善につながることを期待する声は大きい。

大漢中への技術提供

USNは大漢中が資本主義的経済政策を転換してからも、技術提供を止めていない。USN の政策によれば大漢中の旨趣替えは容認できるものではないはずである。しかし、あえて技術提供を続ける意図はどこにあるのだろうか？
——JBNN トピックスより

TOP SECRET

［ワシントン＝赤坂陸郎］　USN政府は大漢中に対して、最新の工業技術を提供することを正式に発表した。提供技術の中には、軍事技術に関するものは含まれていない。

かねてから大漢中と経済的な結び付きを強めたい考えのUSNは、さらに強固な関係を維持するため、最先端の工業技術を提供することにした。提供される技術は、一般工業製品、自動車、航空産業における最新生産技術。

これにより大漢中はUSN、OCUと同等の生産能力を持つことになる。今回の技術提供には、軍事技術に直結するものは含まれていないが、一般工業製品技術の中に、アクチュエーターの制御技術が含まれていることから、実質的にはヴァンツァーの技術提供と見る関係者もいる。そのため今回の決定については、USNのOCUへのけん制だという意見が大勢である。

技術提供の実施時期は明らかになっていないが、USN関係者によると今年度中にも何らかの形で提供が行われる模様だ。

ECからの技術提供

大漢中に資本を投下しているのはなにもUSNだけではない。OCU、EC、ザーフトラ共和国と世界各国が大漢中に接触していたのである。

ECからはアクチュエーターをはじめWAPの技術が提供されている。それは大漢中軍が使用している機動兵器から容易に推察できるだろう。また日本も密かに大漢中との接触を図り、USNの包囲網打破と新たな市場の開拓を画策しているようだ。



兆竜4型
センダー社生産
欧州名：トーラ

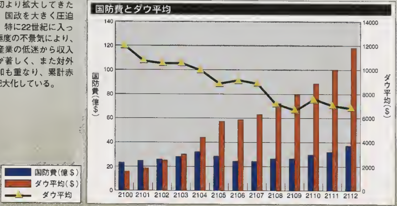
USN第3艦隊

対OCUの最前線に配備されているUSN海軍第3機動艦隊。空母トーマス=ジェファーソンを中心に編成された、世界最強の機動部隊と言われる。



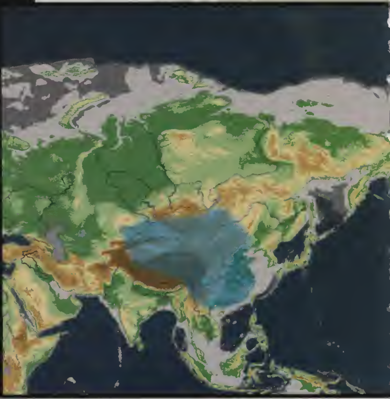
国防費の増加と国政赤字

建国当初より拡大してきた国防費は、国政を大きく圧迫している。特に22世紀に入ってからは極度の不景気により、国内の諸産業の低迷から収入源の低下が著しく、また対外赤字の増加も重なり、累計赤字は年々肥大化している。



People Republic of

DaHanZhong



大漢中人民共和国

ユーラシア大陸の東、歴史ある文明の大地に、新たな経済圏を打ち立てたのが大漢中である。20世紀に確立した社会主義体制から、21世紀にとられた開放政策による経済の自由化によって急成長を遂げた現在でも、国家体制は基本的に一党独裁による議会運営によって成り立っている。

開放政策の下での経済発展
自由経済の集権による新たな世界へ

21世紀、大漢中は開放政策によって推し進められた自由資本主義政策の恩恵により、安定した経済基盤を確立していた。大漢中はもはや発展途上の国ではなく、世界経済を揺るがす巨大マーケットを有する、新たな経済大国へと成長したのである。世界各国の政府機関や企業体はこの未開拓な経済的フロンティアに着目し、多くの資本を投下することで大漢中の経済成長に大きく貢献していた。

しかし21世紀に入り、新たな冷戦と地域紛争の勃発により世界経済が低迷し、巨大な経済共同体すらも不況にあえぐ時代が到来する。各国の支援とともに成長してきた大漢中にとって、この世界的経済の混迷は痛手であり、抜本的な政策の転換を迫られた。

そして2112年、永きに渡り国家主席として人々を導いてきた白泰栄の死去を受け、新たに国家主席へ就任した介博了のもと、大漢中は国家そのものを一つの企業体とみなす新たな政策を推し進める道を選ぶ。それが「自由経済の集権」と呼ばれる政策である。この政策は大漢中を社会主義国家の本来あるべき姿に引きもどし、人民への福祉の充実と経済の安定を第一に考えたものであった。



介博了（57歳）

大漢中人民共和国国家主席

永年に渡り国家主席に就いていた指導者白泰栄の跡を継いだ介博了は、強い発言力とそれに伴う実行力を兼ね備えた人物である。特に軍部への発言権は強く、実権を掌握している。その行動力のため、人民から高い支持を得ている。



■開放政策のもたらした発展

開放政策は経済的な豊かさをもたらし、国民の生活レベルを飛躍的に向上させた。特に都市部におけるインフラの整備は著しく、公共の設備は十二分に充実しているといえる。



大漢中軍 People Republic of DaHanZhong Troops

大漢中人民共和国軍

世界でも有数の軍事力を誇る大漢中人民共和国軍は、20世紀に侵略してきた外敵を排除した時の精神を色濃く継承した屈強の軍隊である。特に基本理念である「人民の財産と生命を守る、人民のための軍隊である」という意志が、一兵卒まで定着している。その最高指導者は国家主席であるが、事実上、軍組織の運営は国家中央軍事委員会と党の軍事委員会の決定によって行われている。

開放政策と大漢中軍の装備

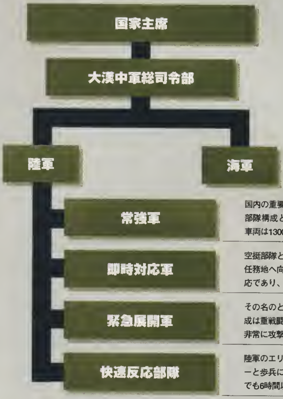
大漢中軍の歩兵部隊は古来から最強の部隊と呼ばれてきた。しかし、社会主義政策下での科学力や技術力の低迷、自由主義経済圏との格差の広がりは、最強と呼ばれる軍隊を過去の遺物へと押しやっていった。特に21世紀半ばに戦場へ導入されたWAPは、大漢中軍のあり方に大きな問題点を突きつけた。いくら屈強な歩兵でも、WAP部隊の前ではあまりにも無力であることが、アフリカ戦線ではっきりと証明されたのである。

軍事利用を目的としたWAP技術の輸出は現在でも厳しく制限されており、当時の大漢中軍がWAP技術を入手するのは不可能であった。

しかし戦略上、いや防衛上においてもWAPの必要性は明らかであり、その入手は急務といえた。そこで党上層部は、開放政策の全面的な容認を決定する。その背景には、国内の生産力の向上を図り、WAP技術を拾得しようという意図がうかがえる。また、経済開放は他の国々へ巨大なマーケットを提供することとなり、国際関係を大きく緩和する効果も期待できた。つまり、それによってハイテクノロジー分野などの輸出規制の緩和を引き出すのが狙いだったのである。

結果、大漢中でのWAP開発は21世紀後半には成功し、現在では軍部への提供だけでなく、主力輸出品として国外へも提供されている。

■大漢中軍指令系統



常強軍：国内の重要拠点に配備され、担当地域の防衛を担う軍。部隊構成と装備はごく標準である。兵力は450万人、車両は1300両と推測されている。

即時対応軍：空挺部隊と歩兵からなる部隊で、作戦時には空輸され任務地へ向かう。その任務は主に国境紛争に対する対応であり、他には暴動鎮圧などにも出動する。

緊急展開軍：その名のとおり緊急を要する作戦を担当する。その構成は重戦闘車両を含み、敵のせん滅を任務の主に置く、非常に攻撃的な部隊である。

快速反応部隊：陸軍のエリートによって構成された部隊。ヴァンツァーと歩兵によって構成され、国内であればどんな地点でも6時間以内に戦闘を可能とする。

■大漢中軍の部隊配置



●北京
大漢中軍総司令部が置かれている首都北京には、首都防衛部隊として大漢中軍の精鋭が配備されている。

●上海
海軍総司令部が置かれている上海。原子力潜水艦をはじめ、最新鋭の艦が配備されている。

●青島
南方の守りの要である青島には海軍基地が置かれている。その規模は上海の1/3ほど。

●蘭州
西方軍区中枢基地が置かれる。広大な西方の地を、この基地から統括している。

●南京
陸軍の総司令部が置かれている。国内の軍事情報網はこの地に集約され、有事の際は即座に対応できる。

大漢中軍情報部 DaHanZhong Troops Intelligence Department

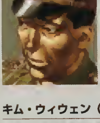
大漢中人民共和国軍情報部

根拠法令	なし
所属	大漢中人民共和国軍総司令部
任務／権限	不明
職員総数	不明

※軍に所属する非公式部隊のため公式文書は存在しない。

大漢中人民軍情報部は、軍の諜報部門を一手に担う部署である。その存在は周知の事実ではあるが、公式書簡にその有無に関しての記述は一切存在していない。指示系統的には大漢中軍総司令部の直属という形になり、人民軍の兵士すらその組織概要を知らされていない。

情報部の任務は軍事的側面のものが多いが、党本部の要請により国政や外交に関わる諜報活動にも活躍する組織である。



キム・ウィウェン（47歳）

大漢中人民共和国軍将軍
総司令部司令

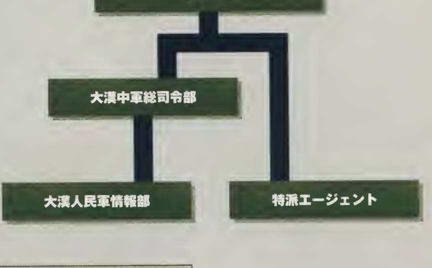
形式的には総司令部の司令がすべての情報を把握する組織構造であるが、実際には国家主席や党本部の上級委員によって利用されている。軍関係の諜報活動についても、中央軍事委員会の意志決定が優先されている。

大漢中軍情報部と国家主席直属エージェント

大漢中の諜報機関としての情報部は、あくまでも組織内の一部署として活動しており、その権限には限りがある。また軍に所属する非公式部隊なため、法律的にその活動が合法化されておらず、さまざまな面において束縛されている面が大きい。特に海外での活動においては、情報部員には決定権が与えられていないため、諜報活動に限界があった。

そこで国家主席直属のエージェント制が導入されたのである。これは党本部や軍部の決定なしに国家主席の権限の下、軍事、外交的な全権を得た情報部員が特殊任務に当たるものである。ただし、エージェントを派遣できる任務は国の危機に関する場合のみという慣例があり、通常時には存在していない制度といえる。また、当然その責務はすべて国家主席に帰属する。

■指令系統



■国家主席直属エージェント

●非公式な制度のため、その形態、権限は一切不明

■エージェントの任務

エージェントのみならず、情報部の任務は極秘事項であり、その活動はまったくと言っていいほど把握できていない。しかし、大漢中のエージェントの活動によるものと思われる事例は数件確認されている。右の写真は日本の横須賀近郊で撮影されたものであるが、日防軍のヴァンツァーを用いて活動している。だが、事件当時その地域に日防軍に該当する部隊は無く、目撃されたパイロットの風貌から大漢中のエージェントではなかったかと推測されている。



大漢中の現状と問題

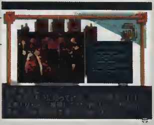
■自由経済の集権という共産主義の復権

21世紀、大漢中はまさしく高度発展の時代であった。前世紀から継承され着実に浸透してきた開放政策は、さまざまな問題を抱えつつも確実に国力を増大し、産業を発展させていった。結果的に人民の生活レベルは向上し、諸問題など人民の幸福の前にはまったく無意味であった。

だが22世紀を迎えると状況は変化する。経済の発展が頭打ちとなり、人それぞれが独自に安定を模索する時代を迎えると、国民の不満が高まり上層部の腐敗が問題視されるようになった。そして世界各地での紛争が経済停滞を呼び込み、大漢中の経済をも直撃したのである。

この問題下に国家主席に就任した介博了は、国家経済の建て直しと腐敗した上層部の粛正のため、国家体制の社会主義化を強化する政策を打ち出した。それが自由経済の集権などに見られる政策である。確かに私企業の経営管理を政府が行い国家そのものを一企業とすることで、国家的公共の福祉を優先にした政策がとれ、なおかつ世界的不況を回避できる可能性も高くなるだろう。しかし、これは共産主義の復権を示すことであり、この集権の行き着く先が何を意味しているのか、大漢中の今後の大きなテーマといえよう。

偉大なる指導者



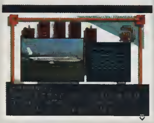
故　白秦栄（没年：89歳）

前国家主席

永く国家主席の地位にあり、大漢中の経済的発展に尽力した。しかし、経済中心のその政策は確かに国と国民を豊かにしたものの、さまざまな問題を生んだ。当初、それらの問題は白氏の意志を継ぐ穏健派が国政を継続することで対処されると考えられていたが、介現国家主席の登場により国政は大きく動き出す結果となったのである。

次期指導者の事故死

故白前主席の後継者として有力視されていた明氏は、不幸にも飛行機事故によって死亡している。もしこの事故がなければ、大漢中の現状も変化していたと推測される。



現代年鑑

2104年　政府専用機墜落　当時の国家主席次官、明氏とその家族を乗せた政府専用機が、訪問先のインドへの飛行中にエンジントラブルを起こし四川省の山中に墜落。この事件で明一家は全員死亡。明　黄珠氏は、白主席の後継者の地位を約束された腹心の部下であり、大漢中の資本主義化を推進する原動力として、人民からも絶大な支持を得ていた。彼の告別式は大規模な国葬としてとり行われ、海外からもUSN大統領、OCU首相を始めとする数多くのVIPが、故人の早すぎる死をいたんで参列した。写真は墜落した政府専用機と同型の機体である。

■華蓮団

介主席の政策変更は、大きな歪みを国内にもたらした。中でも国際企業の国内からの締め出しは、諸外国から大きな反感を買う結果となる。特に大漢中はUSNからの大きな援助によって発展してきている。そのUSNが新政策を支持するかどうかによって、国際的な位置関係が決定されるといってもよかった。

このような情勢の中で、大漢中国内では次第に反介主席政権の動きが活発となっていった。とりわけ大規模なのが、失脚させられた知識層と、企業の国有化によって打撃を受けた華僑が結びついた反政府組織「華蓮団」である。

華蓮団は武力行使も辞さない組織であり、華南は反政府運動に巻き込まれていく。ここで、少々華蓮団の支援者に着目してみよう。確かに、表面上主な援助者は香港やシンガポールの華僑である。しかし、その資金の流れを見ると、USNからの出資が確認できるのである。特に兵器の供給は、USN政府とも関係の深い軍事企業、ディアブルアビオニクス社が介入している節がある。このような複雑な国際関係の下、華蓮団の活動が注目されているのだ。また政府側がUSNとの繋がりを知った上で、華蓮団にどう対処するかにも注目が集まっている。

華蓮団

華蓮団は単なる反政府組織とは違う。通常のテロリストなら持ち得ないような最新のヴァンツァーを数多く保有し、実働部隊は軍組織と同じく完全に統制されている。それは反政府組織と言うより、一国家の軍隊といえよう。



華蓮団団長



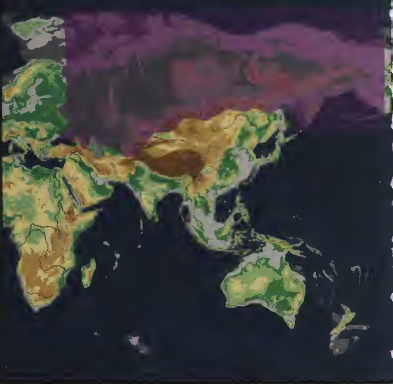
黄漠順（48歳）

前国家副主席

華蓮団を率いる黄漠順は、前国家主席である白氏に師事し、国家副主席にまでなった人物である。新国家設立に伴い政府を追われ、国家の将来を憂う人々に支持されて華蓮団を組織したのである。

Republic of

ZERFTLA



ザーフトラ共和国

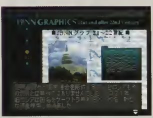
ECなどの新たな国家連合の枠組みに対抗すべく、旧CIS(独立国家共同体) 各国が旧ロシアを中心に再集結し、形成した国家がザーフトラ共和国である。首都機能はモスクワが継承し、クレムリンに今なお大統領府が置かれている。シベリアなどの豊富な埋蔵資源を背景に経済を立て直し、現在は旧東欧州諸国を併合し国力を増強している。

巨大な2つの経済圏に挟まれ停滞する旧CISの復権

旧CISはロシアを中心に構成された緩やかな国家連合であった。だが21世紀初頭、一向に進まぬ自由主義経済に基づいた市場整備と混迷を深める政局に、国家体制の破綻が現実のものとなっていた。しかも、ヨーロッパでのECの統合により成立した巨大な経済圏と、東南アジア諸国の連合によるOCU形成の動きに、旧CIS諸国の経済は危地に立たされていた。なぜなら、2大経済圏に挟まれる形になってしまうと独自政策を取りにくく、低迷している国内の経済がさらに圧迫されてしまうからである。

この状態を打破するためにも、旧CIS諸国は再度協力し、独自の経済圏の確立を目指す必要があった。もともと豊富な埋蔵資源を有する旧CIS諸国は、混迷する政局が解決し安定した資金の流通が確保できれば、十二分に他国に対峙できる経済力を得ることが期待できたのである。

このような情勢を背景に2021年ザーフトラ共和国は建国される。しかし、インフラ整備に対する国力の欠如により経済は一向に復興せず、現在に至っても旧CIS諸国の復権は果たされていない。



■ザーフトラ軍とPMO

20世紀、世界の盟主として君臨していたロシアにとって、ソビエト崩壊後は苦渋に満ちた時代であった。だからこそ、なんとしても世界の中でその盟主たる威厳を確保したいザーフトラ共和国は、独自の国際平和維持機構（PMO）の設立に腐心したのである。しかし、後の第2次ハフマン紛争において、PMOはザーフトラ共和国の国際的地位を維持するための見せかけの組織であることを露呈する。

■旧CISとその加盟国

1991年ソビエト連邦の解体後、連邦を構成していた国によって結成されたゆるやかな国家連合体。

2000年時点の加盟国は、ロシア・ウクライナ・モルドバ・アルメニア・アゼルバイジャン・グルジア・カザフスタン・ウズベキスタン・ラーブヌイ・トルクメニスタン・タジキスタン・キルギスの12カ国である。

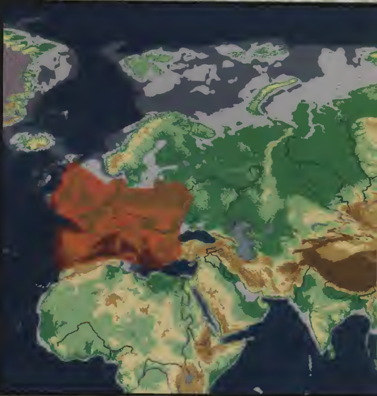


■ラーブヌイ共和国

もともと旧CISを形成していた加盟国であったが、国内に整備されていた研究施設と高度な科学力を持つため、ザーフトラ共和国へは参加していない。現在は研究施設と独自の科学技術を武器に外交を展開している。

EC

Euro Community



ヨーロッパ共同体

旧西ヨーロッパ諸国を中心に1967年に発足したヨーロッパ共同体（EC）は、欧州連合（EU）を経て2005年、はじめての国家連合ECとして成立する。この成立は新しい経済圏を目指した画期的な事柄であり、経済的なグローバル化を決定づけたといえる。その後も世界をリードする者として、ECは世界各国の模範として現在に至っている。

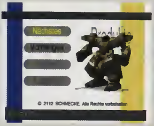
最古の共同体として、再び世界の中心を目指す

有史より多く世界の中心にあったヨーロッパは、20世紀の2度の大戦の影響から、世界の中心たる存在をアメリカや東南アジア諸国に譲り渡した。しかし、 世界初の共同体としてECが成立したことにより、経済的にも国際政策的にも再び世界のひのき舞台に登場したのである。

21世紀にはEC成立を受け、USNやOCUなど後発の経済共同体が発足。そこで世界各国の手本となったのは当然ECであり、21世紀は経済のみならず政治、文化においてもECが世界を牽引したといえよう。しかし、USNとOCUの衝突が激しさを増した21世紀後半は、世界の中心もその両国に移行し始めていた。

■ECの輸出品

ECの産出品で最大の物はヴァンツァーである。もともと旧ドイツにて開発された兵器だけあり、世界中で今なお欧州産のヴァンツァーは人気が高い。だが、USNやOCU 日本における製品が、22世紀に入りその勢力地図を塗り替えようとしている。



■ヨーロッパ共同体の来歴

ヨーロッパ経済共同体（EEC） を中核にヨーロッパ石炭鉄鋼共同体（ECSC）、ヨーロッパ原子力共同体（EURATOM）の三機関を統合した超国家行政組織。1967年に加盟国６か国で発足、73年イギリス・アイルランド・デンマークが加盟。さらに81年ギリシャ、 86年スペイン・ポルトガルが加盟。通貨同盟を結成し、経済統合を経て政治同盟の実現を目的として93年にヨーロッパ連合（ EU ）に発展した。作中のECはそれが中核となっている。本部はブリュッセル。

2034年
歴史から消えたアフリカ内戦

WAPが初めて投入されたといわれるアフリカ内戦は、その背後にECとOCUの影が見え隠れしていた戦いであった。基本的にはOAC（アフリカ統合機構）が中心となり、他の経済共同体に対抗できる経済圏の成立を目指していたが、その目的は達成できないまま内戦は収束してしまう。

しかし、その後遺症はアフリカ全土を覆い、現在でもアフリカ諸国では内戦が継続されている。そして、この経緯はいまや語られることすらない。

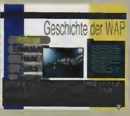
■内戦が続くアフリカ

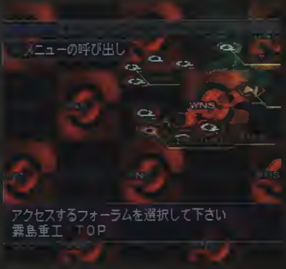
現在、特に南アフリカ地方では激しい内戦が続いている。各国もこの地域への渡航を禁止することで、その戦いの激しさの程を伝えている。



■MULS共通規格

WAPの特異点はMULS―Pという共通規格の採用である。アフリカ戦線に投入されたWAWはこの規格によって汎用性を飛躍的に高めWAPへと進化。多くのメーカーをこの産業に呼び込んだ。





企業

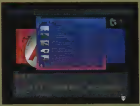
Large Scale Enterprises

世界の産業の中核は軍事関連産業が占めている。特にWAPは20世紀の自動車産業に匹敵するほど産業ピラミッドのすそ野が広く、全産業中に占めるマーケットシェアも高い。ここではそんなWAPを生産する企業をはじめ、世界有数の軍事関連企業を見ていく。

USN

ディアブルアビオニクス

DIABLE AVIONICS



軍事関連機器の開発を中心に発展してきた企業。現在はUSN軍の主要WAPを製作しており、USN政府とも関係が深い。政府の不利益にならない範囲での利益追求が浸透しており、逆に政府の意志を優先して活動している部分もある。傘下に多くの企業を有し、出資先にはラーフヌイの研究所や華僑関連企業も含まれる。



共同体の枠組みを越え営利を求め活動する

国家体系が経済共同体の確立によってグローバル化していった時代の流れの中において、私企業は新たな発展の形を目指した。独自のネットワークと世界展開で、一企業体が世界を席巻することも珍しいことでは無くなったのが21世紀である。企業は利益を生み出す可能性があれば、イデオロギーや国際関係を超えた視野に立ち、経営を展開していった。

しかし、21世紀後半からの世界的経済の停滞により、22世紀初頭には巨大企業同士の合弁や吸収が頻繁に行われるようになっていく。当時はOCUとUSNのように冷戦関係にあった共同体が存在し、民間の交流も制限されていた。その危機の時代にも、企業は現地法人を創立することにより、外交が遮断されている国ですら営利活動の視野に入れていたのである。しかし、このような捻れた関係を今度は不景気が直撃した。特にOCUとUSNにおいて中小企業の倒産が相次ぎ、さらに合併や吸収を盛んにする事態を招いたのであった。

その後、企業は共同体の庇護の下、企業としての体制を再構築する道を歩んだ。これは各共同体が、内需の拡大による産業の建て直しを図ったことに起因する。こうして共同体を超えた利益追求が可能な企業は、ECの企業と、数えるほどの巨大企業に絞られていくのである。ここではそんな経済背景を踏まえ、現存するにいたったグローバル企業を捉え直してみた。特に軍事産業に関する企業をピックアップし、また他業種においてはOCUに関連が深い企業を見ていく。

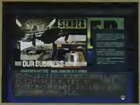
■ヴァンツァー企業のフォーラム



EC

センダー

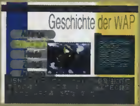
SENDER



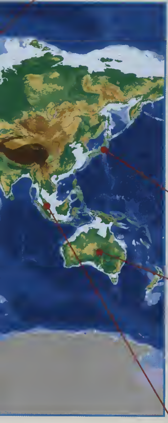
大型WAP開発の先駆者として定着しているセンダーは、その取引先にUSNやOCU、そして大漢中が存在するグローバル企業である。まさしくECという地の利を最大限に活用した企業といえよう。WAP以外にも、人工衛星やロケットといった宇宙関連製品から一般家庭で使用する調理器具まで、取り扱う製品の幅が広い。

シュネッケ

SCHNECKE



独国に本拠を構えるシュネッケ社は、WAPの基本設計の開発に携わった企業。WAPを構成する人工関節機構理論の開発をサポートし、共通規格MULSをUSNのディアブルアビオニクス社とともに決定した最古参のWAP生産企業である。長年の研究によって培われてきた開発技術による安定した生産を続けている。



OCU

OCU日本

霧島重工

KIRISHIMA Industry



航空・宇宙産業などの重厚長大産業から半導体などの電子部品まで、様々な分野で国内技術を牽引してきたオピニオン・リーダー的企業。かねてより燃焼機関の開発に長けており、軍事関連ではヘリコプターをはじめとした支援兵器の生産を行ってきた。WAP開発技術を有して後は、国内を中心にWAPの提供を行っている。

イグチ

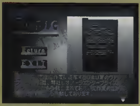
IGUCHI

「ボディリペア」などWAPのサプライ品を生産していたイグチ社は、第2次ハフマン紛争後に同国のWAP企業サカタインダストリィを吸収。WAPの生産部門をはじめ医薬部門などを傘下におさめ、コングロマリットとして急成長を遂げた。また、従来より諸外国からも需要を得ていたWAP用兵器の生産は、現在もトップクラスに位置する。

OCUオーストラリア

ジェイドメタル＝ライマン

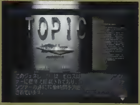
Jade Metal-Lyman



10年連続世界シェア1位を誇る、WAP開発・製造のトップ企業である。現在は軍用のみならず民間用航空機の開発や陸運業などにも参入し、OCUの発展に大きく貢献している。ジェイドメタル＝ライマン社のWAPがOCU軍を中心に各国の軍隊へ導入されていることからも、その企業力の高さは想像に難くないだろう。

レオノーラエンタープライズ

LEONORA ENTERPRISE

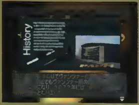


レオノーラ社はWAPの生産だけでなく、コンピューターの設計・製造をはじめ、さまざまな電子産業にまでその活動フィールドを広げている。特にコンピューター部門ではOCU内で40％のシェアを誇っており、超高密度演算処理技術を応用したWAPの市場への投入にも成功している。

OCUシンガポール

パペール

Papel



戦闘車両を中心とした軍事関連企業であるソンクラー重工の子会社として、武器弾薬の製造からスタート。WAP生産の機運が高まると、関連する武器開発に着手し世界有数のWAPサポートメーカーとなる。WAP開発技術を有して独立すると、以降は独自のWAP開発に力を注いでいる。

WNS　Worldwide Network System

ワールドワイド・ネットワークシステム



Network

20世紀末に急速に発展したインターネットは、新たなる情報革命を呼んだ。21世紀に入るとその重要性から国際規約が制定され、すべてのサーバーの管理は公の機関が行うことが決定された。しかし、ネットの重要性と利便性は変わることはなく、人々の生活に新たな産業として定着したのである。

WNS（World Net Service）

情報空間の確立、グローバル化は産業の活性化を促した。これらは技術力や知的財産の密室性を崩壊させ、現況では多くの最新テクノロジーが各国で共用されている。こうした情報のオープン化は国家間の衝突に起因するテクノロジーの独占といった軋轢を生まず、公平な産業体制を形成する土壌を作っていった。

インターネットとそれに準じる通信における国際法、通称国際ネット法は2059年に公布された。この条文では、すべての国家で設置されたサーバーを各国政府が管理することが明記されている。また、表現の自由を認める一方でアクセスログ及びアクセス時の端末に残されたユーザーコードは、すべてサーバー管理者である各国政府機関に残されることとなったのである。

国際法が公布された当初はさまざまな反発が見られたが、現在では安定した運用がなされ、新たな統一名称「ワールドネットサービス」として人々の生活に浸透している。しかし、当然政府の監視下を嫌い独自にネットワークを運営する運動は衰えず、ゲリラネットが多発しているのも事実である。

■ スペンダー

スペンダーとは、報酬を得て情報の違法取得を謀る者たちの総称である。その手段は主にネットワークハッキングと間諜活動だか、特に前者の場合、旧来のハッカーと著しく異なるのが「他者の依頼を受けて商売にしている」という点だ。このスペンダーによるハッキングは全世界で横行しており、国際空港がその機能を停止する事件すら発生している。



Software Developer　ソフトウェア開発会社

人々の生活の奥深くまでコンピューターが入りこみ、情報形態、そしてその質が急速に変化しているこの時代には、あらゆる状況に対応できる優秀なソフトの存在が必然的に求められる。世界各国には高い技術力を誇るソフトウェア企業が存在しており、日々現れる様々な問題、需要に対応するべく開発努力を続けている。ここで紹介する３社は、中でもその技術を世界に認められた優秀な企業である。

■ツール

世界規模のネットが拡大していくと、プライバシーや機密情報の保全に対して高い関心が寄せられるようになる。当然の市場原理として、さまざまな圧縮、スクランブルツールが登場したのである。

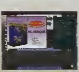


両虎ソフト



大漢中政府のバックアップを得て、多方面に渡るソフトを開発する企業。OSの開発にまで着手しており、安価で高品質なラインアップは世界的な支持を取り付けている。

サイナミックソフト



USNに本社を置くサイナミックソフトは ディアブルアビオニクス社の関連企業である。ディアブルアビオニクス社製品のドライバやオペレーションソフトを中心に、ゲームやプロテクトソフトまで開発している。

ネットワークコンピューティングシステム



日本に本社を置くネットワークコンピューティングシステム社は、企業規模こそまだ小さいものの、画像解析ソフトなど得意分野では高い技術力を持つと評価されている。

BARILAR Barilar High Technology Farm

バリラー畜産実験場

スラウェシ島ランテパオにある家畜実験場。資産家であるバリラー一家によって経営されるこの農場は、主に遺伝子操作による肉牛の品種改良の研究・実験を行っており、OCU畜産品評大会などで受賞するなど高い評価を得ている。近年、当主バーデンによる「メタンヴァンツァー」の研究開発に力を注いでおり、度重なる実験中の爆発事故などで島の住人たちから敬遠されている状況である。



メタンヴァンツアー

バリラーが「完全無公害で地球に優しい」を謳い文句に、構想以来十数年の歳月をかけて開発した。メタンガスを燃料として採用し、駆動するWAPは世界初である。確かにランニングコストも低く無公害ではあるが、世界を変革するとまで自負する彼の意に反し受注は未だにない。

この実験場は、創業者オーリックがわずか肉牛6頭という小さな農場から築き上げたものである。妻エーメとともに農業に勤しみながら、大手食肉会社から肉牛の肥育を請け負うことで徐々に農場の規模を拡大。その後、肉牛の生産も手掛けるようになり順調に資産を増やしていった。

息子のバーデンは工科大学の機械工学科へと進み、卒業後は家業に携わるかたわら、独力で理想とするヴァンツァーの研究・開発を行っていた。バーデンがベネットと結婚したのを機に、オーリック夫妻は隠居。農場の経営はバーデン夫婦が行うことになる。ベネットは農学部で遺伝子操作やクローン技術を学んでおり、この知識をフルに活用して肉牛の品種改良に成功。OCU畜産品評大会で金賞を受賞するまでに至った。

農場の経営が軌道に乗り余裕を得たバーデンは本格的に「メタンヴァンツァー」の開発に着手。4人の子供たちも成長し、父の夢の実現に向けて家族が一丸となって研究を推し進めている。バーデンは一家を「コンツェルン」と称し、自らを「総帥」と銘打って、次世代WAPと信じる「メタンヴァンツァー」の普及を画策している。

■バリラー一家



バーデン・バリラー（父）
バリラーコンツェルン総帥

ジャカルタ工科大学機械工学科卒業。牛舎の清掃中にメタンガスを燃料とすることを発想。以後、「メタンヴァンツァー」の開発に心血を注ぐ。



ベネット・バリラー（母）
農園部門COO（最高執行責任者）

バンドン大学農学部卒業。独自のWAP構想を熱く語るバーデンの熱意に打たれて結婚を決意。肉牛の品種改良などに貢献する。



ターニャ・バリラー（長女）
バリラーコンツェルンCOO

バタム大学経営学部卒業後、インドネシア大使館商務部に勤務。優れた経営手腕を活かし、コンツェルンのさらなる発展を目指す。



リニー・バリラー（長男）
畜産実験場主任兼テストパイロット

トラジャ大学工学部制御工学科卒業。肥料製造プラントなどの設計・管理運用をこなす。「メタンヴァンツァー」の営業・販売にも従事。



オーリック・バリラー（祖父）
名誉会長

農場の創業者。現在も肥育担当として農場へ足を運ぶ。たった一人で荒れ地を開拓し、コンツェルンの基盤を作り上げた。



エーメ・バリラー（祖母）
農園担当CEO（最高経営責任者）

長く農業に従事してきた経験を活かし、深混層ロータリーや全面マルチ消毒機など「メタンヴァンツァー」の各種アタッチメント開発を補佐。



スカイナ・バリラー（次女）
肥料生産部門COO

バンドン大学応用生物科学部に進むが、現在は休学中。化学肥料や有機肥料の品質向上を目指し、完熟堆肥「バリライト」を開発する。



ケトレ・バリラー（三女）
財務担当COO

ジャカルタのミッションスクール卒業後、日本へ留学する予定であったが、父の一存で現職に就く。コストカッターの異名を持つ購買担当者。

Louys The Louys Concern

ルイスコンツェルン

オーストラリアから中東、アフリカにまで販路を持つ鉄鋼業を中心に、建築、デパートなど大規模な多角経営を誇るフィリピン最大の企業体。ともにオックスフォード大学を首席卒業したルイス夫妻は、夫フレッドが前会長オライリーの跡を継いで会長職に就き、妻ジェニーはコンツェルン内の数社の社長職を務めるかたわら、ボランティア活動にも熱心に取り組んでいる。



ファム・ルイス

フィリピンの大富豪・ルイス家の令嬢であるファムとバリラー一家は親戚の関係。



事件・事例

各諜報、報道機関が有する情報をもとに、2112年の世界背景を表する事件事例を検証する

2112年という時代の背景ではさまざまな事件、事例が絡み合っている。言ってみれば今回発生したMIDAS事件も、それら時代の構成要素の一つに過ぎないのである。ここでは、世界各国の諜報機関や情報機関から得た情報を基に、国際的なマスメディアの報道記者が提示した情報を掲載。その事例がどのようにMIDAS事件に関与したかを検証していく。そうすることで初めて、MIDAS事件は本当の顔を我々に見せるのである。

金原子核線 Gold Atomic Nucleus Radiant Rays

金原子核線理論とその可能性

by 神納和紀（JBNN）

行き詰まる核融合開発 そして新たな核分裂理論の誕生

20世紀に開発された核分裂技術は、負の遺産と共に強大なエネルギーソースを人類にもたらした。それは偏ったエネルギー浪費に歯止めをかけ、あらたな未来を人類に提示した。しかしこの核分裂という危険な火遊びは、21世紀に入ると大きな問題をもたらした。それは関連施設や廃材の処理が不可能なことである。

多くの放射線にさらされた物質や、作り出された放射性物質の処理技術が確保できず、半減期を過ぎるまでそれらの物質を保管するしかなかったのである。ゆえに核分裂の代替が常に模索され続けてきたが、そこで注目されたのが核融合である。

もともと核融合技術は核分裂技術の確立とともに理論的には完成し、限定された条件では成功していた。しかし、閉鎖空間で反応を発生させる段階には至っていなかったのである。2112年の時点ですら、いまだその技術は確保されていない。そこで注目されたのが、ラーブヌイ共和国の物理学者であるクラムスコイ博士が提示した、新たな核分裂理論「金原子核線論理」であった。

■USN特殊放射線研究所

素粒子物理学の研究所としてUSNに建設され、現在に至る放射線研究所は、USN内に主要な研究施設として3つ研究所を持つ。現在は核融合のレーザーに関する研究などを主に行っている。



■クラムスコイ博士夫婦

LORAN KRAMSKOI

ロラン＝クラムスコイ：物理学博士

- 2058年　バラノヴィチ生まれ。国立サバラフ大学卒。専攻は原子物理学。卒業後オルシャ国営科学研究所に所属。
- 2087年　同じ研究所のハンナ＝クレショーフと結婚。同年、オルシャ研究所の所長に就任。
- 2093年　原子核線からのエネルギー抽出理論の発表により、ラーブヌイ科学技術庁賞を受賞。
- 2102年　ブレスト郊外の森林で起きた自動車事故により死亡。この事故では、妻ハンナと2人の娘も同じく死亡している。

HANNA KRAMSKOI

ハンナ＝クラムスコイ：物理学者。

- 2061年　ミンクス生まれ。結婚前のファミリーネームはクレショーフ。国立ミンクス大学大学院卒。専攻は原子物理学。卒業後ヤマルカ国営科学研究所に所属。
- 2085年　オルシャ国営化学研究所に異動。放射線を利用したエネルギー抽出研究を行う。
- 2087年　同じ研究所勤務のロラン＝クラムスコイと結婚。
- 2090年　長女エミールを、2093年に次女アリシアーナを出産。
- 2102年　ブレス郊外の森林で起きた自動車事故により死亡。この事故では、夫ロランと2人の娘も同じく死亡している。



金原子核線利用によって得られる莫大なエネルギー

金原子核線理論とは、原子崩壊を誘発する「核線」と呼ばれる新種の放射線を利用し、物質を莫大なエネルギーに変換する論理である。従来の核分裂エネルギーとは、物質を分裂させたときに消失する質量をエネルギーに変換したものだ。基本的に発生するエネルギー量は、分裂時に消失する質量に比例する（特殊相対性理論）。その消失質量が、異常に大量になるのが金原子核線理論である。これは夢の核反応といえた。

しかも、崩壊させた原子構成物質の素原子を、金原子核線は安定元素である重13金になるまで取り込み続ける。結果、エネルギーに変換しきれなかった残留物質は金に変化するため、放射能物質として残ることがない。放射線による汚染は発生しないのである。

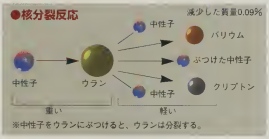
しかし問題は、すべての物質の分子結合を切断する金原子核線は、一定空間に封印することが出来ず、有効かつ安全に制御することが不可能なことであった。言い換えれば、一定空間にその反応をとどめることさえ可能ならば、金原子核線の有効活用は無限の可能性を持つのである。

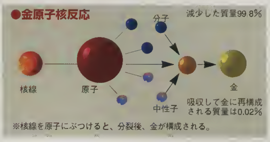
特殊相対性理論

$$E=mc^2$$

エネルギー＝質量×光速の二乗

※高速＝2.99792458×10^8m／sec





■特殊相対性理論

20世紀初頭、アインシュタインが提示した物理学の理論体系のうち、物質が等速直線運動をする座標系に適用される「発生するエネルギーは質量に対し光速の二乗をかけた値に相当する」という理論。つまり物質が変化する化学反応や核反応において、反応時に消失する質量がエネルギーの量を決定する（光速ｃの値は一定であるため）というものである。

■核分裂反応と金原子核線反応

基本的に原子核を崩壊させるという意味では、双方とも核分裂という大枠に含まれる。しかし、核分裂が物をぶつけて二つに割るというものなのに対し、金原子核線反応は作られていた物質そのものをバラバラにするというまったく別の性質を持っている。また、金原子核線反応は、バラバラにした物質を再度別の物質へ構成し直すという特異性を併せ持っている。

金原子核線がもたらす可能性と破局

金原子核線反応は無限の可能性を人類にもたらす理論だ。最大の利点は生み出される莫大なエネルギーであり、そのエネルギー発生論理は核融合、すなわち現存する自然科学の理論を上回る。人類が神の領域に踏み込まんばかりの力を得たといえよう。その圧倒的なエネルギー量は、地球上のエネルギー問題をすべて解決し、化石燃料どころかすべてのエネルギー循環の根本である太陽光にすら依存する必要性を失わせるのである。

また、物質を完全消滅させてしまう性質から、さまざまな不要物質、つまりゴミ問題が解決する。このゴミとは家庭排出のみならず産業廃棄物、ひいては放射能によって汚染された物質などの危険物質の処理すら解決するのだ。

しかし、人類が核分裂を手に入れた時と同じ不安を私たちは禁じ得ない。その巨大なエネルギーは、当然軍事的な利用が可能なのである。それは人類史上類を見ない、破天荒な兵器の誕生を呼び込むに違いないからだ。また、新たに手に入れた神に迫る力は、現在の自然界が持つエネルギーの循環をも崩壊させてしまう可能性を持つ。もしすべての物質をエネルギーへと変化し、浪費させ続けたならば、その後に残る世界はどのようなものなのだろうか。人類は改めて、高い英知とモラルをもって未来を見据えなくてはならない時代を迎えたのかもしれない。

■質量の減少率

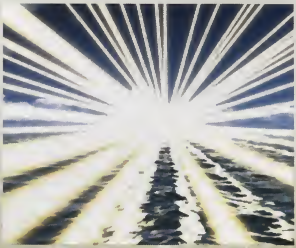
科学反応（石油燃焼）	0.00000001%
核分裂反応（ウラン235）	0.09%
金原子核線反応（水素）	0.998%

■エネルギー変換効率

上記でも触れたように、反応時に消失する質量がエネルギーとなる。左記は主な反応の質量減少率である。金原子核線反応の異常なまでの減少率がうかがえるだろう。

■ 爆発シミュレート

これは金原子核線論理の発表後、シドニー大学原子物理学部において、この論理を爆弾にシミュレートした画像である。その破壊力は特異であり、今までの理論を超越した現象を発生させた。



イマジナリーナンバー Imaginiary Numbers

進化の禁忌に踏み込む非人道的な研究

by Syeng Hang Rong（大漢日報）



ラーブヌイ国営研究所と我が国上層との接点

世界有数の研究施設を保有するラーブヌイ共和国は、ザーフトラ共和国建国後、CISを脱退し独自の政策を取ってきた。外交上は我が大漢中との関係も改善し、現在では友好関係を保っている。党の上層部はかねてより頻繁にラーブヌイ共和国との接触を試みているが、これはラーブヌイの保有する技術力に狙いがあるようだ。ラーブヌイは科学関連のみならず、経済や農産業にいたるまで幅広い研究施設を保有する。

その技術は世界的にも注目されており、我が国の発展に必要との判断からだろう。特に現大漢中在駐大使であるバール・ゴルボフスキィ氏は親漢派として知られ、かねてより党上層部などと接触を図っていた。また、バール大使はラーブヌイ国営研究機関の副長官を務めた人物であり、さまざまな技術を我が国へ提供しているようだ。 その中の一つが、優れた特殊能力を持つリアルナンバー、並びにイマジナリーナンバーと呼ばれる人材の派遣である。



バール・ゴルボフスキィ

ラーブヌイ大漢中駐在大使

ラーブヌイ共和国では国営研究機関の副長官を務める。かねてより新漢派であり、介国家主席とも交友を持つ人物である。

■3通の極秘文書

ラーブヌイ共和国での取材を終えた後、とある筋より入手したのがこの三通の報告書である。すべてイマジナリーナンバー開発に関して書かれている文面は、信憑性が高いものの真偽の程は定かではない。

Top SECRET1

イマジナリーナンバー（以下IN）の製造：INとは、合成した人造遺伝子を人間の細胞内の遺伝子と交換し、代理母の子宮に着床させることによって製造された人類のことを示す。我が国営研究所ではINよりも以前に、リアルナンバー（以下RN）と呼ばれる人工授精による人類の製造に着手していたが、当然のことながらRNはその能力にばらつきがある。その点、INは全ての能力を完全に管理でき、また、能力別にいくつかの異なるタイプを製造することも可能、というRNにはない利点もある。

Top SECRET2

INの教育：INは遺伝子レベルで高い能力が保証されているが、遺伝子がその能力を形成するのは全体の約50％であり、約20％は成長過程プロセスが重要となる。INは生後10年前後代理母の元で育てられる。行われる教育は一般家庭と同等のものだが、能力が確定される3歳前後には国営研究所から与えられた教育プログラムを実行させて能力向上を図る。能力が開花したINは、適切な時期に代理家庭から研究所、専門分野の教育機関へと移され、そこで通常の人間を超えた能力を見つけるための教育を受けることになる。

Top SECRET3

IN計画の実状：前二項の通り、IN計画はわが国の将来を担う人類を製造すべく約40年に渡って研究が続けられている。しかし、論理的には完全な個体であるINも、その周辺を取り巻く環境の影響を受け、不測の事態が生じることもある。実際、製造され成長したINの約44％がガンや遺伝子病とおぼしき症状により死亡した。精神に障害をきたす個体も少なくなく、現在ではその大半が理想とかけ離れた状態となっている。その結果、2101年以降はINの製造が年1～2体のみに制限され、不良個体は処分されることとなった。

最強の生物兵器と特殊傭兵部隊

リアルナンバーとイマジナリーナンバーは、ラーブヌイ共和国の研究機関で育成された人材である。彼らはさまざまな環境下で与えられた任務を遂行できるように教育され、各国へ派遣されていく。その特異な能力から最強の生物兵器とまで呼ばれている。もともとはリアルナンバーと呼ばれる人材が研究され、その後イマジナリーナンバーへと移行したが、国際世論から非人道的という批判を受け、現時点ではすでに凍結された研究である。しかし、我が国では彼らが現時点でも活動しているとの情報もある。

我々が入手したラーブヌイの極秘文書には、その研究行程が明確に記載されている。また、実際にかつて我が国の中枢まで彼らは登用されており、現在も在籍している可能性は否定できないのが現実である。特にバール大使旗下に存在するといわれる特殊傭兵部隊には、数多くのイマジナリーナンバーが採用されているとの証言を得ている。



リアルナンバー

人工受精により管理製造された優良種を規定の環境で育成した人種



イマジナリーナンバー

遺伝子工学を基に、最良種の細胞を培養し人工受胎させ製造した生物

■イマジナリーナンバーとリアルナンバー

現在までの調査で判明しているイマジナリーナンバーとリアルナンバーの違いは上記のとおり。しかも、現人民軍の関係者にも存在するのは間違いないようである。資料によれば、情報部のリュウなる人物がリアルナンバーと酷似する。また、イマジナリーナンバーのリストにはルカーヴなる名があり、かつてラーブヌイ大使館に出入りしていた人物に同名の者が居ることが判明している。

積極的防衛構想 Positive Defense Plan

人的海外支援の失敗と軍備の増強

by Motoyuki Shibata（JBNN）



海外援助派遣部隊の全滅と無政策な外交

日本国はかつて戦争の放棄により軍隊を持たず、外交政策を展開してきた。現時点においてもその理念は変わっておらず、外交における武力行使を行うことは基本的に不可能である。

しかし、内外からの圧力によって人的な海外支援を求められ、現在では紛争地帯に日防軍を派遣する機会が増えてきている。だが、あくまでも自己の防衛時にしか武力は行使されず、専守防衛の立場をとってきた。しかも、政府の外交政策は固有の意志を持たず、かねてよりOCU中央議会の決定を尊重するだけのものであった。

この現状が悲劇を呼ぶ。アロルデシュのクーデター事件後OCU内では内紛が頻発し、中央議会は加盟各国へ軍の派遣を要請。日防軍にも要請があり、政府は「OCU内は国内と同じである」という解釈から派遣を決定。だが他の法律、条例の改正は行わず、日防軍の行動を明記せぬまま戦場へと送り出したのである。その結果、派遣部隊の一部が敵に致命的な先制攻撃を受け壊滅する事件が発生したのであった。



佐々木　正雄

日防統合軍参謀長／陸軍東部方面隊司令

2060年	東京都生まれ。
2080年	陸軍士官学校を卒業、陸軍東部方面隊に配属
2087年	交換留学士官としてOCU陸軍へ出向。
2090年	第2次ハフマン紛争でOCU士官として戦闘に参加。
2091年	日本に帰還、陸軍第6師団　第3大隊長に就任。
2094年	陸軍大佐に昇進。陸軍第1師団長に就任。
2109年	陸軍准将、参謀を経て陸軍参謀長に就任。

積極的防衛構想概要

1.日本国民の生命、ならび財産が侵された時、もしくはその可能性がある場合、防衛行動に出る
2.防衛行動の際、その行動は他の一切の行動より優先される。これは官民問わず適用する
3.防衛行動は生命の危険が生じるとき、また生じる可能性がある状況、要因が存在すると思われるとき、その要因を排除するため銃器の使用を許可する
4.防衛行動に必要とする機器に関して、必要と考えられる範囲なら、その配備を許可する
5.防衛行動に従事する者は特権を有し防衛行動法に基づき行動する。そのため、他のいかなる現行の法律にも束縛されない

佐々木参謀長の発言と日防軍の再編

日防軍海外派遣部隊の全滅は日本国内で大々的に報道されることはなかった。しかも政府はこの事件を利用し、専守防衛を貫いたことによりOCU内での発言権を確保する外交に出た。それは日防軍内に強い反発を生むことになる。

従来、積極的防衛構想を提唱してきた佐々木参謀長が、急激な求心力を持ち出すのもこのころからである。この佐々木の過激な発想は、若手を中心に軍部に広く支持されていく。また政府内の軍属も動かし抜本的な日防軍の再編へ動き出した。それは今年度の防衛庁予算にも明らかである。

これらの動きが生み出す結果を現時点では判断できないが、一部に軍事力が集中するのを抑制できない状況は、民主主義の根幹を揺るがすものと危惧する。国民主権の体制を放棄するつもりなど我々にはない。優れた思想であれ民意に反映されず行使されることは阻止せねばならないし、その努力を怠ってはならないと考える。

2112年度装備調達品

防衛省「最新装備調達報告」より本年度予算の範囲において、新しく調達された装備品を報告する。なお予定されていた宇宙機の配備は来年度に繰り越しされる。

ヴァンツァー：111式春陽

出力は現在主力機に比べて80%向上。開発中のオプションを使えば海中や宇宙での活動も可能な、わが軍初の本格的汎用機である。

潜水艦：SUイ401潜

春陽の搭載を前提とした強襲揚陸用潜。春陽4機を一気に揚陸可能な射出装置を備える。44計画により、同型艦も随時配備予定。

歩兵携行兵器：ヴァンツァーミサイル

内蔵した小型ミサイルでヴァンツァーの上空から弱点である上後部を狙いうちできるのが特徴だ。バックアタック兵器。

歩兵随行兵器：110式対ヴァンツァー銃

37ミリ口径で専用の高初速AP弾を使用する。ヴァンツァーの関節部もしくは後部ならば貫通可能。



沖縄海洋都市計画 OKINAWA Marine City Plan

新たな発展を目指して

by 岩崎秀雄（JBNN）

新国土改造計画と特別行政区沖縄海洋都市

21世紀末より全世界に広がった不景気の波は、巨大な経済共同体にも深刻な状況をもたらした。それは、この不景気を打破するには戦争による特需を見込むしかないと発言する指導者が出現するほど、市場経済は停滞したのだ。

当然、各政府機関は経済の振興策としてさまざまな政策を企画、実行している。日本政府は慣例通り内需拡大を推し進め、巨大な設備投資を行う国家プロジェクトを展開した。このプロジェクトは新国土改造計画と総称され、都市計画の抜本的な変革、並びに改造など、公共施設の拡充を狙ったものが多い。その中でも特出するのが2084年に発表された「沖縄海洋都市計画」である。

このプランは沖縄糸満市の西海上4キロの近海に人工島を建設し、この島を特別行政区として貿易中継地点、経済情報の集中する地点として運営していくものである。政府は2085年に総額3兆2千億円にも及ぶ予算を割り振り、本格的に着工。そして、6年の歳月を経て全長5.9キロ、幅5.5キロの巨大な人工島が完成する。

確かに内需は拡大され、経済の後退を阻止する事はできた。しかし、最新の建造物は絶えず莫大な維持コストを必要とする。実際に沖縄海洋都市では今なお改築が続き、未完のままである。

ただ、海洋都市の維持に関わる組織が不透明であった。基本的には海洋都市事業団が管理しているが、近年の工事などを見ると日防軍が実質的に管理していた。本年に入っても日防軍指導による改装が続き、住民に不安を与えている。

■沖縄海洋都市

この計画の背景には日防軍創立に伴う大規模基地建設の推進があり、世界的な軍事的緊張に拍車をかけるものであると反対する動向もあった。地元住民のなかにも軍事基地建設に敏感に反応し、反対感情を強める者が存在するなか、計画は推し進められたのである。



■海洋都市の構造

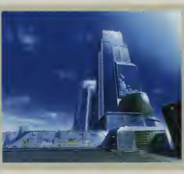
海洋都市は、プライマリィブロック（以下P.B）と呼ばれる全長800mの6角形の構造物を13個集合させて建造されています。各P.Bは、日本の9つの湾上で作られ、内部に装備された動力ユニットにより自力航行して沖縄まで輸送、連結工事が行われました。その後、中層の港や最上層の構造物の建設を行い、現在の海洋都市の姿となりました。

～プライマリィブロック～

海洋都市を構成するプライマリィブロック（以下P.B）は、九州、中国、東海各地方の9つの湾内で建造されました。これは直接沖縄で13個のP.Bを建造するよりも数カ所で一度に建造する方が効率が良いことが理由でした。しかし、全長800mという、タンカーよりも巨大なP.Bは、各湾での建造に5年、自力航行による沖縄までの輸送に半年を要し、都市が機能するための設備建造に3年かかりました。現在、P.Bの地下に装備された航行用の4つの動力ユニットは、都市の発電所として有効に利用されています。 ――沖縄海洋都市事業団







■都市概要

海洋都市の全面積の内3分の2が民間で使用されています。民間施設は、各ブロックごとに、官庁、企業、商業、住宅区に分かれています。住宅区には学校や病院、消防署なども設置され、本土と同様の生活を送ることができます。また商業区にはオフィスビルはもちろん、ショッピングモールやスタジアム、遊園地も完備されています。民間エリアの港湾施設は日本でも最大級で、世界の交易産業が集結した国際港となっています。 ――沖縄海洋都市事業団

Mass Media
世界の事変を伝え政府を監視する

報道機関は絶えず政府を監視して機能してきた。利権と権力の前に屈する報道も存在するが、ジャーナリストの根底には権力との対決を、真実の究明を目指す魂がある。ここではそんな報道機関の中で、最新のメディアであるフォーラムを有する各国のマスコミ各社を追ってみた。インターネットの普及とともに報道の中心に躍り出たフォーラムによる報道形態は、2112年現在、最高速のメディアとして民衆に支持されている。

JBNN
Japan Broadcasting Network News

OCU日本を中心に活動する報道機関がJBNNである。経済的な超巨大国家といえる日本において、JBNNは経済動向と日本の複雑な国際情勢を確実に提示している。日本がもともとUSNと同盟国であったこともあり、OCUに加盟しているものの、世界的な視野においた中立的な報道展開がモットー。



反政府運動 Movement Overthrow The Government

大国の論理の下で戦う人々

by Thomas G Jefferson (DCN)

反政府運動と背後で展開する代理戦争

アロルデシュでのクーデター事件以後、OCU国内だけではなく、世界規模で反政府運動やテロ活動が活発化してきている。これは巨大な共同体の成立後、大国の理念で運営されてきた世界に歪みが生じてきている現れである。

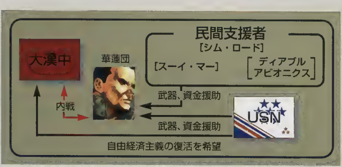
その歪みの原因は、共同体内の構成国に大きな経済格差が生まれていることであった。経済的な不公平や圧迫は新たにナショナリズムを生み、その潮流にエスニシティ的な動きが癒合し、混迷を深めていたのである。各地では宗教、イデオロギー、民族とさまざまな主義のもと、軍事蜂起する動きが見られた。しかもWAPが浸透していた事が、その動きに拍車をかける。WAPは確実な攻撃力と機動力を、反政府勢力が容易く手に入れることを可能としたのである。

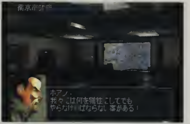
しかし、反政府運動も実際は混迷を深めていた。なぜなら、巨大な共同体は、敵国や経済的な利権争いの駆け引きの材料として、反政府運動を巧みに利用していたからである。特にフィリピンや大漢中においてはその動きが顕著であるといえた。しかし、これはすべて状況からの判断でしかなく、それを裏付けるものは存在していない。アロルデシュでのクーデター事件も同様、その真相が白日の下にさらされることは難しいだろう。だが、このようなマスメディアの提示が、サカタ事件を究明したきっかけを作ったように、大きな潮流を生み出す源になると信じたい。



■反フィリピン政府

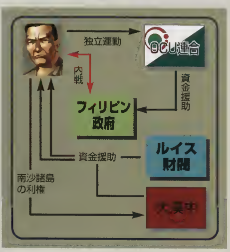
反フィリピン政府運動には、その陰に大漢中の姿が見え隠れする。しかも、USN海軍も反政府側の動きに同調する構えを見せている。





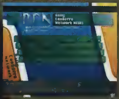
■華蓮団

華蓮団は現江政権に対抗するために組織された勢力である。この背景には華僑を中心とした大漢中系の経済連合が見え隠れするが、そのさらなる後ろにUSNが存在するのは間違いないだろう。



DCN
Dally Canberre Network News

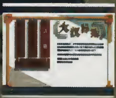
OCUの成立から中央政府を見守るDCNは世界1位の支持率を誇り、OCUの理念を正確に伝える報道機関であるといえよう　その情報網はOCUに深く浸透しており、絶えず新鮮なニュースをユーザーに提供している　しかし　あまりにも政府寄りな姿勢に、批判を受けているのも事実である。



大漢日報

20世紀よりその流れを汲む大漢日報は、大漢中政府の公報的な報道機関であった。しかし、開放政策のなか経済の自由化が進むと、その誌面もジャーナリスティックな構成が増え、報道機関としての役割を明確に果たし始めるようになっていった。

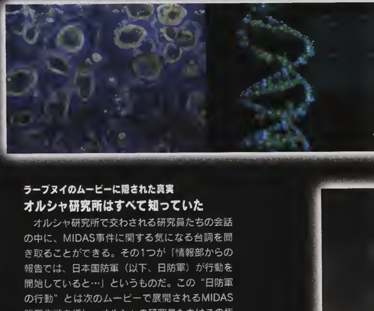
介政権発足後は旧体制に回帰し、政府の機関紙的要素が強くなってきている。



ストーリー解析
MIDAS事件

THE MIDAS INCIDENT
2つのシナリオが事件の全貌を明らかにする

ラーブヌイでのオープニングムービー
ゲームの冒頭に流れるムービーは、ラーブヌイ共和国によって設立されたオルシャ国営研究所の内部。MIDASに継ぐキーワード、イマジナリーナンバーに関する伏線が、このシーンに盛り込まれている。

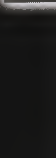


エマ編
USN軍と共に事件の解決を目指す。全世界にMIDASの危険性を訴え、最終的に国家間の陰謀を暴露する。本作品においてエマ編は本筋となるストーリーといえる。



ラーブヌイのムービーに隠された真実
オルシャ研究所はすべて知っていた

　オルシャ研究所で交わされる研究員たちの会話の中に、MIDAS事件に関する気になる台詞を聞き取ることができる。その1つが「情報部からの報告では、日本国防軍（以下、日防軍）が行動を開始していると…」というものだ。この“日防軍の行動”とは次のムービーで展開されるMIDAS強奪作戦を指し、オルシャの研究員たちはこの極秘行動を事前にキャッチしていた。また、オルシャの研究員たちはこうも言っている。
「計画の進行に支障が？」
「これ以上予想外の事が起こらなければ、計画は修正可能です」
「そうだな、彼らの力を信じることにしよう。我々の子供たちのな」
　これはオルシャの研究員、ひいてはラーブヌイ共和国がMIDASを使った極秘計画を進行していることを意味する。そしてこの計画を遂行する実行部隊が“我々の子供”…つまりイマジナリーナンバーであることは間違いない。いったいラーブヌイ共和国は、どんな陰謀を企んでいるのだろうか。

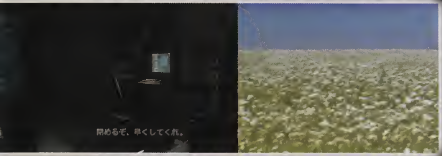


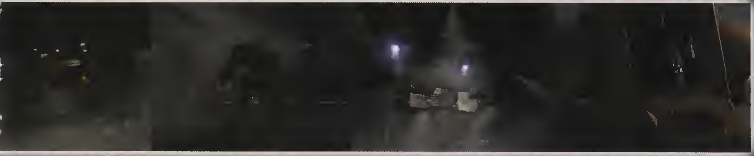
の足跡



エマ編とアリサ編は、登場するキャラクターやエンディング、事件を解決するために属する組織など、さまざまな点においてストーリー展開が違っている。しかし、「MIDAS事件を解決する」という主目的は双方とも同じである。ここでは2つのストーリーを紹介しながら、MIDAS事件の全貌について分析する。

アリサ編
大漢中軍のリュウと共に、MIDASに関わる陰謀を阻止する。一応のハッピーエンドを迎えるが、MIDAS事件の真相が公表されないまま終わってしまう。





アラスカでのオープニングムービー
USN特殊科学研究所で制作されたMIDASが日防軍によって強奪されるシーン。この事件が発端となり、和輝やアリサは国家レベルの陰謀に巻き込まれる。そして新たな事件は数ヶ月後の日本において発生する。

アラスカのムービーに隠された真実
日防軍の計画したMIDAS強奪作戦

この作戦に用いられた兵器はPVA五式改攻撃機8機、PTA九式改二型強襲輸送機3機。また、海上には輸送機等を格納・移送できる潜水艦まで導入した。すべての航空機には国籍を隠すための偽装が施されており、型番の「改」はこの作戦用に特殊な改装を行ったことを示している。ただこのカモフラージュはラーブヌイが流した情報によってほとんど意味を成さず、日本国内に各国のエージェントを招き入れることになる。ちなみに、MIDASを基地外へ運び出したヴァンツァーは、現地に送り込まれた工作員により無人設定が施されていた。

コラム　2つのシナリオに込められた意図

国家間の争いや民族闘争、内乱など、人類の歴史から「争い」という言葉が途絶えたことはない。そしてこれらの争いは大抵の場合、第3者によって善悪が判断される。なぜなら、争っている当人たちはお互いに自らの行為が“正しいもの”と信じているからだ。架空の世界を舞台に、国家間の争いや内乱を描いた『フロントミッション』シリーズにおいて、善悪の判断はプレイヤー自身に委ねられていると言っても過言ではない。ただ今までのシリーズの場合、主人公たちが属している組織（国家）の視点で流れるシナリオと、その結末からしか判断できなかった。しかし、本作品に導入されたダブルフィーチャーシナリオによって“争っている双方の立場で”善悪の判断ができるようになった。例えば大漢中で勃発している内乱を、エマ編では反政府ゲリラの立場で、アリサ編では政府軍の立場で垣間見ることができる。もし片方のシナリオしかクリアしていない人がいるならば、ぜひとも双方のシナリオをクリアして欲しい。新たな判断材料を得ると共に、この事件の意外な真実を知ることとなるだろう。またそれによって、双方のシナリオに散りばめられた各国の思惑が見えてくるはずだ。

日防軍の策謀が事故に

OCU日本エリア

本作のストーリーはOCU日本を皮切りに、オセアニア、東南アジア、大漢中、OCU日本、USNといった順に流れていく。もちろんストーリーによって訪れる場所は異なってくるが、まずは最初の舞台となる日本での展開について解説していこう。日防軍が行ったMIDAS強奪作戦は、横須賀基地の爆発事故により意外な方向へと歩み始める。

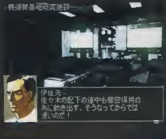
和輝たちの足跡

ここで掲載しているフローチャートは、大まかな和輝たちの行動を表したもの。横須賀基地以降、訪れる場所の違いが確認できる。分岐のフラグは沖縄海洋都市にあり、以降エマ編かアリサ編に決定される。分岐により日本脱出後の行き先がまったく違うのが特徴と言える。



爆発事故がもたらした後々の影響とは…

日本で起きた重要な事件といえば、横須賀基地での爆発事故が上げられる。この事故はMIDAS強奪作戦を計画した佐々木にとってかなりの痛手となった。それはMIDASの研究に着手していた科学者たちの死亡である。各国のエージェントの妨害やOCU軍の介入は時間の問題であると考えていた佐々木は、すでにこれらの対応策も準備していた。しかし、佐々木の計画を実現するための人材を、事故によって失ってしまったのだ。これは後々、ルカーヴの策謀にはまる結果を招く（P148を参照）。ちなみにタール基地へ移送された科学者たちは研究のサポートを行っていたチームで、MIDASの詳しい構造は理解していない。ただアリサだけはそのチームにいながらMIDASの構造をほとんど理解してしまったが…。



◀この爆発事件後、佐々木は作戦の障害となる武村の拉致を画策。が、佐々木の行動を事前に察知していた武村はその身を隠し、後のクーデターに対応する。

劇中ではまったく触れられていないが、沖縄海洋都市を出発した和輝たちのヘリは熊本の霧島研究所で一度給油している。ちなみにこの研究所は、クーデター勃発後の日本（アリサ編）において、黒井が新兵器の強奪に訪れた場所でもある。



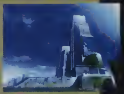
小池英一
霧島重工の技術者。沖縄海洋都市にある試験場にて新型ヴァンツァー春陽の調整を行っている。和輝の上司。

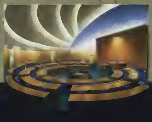


神宮寺静（技術兵）
エマ編では単なる日防軍の技術兵であるが、アリサ編ではメールを亮五に送ってくる神宮寺静として登場。

ゲームのスタート地点

今年で20周年を迎える沖縄海洋都市は世界の貿易拠点として建造された。人口は約17万6千人。うち日防軍関係者が約6万5千人も存在している。OCU日本とは異なる法律が施行されている。





◀▲さまざまな特権が与えられている沖縄海洋都市。上は海洋都市の政治を司る市庁舎　左は市議会議場になる。

よって判明する



●日防軍横須賀基地



武村伊佐夫
正義感の強い日防軍の軍人。終盤のクーデター時において活躍するが、序盤ではアリサ編にしか登場しない。



武村アリサ
OCU軍科学学生研究員として日防軍横須賀基地へ。アリサ編では伊佐夫の手助けのためMIDASを調査する。



佐々木正雄
MIDAS強奪作戦の立案者。専守防衛を唱える日本の軍隊に不満を持っており、積極的な防衛思想を唱える。



黒井優二
日防軍状況対策課の隊長。佐々木の部下としてMIDAS強奪作戦を指揮した。軍のためなら何でもする男である。

●霧島重工のハンガー／足柄サービスエリア



神宮寺静（整備員）
霧島重工の横須賀支社に勤務する整備員。霧島重工のハンガーで出会える彼が、エマ編においての静である。



新条美穂
和輝たちを監視するために黒井が送り込んだスパイ。日防軍に追われている警察官を装い和輝たちに近づく。

MIDASを巡り、各国のエージェントが潜入

ラーブヌイ共和国は各国に潜伏させているイマジナリーナンバーを使い、MIDASの所在を各国へリークした。もちろんその情報はイマジナリーナンバーによって操作され、情報源であるラーブヌイの存在を知られることはない。そして日本には、各国のエージェントたちが集まっていった…。

USN軍はその後の調査の結果、日防軍がMIDASを所有しているという確たる証拠をつかんではいた。にもかかわらず日本に対し直接的な軍事行動を取らなかったのは、USNの国民、ひいては全世界の民衆にMIDASの存在を知られないようにするためである。故にUSN軍の作戦行動は常に極秘であったといえる。

大漢中



ラーブヌイは危険分子と見なしているバールに対し、MIDAS強奪の情報をリークしなかった。が、バールは独自に潜伏させているイマジナリーナンバーによってこの情報を入手。リュウを日本へ送る。

FAI



MIDASの開発者エマは自らこの作戦に志願。和輝との接触を図る。



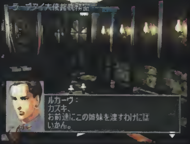
ルカーヴの指揮の元、FAIのデニスもこの作戦に駆り出された。

ラーブヌイにとっての日本の行動とは…

ラーブヌイ共和国が情報をリークした理由は、オープニングムービーからある程度推察できる。それは日防軍の軍事行動に対し「計画は修正可能」と言っている研究員の言葉がヒントとなる。

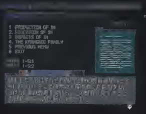
MIDASはUSNが開発した兵器である。ラーブヌイにとっては他国の兵器であり、MIDASを利用するとすればまず国外へ持ち出さなくてはならない。仮にMIDASの強奪をラーブヌイが考えていたとしたら、今回の強奪劇はただ「国が変わった」だけといえる。もちろんこれは「ラーブヌイが日防軍と同じ行動を取る」という仮定を前提とした推測で、イマジナリーナンバーを使い、他国の上層部を押さえるだけでもMIDASを手中に収めたことになるだろう。もともとイマジナリーナンバーは、他国の国家元首、あるいは軍事面における最高責任者の地位を獲得できるように創られた人間で、ラーブヌイはこの忠実なしもべによって世界の主導権を握ろうと画策していた。

ただあくまでも日防軍の行動はラーブヌイにとって予想外の出来事であり、日防軍の計画を遅らせる、もしくは阻止する必要があった。ゆえにMIDASの所在地を各国に流し、計画の修正を図ったのだ。



▲ルカーヴはバールのイマジナリーナンバーであって、ラーブヌイのしもべではない。

▼各国にイマジナリーナンバーを送り込んでいるラーブヌイの目的とは…。



横須賀基地での爆発事故が
若者たちを戦いの舞台へと導いていく

Story

10月30日－1st Day－

横須賀高専に通いながら霧島重工に勤務する和輝は、沖縄海洋都市に設置された霧島重工の試験場にいた。そこでは次期戦略ヴァンツァー・春陽のテストを行っており、調整も最終段階を迎えようとしていた。実戦形式の模擬戦を終え一段落していると、和輝を追うようにして到着した亮五と出会う。亮五は沖縄海洋都市の工事を取り仕切る日防軍へ作業用ヴァンツァーの納品に来ており、和輝は亮五の仕事を手伝うことを決める。

10月31日－2nd Day－

横須賀基地に到着した和輝たちは、予期せぬ爆発事故と遭遇。その実体を究明しようとするが、日防軍の兵士によって基地外へと放り出されてしまう。しかしその後、霧島重工のオフィスにおいて、妹のアリサが横須賀基地に勤務しているという事実を知る。和輝たちはアリサの身を案じ再び横須賀基地へ足を運ぶが、結局何の情報も得られぬまま門前払いを食らってしまう。そんな折、和輝たちはUSNの科学者と名乗る謎の女性と出会う。

Ema-Flow Chart

1st Day 10月30日　亮五と共に住居区の工場現場へ

- 15:35　沖縄基地試験場で新型ヴァンツァーの能力テスト
- 15:55　日防軍の技術兵来訪
- 18:28　居住区の工事現場へ到着
- 20:40　日防軍研究施設へ帰還、横須賀基地出発の準備を始める

2nd Day 10月31日　横須賀基地で発生した謎の爆発事故

- 01:03　横須賀基地へ向け出発
- 05:30　横須賀基地に到着
- 05:47　MIDASのコピーが暴走。爆発する
- **06:03　MISSION 1 #横須賀基地（WAP倉庫近く）**
- 10:43　霧島重工へ出社。アリサからのメールを読む
- 22:15　横須賀基地へ再び訪問。門前払いを食らう
- 23:08　横須賀市のプールバーでエマと出会う





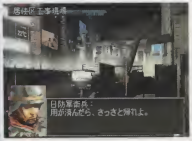




亮五が納品したヴァンツァーは沖縄決戦の伏線

作業用ヴァンツァーを日防軍へ納品するため、沖縄海洋都市に赴いた亮五。和輝は亮五の付き添いで、日防軍の居住区へと足を運ぶ。この居住区では大規模な修復工事が進められており、その工事を日防軍が取り仕切っていた。

この何気ないイベントは、後のストーリーで展開される沖縄決戦に対する伏線といえる。日防軍が行っていた工事はMIDASをこの区画に収めるための準備で、佐々木の指示により極秘裏に進められていた。MIDASのコピーがタール基地へ移送された後、オリジナルが運び込まれている。



◀素っ気ない兵士の対応には裏があった。

他国に比べ数段劣る日本における諜報機関の実態

各国に優秀な諜報員がいるように、OCU日本にも公安調査庁と呼ばれる諜報機関がある。この公安調査庁は、国内における政治家や軍人、企業などの不正や汚職を摘発するばかりではなく、国外にも調査の網を広げている。しかし、その能力は日防陸軍の情報部よりも劣るのが現状だ。

横須賀基地の爆発事故においても、各国がMIDASの可能性を示唆しているのにもかかわらず、公安調査庁だけはその情報をキャッチしていない。ただ日防軍の発表した情報に対し、何かしらの疑惑は感じているようだ。しかし、この情報収集能力の低さが、後にクーデター発生を食い止められなかった原因の一つとなった感は否めない。

OCU JAPAN

Ema　：MISSION1
Alisa：MISSION1　OCU日本編－the first part－

霧島重工のテストパイロットとして勤務する和輝は、横須賀基地での爆発事故を目撃。この事件がきっかけとなり、和輝たちは日本からの脱出を余儀なくされる。エマ編とアリサ編は、沖縄海洋都市において亮五の問い掛けに「どう答えるか」によってストーリーが分岐。つまりアリサから届くメールを「いつ読むか」によって和輝の行動が変わってくる。

Story

10月30日－1st　Day－

沖縄海洋都市でヴァンツァーの調整を行っていた和輝は、親友である亮五と出会う。その亮五に、ヴァンツァーの納品に付き合って欲しいと頼まれた和輝は、その誘いを断わりショッピングモールへと赴く。きっかけは宿舎で読んだアリサからのメールで、和輝は妹への土産物を買いに行ったのである。そして翌朝、最終調整を終えた霧島重工のヴァンツァー・春陽を納品するため、神奈川県横須賀基地へと出発する。

10月31日－2nd　Day－

横須賀基地において春陽の納品を行っている最中、謎の爆発事故に遭遇する。横須賀基地内にいるアリサを心配するあまり、日防軍のヴァンツァーを破壊してしまった和輝は、援軍に駆けつけた日防軍の特殊部隊によって逮捕されてしまう。逮捕された和輝たちは保安室で長時間に渡り尋問を受けたが、亮五の機転により和輝の父、伊佐夫の力を借りることになる。そして16時間後。誤解の解けた和輝たちは、日防軍の保安室を後にする。

霧島重工の春陽は、日防軍への納品が決まった

沖縄試験場において次期戦略ヴァンツァー・春陽の調整を行っている和輝と小池。春陽の優秀さを日防軍に認めてもらおうと、小池は徹夜までして最終調整を終わらせた。しかし、会社の上層部ではその小池の行動を裏切るかのごとく、汚い裏取り引きが行われていた…。

それは11月21日に発売された雑誌「真相の噂」によって明らかとなる。そこには、田畑国防大臣と霧島重工との間に、現金の授受があったとされる贈賄疑惑が掲載されていた。記事の内容は日防軍に導入される次期主力ヴァンツァーに絡んだもので、霧島重工から田畑国防大臣に対し、導入に便宜を図った謝礼として現金の授与があったとしている。結局この事件は証拠不充分として不起訴となってしまうが、小池からのメールを読む限りこの報道は正しいものと断言せざるをえない。メールには、霧島重工が爆発事件に対し黙認を決めたことと、小池に対し圧力が掛かったことなどが書き記されていた。

OCU軍から要求されるMIDAS引渡しに対して佐々木は…

和輝たちが釈放された時間とほぼ同じ頃、佐々木のもとにOCU国防省からの知らせが届く。内容はMIDASと生き残った科学者たちの引き渡しを要求するもので、佐々木にとっては予想された出来事であった。ただ横須賀基地で起きたMIDASの爆発は予想外の事故であり、佐々木にとって運が良かったのはすでにMIDASのコピーを2基生産していたことである。もしOCU国防省が事故をきっかけとしてではなく独自の調査によりMIDASの引き渡しを要求してきた場合、彼にはコピーとなるMIDASを送りつけ、引き続きMIDASの量産を続けようという考えがあったのだ。また、引き渡したコピーは、現地に到着後、工作員によって破壊してしまえばMIDASの研究を断念せざるを得ない。佐々木はあらゆる状況に対応できるよう、綿密な計画を立てていたのである。

Alisa-Flow Chart

1st Day 10月30日　アリサからのメールが運命を変える

沖縄基地試験場で新型ヴァンツァーの能力テスト	15:35
日防軍の技術兵来訪	15:55
アリサからのメールを読みショッピングモールへ出掛ける	17:46
日防軍研究施設へ帰還、横須賀基地出発の準備を始める	20:40






2nd Day 10月31日　日防軍によって拘束される和輝

横須賀基地へ向け出発	01:02
横須賀基地に到着	05:30
MIDASのコピーが暴走。爆発する	05:47
MISSION 1＃横須賀基地（WAP倉庫前）	**06:03**
日防軍に逮捕され、保安室で尋問を受ける	07:01
伊佐夫の元に和輝たちの身元を確認してほしいとの連絡が届く	23:10
約16時間後に釈放される	23:59

MIDASの存在を知った和輝たちは真相を確かめるべく日本を脱出する

Story

11月1日ー3rd　Dayー

作業用ヴァンツァーを搬入する運転手を装い、横須賀基地内へ潜り込んだ和輝たちは、トラックに積んであった戦闘用ヴァンツァーを起動。事故現場となる地下の研究施設へと向かう。深夜ということもあってか何事もなく研究施設へとたどりついた和輝たちは、そこで通常の爆発事故とは思えない凄まじい傷跡を目撃。ただならぬ陰謀の気配を感じ取る。そこへ基地内の侵入者に気が付いた日防軍のヴァンツァー部隊が到着。からくも戦闘に勝利を収め基地外へ脱出する。

霧島重工のハンガーで休憩を取った和輝たちは、エマと共に日本脱出を決意。しかし日防軍の陰謀によって全国に指名手配され、警察と日防軍からの追撃を受ける。また、研究に関わったアリサを捕獲しようと大漢中軍も動き出し、和輝たちの脱出は困難を余儀なくされる。しかしエマの機転やデニスの協力により、無事日本を脱出する。

Ema-Flow Chart

3rd Day 11月1日　国外への脱出を決意した戦い

0:14	エマと共に横須賀基地へ潜入
0:40	地下の研究施設で爆発現場を目撃
0:44	MISSION 2＃横須賀基地（研究施設爆発現場）
01:17	地下を通り搬入出用の別出口へ
01:26	MISSION 3＃横須賀基地（地下通路）
01:36	貨物用のリフトを使い地上へ
01:45	MISSION 4＃横須賀基地（正門前）
01:56	逃走用のトレーラーで霧島重工のハンガーへ
02:22	霧島重工のハンガーへ到着。出発の準備を整え仮眠
06:26	釜利谷ジャンクションで警察の検問に遭う
06:31	MISSION 5＃釜利谷ジャンクション
07:18	MISSION 6＃釜利谷ジャンクション（立体交差）
07:51	MISSION 7＃釜利谷ジャンクション（料金所）
08:09	料金所にあったトラックを奪い横浜市へ
08:42	横浜市の整備工場へ到着
11:49	セットアップを整え出発
12:01	日防軍に偽装した大漢中軍と接触
12:08	MISSION 8＃横浜市市街
12:21	戦闘終了後本牧埠頭へ
14:01	MISSION 9＃本牧D突堤
14:33	MISSION 10＃新扇島ブリッジ
14:54	輸送機で日本を脱出
16:46	USN第3艦隊と合流

4th Day 11月2日　作戦準備中

綿密に計画されていたFAIのMIDAS奪還作戦

和輝たちがエマと知り合ったのは10月31日の深夜。それから横須賀基地に潜入し、日本脱出までに要した時間は約15時間。ほぼ半日という短い時間でエマの作戦行動は完了している。

FAIほどの大規模な組織になると、1つの作戦を成功させるために幾つかのバックアッププランを用意しているのが通例である。これは想定できるあらゆる障害をあらかじめ考え、いかなる状況においても確実に作戦を成功させるための手段である。ただその準備が不完全だったため、MIDASの所在を確認できなかったという失態を招いてしまう。しかしあらかじめ本牧埠頭に輸送機を配備し、無事日本からの脱出を成功させる手際の良さは、さすが一流の諜報機関と言わざるをえない。エマと出会ったブールバーにおいて和輝が「なぜ敵国となるUSNの人間が！」といった感じに驚くシーンからも推察できるように、USNの人間が日本に入国することは非常に難しいのである。ちなみに企業の人間は制限付きで入国を許可されるが、それにしてもヴァンツァーや輸送機をバレることなく持ち込むことは神業に近いといえるだろう。

結果的にエマはMIDASの所在を確認できず、作戦を成し得ることはできなかった。しかし、失敗した場合のバックアッププランを確実に成功させている。それは日防軍に所属する武村伊佐夫大佐の身内を捕獲することである。エマが和輝とコンタクトを取り仲間にしたのは、日防軍との取り引き材料として使うためでもあったのだ。もちろん和輝の性格を考慮しての作戦で、エマの言葉を信じ付いて来ることはほぼシミュレーション通りの展開であったという。

JAPAN

Ema　：MISSION1～10
Alisa：MISSION1～8　OCU日本編－the first part－

ここでの大きな違いは和輝たちに接触する組織にある。エマ編ならFAI、アリサ編なら大漢中軍が、和輝たちをサポートする仲間となる。逆に仲間にならない組織は和輝たちの行動を妨害する敵となり、その後のストーリーで戦っていくことになる（エマ編なら大漢中軍が敵になる)。和輝たちは協力する組織の力を借り、日本からの脱出を試みる。

Story

11月1日－3rd　Day－
　釈放された和輝たちは、基地内に潜入する不審なトラックを目撃。再び基地内へと足を運ぶ。基地内では作業用ヴァンツァーに乗ったアリサと出会うが、USN軍に発見され戦闘に。その後彼らは、大漢中軍のリュウに助けられ基地を脱出する。
11月2日－4th　Day－
　リュウと共にMIDAS事件の全貌を暴くことを決意した和輝たちは、大漢中軍のスパイであるルカーヴの情報によって、MIDASが厚木基地より移送されたことを知る。和輝たちは厚木基地の飛行記録を入手するためIDDN基地へ向かい、リュウとアリサが基地内へと潜入する。そして無事飛行記録を入手した彼らは、途中日防軍に襲われていた婦人警官美穂を仲間に加え、一路沼津港へ。そこに待機している揚陸艦に乗り込もうとするが、黒井率いる特殊部隊に揚陸艦を撃破されてしまう。しかし、援軍に駆けつけた大漢中軍の潜水艦で無事日本脱出に成功する。

日本へ入国したエマは武村伊佐夫と連絡を取り合っていた

　現在OCU日本とUSNは敵対国の関係にあり、たとえ一般人といえども簡単に入国することはできない。そんな状況の中、日本にMIDASがあることを知ったエマは、任務の重さとは裏腹に胸が躍った。それは幼い頃に生き別れとなった、実の妹アリサと出会うチャンスを得たからだ。学生時代、何度も足を運ぼうと思っていた日本…、しかし若くして科学者としての地位を獲得してしまったエマにとって、敵対国となる日本への入国をUSN軍が許すはずもなく、半ば諦めかけていた矢先の指令であった。
　日本へ入国したエマは、仲間の目を盗んでは武村伊佐夫にコンタクトを取り、日頃のアリサの生活について聞き込んだ。エマがアリサと直接会わなかったのは、MIDASという兵器を開発した自分をアリサが軽蔑するのではないかという懸念を拭い切れなかったからだ。また、FAIが作成したターゲットリストの中に武村伊佐夫とその家族の名前が記されていたのもエマの気持ちを押さえ込んだ要因と言える。エマにとって日本の調査は、切なくて辛い任務だったのである。

佐々木の陰謀を暴こうとアリサの力を借りた武村大佐の心境は…

　伊佐夫はMIDASを強奪した犯人が佐々木であると考えていた。もちろんこれは憶測であり、佐々木がMIDASを隠し持っているという確証をつかまなくてはならなかった。そこで白羽の矢が立ったのが、エマの妹アリサである。MIDASという未知の兵器に対するアリサの知識を必要とした伊佐夫は、事の経緯と任務の危険性をアリサに説き、少しでも嫌がるならば無理には推さぬつもりでいた。その際アリサが感情的にならないよう、エマのことは伏せてはいたが、アリサの性格上、快い返事をくれることを伊佐夫はある程度確信していたといえる。それだけに伊佐夫の心は痛み、アリサに何かあった場合は身をていして守ることを心に誓った。
　ちなみに伊佐夫の娘を佐々木が受け入れたのは、アリサの優れた頭脳を認めてのこと。また佐々木は、いざという時アリサを人質に取り伊佐夫の行動を抑制しようとも考えていた。

Alisa-Flow Chart

3rd Day 11月1日　アリサと出会い横須賀基地を脱出

ゲート付近でUSN製のヴァンツァーを積んだトラックを発見	0:14
作業用ヴァンツァーに乗ったアリサと出会う	0:34
MISSION 2＃横須賀基地（研究施設前）	**0:44**
日防軍に包囲されたところをリュウに助けられる	0:56
横須賀基地のハンガーに一旦避難。ヴァンツァーにホバーを取りつける	01:01
東岸倉庫前で日防軍のヴァンツァーと遭遇	01:47
MISSION 3＃横須賀基地（東岸倉庫前）	**01:49**
海を渡り三春町へ	02:00
三春町の倉庫で休憩	02:13
大漢中軍の潜水艦と合流するため火力発電所に	04:46
日防軍の特殊部隊と遭遇	05:21
MISSION 4＃火力発電所（変圧エリア）	**05:27**
MISSION 5＃火力発電所（タンクエリア）	**05:54**
火力発電所を脱出	06:22
大漢中軍の潜水艦と合流	06:54

4th Day 11月2日　リュウと共にMIDASの行方を追う

泰野市に上陸	02:46
IDDN基地に潜入	03:21
MISSION 6＃IDDN基地	**05:27**
IDDN基地を脱出	05:55
足柄サービスエリアで検問に会う。美穂と出会う	07:23
MISSION 7＃足柄サービスエリア	**07:33**
美穂と共に沼津港へ	07:56
MISSION 8＃沼津港	**14:08**
日本脱出	14:30
潜水艦と合流	15:06



Supplementary Explanation

補足解説1

日本国防軍の状態

Japan Defence Force

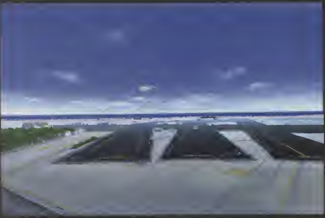
USNからMIDASを強奪した日本国防軍（日防軍）。では、この日防軍とは一体どんな組織なのであろうか。ここでは日防軍の組織体系を紹介しながら、軍事力に対しての考察をしていく。

専守防衛の思想から積極的防衛論へ

OCU中央政府は2026年のOCU設立に伴い、加盟国に対し軍備の強化と装備の統一を要請した。これは後々における軍の統合を想定したもので、USNやEC等に対抗する組織を築き上げるための下準備でもあった。また、OCU中央政府は加盟国に対し「同盟国が有事の際、軍事的な援助を行わなくてはならない」とする条項を掲げ、OCU域内の協力体制を確固たるものにしようとした。

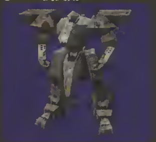
この要請に対し日本では、自衛隊による活動範囲が問題となる。あくまでも自衛隊は専守防衛を前提とした組織で、軍を他国へ派遣することはできない。しかしこれはOCU中央政府の掲げた条項に違反するものであり、自衛隊の存在意義に対し疑問符が持ちあがる。これにより日本国内では、自衛隊の活動範囲を広げようとする動きが活発化していく。

そして20年後。度重なる国会での議論、数度の内閣総辞職を経て、自衛隊は戦略的思想と装備をそれまでの「本土防衛型」から「広域防衛型」に変更。名称も「日本国防軍」と改められ、OCUの加盟条項に即した軍備を持つに至った。しかしこの中途半端なスタンスは、戦地に派遣した日防軍の全滅という悲劇を生む。そしてこれをきっかけとし、日防軍の軍事力は徐々に強化されていったのである。



▲日本国防軍所有のヘリポート。軍の設備は年々強化されている。

●109式炎陽



▲日防軍の主力ヴァンツァー。のちに霧島重工が開発した春陽にその座を譲る。

●キャセルM2



▲炎陽は指揮官クラスの軍人が搭乗する機体であり、キャセルM2は一般兵用。

●ハーンイーガー

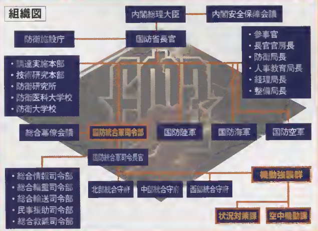


▲機動強襲群・空中機動課が使用したヘリ。20mmマシンガンを搭載している。

●09式装甲車



▲17.5mmマシンガンを搭載した装甲車。戦闘力はかなり低く実戦向きではない。



MIDASに関わる4つの組織

日防軍は内閣より任命された国防長官の下、陸、海、空といった3つの主力軍事力を有している。MIDASの強奪作戦は、この3軍に属さない「国防統合軍司令部」によって計画され、下部組織となる「機動強襲群」「空中機動課」「状況対策課」がこれに参加した。作戦の立案者でもある佐々木は、「国防統合軍司令部」の参謀長官を務める大物で、現場の指揮等を「状況対策課」の黒井に一任。MIDAS強奪作戦を成功させる。日防軍の武村大佐は以前より佐々木の行動に対し強い疑惑を抱いており、確たる証拠をつかむため奮闘するか、依然として佐々木の陰謀を暴けずにいる。日防軍は佐々木と伊佐夫、この2人を軸とし物語が進行していく。



武村伊佐夫
以前は佐々木の下で働いていたが、彼の好戦的な考え方に反発。以後、佐々木の敵対勢力となる。



佐々木正雄
日本が掲げる軍事思想に対し、疑問を投げかけている人物。日防軍の軍事力強化を目指している。

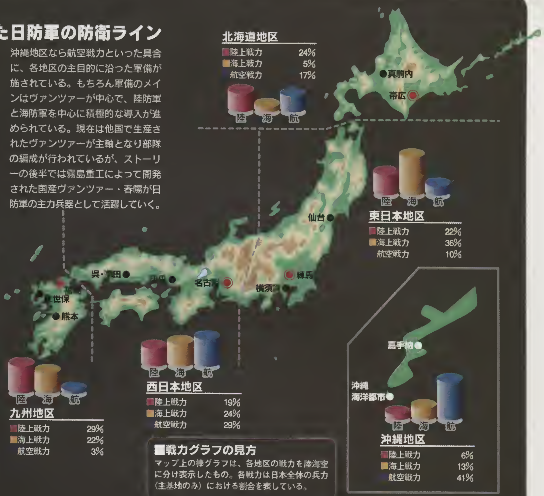


黒井優二
佐々木の部下。作戦に私情を挟まないクールな性格だが、責任感が強く部下たちの信頼も厚い。

地区ごとに分けられた日防軍の防衛ライン

日防軍はOCU日本の国土を5つの地域に分け、敵国の侵攻やテロに対する防衛を行っている。所有する基地の数は大小合わせ40余り。右の地図上で記した都市は、その中でも主要となる軍事拠点を表している。また、各地区には、その地域全体を取り仕切る「司令部」が定められており、北海道地区なら帯広基地、東日本地区なら練馬基地がその任を務める。特に練馬基地は東日本地区だけではなく、国家の存亡に関わる有事が生じた場合、日防軍全体を取り仕切る「国防統合軍司令部」が設置されている。よって東日本地区は、ほかの地区に比べ戦力が集中しているのである。

各地区に配備された軍備は、地区ごとによって多少軍備の傾向が違っている。東日本地区なら海上戦力、沖縄地区なら航空戦力といった具合に、各地区の主目的に沿った軍備が施されている。もちろん軍備のメインはヴァンツァーが中心で、陸防軍と海防軍を中心に積極的な導入が進められている。現在は他国で生産されたヴァンツァーが主軸となり部隊の編成が行われているが、ストーリーの後半では霧島重工によって開発された国産ヴァンツァー・春陽が日防軍の主力兵器として活躍していく。



■戦力グラフの見方
マップ上の棒グラフは、各地区の戦力を陸海空に分け表示したもの。各戦力は日本全体の兵力（主基地のみ）における割合を表している。

■北海道地区

全体的に戦力の劣る北海道地区は、ヴァンツァーを主軸とした陸上兵器によって守られている。また、劇中では登場しないが、歩兵部隊の戦闘能力は全国一といわれている。

■東日本地区

東日本地区には劇中で登場した横須賀基地がある。この横須賀基地は海防軍を取り仕切る総司令部があり、軍の性質上、配備されたヴァンツァーが少ない。和輝たちの作戦が成功した背景には、こういった基地自体の性質が影響していたともいえる。

■西日本地区

西日本地区は、名古屋の守山基地が司令部となっている。ここの司令長官・磯貝国光は劇中でも登場するが、クーデターの成り行きを傍観し、最後まで軍を動かさなかった。

■九州地区

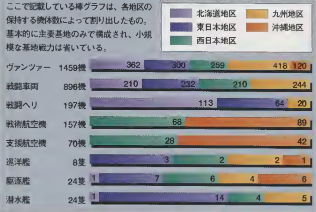
クーデターが勃発した日本において、九州地区は佐世保と熊本が重要な拠点となる。また、九州地区は陸上戦力が充実しており、和輝たちの戦いも苦戦を強いられる。

■沖縄地区

最終決戦地となる沖縄は航空戦力に優れた地区。しかし、クーデター時の日本においては自慢の航空戦力もほとんど活躍せず、もっぱら陸上戦力による戦いが展開された。

各地区の戦力分析

ここで記載している棒グラフは、各地区の保持する機体数によって割り出したもの。基本的に主要基地のみで構成され、小規模な基地戦力は省いている。



国防統合軍司令部

国防統合軍司令部は日本における3軍（陸・海・空軍）を効率良く運用するために作られた組織。日本において「有事」が生じた場合、3軍より作戦参謀や司令官を召集し、国防統合軍司令長官の指揮の下、作戦を遂行する。現在は司令部要員が滞在するのみで、事実上その機能は休止している。ちなみに有事とは次に記載した5つの項目を指し、国防軍成立時に決められた定義となっている。

1.大規模な災害（天災、人災を含む）。
2.OCU加盟国以外の国家による日本国への武力侵入及び、攻撃。
3.日本国内でのテロ行為。
4.OCU加盟国国民及び日本国国民による日本国に対する騒乱。
5.海外での日本国民に対する危害。

このうち、国防統合軍司令部が活動を開始するのは2.3.4.のみとされる。ただ状況によっては司令部を起動せず、通常の3軍が個別に対応する場合もある。

機動強襲群

有事の初動作戦ほか、国内でのテロリズムに対応する実行部隊組織。国防統合軍司令部が起動して初めて作戦行動が認められる。司令部付きの警護部隊としての役割も担い、統合軍司令長官の活動命令だけでも実行は可能。軍備や規模など、さまざまな点において謎の多い組織。

状況対策課

機動強襲群の主実行部隊。基本的には特殊歩兵集団として位置付けられているが、戦闘車両やヴァンツァー、支援ヘリコプターをはじめ、あらゆる兵器等の操作にも精通している。必要な機材は作戦に応じて配備されるようになっている。

空中機動課

状況対策課の支援を行う部隊。支援用の攻撃ヘリや輸送航空機などのパイロットが所属している。この課のパイロットは特殊歩兵訓練を受けており、地上部隊としても行動可能。状況対策課同様、作戦行動に応じ機体が追加配備されるため、常駐する航空機は最低限のものしかない。

MOBILITY ASSAULT DEPARTMENT 機動強襲群 Japan Defence Force

空中機動課

Situation Corresponding Division

移送されたMIDASを

オセアニア・東南アジアエリア

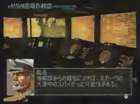
日本を脱出した和輝たちはMIDASの所在を求め、オセアニアや東南アジアを探索。幾多の戦いや人々との出会いを経て、ついにMIDASのありかを探り当てる。ルソンやパナイ、ミンダナオ島をはじめとし、7000以上もの島々からなるフィリピン…。横須賀基地より移送されたMIDASは、この南国の島国に隠されていた。そして悲劇は生まれる。

和輝たちの行動は大漢中軍によって決められていた

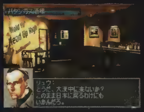
このゲームのストーリーを序盤・中盤・終盤に分けるとしたら、オセアニアから始まる東南アジアエリアが序盤においての締めくくりと言える。最大の山場はOCUフィリピン軍により実行されるMIDASの投下で、この一件によってエマ編とアリサ編は新たな展開を迎える。それは各国の思惑が、MIDAS本体ではなく、それを開発できる"人"へと移行したことだ。そしてそれをいち早く察知し実行に移したのが、大漢中のエージェントであるルカーヴとリュウであった。

現在MIDASに関しての知識を持つ人材は大きく2つのグループに分けられる。1つがエマを筆頭とした開発チーム。もうひとつがMIDASの研究を行っていた日本の科学者たちである。しかし、MIDASの構造を完璧に理解し、実際に製造できたのはエマとアリサだけで、これ以外の人材は単なるサポートに過ぎない。ルカーヴとリュウはそれを知った上で、エマとアリサの確保を企てる。エマ編では、タール基地において日本人科学者たちの移送を任されたルカーヴがアリサ以外の科学者を抹殺。わざわざ死体を見つかるような場所へ放置し、和輝たちを誘い出してエマの確保を画策。アリサ編ではルカーヴがエマを脅迫し、リュウは和輝たちの信頼を利用した形でアリサを手に入れようとする。

MIDASを追って日本を脱出した和輝たちは、大漢中軍のエージェント・ルカーヴとリュウの思惑によって次なる戦いを強いられるのである。



◀タール基地に潜入した和輝たちは一時アリサの救出に成功するが、ルカーヴの裏切りによって再びアリサと離れ離れに（エマ編）。



▶MIDASの消失により目標を失った和輝たちは、リュウの言葉を信じ大漢中へ。しかしそれはアリサを確保する作戦だった（アリサ編）。



和輝たちの足跡

オーストラリアやインドネシアなど、各国を廻りMIDASの情報を集めるエマ編に対し、アリサ編はMIDASの隠されたフィリピンへ直接向かう。エマ編はオーストラリアでの戦闘内容によって分岐。カデンザを破壊したら上のルート。破壊できない場合は下のルートをたどることになる。

追って



●大漢中軍潜水艦

日本にあるMIDASを強奪するため、大漢中軍より派遣された潜水艦。アリサ編では和輝たちを回収後、移送されたMIDASを追ってフィリピンへ向かう。

●アユタユ

オーストラリアの分岐でスラウェシ島に向かうと、タイのアユタユでセロフと遭遇。戦闘になる。セロフの登場は分岐によりかなり異なる。

●USN第3艦隊

USN海軍第3艦隊の面々
MIDAS奪還作戦においてその主任務に就く。太平洋にはUSN海軍基地が多く存在。OCU軍や大漢中軍に対し警戒態勢を取っている。

●ネグロス要塞　タール基地

マナロ／セマウン
フィリピン国内において基地指令を任されている2人。所属する軍は違うが、祖国を愛する気持ちは同じである。

●ミンダナオ島

反政府軍の面々
フィリピン政府に反旗を翻す組織。自らをフィリピン自由主義党と名乗り新たなる政権奪取を目指している。

●ダガト　アハス

ダガト・アハスの艦長
フィリピン軍の海上要塞ダガト・アハスを指揮している。老練な用兵家で海上の警備を一手に担っている。

●ランテパオ

バリラー家
他人から見ればあやしげな研究と、はた迷惑な事故ばかりを起こしている“変”な家族。スラウェシ島を本拠地とし、肥料で動く機動兵器、メタンヴァンツァーを製造している。

●タ

ハッタ・ミルザ
エマ編で登場するハッタは反OCUゲリラ。ルートによって出会い方が違い、ユンのフラグに影響している。

●シンガポール

ユン・ライファ
シンガポールを拠点に仕事をしているスペンダー。スマトラ島でハッタを救うとシンガポールで会える。

●USN軍潜水艦

航行不能な海域の多いインドネシア諸島において、あらかじめ軍が配置しておいた潜水艦。エマ編において登場する。

●スタンリー山脈

セロフ・ウォーレン
OCU軍の科学者。彼と出会うか出会わないかにより大きくストーリーが分岐。

MIDAS捜索の過程で出会う海千山千の女の子

Story

11月3日ー5th　Dayー
　太平洋上に待機している第3艦隊と合流した和輝たちは、オリジナルのMIDASが日本から運び出されたことを知る。移送された経緯にOCU軍が絡んでいることから、OCUの本拠地となるオーストラリアへ向け出発する。
　スタンリー山脈に到着後、MIDASが隠されていると思われる軍の実験場を目指すが、その途中偶然にも敵の輸送部隊を発見。戦いの末、OCU軍の科学者たちを捕獲する。そして科学者の1人セロフから、MIDAS絡みと思われる「軍輸送機の墜落事故」を知る。

11月6日ー8th　Dayー
　輸送機の墜落現場・タランベツツに到着した和輝たちは、OCU軍と戦う謎の部隊と遭遇。謎の部隊に加勢する形でOCU軍を撃破する。その後、反OCUゲリラのハッタから情報屋を紹介してもらうことになった和輝たちは、一路シンガポールへ。そこでちょっと生意気な17歳の女の子、マネーメイカー（本名はユン・ライファ）と呼ばれるスペンダーに仕事を依頼する。

Ema-Flow Chart

5th Day 11月3日　OCUの科学者セロフとの出会い

04:10　USN第3艦隊を出発
07:00　スタンリー山脈へ到着
08:57　OCU軍の装甲車を発見。襲撃する
09:00　MISSION 11＃ウィルソンクリフス
09:26　OCU軍の科学者（セロフ）からスマトラ島の墜落事故を知る
11:30　スタンリー山脈へ帰還
11:11　ロスタイムをなくすため、東南アジア付近に待機している潜水艦へ向け出発
12:19　USNの潜水艦に搭乗。スマトラ島へ向け進路を取る

6th Day 11月4日　潜水艦にて移動中

7th Day 11月5日　潜水艦にて移動中

8th Day 11月6日　スペンダー「マネーメイカー」登場

16:47　OCU軍と戦う謎の部隊を発見。戦闘に
16:49　MISSION 12＃スマトラ島（タランベツツ）
17:18　ハッタから情報屋を紹介してもらうことに
20:05　シンガポールのジュロン工業地帯に到着
21:46　シティの酒場でマネーメイカーと契約
22:22　パロポ海岸でエマの意外な一面を知る

カデンザ破壊に失敗すると…

MISSION11に登場する輸送部隊の中に、カデンザという輸送用装甲車の存在が確認できる。このカデンザは2ターン目から移動を開始し、MAPの外へ逃げようとする。カデンザにはOCU軍の科学者たちが乗っており、戦闘中MAPの外へ逃がしてしまうと、セロフからの情報を得られぬままUSN軍の潜水艦へ向かうこととなる。

あまりにも運が良すぎた反OCUゲリラ・ハッタとの出会い

スタンリー山脈からUSN軍の潜水艦までの距離が約2000㎞（輸送機で約1時間強）。潜水艦からスマトラ島の墜落現場までは約3500㎞。ゲーム中のネットワークから判明する潜水艦のスピードは約32ノット（1ノット＝毎時1852m。時速に換算すると約60㎞）。これを考えると、和輝たちが現場に到着するまでに要した時間は、約65時間（2日半）以上ということになる。しかし実際のゲーム中では和輝たちが情報を入手してから、さもその日のうちに到着したかのような錯覚を覚える（墜落した輸送機を巡りOCU軍とゲリラが戦っていたから）。しかしこれには理由がある。
　以前よりこの地域は、軍の輸送機をターゲットにした襲撃事件が多発していた。これに対しOCUはゲリラ討伐の部隊を配備する。そんな折り、ハッタ率いるゲリラ部隊が行動を開始。1機の輸送機を撃墜する。ミサイルの当たり所が悪かった輸送機は、ハッタたちからかなり離れた場所に墜落。ハッタたちは輸送機に積まれた軍の物資をかすめ取るため、墜落現場へ急行する。しかし、その情報を聞きつけたOCU軍は即座に対応。ハッタたちが現場に到着する前に戦闘が開始される。そうこうしているうちにこの戦いは膠着状態に陥り、ハッタたちが墜落現場に到着した頃には丸々3日以上も掛かっていた。
　もしこれらの状況が重なっていなかったら、和輝たちは元気いっぱいのハッタと出会うことはできなかったし、マネーメイカーを紹介してもらうこともなかったといえる。

日本を脱出した和輝たちの前に現れたのは、一癖も二癖もあるちょっと可愛い女の子。エマ編では「マネーメイカー」と名乗るスペンダー。アリサ編では「超」が付くほどのわがままな大企業のお嬢さまが登場する。MIDAS事件を解決するためには必要な人材といえるこの2人だが、普段の生活ではあまり会いたくない癖の強い女の子たちだった。

Story

11月5日—7th　Day—

厚木基地の飛行記録を解析した和輝たちは、OCUフィリピンのタール基地に移送されたMIDASの所在を確認。リュウの指示によりミンダナオ島へ向け進路を取る。この時タール基地のあるルソン島へ向かわなかったのは、ミンダナオ島にいる反政府軍の協力を得るため。現在フィリピンでは政府軍と反政府軍の内乱が勃発しており、ミンダナオ島は反政府軍の勢力下にあった。

反政府軍の本部に到着した和輝たちは、リーダーであるバマラムと会見。リュウはMIDASに関する情報を提供した上で、ルソン島への侵攻作戦を提案する。しかし現在の反政府軍は戦力的にも劣っており、リュウたちのために危険を犯せないとして、その提案を一時保留する。そこでリュウは反政府軍が攻めあぐんでいるパナイ島のミサイル基地攻略を進言。その作戦の成否により彼らの協力を取り付けることを約束する。そして和輝たちはミサイル基地を破壊するため、作戦準備に取りかかるのだった。

Alisa-Flow Chart

5th Day 11月3日　潜水艦にて移動中

6th Day 11月4日　潜水艦にて移動中

7th Day　11月5日　反政府軍の力を借りるためミンダナオ島へ

ミンダナオ島、反政府軍の本部へ到着	13:31
バマラムに協力を求める	13:40
ダバオ市のショップでファムと出会う	18:11
リュウが作戦を提案。それに合わせ反政府軍は軍の再編を行う	20:04

8th Day 11月6日　作戦準備中

日防軍が強奪したMIDASをタール基地へ移送した理由

OCU国防省は日本に対しMIDASの引き渡しを要求。フィリピンのタール基地へ移送される。このMIDASの移送にはOCU陸軍情報部の思惑があった。

ルソン島にあるタール基地は山岳地帯をくり抜いて建設された自然の要塞であり、レベルの高い機密保持能力を有する研究施設を持っている。この研究施設は基地の地下に設置されており、万が一事故が発生した場合でも都市部に被害が及ぶことがない。これらの状況を踏まえた上で、OCU陸軍情報部はMIDASの移送先にタール基地を推奨。統合幕僚本部がこれを承認した形でタール基地への移送計画が決定する。余談だが、タール基地はOCUが管理する海軍基地であり、フィリピン軍の管理下には置かれていない。ゆえにフィリピン政府と軍はMIDASの移送に関しての情報をまったく知らされていない。これは後々におけるフィリピンとOCUの確執を生む結果となる。

閑話休題

薫風杯帝北大ミスコンテスト

アリサの通う帝北大学では、風薫る春のイベント「帝北祭」へ向けてミスコンテストが催されている。候補はアリサを含む5人の乙女で、いずれもおとらぬ麗しの美姫たち。彼女たちの隠された プロフィールを知り、その実像に近づこう。



野神恵（のがみ めぐみ）

教育学部児童心理学科2年在籍。身長166cm、体重53kg。コンタクトは持っておらずメガネ派。外そうが外すまいが変わらず美人。出身は熊本で、会話中たまに方言がこぼれる。趣味はアシッドテクノと入浴中の読書。



親堂真実（しんどう まみ）

芸術工学部環境設計学科1年在籍。身長173cm、体重55kg。家は銭湯を営んでおり彼女もまれに番台に立つ。漫画好きだが、そのジャンルは劇画系にかぎられる。水を眺めると精神が安らぐらしく、休日はよく水族館を訪れる。



水先香治音（みなさき かやね）

芸術工学部環境設計学科1年在籍。身長159cm、体重51kg。派手な恰好を好むが、隠れた趣味は盆栽。プロレスが好きで、試合を観て涙を流したこともある。いつかK-1に登りたいという夢を持つ。父親はプロ野球解説者。









武村アリサ

理学部放射線学科1年在籍。身長160cm、体重49kg。視力は右0.2左0.1で、普段はコンタクトだがまれにメガネを着用する。食べる事が好きで、学食時外せないメニューに生協牛乳500mlがある。これは高校生の時分、チト貧弱気味だった胸部を何とかしようと思い飲み始めたもの。以来食事の友となる。大学に入ってから憧れの弓道部に入るが腕はまだまだ。尊敬する人物は那須与一らしい。白衣と化学薬品のにおいが好き。









水城舟穂高（みきふね ほだか）

法学部国際政治学科2年在籍。身長164cm、体重52kg。武村アリサとは親しい間柄だが、何かにつけ勝ち負けを競いたがる「自称」アリサの好敵手。高校の頃からモデルとして雑誌の表紙を飾ったりテレビにも出ているため、知る人ぞ知る有名人。コスプレは仕事でして以来まんざらでもなかったらしく、多少趣味と化している。
本人は自分を童顔と思っていて、悩みのひとつとのことだ。スポーツが万能で、その言葉使いは良家のお嬢様を思わせるが、実は実家の近所の剣道場に幼い頃から通っており、礼儀作法と代々伝わる剣術「木崎無双流居合い」を学んだため。ゴキブリも素手で叩き落とす、胆力のある乙女。

目的を達成するために行う
意味なき戦いの日々

Story

11月7日ー9th　Dayー
　ユン（マネーメイカー）に仕事を依頼した和輝たちは、シンガポール郊外にあるジュロン工業地帯で睡眠を取る。しかしその安眠はハッタが入手した急報によって終わりを告げる。その急報とは仕事を依頼したユンがチョア・チュー・カン（収容所）に収監されたというものであった。ユンに依頼した仕事とは厚木基地の飛行記録を調べることで、もちろん軍の極秘情報となる。和輝たちはユンが仕事を失敗したと考え、彼女を救出するためチョア・チュー・カンへ向かう。
　ユンを助け出した和輝たちは、彼女が収容所にいた理由を聞いて呆れた。それはユンが借金取りから逃げるため、一番安全だと思われる軍の収容所に逃げ込んだだけだったからだ。何はともあれ和輝たちは厚木基地の飛行記録を入手。日本人の科学者たちと共にMIDASがフィリピンへ移送されたことを知る。そして、科学者の名簿リストの中にアリサの名前を確認。和輝の目的は、MIDAS奪還以上にアリサの救出の色が濃くなっていく。

Ema-Flow Chart

9th Day 11月7日　困ったチャンのマネーメイカー

- 03:17　ハッタから「マネーメイカーが捕まった」という情報を聞く
- **04:30　MISSION 13#チョア・チュー・カン（収容所）**
- 04:56　マネーメイカーを救出
- 05:01　パープルヘイズに助けられる
- 18:00　マネーメイカーから厚木基地の飛行記録を入手
- 20:38　ジュロン工業地帯でマネーメイカーが仲間に加わる
- 23:19　潜水艦と合流。USN第3艦隊へ向け出発

10th Day 11月8日　潜水艦にて移動中

11th Day 11月9日　潜水艦にて移動中

12th Day 11月10日　潜水艦にて移動中

閑話休題

警察のフォーラムで公開されている指名手配犯と尋ね人

日本警察機構のフォーラムにある「指名手配・尋ね人」の欄。この欄に掲載されているたくさんの顔写真は、ゲーム中の酒場に時折出現するプチレアな人々。彼らを発見し警察にメールを送ると、謝礼として賞金をもらうことができる。しかし、すべての人物が酒場にいるわけではなく、ここで紹介している写真の左下に赤い●が付いた人のみがゲーム中に登場する。余談だが、●が付いていない人々は「frontmission3」の制作に関わったスタッフ。多少の写真修正を施しているが、見る人が見れば一目瞭然。もし街中や怪しい酒場で彼らを発見しても謝礼はもらえないのであしからず。もっとも徹夜や泊まり込みが多く、なかなか会えない鬼レアな人たちだが…。



指名手配犯	加藤和海	大島隆二	高橋一志	松本章子	佐藤　大	山田越司	尾崎達矢
尋ね人	横浜聖美	牛久由久	古沢章一	岸　隆史	火口明雄	池原　研	種子島防

マネーマイカーが抱えている借金の実態は…

高額な依頼料を要求し、荒稼ぎをしているマネーメイカーことユン・ライファ。スペンダーとしても超一流で、彼女に仕事を依頼する金持ち連中は後を絶たない。そんな彼女が借金取りから逃げるため軍の収容所に逃げ込むというシーンがある。これは一体どういうことなのか…。
　この謎を解く鍵はお金に対する彼女の“強い執着心”がヒントとなる。マネーメイカーが借金をしているのは、劇中の台詞から見ても間違いはない。ただその借金が莫大な金額であるとしても、法外な依頼料を吹っかけるマネーメイカーにとって返返済できない金額ではないはず。とするとマネーメイカーは、「お金はあるが金は返さん」という傲慢な態度で、借金取りから逃げている可能性が高い。もし本当に莫大な借金をしているなら、そんなに飄々と生活できるわけがないのだから…。

各諜報機関が入手していた情報をOCU中央議会は知らなかった

今回の作品で登場する諜報機関は、CIU、OCU陸軍情報部、公安調査庁、大漢中軍情報部、ラーブヌイの情報部、そしてFAIである。劇中で直接的に関わってくる組織はFAIとCIUだけで、他の諜報機関はネットやゲーム中会話でしか登場しない。そしてこのほとんどの諜報機関が、USNがMIDASを製造しているということをキャッチしていた。唯一知らなかったのは日本の公安調査庁だけである。そんな中、直接的な軍事行動を起こしたのが佐々木の束ねる日防軍である。
　この事件をいち早くキャッチしていたのがラーブヌイの情報部で、それ以降次々に日防軍の行動が露見する。ただCIUはOCUの中央議会に対してこの情報を発表していない。それはMIDASを利用しようと画策するOCU軍からの妨害工作が予想され、報告も慎重を要したからである。OCU内でMIDASの情報が公にならなかったのは、CIUとOCU陸軍情報部（OCU軍）が互いに牽制していたからといえよう。

Ema ：MISSION13　OCUシンガポール編
Alisa：MISSION9～17　OCUフィリピン編

エマ編はMIDASの奪還、アリサ編ではMIDASの強奪…。微妙に立場の違う双方のストーリーだが、MIDASを手に入れ開発を凍結するという和輝たちの目的は同じといえる。この辺りのストーリーは、MIDASの隠されたタール基地を攻略するための前哨戦であり、和輝たちにとって本当に辛い日々はこれから始まろうとしていた。

Story

11月8日—10th　Day—

リュウの作戦は事故を装った民間の旅客機でパナイ島へ上陸。旅客機内に搭載したヴァンツァーを使い、ミサイル基地を破壊するというものだった。その作戦に際し、反政府軍のスポンサーの娘ファムは、和輝たちに1機のジャンボジェットを手配。まだ日の昇らない午前4時頃、パナイ島へ向け出発する。

エマージェンシー信号を出しながらパナイ島へ近づいていった和輝たちは、演技とは思えない派手な墜落事故を装い辛くもパナイ島へ上陸する。それから1時間後、ミサイル基地の破壊に成功した和輝たちは、引き続きネグロス要塞を攻略。タール基地のあるルソン島へ1歩1歩近づいていった。

11月10日—12th　Day—

タール基地へ潜入するにはフィリピン軍の所有する海上要塞ダガト・アハスの動きを止めなければならない。そこでリュウが立てた作戦は、信管を抜いた魚雷にヴァンツァーを搭載。ダガト・アハスへ向け魚雷を撃ち込み、内部より破壊するというものだった。

反政府軍のスポンサー ルイスコンツェルンの実態

フィリピン最大の企業体として成長したルイスコンツェルンは反政府軍のスポンサーとして登場する。ルイスコンツェルンがスポンサーとなった理由は、現政権の内向的な政策による不景気を脱するため。しかし真の理由はルイスコンツェルンの会長フレッドルイスの一人娘ファムが、反政府軍に入隊したことがことの始まりとなる。ヴァンツァーの操縦技術を身に付けたファムは自分の腕前を実戦でも試したみたいとして、反政府軍へ入隊。積極的に作戦に参加しては政府軍と戦った。父フレッドはこのファムの行動に大いに感動し、反政府軍のスポンサーとなることを決める。普通の父親なら絶対反対するこの行為を自ら認め娘を援助するという、ちょっと変わったフレッドの行動は、伊達にバリラー家と親戚関係じゃないことを物語っているのかもしれない。

バマラムが起こした軍事行動は独立への道を遠ざけた

OCUからの独立を目指し戦っている反政府軍は、和輝たちの来訪をきっかけとし攻勢に出ることを決意する。しかしこの決断はバマラムにとって思いがけない結果を招いてしまう。

和輝たちがフィリピンを去った後、アロルデシュにおいてOCU経済会議が開催される。この会議は日本をはじめオーストラリア、韓国、タイなどのOCU主要国が、経済情勢の悪化に苦しむ加盟国への資金援助を決定するというものだった。資金援助を要請してきた国は4カ国で、総額180億円もの経済援助が予定されている。またOCU中央政府は軍事力がある一定のレベルに達していない各国に対し、OCU軍の追加派遣を要請。これは対象となる各国からの強い反発を受けることになる。

和輝たちの活躍によって皮肉にも悪化するOCUフィリピンの内乱は、結果的にOCU軍の追加派遣を呼び込んだ。しかしこの後、今まで傍観者という立場でしかなかったフィリピン市民に、強い独立への意識が芽生え始めるのであった。

Alisa-Flow Chart

9th Day 11月7日　作戦準備中

10th Day 11月8日　反政府軍の協力を得るための戦い

ミンダナオ空港から和輝たちの部隊が出発	04:00
パナイ島のジャングルへ不時着成功	04:25
不時着現場を政府軍に発見される	04:29
MISSION 9＃パナイ島（ジャングル）	**04:30**
MISSION 10＃パナイ島（ミサイル基地）	**04:55**
作戦成功。潜水艦との合流地点へ向かう	05:22
潜水艦と合流。ネグロス島へ向け進軍する	05:39
ネグロス島の海岸に上陸。守備部隊に発見される	06:10
MISSION 11＃ネグロス島（海岸）	**06:11**
MISSION 12＃ネグロス島（ジャングル）	**06:46**
戦闘終了後、排水溝を通ってネグロス要塞に侵入	06:59
基地司令マナロ率いる部隊の待ち伏せに遭う	07:09
MISSION 13＃ネグロス島（ネグロス要塞内部）	**07:09**
潜水艦へ帰還。ダガト・アハス攻略の準備を始める	13:33

11th Day 11月9日　作戦準備中

11th Day 11月10日　海上要塞ダガト・アハスを足止めするために

ヴァンツァーを搭載した魚雷を射出	17:04
MISSION 14＃ダガト・アハス（格納庫）	**17:11**
MISSION 15＃ダガト・アハス（通路）	**17:12**
MISSION 16＃ダガト・アハス（デッキ）	**17:41**
MISSION 17＃ダガト・アハス（機関室）	**17:43**
ダガト・アハスから脱出	17:50

タール基地の独断で ついにMIDASが使用される

Story

11月11日─13th Day─
MIDASの奪還作戦を立案、準備を行う。
11月13日─15th Day─
MIDASが収容されたタール基地は山岳地に建設された自然の要塞である。基地内へ潜入する経路は2つあり、和輝たちは戦力の集中していない（と思われる）山沿いのルートを選び行動を開始する。
基地内に潜入した和輝たちは、アリサを含めた日本人科学者たちの救出に成功。しかし、肝心要のMIDASはすでに基地外へ運び出されており、タール基地の司令セマウンによってMIDASの移送作戦が実行されようとしていた。科学者たちの脱出任務をルカーヴに任せた和輝たちは、引き続き作戦を続行、奮戦するが、力及ばずMIDASの奪還に失敗。そしてセマウンは独断でMIDASを、フィリピンに侵攻して来た大漢中軍艦隊へ向けて投下してしまう。
目的を失った和輝たちは一時第3艦隊へ帰還するが、デニスの報告によりルカーヴの裏切りが発覚。新たな戦いが幕を開ける。

Ema-Flow Chart

13th Day 11月11日 タール基地への侵攻を提案

08:17 USN第3艦隊と合流

14th Day 11月12日 作戦準備中

15th Day 11月13日 奇襲作戦の結末と惨劇

06:00 MIDAS奪還作戦スタート。ヴァンツァーを搭載した専用ポッドが発射される
06:06 タール基地の入り口に専用ポッドが不時着

06:09 MISSION 15＃タール基地（爆薬庫前）

06:51 MISSION 16＃タール基地（爆薬庫内）

07:22 MISSION 17＃タール基地（テスト施設）

07:27 戦闘中、レーザー兵器を搭載したヴァンツァーが出現
07:37 アリサと再会
07:50 科学者と共にタール基地からの脱出を決行する

08:08 MISSION 18＃タール基地（排水溝出口）

08:23 戦闘中、パープルヘイズから救援の連絡が入る
08:47 戦闘終了後、ルカーヴと科学者（アリサ）たちがホバーで脱出
08:48 パープルヘイズの救援に向かう
09:10 狙撃兵ホセによりパープルヘイズが全滅
09:13 ミダスを搭載した飛行艇が離陸．追撃を試みるが敵の妨害に遭い戦闘に

09:14 MISSION 19＃タール基地（滑走路）

09:40 戦闘終了後、ミダスを追って飛行艇で離陸
09:47 和輝たちの追撃も虚しく、大漢中艦隊にMIDSAが投下される
10:30 亮五とデニスは潜水艦へ帰還
10:36 USN第3艦隊に和輝とエマが帰還
11:00 デニスから通信。ルカーヴと科学者（アリサ）が行方不明に
16:25 亮五とデニスが第3艦隊へ合流（航空機を使って）
16:45 台北市郊外に科学者たちの死体が…。ルカーヴの裏切りが判明する

ルカーヴがリュウを使って フィリピンの内乱に油を注いだ

MIDASの所在を突き止めた和輝たちはタール基地への奇襲作戦を提案。しかしMIDAS奪還作戦の責任者でもある第3艦隊の艦長は、「OCU域内の奥にあるフィリピンへの侵攻は無謀である」と判断。和輝たちの作戦を却下する。そんな折りルカーヴが、OCUフィリピンでの内乱が活発化しているとの情報を入手。すぐさま、奇襲作戦は実行に移されることとなる。そして、このあまりにも都合よく激化したフィリピンの内乱は、ルカーヴの手によって仕組まれた可能性が高いといえる。これはエマ編とアリサ編、双方のストーリーからある程度推察することができる。

ルカーヴとリュウは大漢中軍のスパイである。劇中ではあまり描かれていないが、大漢中軍にMIDASを持ち帰るため、ルカーヴとリュウはお互いに情報を交換し合っていた（アリサ編のMISSION5クリア後、潜水艦にいるリュウのもとへルカーヴからの通信が入る）。そしてリュウは、結果的にルカーヴが流した情報によってMIDASの所在を突き止めている。またOCUフィリピンの内乱は、政府軍の築いた防御ラインの強固さにより侵攻を阻まれ膠着状態に陥っていた。この状況を打破したのがリュウの作戦（アリサ編参照）であり、反政府軍には攻勢に出る能力がなかったといえる。ルカーヴはそれを見越した上で、リュウに情報を流したのではないだろうか。

ホセの運命を握る侵攻ルート

タール基地への侵攻ルートは2種類ある。和輝たちが正面のルートを選ぶと、パープルヘイズが山沿いのルートを担当。陽動部隊として和輝たちをサポートしてくれる。逆に山沿いのルートを和輝たちが選ぶと、パープルヘイズは正面のルートを担当する。基本的なストーリーはどちらを選んでも変わらないが、山沿いのルートを選ぶとホセが和輝たちの仲間となる。その替わり大漢中で出会うリィを仲間にすることができなくなるが…

SOUTHEAST

Ema　：MISSION15～19
Alisa：MISSION18～22　OCUフィリピン編

活発化するOCUフィリピンでの内乱。エマ編はこの内乱に乗じタール基地へ侵攻。そしてアリサ編では自らの力で政府軍と戦い内乱を激化させる。しかし結局この戦いは、政府軍の敗退を感じとったセマウンにより意外な結末を迎えることになる。それは、和輝たちの追っているMIDASが、セマウンによって使用され消失してしまうことである。

Story

11月13日ー15th　Dayー

無謀とも思える大胆な作戦でダガト・アハスを航行不能にした和輝たちは、タール基地まであと一歩の所まで迫る。反政府軍はミンドロ島の野営地からバタンガスへ侵攻。反政府軍の勝利を確実なものとするため、リュウがあらかじめ手配した大漢中軍艦隊も行軍を開始する。政府軍はこの動きに対し、バタンガスへ戦力を集中。和輝たちは手薄となったタール基地への潜入を試みる。

フィリピン軍が築いた防衛ラインの網をくぐりタール基地に到着した和輝たちは、何者かによって破壊されたタール基地を目撃。そこへ現れたFAIの実行部隊パープルヘイズによってUSN軍の仕業であることが判明する。そしてパープルヘイズは、和輝たちを発見するや否や発砲。意外にも和輝たちはUSN軍との戦いを強いられることとなる。

辛くもパープルヘイズに勝利した和輝たちはMIDASに肉薄。しかし反政府軍の攻勢に恐怖を覚えたセマウンの命令により、大漢中軍艦隊にMIDASが投下されてしまう。

大漢中を動かすことのできるリュウに与えられた権限

先ほどエマ編のところでルカーヴが「リュウを使いOCUフィリピンの内乱を活発化させた」という内容を述べた。アリサ編ではその事実をさらに裏付ける作戦をリュウが行っている。それが大漢中軍艦隊の侵攻である。

リュウはMIDASを強奪するため、反政府軍のリーダー・バマラムに協力を仰ぐ。しかしバマラムは無謀な挑戦であるとして、リュウの提案を一時保留。その後のリュウたちの活躍により、バマラムは全軍を挙げて政府軍と戦う。その時リュウは「大漢中軍艦隊を派遣させる」という約束をバマラムと取りつけている。そして事実、大漢中軍艦隊はフィリピンへ行軍を開始した。結果的にMIDASによって全滅してしまうが、リュウは一介の諜報員でありながら大規模な軍事行動を決定できるほどの権限を与えられている。エマ編からはその事実を垣間見ることはできないが、反政府軍の活性化は間違いなくリュウの仕業であり、ルカーヴはそれを見越した可能性が高いといえる。

タール基地司令セマウンは何者だったのか

タール基地はOCU中央政府（OCU国防省）の管理下にあるOCU海軍基地である。通常このような駐屯基地は中央政府から派遣された人材によって構成され、その国の人間が入隊することはない。しかしOCU軍の派遣及び他国の介入を拒みつづけたラカン大統領の政策により、中央政府はフィリピン国内に駐屯基地を建造できずにいた。そこで中央政府は、タール基地を管理する人材をフィリピンの軍人の中から選出。タール基地の構成メンバーの中にフィリピン軍人を入れることで、フィリピン政府はタール基地の建造を許可する。もちろんタール基地へ派遣されたフィリピン軍人はOCUの管理下となり、たとえフィリピン政府にとって不利な情報でも流すことはできないという状件付きではあるが。そうして選ばれた人材が、軍の行動に私情を挟まないクールな男セマウンであった。しかしセマウンは大漢中軍艦隊の侵攻にあせりを感じ、結果的にフィリピンのためにMIDASを投下してしまう…。

ASIA

Alisa-Flow Chart

13th Day 11月11日　バタンガスに向けての侵攻作戦準備	
ミンドロ島野営地にて作戦会議	07:12
14th Day 11月12日　作戦準備中	
15th Day 11月13日　MIDASを投下するセマウン	
潜水艦へ帰還。タール基地攻略の最終調整を行う	07:10
反政府軍の作戦がスタート。反政府軍と大漢中軍はバタンガスに向け侵攻	07:30
和輝たちは空挺ポッドでタール基地へ	07:55
タール基地が何者かに襲撃されていることを確認	08:05
MISSION 18＃タール基地（正面）	08:09
パープルヘイズと遭遇。戦闘に	08:29
MISSION 19＃タール基地（通信施設）	08:31
アリサ、タール基地内に単独で潜入する	08:47
MISSION 20＃タール基地（ヘリポート）	08:50
アリサ、エマとルカーヴに助けられる	08:58
ヘリポートでの戦闘終了。アリサを追って基地内へ	09:07
アリサと接触しているUSN軍のヴァンツァーを発見	09:15
USN軍が去った後にホセ登場。戦闘に	09:20
MISSION 21＃タール基地（爆薬庫前）	09:20
MIDASを積んだ輸送機が発進	09:39
戦闘終了。MIDAS奪還に失敗した和輝たちは作戦を立て直すべく撤退	09:43
大漢中艦隊にMIDASが投下される	09:47
バタンガス市街へ。エマとルカーヴに出会う	11:53
バタンガスの酒場で大漢中に渡ることを決意	12:14
反政府軍の残党狩りをしているセロフと出会う。戦闘に	12:15
MISSION 22＃バタンガス	12:18
ファムが手配した輸送機でフィリピンを脱出	12:47

Supplementary Explanation

補足解説2

OCUフィリピンの情勢

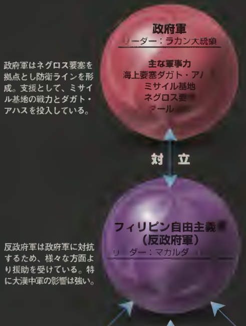
OCU PHILIPPINES SITUATION

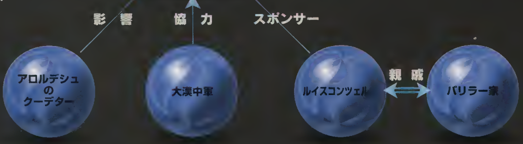
反政府軍の武力蜂起により緊迫した状況の続いているフィリピン。OCU中央政府はこの内乱に対し協力の姿勢を明らかにするが、ラカン大統領の意思により軍事援助はいまだ実現していない。

大漢中軍とルイスコンツェルンが反政府軍をバックアップ

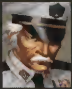
フィリピンで勃発した内乱は、OCUからの独立を目指すバマラムによって始められた。そもそもバマラムはフィリピン政府において第2副大統領という要職に就いていたため、軍人や企業関係者たちに顔が広かった。バマラムはそれらの人脈を利用して今回のクーデターを実行。また大漢中軍と手を結び、政府軍との軍事的格差を補おうとした。これらの要因がうまく重なり合ったバマラム派の勢力は、ミンダナオ島の占領に成功。以後政府軍と反政府軍の戦いは膠着状態に陥る。

この膠着状態を招いた原因は、ラカン大統領が積極的にバマラム派の討伐に乗り出さなかったところにある。ミンダナオ島を占拠した反政府軍は、ある意味民間人を人質に取っていると言っても過言ではない。この度の内乱において、ラカン大統領はなるべく民間人の犠牲を少なくするため、あえて積極的に攻撃を行わず、防戦主体の命令を軍に出していたのだ。

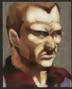




政府軍




政府軍の2人のキーマン。左がダガト・アハスの艦長。右がネグロス要塞の司令。ダガト・アハスが海上を守り、ネグロス要塞が敵の侵攻を阻止している。



タール基地の指令セマウン。彼は元フィリピン軍に属していたが、OCU軍の介入により、部署を移転。現在はOCU海軍に属している。祖国であるフィリピンを愛し、反政府軍の猛攻に対しMIDASを使用することを決断する。

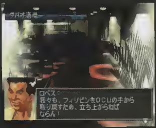
反政府軍



反政府軍のリーダー、バマラム。大漢中軍やルイスコンツェルンからの協力を得、現在の勢力を築く。ラカン大統領の腹心を務めていたが、意見の対立により現在の道を選ぶ。OCUからの脱退を目指し政府軍と戦っている。

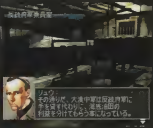
OCUからの独立を考えていたラカン

バマラムの主張するOCUからの独立は、民衆から支持を得ていた。フィリピンはOCUに加盟したことにより経済的に破綻しつつあったからだ。結局OCU域内で利益を得ているのは日本とオーストラリアだけで、その他の国々はただ利用されるだけの状態が続いていた。それゆえラカン大統領はバマラムの意見に対し賛同する面も少しはあったが、現在の経済状態では独立は困難であり、時期尚早であるとも考えていた。また独立の際に他国からの力を借りれば、結局の所ただ利用されるだけの状態が続くのではないかという懸念もあった。それゆえ、大漢中軍の力を借りているバマラムの行動を認めることができなかったといえる。



▲市民の中にも、OCUからの独立を考える人たちがいる。

▼バマラムはフィリピンの財政源である海底油田の利益を取り引き材料に使っている。



政府軍と反政府軍の勢力図

ミンダナオ島を占領した反政府軍の目的は、ルソン島にある首都マニラを征圧して現政権を駆逐することにある。よって反政府軍の侵攻は常に北上するルートをとっていた。しかしネグロス島以北の島々まで侵攻することができず、戦況は好転しない。それはネグロス島の要塞を攻略できずにいたからである。戦闘は常にネグロス島近辺で行われ、反政府軍は何度も侵攻作戦を実行するが、成功を収めた試しはない。これはフィリピン軍が築き上げた防衛ラインの優秀さを物語っている。

フィリピン軍の防衛ラインは3つの戦力によって保たれている。1つがルソン島のミサイル基地、2つ目がネグロス要塞、そして3つ目がダガト・アハスである。反政府軍はこの3つの戦力を攻略しようと画策しているが、それはいまだ実現していない。ただ内乱が膠着状態に入ったことにより、ダガト・アハスは反政府軍に対する警戒を解除していた。そんな折、和輝たちがフィリピンを来訪するのである。

基本的にダガト・アハスは、レイテ島付近で反政府軍の牽制を任されている。しかし和輝たちが訪れた時にはルソン島付近の警備を行っており、結果的にネグロス島及びパナイ島への侵攻を許す結果を招く。もしダガト・アハスがレイテ島付近に配備されたままであれば、和輝たちの作戦は失敗に終わっていたのかもしれない。



ルソン島：Luzon
フィリピン諸島最大の島。政府軍の本拠地マニラがある。タール基地はルソン島南部にある活火山地帯に造られた。周囲には巨大なカルデラ湖が存在している。

レイテ島：Leyte
ビサヤ諸島の東部にある島。屈曲に富んだ海岸線には、フィリピン最大級の海軍基地がある。ダガト・アハスもここで補給を受け、反政府軍を牽制している。

ミンドロ島：Mindoro
サンホセ率いる第7特機師団のヴァンツァー部隊と、カラバン率いる第5歩兵師団が常駐している。後に反政府軍の侵攻により、ルソン島攻略の橋頭堡となる。

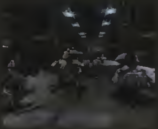
パナイ島：Panay
フィリピンの中央部に位置する島。防衛ラインの要となるミサイル基地が設置されている。反政府軍はこのミサイル基地からの空爆により侵攻を阻まれている。

ネグロス島：Negros
カンラオン火山を主峰とする山地が南北に走る島。ネグロス要塞はこの山岳部に造られた自然の要塞である。常に戦闘はここを中心に行われている。

ミンダナオ島：Mindanao
反政府軍の占領地。フィリピン諸島中第2の面積を持つ。山がちで火山も多く、隠れ家となる場所に事欠かない。反政府軍の本部の政策には大漢中軍も絡んでいる。



▲反政府軍の防衛に着手するミサイル基地。この基地の上げる功績は大きい。



▲OCU海軍が統轄するタール基地内部。地下施設の規模は世界有数である。

エマ編のラストで登場するフィリピン軍のスペースシャトル

タール基地のセマウンにより投下されたMIDASは、大漢中軍艦隊を一掃。それにより援軍を失った反政府軍は壊滅的なダメージを受けた。この事件がきっかけとなり、事実上OCUフィリピンでの内乱は終結する。しかし、MIDASによる実害をこうむったのは何も大漢中軍や反政府軍だけではない。被爆地であるバダンガスも、多くの死者と共に忘れられない傷跡を残す。フィリピン政府はこの件に対し、OCU軍への抗議を行った。しかし、反政府軍の侵攻を阻止し現政権を維持できたのはMIDASによる功績が大きく、また現時点においてMIDASの存在を発表することは、OCU軍による過剰な妨害工作と、OCUからの除名による政治的な孤立を招く恐れもあった。ゆえにフィリピン政府は、この件に関して沈黙を守るしかなかったのである。

しかしエマ編のラストMISSIONにおいて、フィリピン政府は和輝たちに対しスペースシャトルを提供している。事の経緯と理由については明らかとされていないが、被爆国であるOCUフィリピンが、同じような惨劇を起こさないために放った“大国に対するメッセージ”なのかもしれない。



◀被爆国となるOCUフィリピンは和輝たちにスペースシャトルを託し、新たな時代を模索しようと考えた。



▶エマの発表により、MIDASの存在は暴露される。傍観していた人々はエマに対して暖かい拍手を送った。

MIDASから人へ…それぞれの思惑が交錯する

MIDAS投下に対する各国の対応

ついに使用された禁断の兵器MIDAS。この事件により各国はどのような反応を示したのであろうか。ここではUSNとOCU、そして大漢中がとった行動を紹介する。









OCU

OCUフィリピンへOCU軍の追加派遣が成功

フィリピンに侵攻した大漢中軍艦隊の消滅は、OCU中央議会にとっては好都合の事件といえた。それは軍事援助と称し、フィリピンに対しOCU軍を派遣できたからである。

また一方で、MIDASの情報を知らされていないOCU中央議会は、CIUに対し真相[illegible]明を要請する。しかしもともとMIDASの情報を入手していた[illegible]OCU軍との絡[illegible]り、報告するタイミングをうかがって[illegible]ンガスで投下されたMIDASが「[illegible]いう疑問に対し強い関心を持つよう[illegible]以後CIU[illegible]調査を行っていく。

USN

MIDASの技術を知る科学者たちの捕獲へ

MIDASの所[illegible]たUSNは、MIDASの消失により大幅な作戦変更を余儀なくされる。それはMIDAS本体ではなく、MIDASに関わった人々へターゲットが移行したことにある。以後USNは、日本人科学者たち（主にアリサ）の捕獲へ向け、大規模な軍事行動を起こすようになる。その一環となったのがアリサ編における、台湾に対しての上陸作戦である。

もともとUSNとOCUは対立国であり、この大規模な軍事行動は両国間の情勢の悪化として報道される。諜報機関の発達していない日本政府は、その情報を鵜呑みにしてしまったが…。









大漢中

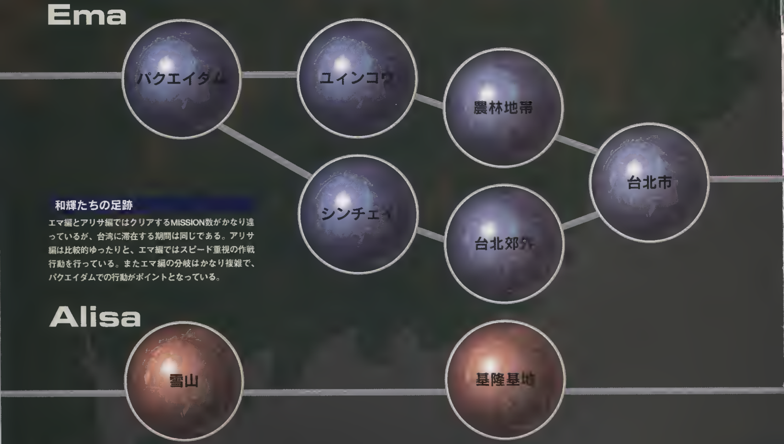
あらかじめ潜伏させていた[illegible]が動き出す

USNと同じく事件の真相を熟知している大漢中もさっそくMIDASに関わった科学者たちの捕獲に走る。エマ編ならルカーヴがその任を担当し、アリサ編ならリュウがその任務に就く。結果的に一番無駄なく作戦を実行できたのは大漢中のみで、他国は遅れを取ることになってしまう。ちなみに大漢中国内では、大漢中軍艦隊の消滅事件に関しての情報は一切報道されていない。主に報道されている内容は、反政府ゲリラ華蓮団の情報で、これは報道機関が政府によって管理されていることを如実に物語っている。

ルカーヴの野望を阻止

台湾エリア

台湾へ上陸するに至った経緯は、エマ編とアリサ編で大きく異なる。しかしここで行われるUSNの上陸作戦は、歴史に残る事件となった。USNの目的は、科学者の捕獲であり、MIDASに関する情報の漏洩を防ぐことでもある。特にアリサ編では機密保持という概念が如実に現れ、捕獲ができない場合は抹殺せよ、との命令が下されていた。



和輝たちの足跡

エマ編とアリサ編ではクリアするMISSION数がかなり違っているが、台湾に滞在する期間は同じである。アリサ編は比較的ゆったりと、エマ編ではスピード重視の作戦行動を行っている。またエマ編の分岐はかなり複雑で、パクエイダムでの行動がポイントとなっている。

USN軍がとった上陸作戦の違い

台湾へ上陸したUSNの目的は科学者の捕獲及び抹殺である。エマ編ではルカーヴによってさらわれたアリサを救出するため、USN海軍の力を借り和輝たちが出撃する。アリサ編ではMIDASに関わった科学者（アリサ）を捕獲及び抹殺をするため、USN海軍が台湾へ上陸する。

エマ編とアリサ編での大きな違いは、この作戦を成功させるために協力を求めた組織にある。エマ編では純粋に和輝たちを含めたUSN海軍しかこの作戦に参加していないが、アリサ編はいろいろな人や組織に協力を求めている。その一番の功労者が華蓮団である。華蓮団は大漢中の政府に反抗するゲリラで、USNがバックアップをしている。また、スペンダーのユンを雇い、アリサを国外へ脱出させないようにしている。

結果的にこの作戦は双方のストーリーとも失敗に終わることになる。しかしUSN海軍がとったこの侵攻は、さまざまな国から批難される対象となった。それでも国際間の大きな問題に発展しなかったのは、USN海軍が軍事施設及び政府関係者の拘禁等を行わなかったからである。USN海軍の行動はあくまでも科学者たちの捕獲であり、台湾を制圧する目的ではない。よって作戦が失敗した後は直ちに撤収。MIDASの情報を入手していない国々にとってはUSN軍のとった行動の意味をつかむことができなかった。



▲USNがとったこの軍事行動は、各国の報道機関で“謎の行動”として受け止められる。

するために



グループ・ブローブヌイ
エマ編で初めて登場するイマジナリーナンバー部隊。アリサ編ではチャーリーが和輝たちの行く手を阻む。

エマ編のチャーリーは陽動としてシャンシーへ。和輝たちの行動内容により戦況は変化するが、とりあえず苦戦を強いられるようだ。

●福台トンネル入り口
アリサ編ではOCU海軍のマーカス（チーム名はブラボー）が福台トンネルの入り口に登場。エマ編では大漢中軍が行く手を阻む。

●基隆基地
ハン・ワンダオ
アリサ編では基隆基地の司令としてリュウを困らせる。エマ編ではヴァンツァー格納庫等で登場する敵に。

マーカス・アレン
和輝たちを台北市へ潜入させるため、マーカス率いるブラボーが囮としてクァンヤンへ向かう（エマ編）。

ハッタ・ミルザ
エマ編では和輝たちに協力してくれるハッタだが、アリサ編では華蓮団として雪山で登場。敵となる。

クレイ大使
USNの大使（実は大漢中のスパイ）。リュウたちに有益な情報を提供し、デニスたちにはウソの情報を流す。

ここでの戦闘内容によりストーリー展開は大きく分岐。ユィンコウはシャンシーへ行く途中に。シンチェイはクァンヤンへ行く途中にある。

コラム　部隊名でよく使用される隠語「ブラボー」とは…

アルファベット文字圏では聞き間違え易いアルファベットそのものを伝える時、そのアルファベットの頭文字を使用した単語に置きかえる場合がある。Aならアルファ（alpha）、Bならブラボー（bravo）、Cならチャーリー（Charlie）といった単語がそれ。そしてこれらの単語はよく作戦行動を行う軍隊の「部隊名」として用いられる。パロディ映画で話題を呼んだ「ホットショット」にもこの部隊名を用いたパロディが盛り込まれ、Aから始まる単語としてアルバトロス（albatross）が使用され笑いを誘った（アルバトロスは日本語で「アホウドリ」という意味）。数多くの戦争映画を世に送り出したアメリカにとって、アルファやブラボーはもはや常連の単語。「ホットショット」で使用したパロディもアメリカ人のツボを押さえたギャグといえる。しかし、元ネタを知らない人（日本人）にとっては別に面白くもない台詞として聞き流されてしまう（ただ言葉の意味だけで笑ってしまった人もいると思うが…）。この度の「フロントミッションサード」においてもブラボーやチャーリーといったおなじみの部隊のほかに、「クールフェイス」といった部隊名も登場する。こういった言葉をただ聞き流すだけではなく、その言葉に隠された意味自体を追求してみるのも、こういった作品を楽しむ上でのポイントなのかもしれない。



▲デニスの率いる「クールフェイス」。諜報員ならではの言葉の意味が隠されている？

アリサを巡って奮戦する大漢中軍とUSN海軍

Story

11月14日—16th Day—

大漢中のスパイだったルカーヴは、アリサ以外の科学者たちを殺害。行方をくらませた。科学者たちの死体が台北市郊外で発見されたことから、和輝たちは台湾への上陸作戦を開始する。

陽動作戦を担当したUSN海軍の協力により、無事台北市に到着できた和輝たちは、台湾に駐在するクレイ大使と接触。ルカーヴの情報を入手する。現在ルカーヴは漢光というヴァンツァーメーカーの社屋に潜伏しており、大漢中軍が来るのを待っているという。そして和輝たちは、夜になるのを待ってから、ルカーヴのいる社屋へと足を運ぶ。

漢光の社屋に潜入した和輝たちは、大漢中軍（常強軍）との戦闘を余儀なくされる。情報ではまだ大漢中軍と接触していないはずだったが、施設内部には和輝たちを待ち伏せする部隊が多数存在していた。

クレイ大使も大漢中軍のスパイであることを知った和輝たちは、USN海軍マーカス大尉の情報を得、大漢中本土へと向かう。

Ema-Flow Chart

15th Day 11月13日　作戦準備中

16th Day 11月14日　台湾への上陸作戦スタート

12:00　台湾への降下作戦開始

12:28 **MISSION 20＃パクエイダム**

14:34 **MISSION 21＃ユィンコウ郊外**

16:16 **MISSION 22＃農村地帯**

17:39　台北市内の酒家でクレイ大使と会う。その後場所を移動

17:50　台北市の郊外にある空き家でルカーヴの情報を入手

17th Day 11月15日　福台トンネルを抜けて

1:30　ルカーヴの潜伏している格納施設へ

2:40　格納施設への突入開始。待機していた大漢中軍と接触

2:45 **MISSION 23＃ヴァンツァー格納施設**

3:17　戦闘終了後、格納施設内へ突入

3:27　ハンの待ち伏せ部隊と遭遇

3:29 **MISSION 24＃テストセンター**

3:51　作戦を立て直すため、一旦空き家に引き上げる

8:30　マーカスからの連絡が入る。真相を確かめるため、USN大使館へ

10:37　大使館へ到着。敵の装甲車が仲間のヘリを撃墜。装甲車からマーカス登場

10:41 **MISSION 25＃USN大使館**

11:02　別働隊により大使館が破壊される

11:03　マーカスの情報によりルカーヴの居場所が判明。福台トンネルへ

マーカスが仲間に

13:55　福台トンネルに急ぐため、台北市内を通過

13:58 **MISSION 26＃台北市街**

14:21　市街戦を終えた後、福台トンネルへ向け移動

15:33 **MISSION 27＃福台トンネル入り口**

16:37　トンネル内にヴァンツァーを搭載した列車が送り込まれる

16:41 **MISSION 28＃福台トンネル内**

18:36　福台トンネルを通過

TAIWAN

陽動作戦と気付かれぬように

パクエイダムでの分岐は戦闘内容によって変化する。分岐の条件は和輝たちの行動を「敵が連絡するかしないか」。また「ダムを破壊するかしないか」も分岐の条件となっている。シンチェイルートを選んだ場合、ダムの破壊は分岐に関係しないが、ユィンコウルートを選んだ場合、ダムの破壊と敵の連絡が戦闘時のストーリー展開を左右する。が、結局のところ戦闘時の状態と会話が変わるだけで、大まかなストーリーには変化はない。

ルカーヴとラーブヌイ共和国、そしてバールとの関係

ルカーヴはバールによって創り出されたイマジナリー・ナンバーである。ラーブヌイ共和国も少年の頃のルカーヴは知っていたが、実際に成人したルカーヴの姿を知るに至っていない。それはまだバールがオルシャ国営研究所の所長であった頃、青年だったルカーヴを“死亡した”として報告書を提出していたからである。

この度の日本人科学者たちの殺害及びアリサの捕獲は、バールがルカーヴに下した指令であり、ラーブヌイ共和国が画策する「MIDAS計画」とは関係ない。ついラーブヌイ共和国が、バールとルカーヴを使い、今回の計画を実行したように思ってしまうが、あくまでもアリサの捕獲はバールがルカーヴに下した命令の一環であり、ラーブヌイ共和国はまったく関係ないのだ。

Ema　：MISSION20～28
Alisa：MISSION23～26　台湾編

MIDASが失われたUSNにとって、重要となるのは"MIDASに関わった人間"の確保である。エマ編はルカーヴにさらわれたアリサを救出するために軍事行動を展開。アリサ編では和輝たち（メインはアリサ）を捕らえるため、台湾への上陸作戦を開始する。今まで表立った行動を避けていたUSNが、アリサを巡り初めて直接的な行動を起こす。

Story

11月13日―15th　Day―
MIDASの投下により目的と行き場を失った和輝たちに対し、リュウは大漢中入りを進言。ファムが手配した輸送機に乗り込み移動する。しかしその途中、華蓮団と称する反政府ゲリラの攻撃を受け台湾へ墜落。台北市の北東にある大漢中軍の基地へ向かうこととなる。
基隆基地を任されているハンは、他人を卑下するイヤミな人物。リュウはそのハンに対し、大漢中へ渡るための協力を要請するが、あまり色良い返事をもらえぬまま、屈辱的な仕打ちを受けてしまう。ハンが当てにならないことを感じとったリュウは、USNのクレイ大使（実は大漢中軍のスパイ）から情報を得るため連絡を取りつける。
11月14日―16th　Day―
クレイから、USN軍がアリサの身柄を求め作戦行動を開始しているという情報を入手。一刻も早い台湾からの脱出を決意する。
11月15日―17th　Day―
さまざまなUSN軍の妨害を乗り越え、大漢中へ渡ることに成功する。

Alisa-Flow Chart

15th Day 11月13日　基隆基地司令ハンとの確執

輸送機がハッタ率いる華蓮団に撃墜される	14:05
MISSION 23＃雪山	**14:18**
台北方面に移動。近くにある大漢中軍の基地へ	14:40
基隆基地へ到着。ハン司令と逢う	17:32
クレイ大使に連絡。翌日の夜に会う約束を取りつける	19:58

16th Day 11月14日　大漢中軍のスパイ、クレイ大使

台北市の酒家でクレイ大使と落ち合う	23:30

17th Day 11月15日　USN軍の包囲網を破って…

基隆基地へ帰還。何者かのハッキングにより管制システムがマヒ状態に	3:21
敵襲。輸送機の格納庫が襲撃される	3:46
格納庫を襲撃した敵を追撃するため和輝たちは出撃	3:56
逃走中の部隊（パープルヘイズ）を発見。戦闘に	5:45
MISSION 24＃東港基地周辺	**5:45**
基隆基地へ帰還。福台トンネルへの出発にそなえ仮眠を取る	7:39
福台トンネルへ向け出発。途中デニスは別行動を取る	14:50
マーカス部隊に発見され戦闘に	17:59
MISSION 25＃福台トンネル入り口	**17:59**
福台トンネル内でチャーリーの部隊に狙撃される。装甲列車は走行不能に	18:47
MISSION 26＃福台トンネルターミナルエリア	**18:56**
福台トンネルを通過	19:43

各国はイマジナリーナンバーをどう捕らえているのか

世界最大の諜報機関であるFAIとCIU。この2つの機関はイマジナリーナンバーについてどのくらいの調べていたのであろうか。結論から言うと双方の諜報機関ともイマジナリーナンバーについての情報をほとんど入手していない。現時点ではFAIが、「イマジナリーナンバーという言葉がラーブヌイ共和国から発信されていること」、「イマジナリーナンバーが個人名ではなく組織名、あるいは諜報員たちの総称ではないか」という程度しか把握できていない状態だ。CIUはそれ以上に調査が遅れており、MIDASや日本の状態を探るのが最優勢されていた。ゆえにバールやラーブヌイ共和国が画策する「イマジナリーナンバー計画」が順調に進んでしまう。

魚雷にヴァンツァーを搭載したリュウとルカーブの思考の酷似

ラーブヌイ共和国のオルシャ国営研究所では、高い能力と優れた運動能力を持つ人類の製造に着手していた。スポーツマンや学者、政治家など、さまざまなな分野で活躍している一流の人たちから精子や卵子を回収、もしくは提供してもらい人工受精を行う…そうして生まれてきた子供たちがリアルナンバーの実体である。子供たちは幼い頃より特殊な教育プログラムを施され、能力の向上と共に製造者（ラーブヌイやバール）に対する絶対的な服従心を植え付けられる。しかし当然のことながら生まれた子供たちの能力にはばらつきがあり、あまり実用的な方法とはいえなかった。そこで、合成した人造遺伝子を人間の細胞内の遺伝子と交換し、代理母の子宮に着床させる研究が進められた。それがイマジナリーナンバーである。基本的にリアルナンバーとイマジナリーナンバーの製造過程は違っているが、誕生後に施す教育プログラムは同じものであった。

魚雷の信管を抜きヴァンツァーを搭載するという作戦は"知識"というよりはむしろ"発想"の方に近い。奇しくもリュウとルカーブの作戦が似ていたのは、育った環境と教育プログラム同じだったからではないだろうか。

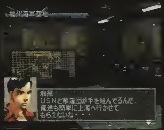
上陸から武漢への道

大漢中人民共和国エリア

和輝たちの奮戦も空しく、バタンガスでMIDASは投下されてしまった。物語は新たな展開を迎え、一行は大漢中人民共和国を目指す。エマ編ではアリサを助けるためにルカーヴを追い、アリサ編ではラーブヌイ大使館に行き日本へ帰る手段を見つけるためである。この広い大地を舞台に繰り広げられる、彼らの新たな戦いをたどってみる。

組織の力を借りて上海を目指す

現在の大漢中人民共和国はジエ主席率いる新政府が政権を握り、その政策に反発する人々が集まって結成された「華蓮団」と名乗る一団が、ジエを失脚させるために活動している。そのため各地では軍と華蓮団との衝突が絶え間なく続いていて、和輝たちもこの戦いに巻き込まれていく。エマ編でルカーヴを追いかける場合もアリサ編のラーブヌイ大使館を目指す場合も最終目的地は上海。この都市へ到達するまでの2週間にもおよぶ戦いが大漢中での物語だ。



◀目的のために和輝達は現地の組織と接触。



メイリン
ジュンの恋人。移動要塞完成時、軍に父を殺されている。父からは知らぬまに要塞の秘密を託されていた。

反政府組織華蓮団

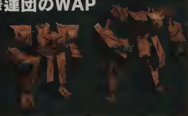
前国家副主席の黄漠順（ホアン・モッグション）が中心となって結成した組織。ジエ主席の政策に不満を持つ人々が集まって組織を構成している。広州に本部を構え、華南地方を中心に各地に支部を置いて反政府活動を繰り返している。最終的には上海へ侵攻してジエを失脚させるのが目的。エマ編では和輝たちとの出会いがきっかけとなり、上海制圧へ向けての本格的な行動を開始する事になる。

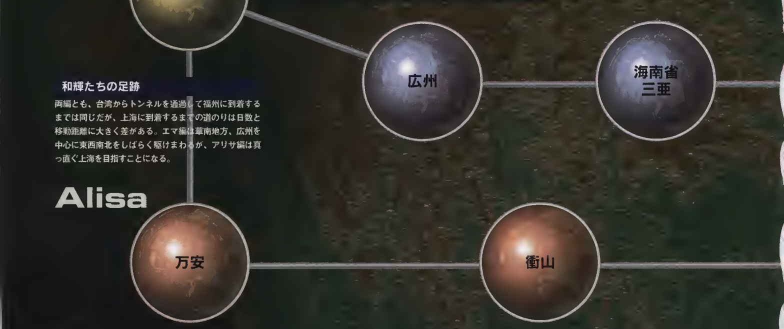


▶紅の色が特徴的な機体。ヴァンツァーは着彩されているが、ヘリなどはノーマルカラーで使用されている。左肩の「華」の文字が華蓮団を表す。

華蓮団のWAP

USNのディアブル・アビオニクス社製のヴァンツァーが主力マシンとなっている。ヴァンツァー以外にもUSN製の武器が装備の大半を占めているようだ。





和輝たちの足跡
両編とも、台湾からトンネルを通過して福州に到着するまでは同じだが、上海に到着するまでの道のりは日数と移動距離に大きく差がある。エマ編は華南地方、広州を中心に東西南北をしばらく駆けまわるが、アリサ編は真っ直ぐ上海を目指すことになる。

ホアン・モッグション
華蓮団の団長。国家副主席だったが、新政府に追われ華蓮団を結成するに至る。大義のためには多少の犠牲にも動ずることなく行動する。

ミン・コォワン
記憶を失っていたが、自分がミン次官の息子という真実を知ったことで、ジエ政権を倒すため華蓮団に入る。

ルオ・チェン
華蓮団副団長。女性であるため頼りなさげに見えてしまうが、決して弱音を吐かない芯の強い女性。

通信士
本部オペレーター。街へ和輝たちを探しに来た際、ユンから「ひょうきんな人」と言われる一面を見せる。

リン・チャオホア
軍の長官をしている父に反発し、学生でありながら弟と共に華蓮団へ入る。辛い事は一人で抱え込む性格。

リン・ウォベン
チャオホアの弟。真面目で控えめだが、兵士としての能力はホアンも認めるほど優秀な戦いをする。

グァンレイ
無錫で自動車工場を営んでいるが、USNの諜報員という顔も持つ。リィとホセは昔からの知り合い。

ランフォン
グァンレイの娘。父がスパイ活動をしている事は知っている。エマ編では父の死後、華蓮団に入る。

チャン・ヨウニン
福州の支部長。用心深い性格だが、仲間に対しては冗談や軽口をいうノリのよい人間性も持っている。

リシアン
航空機墜落の現場で生き残ったコォワンを助け、8年間育てる。大勢の人に慕われている女性。

ウェイ・チェンイ
イマジナリーナンバー計画の秘密を探る記者。デニスとは学生時代の友人だが、現在は交流を絶っている。

ジュン・シリアン
哮天雷閣設計者の一人。完成時に軍の口封じから逃れ、5年間身を潜め暮らしていた。現在は酒浸り。

ユエ・ユイジャン
高齢でありながら桂林支部長を勤めている。腕は立つが、眉唾確定と言える伝説の持ち主でもある。

ション
厦門支部長。人柄に多少問題があるが、能力は低くない。華蓮団のために厦門をしっかりまとめている。

ジュウン・ソンヤン
ホアンの信頼も厚い工作部隊長。人柄は温厚で部下からも慕われているが、戦闘には向いていない。

ジョウ・リェンホワ
軍の航空部隊にいたが、方針に納得できず華蓮団へ流れてくる。きつい性格だが他人を想う情は厚い。

スゥ・シュエセン
リェンホワの部下で同じように華蓮団に入る。臆病で泣き言ばかり言うが、土壇場には強い人物。

大漢中のエマ編には他にも登場人物がいる。台湾で仲間にしていなければユンが、貴陽から昆明への道ではリニーが現れる。

ウェン
上海を中心に活動している情報屋。呉龍のルドルフとは昔からの知り合いだが、少し彼を煙たがっている。

ウー
それなりの腕を持つスペンダーだが、マネーメイカーには及ばない。そのため彼女を強く妬んでいる。

ナン
大漢中軍に所属しているが裏では華蓮団とつながっている。組織の資金源である海底油田を管理している。



かすかな望みを求め 和輝は黄砂の大陸へ立つ

Story

11月15日―17th　Day―
　福州の町に到着した和輝たちは、デニスの知り合いを頼って華蓮団のアジトを訪ねる。目的の男ホアンは広州にいると知り、一行は華蓮団の本部へと向かう。
11月16日―18th　Day―
　ホアンと対面した和輝たちは、ルカーヴとアリサの捜索に華蓮団の組織力を貸してほしいと頼む。だがホアンは、デニスの頼みとはいえ突如押しかけた日本人をすぐには信用しない。そんな折、華蓮団と裏でつながっている三亜基地から、資金源の海底油田プラントに軍の視察が迫っていると通信が入る。ホアンは和輝たちを試すため、彼らにその始末を要請する。アリサ救出になんとしても華蓮団の助けが必要な和輝は三亜基地を目指す。
11月17日―19th　Day―
　海南省へ着いた和輝たちは、ナン司令官から視察団がすでに油田に向かったと知らされ、急いで追いかけこれに襲撃をかける。敵の殲滅に成功した彼らは、無事に広州本部へ戻りホアンの協力を得ることに成功する。

Ema-Flow Chart

17th Day 11月15日　デニスのつてで華蓮団を訪ねる

- 18:36　大漢中本土上陸
- 19:24　福州華蓮団支部到着。広州本部へ

18th Day 11月16日　和輝の熱意がホアンを動かす

- 08:47　広州華蓮団本部到着
- 09:17　ホアンと対面。協力を求める
- 17:05　華蓮団の助力を得るため、海南省三亜基地へ

19th Day 11月17日　華蓮団の協力を得るための戦い

- 07:33　三亜基地到着。油田プラントへ
- **08:05　MISSION 30＃三亜海軍基地油田プラント**
- 18:10　広州本部到着

デニスとホアンの過去 今の2人の関係

　華蓮団結成時にデニスはホアンの命を救ったとあるが、これはデニス個人の行動ではなく、USNとして彼を助けた可能性が強い。ジエが新たな主席となってから大漢中の国家姿勢は大きく変化し、ジエはそれまで係わりのあったUSNとのつながりを絶ち切ってしまった。この突然の反意と大漢中の現状の調査に、USNはFAIのエージェントを送ったと思われる。さらにジエに反発して暴動を起こした集団に組織を結成する気があるならば、USNが後ろ盾となり協力しようと、華蓮団の結成自体にも手を貸した可能性も否定できない。おそらくデニスは、ホアンではなく大漢中の「前国家副主席」の命を助けたのだろう。ホアンもそれがUSNの利益を求めての行動と理解しているため、恩義は感じていても心から仲間とは思っていないのだ。

閑話休題

街に生きる人

　繁華街や酒家に登場する人物を集めてみた。みな呼び名が個性的だが、一度しか出てこない貴陽とパロポのマスターに限っては「見た目」が個性的だ。


台北　店主
広州　不幸なバク
無錫　マスター


シティ市　からみ酒のカロン
広州　熱血一直線のソン
広州　楽天家のホウロン
永定　風水士のチン


台北　怒りのイーハン
永定　常連のミヨン
福島　故郷を思う一広


横須賀　よっぱらいの仁志
バタンガス　事情通のタルラ


鎮遠　恋するイーサン
上海　ウワサ好きのチャオ


台北　危ないチャン
鎮遠　悔やみのチョウ
南京　愛国のリョカ
福島　好人の政司


広州　見物人のキム
永定　くそ真面目なジュウホ
武漢　農家のハン


台北　優しいシュアン
上海　ヴァンツァー好きのムーアン


横須賀　日防軍好きの哲太
タバオ　熱血のロペス
無錫　あきらめのソウケツ
熊本　元日防軍の照夫


鎮遠　よそ者嫌いなボウ
南京　激怒のライハ


パロポ　からみ酒のラマン
バタンガス　冷静なコラン
桂林七星岩公園　観光客のツォン
貴陽　酒がすべてのロウ
武漢　塩まきのフェイ
呉　もの静かな和義


パロポ　小心者のザリーロ
広州　酔っぱらいすぎのフーチン
無錫　絶望のジン
熊本　ビビリの久志
熊本　臆病者の久志


横須賀　マスター
バタンガス　マスター
呉　マスター
熊本　マスター


広州　コック


万安　カン違いのウーザン
鎮遠　マスター
武漢　塩まきのフェイ
福島　マスター


貴陽　マスターのランディ


タバオ　主人
パロポ　主人
シティ市　主人
広州　さわやかクアンユー
万安　主人
武漢　主人


台北　マスター
上海　マスター


タバオ　マスター
シティ市　マスター
万安　マスター
広州　ウェイター


広州　主人
上海　主人


横須賀整備工場　おやじ


パロポ　マスター


横須賀　元コギャルの令子
広州　うれいのスウ
広州　不安のスウ
福島　怒りの京子
熊本　ときめきの令子
熊本　ウッキウキの令子


タバオ　商売人のサリア
シティ市　お色気のフォン
広州　思慮深いハクシ
貴陽　クールなシェン
武漢　玉のこしのレイ


パロポ　好奇心いっぱいのタン
バタンガス　悩みのアニタ
無錫　くじけないサイ


永定　戦争嫌いのスー
永定　ママ
南京　強がりのウィリン


広州　いいことなしのコラン
万安　強気のテェン
武漢　玉のこしのレイ
呉　普通のOL陽子


タバオ　平凡なイリガン
シティ市　びん感なミラー
桂林七星岩公園　観光客のファン
呉　テレビ好きの広美

Ema　：MISSION30
Alisa：MISSION27～28　大漢中編

和輝は内乱の渦巻く大漢中の土を踏んだ。現在この国は政府と反政府ゲリラの2大組織が争いを引き起こしている。和輝は、エマ編の場合は大漢中軍に、アリサ編では反政府組織の華蓮団に接触し、共に行動する。和輝たちは思想や戦う動機がまったく異なる視点から、この大陸で巻き起こるさまざまな出来事を追いかけていくことになる。

Story

11月15日―17th　Day―
リュウと共に福州海軍基地へ着いた和輝たちは、ようやく戦闘の緊張感から解放される。日も暮れた福州で、旅の疲れを取る。

11月16日―18th　Day―
華蓮団の襲撃を避けて上海へ向かうため、軍が誇る移動要塞「哮天雷関」と合流しようと衡山へ出発する和輝たち。途中立ち寄った万安補給基地には、ラン率いる快速反応部隊が華蓮団に関わる重要人物を探して駐留していた。夜半、リュウの頼みで近くに発見された華蓮団のアジトを攻撃する和輝たち。そこに快速反応部隊も駆けつけ、アジトは壊滅した。基地へ帰投後、街へ出た和輝は軍に追われているウェイという記者と出会う。彼こそランが探索していた人物で、和輝を敵ではないと判断したウェイは、現在彼が探っている軍の機密について語った。

11月17日―19th　Day―
大漢中が秘密裏に行っているという「非人道的な実験」の話に半信半疑の和輝は、リュウに不信を抱くも上海へ向けて進み出す。

ラーブヌイとザーフトラのつながり

11月16日、この日ザーフトラ共和国のゴルチャコフ大統領が、ラーブヌイ共和国を表敬訪問している。これは11月初頭に両国の間で講和条約が締結されたためで、ゴルチャコフ大統領は7日間の日程でラーブヌイ国営科学研究所や工業施設を視察した。両国の友好と理解を一層深めるためということがこの訪問の名目らしいが、長い間対立を続けてきた両国が、このような関係を築くに及んだ背景には何があったのだろうか。

先に講和を申し込んだのはラーブヌイ共和国の側で、ザーフトラ共和国もこれにすんなり応じている。この両国は共に経済の崩壊が著しい状態にあるため、互いにこれ以上の対立は得策でないと判断したというのが周囲の見解だ。一見、平和への歩み寄りが感じられるが、これにMIDASがからんでいると考えることもできる。ラーブヌイ共和国は金原子核線とイマジナリーナンバーの研究を今も続けているのは明らかだ。だがそのせいで国の経済も傾き研究の資金が底を突きかけているラーブヌイ共和国に対し、研究を嗅ぎつけていたザーフトラ共和国が協力を申し込んでいたとしたら…。両国が研究の成果を互いに独占しないなどの盟約をもって、今回の協力態勢に及んだという推測が可能だ。13日にフィリピンにMIDASが投下された件について、ザーフトラとラーブヌイの両国からは何のコメントも出ていない。だが可能性として今回の訪問は、MIDASについての密談とイマジナリーナンバーの研究をしている国営研究所の視察というのが真の目的にも思えてくる。

バール・ゴルボフスキィという人物について

リュウが仕えるバールは大漢中のラーブヌイ大使。主席ジエと共にMIDAS絡みで協力関係を築いている。一見、仲間同士に思えるが、大漢中情報部のバールに関する資料には「所詮は金次第でどうにでも動く売国奴」とある。バールはラーブヌイ本国の資料にも裏で何か企んでいると記され目をつけられており、大漢中政府にもまったく信用されていなかったのである。

Alisa-Flow Chart

17th Day 11月15日　大漢中軍と接触

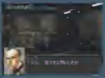
大漢中本土上陸	19:43
福州海軍基地到着	21:14

18th Day 11月16日　軍の機密を探る男

海軍基地出発	09:12
永安で快速反応部隊と遭遇	13:21
MISSION 27＃永安付近山間線路	**13:26**
万安補給基地到着	15:34
リュウの華蓮団討伐任務に同行	19:03
遂川の華蓮団アジト到着	19:51
MISSION 28＃万安近郊の村	**19:55**
快速反応部隊引き上げる	20:26
和輝、補給基地帰還	21:22
万安酒場でウェイと出会う	23:10
空家でウェイからイマジナリーナンバー計画の話を聞く	23:26

19th Day 11月17日　焦りだけがつのる日

リュウと合流	06:38






9

イマジナリーナンバーの出現
エマとアリサは自分の真実に近づく

Story

11月18日ー20th　Dayー
華蓮団の仲間となった和輝たちは、街で団員の女性兵リンと出会う。そんな折、宜章付近でリンの弟ウォベンが護衛している輸送部隊が軍に襲撃されたという通報が入る。和輝はリンと共に宜章へ急ぐが、現場に到着した時、部隊はすでに壊滅した後だった。待ち伏せしていた軍の部隊と和輝は戦う。
11月19日ー21th　Dayー
桂林の華蓮団支部まで、ジュウンの物資輸送を護衛する和輝たち。桂林に到着後、彼らは近くの村でたった1機の快速反応部隊兵が見たこともない部隊と争っている現場に出くわす。和輝は孤軍奮戦している男、リィに加勢して、初のイマジナリーナンバー相手の戦闘を経験するのだった。
11月20日ー22th　Dayー
デニスに旧友のウェイから、互いの情報交換のため会いたいとの連絡が入る。一同は彼と接触するため永定へ向かい、そこで軍の機密である「非人道的な実験」について聞き出すことに成功した。

Ema-Flow Chart

20th Day 11月18日　襲撃された輸送隊の救助へ

11:42　酒場で団員のリンと出会う
12:30　宜章で輸送部隊が襲撃される。和輝、救援に向かう
15:32　MISSION 31＃宜章山間線路
18:11　広州本部到着

21th Day 11月19日　武骨な戦士との邂逅

23:11　科学者の情報を得る。梧州へ真偽を確かめにいく
01:12 ⚠ MISSION 32＃梧州駐留基地近郊
03:32　広州本部到着
09:40　ショップでジュウンと出会う。輸送部隊警護で桂林まで同行
15:38　桂林華蓮団支部到着
16:32　龍勝で何者かが戦闘中との通報。和輝、現場に向かう
17:10 ⚠ MISSION 33＃龍勝ライステラス

22th Day 11月20日　デニス、旧友との再会

08:02　龍勝を出発
08:33　MISSION 34＃村落カルスト
09:04　桂林支部到着
14:19　広州本部到着。デニス宛にウェイからメールが届く
14:55　ウェイに会うため、永定へ向かう
16:13　永定酒場でウェイと対面
17:34　ウェイからイマジナリーナンバー計画の話を聞く
19:36　広州本部到着
22:44　華蓮団廈門支部からイヴァンの情報が入る

軍のエリート快速反応部隊 その機密性

華南地方を中心に勢力を拡大しつつある華蓮団の抵抗に対し、大漢中政府は彼らを一掃するための大作戦を行うと公式発表している。その中で軍の秘密兵器、「快速反応部隊」を投入する事を明らかにした。エマ編の宜章で和輝と戦った部隊こそこの快速反応部隊である。この部隊に関してはマスコミなどでも公式な確認はされておらず、規模や装備などの詳細は一切不明。一般には精鋭を集めたエリート中のエリート部隊と言われているだけだ。快速反応部隊を逃亡したリィやランが命を狙われることから、その機密性の高さを十分にうかがい知ることができる。

⚠ ユンと仲間とお金

台湾でユンを仲間にしていた場合、梧州にアリサがいるという情報はユンが和輝を軍に売るために流した情報となる。逆のルートで来た場合、情報は軍が和輝を誘い出すために流した偽モノとなる。前者の展開では、大金欲しさに仲間を裏切ったユンを和輝が激しく非難し、あげく彼女を殴るという、一風変わったシーンが見られる。

⚠ 孤高の戦士との出会い

龍勝で出会う男リィは、ホセがメンバーにいない状態だと仲間となり一緒に戦ってくれる。またこの後、桂林へ戻る途中の村落カルストでセロフとの戦闘が待っているが、アユタユで一度戦ったルートではなくオーストラリアで彼と会うルートの場合、戦闘後エマに関する話を聞ける。

閑話休題

ユエの伝説

華蓮団に身を置くユエ・ユイジャン71歳。晩年を迎えながらも、その戦闘技術はまったく衰えを知らない。「数年前のゲリラ戦で1000人を相手に闘った」とか「気合でヴァンツァーを倒した」との伝説まで残っている。到底信じられない話だが、ユエ本人からメールで届く証拠写真には、軍の来迎1型を徒手空拳で撃破するユエ老の姿が確かに写っている。老いてますます健在のユエ。もしこれらの伝説が真実とするなら、彼はまさしくマスター華蓮団といえる。ただし、ユエの部屋にはパソコンとスキャナが配備されていた。



▲王者の風を背に受け、ユエと華南地方は赤く燃えている…ような気がする。

Ema　：MISSION31～34
Alisa：MISSION29～34

上海へ向かう途中、「哮天雷関」という巨大な移動要塞が現れるが、この要塞は2つの物語の中で大きな相違点を持つ。エマ編の場合、華蓮団に属する和輝は哮天雷関を攻撃対象として破壊することになるが、アリサ編では軍の勢力に組み込まれているため、哮天雷関を襲撃してくる華蓮団と戦って退けるという展開になる。この要塞をめぐる戦いも、両編を追う上で重要な場面となる。

Story

11月18日ー20th　Dayー
　福州基地で軍用列車を調達し、和輝たちは衡山へ出発した。山間で華蓮団と戦闘になり列車を破壊されるが、呉龍の協力で無事に哮天雷関と合流を果たす。だが安息もつかの間、要塞は華蓮団の大部隊に襲撃され、和輝は再び戦場に立つ。軍は近くに野営している華蓮団の本拠地に総攻撃をかけるが、そのさなか、ランはひとりの少年を助ける。華蓮団を助けたランは反逆罪で独房に入れられてしまい、少年も身柄を拘束された。

11月19日ー21th　Dayー
　ランが助けた少年は、前国家主席次官であるミンの息子コォワンだった。軍はコォワンを公開処刑すると宣告する。和輝たちはリュウとランの協力で、コォワンを脱出させた。

11月20日ー22th　Dayー
　武漢の空港に着いた和輝たちはイマジナリーナンバーのイヴァンと出会い、襲われるままに彼と戦闘を始める。死の間際、イヴァンはアリサに何かを伝えようとするが、リュウが彼を射殺し言葉をさえぎってしまう。

コォワン脱出成功の要因と新条美穂の存在

コォワンは快速反応部隊が搭乗し鉄壁の守りを誇っている哮天雷関に捕まってしまう。和輝たちはコォワンを逃がすため奮戦し、作戦は見事に功を奏した。不可能に近いといえるこの脱出作戦を成功させたのは、さまざまな要素が重なった結果といえる。

作戦はまず哮天雷関のコンピューターにアクセスし、レーダーやカメラを使用不能にする段階から始まる。和輝たちは格納庫で無人機を破壊し、要塞の上部ハッチを開け外に出ているが、これらの行動が誰にも気づかれなかったのはなぜか。哮天雷関の隊員たちは、華蓮団の大部隊を退けた安心から乗員室で休息を取り、見張りの人間も油断から遊戯に興じ、居眠りをしていた。ブリッジも、コンピューターの異常はすぐにカタがつくと乗員たちに注意を促さなかったのだ。

さらに作戦成功の最大の要因は、美穂が哮天雷関のコンピューターをマヒさせたことだ。だがこれは凄まじい難題のはず。哮天雷関の乗員にもお手上げのハッキングをしかけ、レーダーに居もしない敵影が映し出されるよう、乗員たちとジュ隊長が見ている目の前で細工を行う。アリサも手伝ったとはいえ、これを美穂はやってのけたのだ。後に分かることだが、美穂の正体は日防軍の諜報員。そのオペレーション技能は、哮天雷関のオペレーターをはるかに凌いでいたということだ。作戦を立案し、自ら実行した彼女がいなければ、コォワンの脱出は叶わなかっただろう。

大成功したこの作戦だが、実行前、美穂にはひとつ懸念があった。和輝たちが、美穂のオペレーションは一介の婦人警官にできる範囲でないと、彼女の正体に気づいてしまうのではないかということだ。このとき美穂は、それでもいいと判断している。何よりも少年の命を救いたいし、和輝たちなら分かってくれると信じたのだ。結局それは杞憂に終わり、和輝たちは何の不審も抱かなかった。アリサが手伝ったということもあるし、哮天雷関のオペレーターの腕が悪かったぐらいにしか、彼らは考えていなかったのだ。この後の哮天雷関は、セキュリティーやオペレーターの問題の根本的改善を迫られる。

Alisa-Flow Chart

20th Day 11月18日　移動要塞「哮天雷関」と合流

軍用列車で衡山へ向け出発　09:12
華蓮団の襲撃で橋が破壊される　12:17
MISSION 29＃衡山道程山中　12:19
華蓮団の増援部隊が現れるが、呉龍登場で形勢逆転　12:31
衡山で哮天雷関と合流　18:35
華蓮団の襲撃。両崖の爆破で足止めされる　20:12
MISSION 30＃衡山近郊　20:19
和輝、華蓮団を追跡　20:52
MISSION 31＃衡山近郊　21:08

21th Day 11月19日　華蓮団の最重要人物を捕える

哮天雷関、華蓮団のアジトを襲撃。ランがコォワンを助ける　02:16
ランとコォワンは独房に入れられる　03:12
コォワン救出作戦を実行する　22:21
MISSION 32＃哮天雷関航空機格納庫　22:25
上層で爆薬が爆発　22:54
MISSION 33＃哮天雷関ヴァンツァー格納庫　23:13
ラン、コォワンと脱出　23:21

22th Day 11月20日　イマジナリーナンバーと初の戦闘

ラン、鎮遠まで逃亡し、コォワンと別れる　08:17
哮天雷関が武漢に到着。和輝達は補給基地へ　10:21
和輝、漢口空港到着　20:40
イヴァンと出会う　22:35
MISSION 34＃漢口空港　22:41





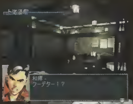

上海到達と日本への帰還

大漢中人民共和国エリア

大漢中での物語も終盤へ向けて動き始める。軍の立場、華蓮団の立場という、異なる視点からこの国の内情に係わってきた和輝。幾多の障害を突破し、彼等はついに上海の街にたどりつく。そこに待つのは、エマとアリサの存在を揺るがす衝撃の事実と、祖国の危機だった。大陸を離れ和輝が日本へ向かうまでの物語を追いかける。

日本でのクーデター事件

大漢中で和輝たちが戦いを繰り広げている間、祖国日本ではある重大な事件が勃発する。和輝とアリサの父、武村伊佐夫を首謀者としたクーデターが発生したというのだ。和輝は上海に到着してからこの話を知り（エマ編では事前に知るが、その時はアリサ優先で無視する）早急に日本へ帰る算段をする。華蓮団と軍の争いの結果を見届ける事なく、和輝は日本へ旅立つ事になる。



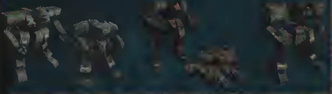
◀和輝は祖国の危機を知る。

大漢中政府と政府軍

介博了（ジエ・ボアリオ）を主席とする大漢中人民共和国は、世界でも有数の軍事力と勢力を誇る国家である。その政治中枢には軍人が多く、軍と政治家を兼任している人物が多いため軍と政府は非常に親密な関係にある。大漢中軍の総司令部は上海にあり、そこではキム・ウィウェン将軍が指揮を執り、華蓮団鎮圧の方策を巡らせている。軍は大きく陸軍と海軍に分けられ、陸軍はエリート集団の快速反応部隊、重戦闘車両を含む緊急展開軍、空挺装備からなる即時対応軍、国内の重要拠点に配置される標準部隊の常強軍から構成される。

大漢中軍のWAP

大漢中軍は部隊別で搭乗する機体が違う。快速反応部隊のヴァンツァーはやはり高性能なマシンで、リュウもこれと同じ機体を駆る。



和輝たちの足跡

アリサ編は武漢の街からなんの障害もなく上海に到着して、その後は間を置かずに日本へ渡る。エマ編の場合は華蓮団の上海侵攻が始まり、哮天雷関の撃破を皮切りに武漢、南京を制圧し一気に上海を目指す。和輝たちはここで華蓮団と別れ、単独で日本へ帰るルートを選ぶ。



ジエ・ボアリオ
現国家主席だが、ライバルを暗殺して今の地位を手にしている。軍の戦略にも積極的に指図する野心家。歴代の主席に比べ国民の支持は高い。

パール・ゴルボフスキィ
上海でラーブヌイ大使の任についている。祖国には内密でパールと手を組み、イマジナリーナンバーを操ってMIDAS入手を画策している。

キム・ウィウェン
大漢中人民軍の将軍で、上海基地総司令部から指揮を振るっている。ジエには媚びるが部下には厳しい人物。

シュイ・シュアン
武漢基地司令官。リィとは旧知の間柄。味方の危機を放っておけない、他人に優しく自分に厳しい好漢。

ツァオ・リンアル
父親が議員をしていて、軍の中でも他の兵より待遇よく扱われている。その事を言われると少々キレる。

●イマジナリーナンバー

ルカーヴ・ミナエフ
パールの最高傑作といえるイマジナリーナンバー。パールのしもべを演じながら、MIDASを使って世界に新国家を興す計画を立てている。

ジオール・ボグダーノフ
ルカーヴの側近の一人。イマジナリーナンバー部隊の中でトップの能力を持ち、部隊の指揮をとっている。

ロザヴィア・グレーフェ
ジオールと同じく、ルカーヴに仕える者の1人。イマジナリーナンバーの中でも特に感情を持たない女性。

グループ・プローブヌイ
ジオールやロザヴィアより能力は劣るが、部隊の中では優秀な兵。多少感情らしきものが見受けられる。

シア・ズウェン
南京常強軍の軍長。上層部に対して反抗的な部分がある。作戦で同行する呉龍にも良い感情を持たない。

コウ
万安の街に構える補給基地の司令官。快速反応部隊の非道なやり方に不満を持つなど、人柄は良い。

ジュ・リエイン
快速反応部隊の隊長で、昨天雷関の司令官を務める。自分の命を失うよりも、使命を重視する軍人。

ラン・ショウホア
家族をテロで失い、華蓮団を壊滅するため軍に入る。和輝と出会い新しい生き方を見つけ、軍を抜ける。

リィ・ジャンメイ
作戦中に家族を死なせてしまい軍を去る。その後は各地の村を渡り、たった1人で政府と戦っていた。

●連雲港

ヤン
軍隊に所属していたが、老いと共につまはじきにされる。現在は軍艦解体所で廃棄船修理に励んでいる。

●呉龍

凄腕ぞろいの傭兵部隊。呉龍の名称は、大漢中の伝説に登場する大百足の怪物の呼び名に由来している。

スン・シュイアン
杭州常強軍の隊長。南京常強軍の増援のため黄山まで出兵するが、エマの襲撃に遭い命を落とす。

●福州海軍基地

リャン
大漢中に帰還したリュウが初めに訪れた福州海軍基地の司令官。この地方の華蓮団制圧に奮戦している。

ハーマン・グレー
USNの大使という役職にあるが、裏の顔は大漢中軍の諜報部員。台湾で和輝たちと接触する。

メイヤー・エドワード
CIUの諜報員。和輝に日本のクーデターを伝え、彼らを導く。日本人とOCUオーストラリア人のハーフ。

イヴァン・ラーザレフ
パールの研究所を逃げ出したイマジナリーナンバー。精神が不安定で、兵士としては未完成らしい。



動き出す華蓮団とルカーヴの反乱

Story

11月21日―23th　Day―
　華蓮団厦門支部から、軍を逃亡してきたイマジナリーナンバーの情報が入る。和輝たちは厦門へ向かい、イヴァンと対面してイマジナリーナンバー計画の正体を知る。
11月22日―24th　Day―
　快速反応部隊を撃破するため、自ら囮となって敵をおびき出す和輝。だがリュウの出現で作戦は失敗し、一行は本部へ退却する。途中休息のため立ち寄った村で、和輝は8年前暗殺されたミン次官の忘れ形見と出会う。
11月23日―25th　Day―
　和輝はミン次官の息子コォワンを本部へ連れ帰る。一方、華蓮団本部ではUSNスパイから移動要塞の情報を入手する。和輝は要塞を作った設計者に会うため、貴陽へ赴く。
11月25日―26th　Day―
　酒場についた和輝はジュンを発見。軍から逃げるだけの人生に絶望し、生きる気力を失っている彼を奮い立たせる。彼の恋人が知るという軍の機密パスワードを求めて昆明へ向かう。

Ema-Flow Chart

23th Day 11月21日　攻めに転じる華蓮団

00:07　厦門支部へ出発
07:48　厦門支部到着
10:10　イヴァンと対面
10:46　MISSION 35＃厦門華蓮団アジト
19:57　広州本部到着
22:19　和輝、快速反応部隊を倒すための作戦会議を開く

24th Day 11月22日　傭兵部隊「呉龍」との戦い

00:20　玉屏へ出発
05:12　MISSION 36＃飛鳳河川跡
05:31　リュウを撃破し、広州本部へ撤退する
07:40　鎮遠石屏付近でエマの休息のため近くの村へ
16:41　エマも落ちつき、和輝達は酒場へ
18:02　酒場でコォワンと出会う

25th Day 11月23日　移動要塞の情報を入手

03:03　コォワンと共に村を発つ
06:43　広州本部到着
10:00　ホセ(リィ)、仏山で友人と再会
10:55　MISSION 37＃仏山錦香池
12:04　広州本部到着。マイクロチップの解析に取りかかる
13:10　チップ解析終了。移動要塞「哮天雷関」の秘密に迫る
13:32　哮天雷関設計者に会うため貴陽へ向かう
22:43　貴陽到着。設計者ジュンを探す

26th Day 11月24日　哮天雷関攻略の手がかりをつかむ

01:22　ジュンを見つける。協力を得る事に成功
06:25　さらなる手掛かりを求めて昆明へ
08:20　MISSION 38＃黄果樹
12:15　昆明到着
12:32　[illegible]ンの協力で哮天雷[illegible]法を[illegible]

短命の宿命を背負うイマジナリーナンバー

　和輝たちは厦門でイマジナリーナンバー研究所を逃げ出してきたイヴァンと出会う。和輝と彼との対話の中に「イマジナリーナンバーは成功したとしても短命となる」という話が登場し、またイヴァン自身、ジオールとの戦闘に敗れ死を迎える際に、自分は「もう長くは生きられなかった」と告白する。
　ラーブヌイの研究所の資料に、イマジナリーナンバーは成長しても約40%がガンや遺伝子病で死亡すると記されている。この時のイヴァンは資料にもある遺伝子病に冒されていて、せいぜい残り1年しか生きることができない状態だった。また短命という点については、遺伝子病が発病しなかったイマジナリーナンバーたちも、これまでに長くて35年ほどしか生きた者はいないという。
　統計を信じるなら、ルカーヴをはじめとする成功例のイマジナリーナンバーでさえ、短い生涯を背負って生まれてきたということになる。しかし今後長寿の例が現れないとは限らない。エマやアリサも短命とは限らないのだ。

グァンレイの友人たち

　仏山でのシナリオは、リィとホセのどちらが仲間にいるかで微妙に展開が異なる。ホセは昔なじみのグァンレイ親子と久しぶりに会うため仏山へ向かい、そこで騒動に巻き込まれる。ホセはグァンレイがUSNのスパイとは知らないが、リィは彼の裏家業を知っている。リィの場合グァンレイから思わせぶりな口調で呼び出され、彼から娘のランフォンを守ってほしいと頼まれる。

頼もしき御曹司

　フィリピンのバリラー農場を訪れないで進んできた場合、この黄果樹がリニーとメタンヴァンツァーとの初対面となる。彼は遠く故郷を離れ、例の自家製ヴァンツァーの営業で大漢中までやってきている。これは両編とも変わらず、呉龍にからまれている彼をしょうがなく助けてやると、仲間となってしまい行動を共にするのだ。

Ema　：MISSION35～38
Alisa：MISSION35～38

上海を目指す旅もいよいよ佳境に差し掛かる。アリサ編はエマ編より先に上海に到着して大漢中での戦いも終わるが、エマ編では哮天雷閲の攻略がこれから開始され、数日遅れて上海へ到着する。ふたりの出生の秘密もここで明らかになるのだ。エマとアリサの物語は、上海の街を舞台にひとつのターニングポイントを迎える。

Story

11月21日ー23th　Dayー
　ラーブヌイ大使館に着いた和輝は、留守にしているバールを待つため大使館内で過ごす。
11月22日ー24th　Dayー
　和輝はバールとの対面を果たし、そこでエマとアリサがイマジナリーナンバーだったという事実を突き付けられる。事はバールの思い通りに進んだかに見えたが、突然のルカーヴの反乱が事態を急変させる。バールを殺害し、エマとアリサを連れ去ろうとするルカーヴに、和輝は戦いを挑む。
11月23日ー25th　Dayー
　エマとの再会を喜ぶアリサ。だがその夜、エマはルカーヴから届いたメールにショックを受け、理由も告げずに彼の元へ去って行く。
11月24日ー26th　Dayー
　和輝はUSN艦隊の事故の報告の中でルカーヴとエマが死亡したと知らされる。うなだれる和輝とアリサの前に現れたCIU諜報員メイヤーは、日本でのクーデター事件とルカーヴの生存を告げる。和輝はルカーヴを倒すため日本への帰路を急ぐ。

エマに届いたルカーヴからのメールの内容

アリサとエマは上海でようやく再会を果たす。だが喜びもつかの間、その日のうちにエマはアリサの元を離れ、ルカーヴと共に去ってしまう。原因は彼女に届いたルカーヴからのメールだが、その内容は明らかにならない。エマがアリサを捨ててまでして、ルカーヴの元に行かねばならない理由とは何だったのだろうか。

エマがメールの内容を読んだ時の「まさか、そんな!?」という驚きの様子。そして追ってきたアリサに「こうするしか無い」と、強制ではなく自分の意志でルカーヴと去っていく姿。そこからの推測だが、メールは「日本にオリジナルのMIDASがある」という内容だったと考えられる。エマは自分がMIDASを創ってしまった事に責任を感じていた。フィリピンでそれが投下されてしまった時は、深い悲しみと同時に安堵の気持ちも抱いていただろう。だが、MIDASはまだこの世に存在し、それが日本にあると知ってしまったら彼女ならどうするか。それを処分するために、エマは命を捨てる覚悟までしていた。日本にあると知らされても、その正確な場所が分からない彼女には、たとえ利用されると分かっていてもルカーヴの後をついていくしか道はなかった。なんとかチャンスをみつけてMIDASを破壊しようとしたのだろう。その事をアリサに知られないために、彼女は苦渋の選択をしたのではないだろうか。

グァンレイのスパイとしての力量は低かった？

USNの諜報員として大漢中の内情を探っていたグァンレイ。エマ編では哮天雷閲の情報と一人娘を残しこの世を去る。だが、娘にスパイという正体を知られていたり、ペンダントにマイクロチップを隠しているところを見つかるなど、スパイとしての能力は高くないのでは、と思わせる。リィも、ヘマをしたと告白する彼に「またか？」と聞く始末。人柄は悪くなかったが、足を洗うのが少し遅かったようだ。

Alisa-Flow Chart

23th Day 11月21日　目的の地へ到着	
上海へ向け離陸	00:31
上海空港到着	03:49
ラーブヌイ大使館到着	04:42
24th Day 11月22日　ルカーヴの反乱とバールの死	
亮五と美穂、街を偵察	17:56
和輝とアリサ、バールと面会	18:51
ルカーヴの反乱。バール死亡	20:06
MISSION 35＃ラーブヌイ大使館内	**20:10**
MISSION 36＃ラーブヌイ大使館外	**20:23**
呉龍と共に海軍基地へ	22:36
海軍基地到着	23:16
25th Day 11月23日　エマの離反	
エマにルカーヴからメールが届く	01:03
アリサがエマを追って上海動物園跡へ	01:33
ルドルフからアリサの危機を知り動物園へ	01:39
MISSION 37＃動物園跡	**01:56**
基地へ帰還。ルドルフから人探し屋を紹介してもらう	02:19
ウェンと会い、無錫のＵＳＮスパイの情報を得る	02:43
無錫、グァンレイの家到着	04:12
ルカーヴがＵＳＮ艦隊と合流	04:56
海軍基地へ帰還	06:11
イマジナリーナンバーと華蓮団、上海侵攻	11:27
イマジナリーナンバーを捕えるために南京へ	15:15
MISSION 38＃南京市政府	**16:11**
26th Day 11月24日　CIUエージェント登場	
ＵＳＮ艦隊が太平洋場で座礁	03:17
和輝、ＵＳＮ艦隊の事故を知る	17:22
和輝、アリサと東方明珠塔へ行き、メイヤーと出会う	18:03
日本へ出発	20:51



ふたたびめぐりあう兄妹
戦いの地は日本へ

Story

11月25日－27th　Day－
　哮天雷関の内部構図を見つけた和輝は広州に戻る。コォワンは華蓮[illegible]の一斉蜂起へむけて全支部に熱弁をふるい、華蓮団は衡山へ向けて、全部隊を進める。

11月26日－28th　Day－
　衡山に到着した華蓮団は大部隊で攻撃を始め、和輝たちも快速反応部隊を撃破しながら哮天雷関に突入する。ジュンの指示で動力部を暴走させる事に成功し､移動要塞の破壊を果たす。華蓮団は次の制圧目標武漢に攻め込む。

11月27日－29th　Day－
　南京侵攻の作戦は、エマが囮となっている間に和輝たちが市政府を攻めるというものだ。作戦は成功したが、和輝はエマや民間人の命を犠牲にしようとするホアンと決別し、自分たちだけで上海を目指すことにする。大使館で和輝は妹と再会するが、バールからエマたち姉妹がイマジナリーナンバーと教えられ衝撃を受ける。その直後、その場にいたルカーヴが突如バールに反旗をひるがえし、エマとアリサを連れ去ってしまう。

Ema-Flow Chart

27th Day 11月25日　上海制圧作戦開始

06:11	広州本部到着
07:59	コォワン、全華蓮団支部へ向けて演説
14:10	全軍を上げ衡陽へ出発
22:28	衡陽到着

28th Day 11月26日　哮天雷関陥落する

00:23	対哮天雷関作戦会議
05:45	**MISSION 39＃哮天雷関上層**
06:04	内部突入
06:08	**MISSION 40＃哮天雷関第一層**
06:18	**MISSION 41＃哮天雷関第二層**
06:28	動力部到達。暴走開始
06:35	**MISSION 42＃哮天雷関第一層**
06:54	哮天雷関、轟沈
07:30	武漢侵攻作戦会議
08:15	武漢へ侵攻開始
09:14	武漢基地、華蓮団の進撃を察知して迎撃用意を整える
16:52	和輝たち、武漢到着。橋へ向かう
17:23	**MISSION 43＃武漢大橋**
17:38	ジュウン率いる工作部隊到着
17:41	武漢補給基地に華蓮団の橋突破の知らせが届く
18:16	和輝、基地裏の蛇山到着
18:19	基地司令官が背後の華蓮団に気づく
18:26	**MISSION 44＃武漢補給基地**
20:13	上海侵攻作戦会議
21:43	和輝、屋台街でエマと対[illegible]

エマとアリサの過去には何があったのか

ラーブヌイの大使館でエマとアリサはバールと対面し、自分たちがイマジナリーナンバーだという事実に直面する。この時語られるオルシャでの過去が、証言者によって内容に違いが見られる。バールの話では、エマたちの両親は研究所から2人を連れ出し、イマジナリーナンバーの研究をUSNに売るつもりであった。逆に伊佐夫の口から語られる内容では、両親はエマたちを実験道具にしたくなかったため、命をかけて逃亡させたとなっている。真実はわからないが、現在の様子から以下のような推測が可能である。

研究所を逃亡したその日、エマが追いつめられた現場にUSNが救助にやってくる。バールは証言で、これこそ両親がUSNと手を組んだ証拠だという。USNはエマがイマジナリーナンバーと知っていて、MIDASを造らせるために利用した、というのだ。確かに偶然その場所にUSNが現れるとは考えられない。この指摘にエマも動揺し、バールの言葉を信じ始めるのだが、この言葉には裏付けがない。

なぜなら現在のFAIの報告書には、イマジナリーナンバーという存在は捉えているが、それが具体的に何を指すのかまだ分からないとある。またUSNは、人工的に優秀な人間を製造する研究には取り掛かっていない。もし、USNがエマの存在を知っていたなら、彼女は実験の道具として扱われていただろう。とすればバールの言葉はエマを味方にするための虚言と思われる。考えられる可能性は、両親がUSNと手を組んで逃亡しようとしたのは事実だが、そのとき売ろうとした情報は金原子核線に関する内容だったというものだ。娘が人工生命という話はUSNには伝わっていない。やはり伊佐夫の言うように2人は愛され、両親が命を賭けて逃亡させたのだろう。

DaHanZhon

物語は中盤を終えようとしている。哮天雷関の撃破を皮切りとし、ついに和輝は華蓮団と共に上海へ動き始めるのだ。大漢中でのふたつの物語を見てきたが、両編には「仲間」に関して相違点が存在する。アリサ編だとリュウや美穂に和輝は騙されているが、エマ編では和輝は裏切りにあうことなく最後まで信頼は続く。

11月28日ー30th　Day―

和輝はルカーヴの居場所を突き止め、エマたちが捕らわれている塩城ミサイル基地へ向かう。現場に到着し、和輝たちは基地内でようやくルカーヴを追いつめるが、エマとアリサが人質となっているため手出しできない。そこへ突如リュウが現れ、スキを突いて撃破する。リュウはエマたちを殺そうとし、和輝は彼を倒して2人を助け出した。一同は連雲港へ向かい、ヤン老人の助けを得て、日本へ渡るための揚陸艦を手に入れる。

Ema-Flow Chart

29th Day 11月27日　華蓮団との決別とアリサの救出

03:15	ポーヤン湖へ移動開始
06:38	ポーヤン湖到着
06:52	大漢中軍偵察機発見。これを撃墜
07:09	**MISSION 45＃ポーヤン湖**
07:32	エマ率いる陽動部隊出撃
08:23	陽動部隊、南昌到着
09:11	陽動部隊、黄山へ出発
09:18	華蓮団主力部隊、南京へ侵攻開始
10:53	南京常強軍、エマの部隊を発見。呉龍は南京へ向かう
11:04	**MISSION 46＃黄山山中**
11:41	華蓮団、南京到達
11:47	**MISSION 47＃南京大橋**
12:02	和輝隊、南京市政府に向かう
12:06	エマ隊、黄山脱出中に大漢中軍を発見
12:09	**MISSION 48＃農村**
12:33	和輝、市政府到着
12:36	**MISSION 49＃南京市政府**
13:11	華蓮団、南京制圧
15:12	和輝、エマの危機を知り黄山へ向かう
16:10	**MISSION 50＃農村**
16:34	エマと合流。南京へ帰還
17:34	和輝、華蓮団と決別
19:44	和輝、上海到着
19:53	**MISSION 51＃新上海空港**
20:02	列車で大使館へ
20:21	**MISSION 52＃大使館前**
20:38	大使館内に突入。アリサとエマがルカーヴにさらわれる
20:43	**MISSION 53＃大使館内**
22:23	上海郊外で作戦会議。無錫のヴァンレイの家へ
23:27	無錫到着。ネットの情報を得て塩城ミサイル基地へ向かう

30th Day 11月28日　日本への帰還

06:12	和輝、塩城到着。パールがルカーヴに殺される
06:16	**MISSION 54＃塩城ミサイル基地跡**
06:26	和輝、基地内突入
06:31	**MISSION 55＃塩城ミサイル基地内部**
06:58	エマとアリサを救出。無錫へ引き返す
11:39	無錫。日本へ行く船を入手するため連雲港へ
16:43	連雲港到着。謎の老兵とＵＳＮ軍現る
16:45	**MISSION 56＃連雲港軍艦解体所**
17:14	ヤン老人の協力で揚陸艇を入手
18:03	日本へ出発

南京の市民はなぜ避難していなかったのか

和輝は華蓮団と共に戦ってきて、ホアンのことを完全に信頼し仲間と思っている。だがホアンはテニスや和輝たちを心から仲間として信頼していない。南京制圧後の「奴らは所詮よそ者だ」という言葉でもそれは明らかだ。哮天雷関のへの突入や、武漢補給基地の制圧を和輝達に頼んだのも、彼等の実力を評価したというのもあるが、所詮は優秀なコマ程度にしか考えていなかったからであろう。ホセや亮五の「俺達は死んでもいいということか」というセリフは、ホアンの真意を正確に突いていたのだ。

和輝たちが南京に突入したとき、民間人はまだ避難をしていなかった。作戦会議上ではホアンは華蓮団の指揮による市民の避難を約束している。この食い違いはどういうことか。単純に避難活動が遅れたと考えることもできるが、理想のためなら犠牲もいとわないホアンを見ると、最初から切り捨てるつもりであった可能性が強い。だとすれば会議での提案は和輝やリェンホワを納得させるための嘘だといえよう。

ジエ主席と華蓮団に対する市民の声

ジエに不満を抱く国民は多く、現に華蓮団という反政府組織が誕生している。しかし、民主化の波がおしよせていた大漢中を、かつての社会主義状態に引き戻したジエを支持する国民も多い。実際、彼の支持率は歴代の主席を上回っている。華蓮団にしても同じことで、ジエを倒すように応援する市民がいれば、ただの戦争屋だと忌み嫌う市民もいるのだ。

人は自分に都合の悪い現実や未来を受け入れるのが難しい。結果、嘘だと認めなかったり、最後には悪だと決めつけ排斥しようとする。人間が人間を否定する限り争いが絶えることはないのだろう。

g

MIDAS事件の終結

OCU 日本エリア

日本でのクーデター勃発を知り、祖国へ帰ってきた和輝。風雲急を告げる展開のなか、和輝は伊佐夫との再会を果たし事件の全貌をつかんだ。日本人同士の争いを止めさせ、今度こそMIDASを破壊するために、和輝は再び戦火に身を投じる。ルカーヴとの最後の戦いに向け、最終決戦地沖縄を目指す彼らをどんな結末が待っているのだろう。

ルカーヴと佐々木の邂逅

日本でクーデターが発生し、そこにオリジナルのMIDASが存在すると知ったルカーヴは、イマジナリーナンバーを率いて日本へ向かう計画を立てた。その第一歩として、クーデターの首謀者である佐々木にコンタクトをとり、MIDASに詳しい自分の必要性を説いて売りこみ、オリジナルに近づこうとした。ただし表向きは、クーデター成功後の地位の約束や、ばく大な利益を求めるふりでもしていたと考えられる。

佐々木はクーデターの計画を推し進めていたが、切り札のMIDASはまだ完全に研究しきれていなかった。なぜなら横須賀の誤爆で科学者たちを失い、完全な複製を造るための人材が欠けていたからだ。配下の伊佐夫はクーデター計画に感づき始めており、一日もはやく事を起こさなくてはならない。そんな折、ルカーヴと名乗る外国人から、MIDASに関する技術提供を行うかわり、自分たちの亡命に協力するよう申し込みがある。佐々木にしてみれば製造法に精通しているという人物はぜひとも手に入れねばならない。また、MIDASの秘密を知る正体不明の危険な人物は、消さなくてはならない。こうしてルカーヴと佐々木は接近していくのである。



田中徳彦
佐々木派に属する福島基地の司令官。酒呑童子山の第8師団を襲撃するが、和輝たちの前に敗れ去る。



河田
アリサ編では沖縄基地の司令官。エマ編では佐世保の司令官として現れ、伊佐夫を裏切り佐々木派につく。



谷山牧人
熊本基地の司令官で最後まで伊佐夫と共に戦う。アリサ編だと熊本は最初制圧され、敵に捕まっている。

和輝たちの足跡

エマ編では九州がメインの行動範囲で、熊本を拠点とし本州には向かわない。アリサ編だと広島から始まり、北は遠く仙台まで戦いに赴くなど、かなりの広範囲を移動する。クライマックスは両編とも沖縄で、ルカーヴとの決着をつけるため海洋都市を最期の舞台とする。



クーデターの真相

日本国防軍の公式発表では、武村伊佐夫が反乱を起こしたとある。だが真相は佐々木こそこのクーデターの首謀者で、オリジナルのMIDASを切り札に日本はもとより世界を手中に収めようとした黒幕なのだ。彼は伊佐夫を計画の障害と判断し、彼にクーデター主犯の濡れ衣を着せて自らの計画を進行させようとしているのである。

喜多島
海田基地司令官。クーデターに対して中立の立場をとるが、それは責任の問題を恐れて行動できなかっただけ。

盛伸之
階級は中尉。佐々木派に対立しクーデターを鎮めようと奮戦する。新条美穂と相思相愛の雰囲気。

五木修
クーデターをなんとかするため単独でも出撃するという、思い立ったら行動せずにはいられない性格。

●郡山高層都市

金井宏道
郡山高層都市を拠点とする佐々木派の司令官。戦いが敗色濃厚になると、部下を盾にしてでも逃走する。

●相馬ケ原基地

野中
佐々木派の相馬ヶ原基地司令官。郡山が和輝に制圧されると伊佐夫に投降し、クーデター鎮圧に動き出す。

武村伊佐夫
和輝とアリサの父親で、佐々木派に対抗する派閥のリーダー。全国に散っている味方をひとつにまとめ、クーデターの鎮圧に乗り出す。

滝口
伊佐夫の側近として彼の補佐を務め活躍する。生真面目な性格で伊佐夫にも信頼されている。

西山
呉海軍基地で伊佐夫と共に戦う。和輝たちが名古屋に移動する際に使用した、潜水艦の艦長でもある。

後藤利明
名古屋の磯貝司令官を軟禁し、佐々木派のために部隊を動かすよう説得する。黒井の理想の下に集った男。

磯貝国光
守山基地の司令官。佐々木派にも伊佐夫にも協力しないで中立の立場をとる。政府の声でのみ行動する。

佐々木正雄
現日本国防軍参謀長官。現状の日本を憂い、MIDASを使った武力行使で日本を世界の頂点に立たせようとクーデターを起こす。

黒井優二
政治家の道具と化している軍の現状を改革するため、佐々木の配下としてクーデターの実動部隊を率いる。

岡野
佐々木派ではなく、黒井優二の配下として、彼の理想の実現のために戦う。生真面目で一本気な男。

●千葉保養地

首相
佐々木によって千葉に軟禁されている。和輝に救出された後、全国にクーデターの真相を公表する。

佐々木派の政治家
佐々木と手を組んで日本を手中に収めようとする。形勢が不利になると、佐々木を捕え伊佐夫に寝返る。



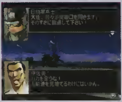


一輝の祖国日本で戦いは最終局面を迎える

閑話休題

戦う男の顔

各国をまたいで繰り広げられる戦いともなると、その戦場には無数の部隊が登場する。兵器類が国ごとに違うように兵士も国ごとに姿を変え、それは車両兵からヴァンツァー兵まで、実に多様なのだ。登場しては散るだけの名も無き兵士たちだが、見えない彼らの人生を思い浮かべるのはどうだろう。



▼ゴーグルの下に隠されたまなざしは、熱く、また澄みきっていただろう。

●OCU日本



神奈川県警機動隊

日防軍: 兵士 / 兵士 / 歩兵 / ヘリパイロット / 車両兵 / ヴァンツァー兵

日防軍特殊部隊: ヘリパイロット / 車両兵 / ヴァンツァー兵

闇夜に乗じて活動する日防軍特殊部隊はゴーグルが外せない装備。神奈川県警のフェイスガードは44口径のマグナムも通さないスグレモノだ。

●USN



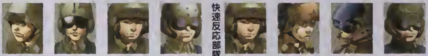
警察官 / 特殊部隊ヴァンツァー兵 / 海軍ヴァンツァー兵 / 空軍パイロット

●OCUフィリピン



歩兵 / ヘリパイロット / 車両兵 / ヴァンツァー兵 / MIDAS投下役パイロット / 反政府軍

●大漢中人民共和国



常強軍: 歩兵 / ヘリパイロット / 車両兵 / ヴァンツァー兵

快速反応部隊: 車両兵 / ヘリパイロット / ヴァンツァー兵 / ヴァンツァー兵



華運団: 兵士 / ヘリパイロット / 車両兵 / ヴァンツァー兵

リアルナンバー: ヴァンツァー兵 / ヴァンツァー兵

イマジナリーナンバー: 歩兵 / 車両兵 / ヴァンツァー兵

大漢中軍は常強軍と快速反応部隊のふたつに分けられているが、両者を外見だけで見分けるのは難しい。イマジナリーナンバーたちの身につけるゴーグルは高性能で、快速反応部隊にも支給されていない高級品だ。

●OCU軍



OCU陸軍: 歩兵 / ヘリパイロット / 車両兵 / ヴァンツァー兵

OCU海軍: 車両兵 / ヘリパイロット / 車両兵 / ヴァンツァー兵

OCU軍は海軍と陸軍が存在している。制服からヘルメットまでデザインはまったく一緒となっているが、彩色の違いで見分けることができる。また迷彩カラーを積極的にとりこんでいるのも特徴的だ。

OCU JAPAN

Alisa：MISSION39～44　OCU日本編－the last part－

大漢中で和輝が奔走する中、見えないところで事態は進展していた。MIDAS事件は舞台を日本へ移し、沖縄で収束していく。日本到着後の両編は行動範囲に大きな違いがある。エマ編では九州を戦場にし熊本の基地に陣を据えるが、アリサ編では全国各地を移動し、各地で戦闘をくり広げることになる。

Story

11月25日－27th　Day～
日本の浜田に着いた和輝は、呉を目指して高速道路を移動する。途中、佐々木派に襲われていた日防軍の兵士を助け、現在中立を保っている海田基地へ到着する。

11月26日－28th　Day－
明け方に海田基地は佐々木派の襲撃をうけ、善戦の甲斐もなく壊滅してしまう。和輝は呉へ急ぎ伊佐夫との対面を果たしたが、伊佐夫は部隊を動かして日本人同士が争う事に悩み、決断できずにいた。

11月27日－29th　Day～
伊佐夫はついに戦う決意をし、手始めに和輝は名古屋の磯貝を救出して協力を求める。だが彼は中立を貫き、あきらめた和輝は伊佐夫との合流のため仙台へと向かった。

11月28日－30th　Day～
帯広の部隊との合流を果たすため仙台で指揮を執る伊佐夫。そこへイマジナリーナンバーが襲撃してくるが、伊佐夫は自ら囮となって部隊を逃がそうとする。危ういところに和輝も駆けつけ、部隊も集結を果たした。

オリジナルMIDASの存在に気づいたルカーヴ

フィリピンに投下されたMIDASは日防軍が造ったコピーのひとつにすぎなかった。OCUは日本を初めから調査していたので、そのことに気づきメイヤーを派遣したのだ。だが大きな組織力を持っていなかったルカーヴまでもが、なぜオリジナルの存在を知り、日本へ向かう行動に出られたのだろう。それは、恐らく日本のクーデター事件が、オリジナルの存在を彼に知らせるきっかけとなったと思われる。

日防軍がアラスカからMIDASを強奪したこと、軍の内部で不穏な動きがあったことを、日本に目を光らせていた周囲の国家機関はつかんでいた。ルカーヴも日防軍がMIDASを使って行動を起こすと予測していた。だがMIDASはフィリピンに輸送され、バタンガスで使用されてしまう。ルカーヴもこの時はMIDASが消滅してしまったと信じた。しかし数日後、エマから爆弾の製造法を聞き出そうと上海で暗躍していたルカーヴは、そこで日本のクーデター事件を知る。日防軍はなぜ今、MIDASという切り札を失ったにもかかわらずクーデターを実行したのか。それは「バタンガスのMIDASもコピーで、オリジナルは日防軍が隠し持っていた」から。この結論に至ったからこそ、ルカーヴは佐々木にコンタクトをとり、日本へ向かったのである。

五木曹長は本当に死んでしまったのか

森林公園で出会う海田基地所属の五木曹長。彼は仲間の危機を見逃ごせず、危険を承知で飛び出すような和輝と良く似た熱血漢だ。彼は海田にイマジナリーナンバーが襲撃してきた際、武装なしで敵に立ち向かい、その若い命を散らしたかに思われた。この先は語られない話だが、呉の医療室で、五木は盛とベッドを並べて治療に精を出している。あの時盛は「自分が部下を死なせた」と悔やんでいるが、実は五木は数ヶ所の骨折を負いながらもヴァンツァーのハッチから這い出ていた。死ぬには惜しい若者を、天は見捨てなかったのだ。

Alisa-Flow Chart

27th Day 11月25日　日本到着。呉を目指す

浜田港到着。高速道路で呉へ向かう	15:03
高速道路上で救援を求める無線を捉える	17:39
MISSION 39＃森林公園	18:35
佐々木、海田基地に部隊を送る	18:50

28th Day 11月26日　親子の再会

MISSION 40＃海田埠頭	05:24
海田基地ミサイル攻撃により壊滅	05:39
呉海軍基地到着	06:42
和輝、伊佐夫と対面	17:10
伊佐夫、戦う決意を固める。作戦会議	18:11

29th Day 11月27日　伊佐夫、クーデター阻止に動く

潜水艦で名古屋へ出発	06:05
名古屋到着	15:01
名古屋下水処理場到着	15:42
MISSION 41＃名古屋下水処理場	15:48
化学工場にて黒井と後藤が対話	16:03
MISSION 42＃下水道地下水路	16:14
化学工場にて後藤とロザヴィアの対話	16:25
MISSION 43＃化学工場	16:39
磯貝救出。しかし協力は得られず	16:57
和輝、仙台へ出発	18:20

30th Day 11月28日　北の同胞と合流

伊佐夫が仙台でイマジナリーナンバーに襲撃される	05:47
仙台沖の和輝にルドルフから通信入る	05:56
和輝、伊佐夫の交戦現場到着	06:41
MISSION 44＃多賀城聖大橋	06:45
和輝、福島前線司令部到着	09:08
伊佐夫が郡山侵攻の作戦会議を開く	16:01

クーデターの終焉とその先に待つ真の戦い

Story

11月29日ー31th　Dayー
　再会を果たした武村親子。だが和輝はクーデター鎮圧に動こうとしない伊佐夫に幻滅する。夜、伊佐夫は和輝を基地から逃し、河田の裏切りで佐々木派に捕まる。
11月30日ー32th　Dayー
　多良岳観測所に逃げた和輝たちは黒井の襲撃を退け、味方の第8師団が駐在している酒呑童子山を目指す。福島部隊の攻撃を凌ぎつつ、第8師団と合流した和輝たち。熊本基地に到着し、そこを前線基地としながら反撃のチャンスを待ち、防衛戦を繰り広げる。
12月1日ー33th　Dayー
　熊本に本拠地を構えた和輝たちは敵の大部隊を迎え撃つ。和輝と亮五も二手に分かれ総力戦を挑み、戦いに勝利した。今度は攻撃に出ようとした時、クーデター軍から停戦交渉の使者、伊佐夫がやってきた。彼の告げた話は大漢中とルカーヴが沖縄に攻め込み、そこにあるオリジナルのMIDASを狙っているというものだった。クーデターはここに終わりを見せ、和輝は沖縄へ飛ぶ。

Ema-Flow Chart

31th Day 11月29日　父子対面

15:13	日本海軍の艦隊が現れる
15:43	MISSION 57＃日本領海内
15:51	滝口率いる海軍登場。和輝の危機を救う
16:21	和輝、佐世保基地に到着
17:44	伊佐夫と対面
18:49	多良岳観測所へ到着
22:21	伊佐夫が河田に身柄を拘束される
22:43	佐々木が黒井に多良岳攻撃を指示

32th Day 11月30日　第8師団との合流

02:52	黒井、多良岳到着。観測所を包囲
03:03	MISSION 58＃多良岳観測所
07:22	和輝、酒呑童子山へ到着。第8師団と合流
08:01	MISSION 59＃酒呑童子山
09:45	和輝、熊本基地へ到着

33th Day 11月30日　クーデターの終わり

03:13	熊本基地が、敵部隊の進軍を確認
03:21	大牟田市に偵察を送る
04:30	偵察部隊からの報告を受け、和輝たちは長浜へ向かう
05:04	MISSION 60＃長浜町付近
06:14	基地へ帰還
13:23	敵の大部隊、熊本を目指す。熊本基地は迎撃作戦会議
14:53	亮五部隊、阿蘇山麓到着
15:13	MISSION 61＃阿蘇山麓
15:33	和輝、大牟田市到着
15:38	MISSION 62＃大牟田市
16:34	佐世保基地より停戦交渉
17:20	停戦使者・伊佐夫、熊本基地到着
22:43	MISSION 63＃三角港
[illegible]:03	ホバーで沖縄へ出発

突然のクーデター終結　その裏では何が

　熊本基地から和輝たちが打って出ようとした時、佐々木派の停戦交渉によりクーデターは終わりを迎えた。そしてルカーヴがイマジナリーナンバー部隊と共に姿を消した後、幕僚本部の佐々木の元に大漢中軍の艦隊が沖縄へ向かっているとの報告が入る。ルカーヴの真意を理解した佐々木は計画続行をあきらめ、佐世保の河田に伊佐夫の釈放を命じた。そして伊佐夫に事態を説明し、クーデターの終結のため熊本への使者になってくれと頼む。佐々木は大漢中にMIDASを渡す事態だけは絶対にさけようとしたのだ。

エマ編とアリサ編における戦力の推移

　エマ編の日本到着時は、佐世保と宮崎、鹿児島と熊本の部隊が伊佐夫の味方であった。しかしこのとき佐世保の部隊はすでに佐々木派に属していた。熊本の谷山牧人率いる第8師団は佐世保から引き返し、酒呑童子山へ立てこもる。福岡第4師団が谷山を追跡し襲撃するが、和輝に阻まれ第8師団は熊本へ無事帰還。その後宮崎と鹿児島の部隊が熊本と合流するが、依然戦力は2対8と熊本基地が負けていた。その圧倒的不利を、エマたちの作戦で補い熊本基地はクーデター軍を撃退する。そして戦力差を4対6とやや不利程度まで運び、佐世保へ攻めて出ようとした段階でクーデターは終わるのだった。

　アリサ編は全国が舞台なだけあって巻き込む師団も多い。クーデター軍は練馬、相馬ヶ原、真駒内、福岡、那覇と横須賀の海軍基地が戦力。伊佐夫の味方は呉海軍基地、仙台、帯広だけで、守山基地と千僧、熊本はすでにクーデター軍に制圧されている。この段階の戦力比は2対8で伊佐夫不利という状態だ。和輝はまず守山の司令官を助けだし味方にしようとするが、守山基地は中立を保つ。伊佐夫は帯広の部隊と合流し、戦力は伊佐夫3対佐々木7となる。その後和輝が郡山制圧後、敵の主力の相馬ヶ原が投降してきたため、戦力は一気に五分にまで拮抗する。しかしその後、佐々木派は内部崩壊し、戦いは幕を閉じる。

Ema　：MISSION57～63
Alisa：MISSION45～51　OCU日本編－the last part－



イマジナリーナンバーを従え日本に赴き、佐々木と手を組んだルカーヴ。何かを企んでいた彼はついに行動を開始する。オリジナルMIDASの在り処は沖縄海洋都市と判明し、彼はそこへ向かった。その野望を止めるため、和輝は南へ向かって追跡を開始するのだった。ここではクーデターが一応の決着を迎えるまでのストーリーを追う。

Story

11月29日－31th　Day－
　福島に拠点を構え、全国の部隊と合流を果たした伊佐夫は攻撃に転じる。和輝たちは郡山高層都市に潜む敵部隊に奇襲をかけ、見事に制圧を完了。郡山の拠点が落とされた事で相馬ヶ原基地のクーデター部隊は投降を始め、佐々木の本部には動揺が走る。
11月30日－32th　Day－
　現在、国の首相はクーデター軍に捕まっていた。首相救出が戦いを終わらせると判断した伊佐夫は、盛中尉の協力で首相の居場所を千葉と突き止め、和輝たちは首相を取り戻すことに成功する。首相は全国にクーデターの真相を公表し、追いつめられた佐々木派は佐々木の身柄を拘束し伊佐夫に寝返る。
　和輝は、黒井とルカーヴが九州へ向かったことを知り後を追う。阿蘇の麓で黒井と和輝は激突し、敗れた黒井は自ら命を絶った。三角港でルカーヴに追いつく和輝だが、後一歩というところで逃げられる。和輝たちは彼の目的が沖縄のオリジナルMIDASと知る。

佐々木のクーデター計画が始動した日

　佐々木のクーデター計画は、数年前にアロルデシュで日防軍が全滅した事件から始まっていた可能性が強い。事件とは政府がOCU中央議会の要請で内戦が起きたアロルデシュへ派遣した部隊が、現地で全滅したというものだ。この当時から佐々木は軍備増強を唱えていたが、日本は専守防衛を主張しそれを聞き入れてはくれなかった。だが事件後、佐々木はアロルデシュでの部隊壊滅は装備の希薄さや日本の防衛主義に原因があるとし、軍備拡大の必要性を国民に説いて、日防軍の強化を計ることに成功している。
　この一連の背景には何があったのか、可能な限りの推測をしてみる。事件に対する報道では部隊は前線で全滅したとあり、アリサ編では美穂の口から「政府の命令で、戦闘行為を禁止されたまま前線に送られたんです」という台詞が語られる。日本政府が部隊を派遣したのは、OCUに対し発言力を持っていないという状況を改善するためであり、また政府は専守防衛を重視していたため、部隊に戦闘を禁止したのも事実と考えられる。だが、まさか戦闘行為を禁止した部隊を前線へ送るとは思えない。政府の意図が「部隊の派遣」という事実だけにあったなら、戦闘行為を極力回避できる後方支援に専念させるだけで十分だったはず。
　では部隊が前線で壊滅したというのは何故か。ここで一つの可能性として、佐々木の思惑が絡んでいると考えられるのだ。後方支援が目的の部隊に重装備は必要ないため、彼らは武器の類はほとんど与えられなかったはず。そんな部隊が偽の指示で最前線に送られ、そこで敵の襲撃を受けたとしたら、壊滅は免れないだろう。佐々木はこの部隊を壊滅させることで日防軍の「脆弱さ」を国民に印象づけ、たとえ専守防衛の基本理念は変わらずとも、せめて「敵部隊と対等に戦える」軍隊を持つ必要があるのだという、自己の唱える「軍備増強論」へ利用したのだと考えられる。
　そして佐々木の思惑通りに事は進み、日防軍は強化され、ついに2112年秋にクーデターを実行に移したのではないかと考えられるのだ。

Alisa-Flow Chart

31th Day 11月29日　敵の拠点郡山を制圧	
和輝、郡山へ出発	03:00
MISSION 45＃阿武隈川流域	04:32
郡山高層都市到着	05:40
MISSION 46＃郡山高層都市	05:45
MISSION 47＃郡山高層都市内部	05:53
伊佐夫に報告後、金井を追う	06:12
MISSION 48＃郡山インターチェンジ	06:52
野中が投降	07:11
和輝、福島へ帰還	11:26
相馬ヶ原基地が協力態勢に	18:26
幕僚本部。佐々木派、相馬ヶ原陥落に動揺	19:05
和輝、相馬ヶ原基地到着	22:30
32th Day 11月30日　首相救出と佐々木派の最後	
首相救出のため千葉へ	02:00
首相の監禁場所到着	04:19
MISSION 49＃千葉保養地	04:23
首相救出成功	04:45
相馬ヶ原へ帰還	08:11
首相が全国へ声明発表	12:00
佐々木派、首相の声明に動揺。佐々木の身柄を拘束	12:11
相馬ヶ原基地に佐々木逮捕の通信が届く	13:17
伊佐夫、幕僚本部到着	18:25
和輝、熊本へ出発	23:02
33th Day 12月1日　ルカーヴを追って沖縄へ	
熊本基地へ到着	06:23
黒井を追って阿蘇山へ	09:52
MISSION 51＃阿蘇山麓	10:27
ルカーヴを追って三角港へ	11:12
MISSION 52＃三角港	16:11
ルカーヴ逃走。和輝、一旦退く	16:29
和輝、イマジナリーナンバーの沖縄襲撃を知る	20:34
沖縄へ出発	22:34

MIDASの消滅
何かとひきかえの平和

Story

12月2日―Last　Day―

　和輝たちはルカーヴを追って海洋都市最下層へ到着する。そこには動力ユニットと一体化し、解体不能と化したMIDASがあった。和輝はこの区画だけを海に沈めるため制御室へ向かう。だがルカーヴは先回りし、すでに区画崩壊のプログラムを作動させていた。

　崩壊が進む中、伊佐夫とアリサも揚陸艦へ向かうが、突如現れたルカーヴにアリサは捕われの身となる。和輝は助けに行こうとするが、現状では無理と判断しその場は退く。崩壊が静まり、最下層が地上へ姿を現すと、和輝は突入してルカーヴと対峙。しかしアリサが人質のため戦えない。そこで伊佐夫は子供たちのため、その命を捨ててアリサを救い出した。そして和輝がルカーヴを倒し、一同は最後の脱出を図るが、アリサはMIDASを破壊するためにひとりとどまってしまう。和輝がアリサの不在に気づいた時、もはや引き返す事も叶わず艦は区画を遠ざかっていく。アリサはMIDASをこの世から消し去るため、起爆装置を作動させた。

Ema-Flow Chart

Last Day 12月2日　アリサが残したかったもの

06:05　沖縄瑞慶覧到着
07:16　連絡橋到着

07:18　MISSION 64＃沖縄連絡橋

07:55　海洋都市居住区へ到着

08:03　MISSION 65＃沖縄海洋都市上層部

08:17　ルカーヴを追って海洋都市内部へ

08:34　MISSION 66＃沖縄海洋都市中層部

09:02　海洋都市最下層に到達
09:07　コントロールルームへ向かう

09:18　MISSION 67＃沖縄海洋都市ユニット室

09:26　亮五部隊が上層に到着。民間人の避難活動を
09:47　和輝、コントロールルームに到着
09:52　区画分離、崩壊開始
10:12　亮五が民間人を連れて揚陸艇上陸地点へ

10:15　MISSION 68＃沖縄海洋都市湾岸施設

10:44　和輝、亮五と合流。アリサと伊佐夫脱出開始
10:58　アリサが脱出途中ルカーヴに捕われる
11:04　伊佐夫から和輝へ、アリサの危機を告げる通信
11:16　区画崩壊進行。動力室浮上
11:19　ルカーヴ、アリサと動力室に．揚陸艇へ和輝到着

11:25　MISSION 69＃沖縄海洋都市最下層動力室

11:38　海洋都市を緊急脱出
12:01　MIDAS起爆





ルカーヴが沖縄へ侵攻したのはいつだったのか

ルカーヴが日本へやってきてから沖縄へ向けて行動を起こすまでには、数日ほど時間がかかっている。彼は何を待っていたのだろうか。

　アリサ編の名古屋化学工場で、和輝たちに敗北した後藤に対し、ロザヴィアは「もうお前達に用はない」と告げている。おそらくあの時に、ルカーヴは行動を開始したと思われる。それまで作戦を実行に移さなかった理由があるとしたら、それはふたつ考えられる。ひとつ、ルカーヴが佐々木にまだ信用されておらずMIDASの在り処を知らされていなかった、または教えられていたがそれは偽の情報で、配下を使ってMIDASの場所を確認するまで動けなかった。もうひとつは、MIDASの場所は知っていたがエマからその製造法を聞き出していなかったため沖縄へ向かう時期ではないと判断し、自白薬などでようやく口を割らせた後に、事を起こしたというものだ。海洋都市までエマを連れていったのは、実物を見て完全に理解するための行動だろう。

　和輝たちのことを「計画に狂いが生じるので殺さなくていい」とルカーヴは言っているが、佐々木の意識をクーデターに向けさせるには和輝たちの抵抗が必要だったのだ。ルカーヴはこの時点で佐々木と手を切り、沖縄へ向かう行動を開始したと思われる。

エマ編　桐生悠一の事件を報じる記事

　大漢中軍の日本侵攻により始まった、OCU日本と大漢中人民共和国の紛争で、日本は以前OCU国内で起きた謎の爆発事故を大漢中人民軍の謀略であると発表した。また、日本国内で発生したクーデター事件にも関与している可能性があるとして、大漢中人民共和国と徹底抗戦の構えを見せている。

　これに対し、大漢中人民共和国政府は日本の発表を全面的に否定、一連の事件はUSNの新兵器の実験であると公表した。USN大統領は、新兵器の事実はないとして、この発表を行った大漢中人民共和国を非難し、OCU日本への支援を行う構えを見せている。

Ema　：MISSION64～69
Alisa：MISSION53～58　OCU日本編－the last part－

沖縄から始まった戦いは、その終焉を同じ沖縄で迎えようとしている。海洋都市を決戦地とする展開は両編とも変わらないが、その展開に大きな相違がある。アリサ編だとMIDASは消滅し、和輝たちには再び安息の日々が訪れる。エマ編の場合和輝はMIDASの消滅と引き換えに、伊佐夫とアリサを失うのだ。訪れる2つの結末を見つめていこう。

Story

12月2日ーLast　Dayー

和輝は海洋都市に到着しMIDASを求めて最下層を目指す。途中ルカーヴに追いつき戦闘になるが逃亡を許し、最下層へのエレベーターまで破壊されてしまう。やむなく和輝たちは地上へ戻り、再び別ルートから地下へ侵入。その後最下層にたどり着くことになる。

動力室には心を失った状態のエマが倒れており、MIDASはすでに作動を始めていた。ルカーヴは薬物を使って彼女からMIDASの製造法を聞き出し、不用となったオリジナルを和輝共々消去しようとしたのだ。和輝たちは地上へ戻り、制御室でこの区画を海に沈めようとプログラムを実行させる。崩壊が始まり、ガレキと化す周囲。和輝たちはルカーヴの部隊が上陸に使った揚陸艦に乗りこみ、緊急脱出を試みる。途中、イマジナリーナンバーを引き連れたルカーヴが最期の戦いを仕掛けてくるが、和輝はこれに打ち勝つのだった。揚陸艦は区画を遠ざかり、起爆したMIDASが何もかもをのみこみ消滅していく。そして、一行は日本へ艦を向け帰還の途に着く。

エマとアリサの　もうひとつの可能性

エマとアリサは、ルカーヴと自分を重ねたことはなかったのか？　彼はもうひとつの可能性をもった自分の姿なのだと。オルシャで育ててくれた両親がいなかったら、伊佐夫と和輝に出会わなかったら、自分たちも彼のようになっていたのかもしれない。人間を卑下し、その上に君臨しようと考えたのかもしれない。ルカーヴの人格と思想を形成したのは、研究所で育った時の環境が関係している。エマもアリサもそれを知っている。

2人はルカーヴに対し敵愾心を持っていたが、憎んだことは一度として無かっただろう。心の奥では、同じ境遇に生まれながら別の道を進んでいったルカーヴに、憐憫に近い情を抱いたのかもしれない。

アリサ編　桐生悠一の事件を報じる記事

沖縄海洋都市での爆発事故に関して、日本政府はクーデター軍の犯行であると断定。日本国内で発生した日防軍によるクーデター事件は、USNが開発した新型爆弾［MIDAS］が原因であり、軍の一部がこの新型爆弾を使い暴動を起こしたものと発表された。横須賀基地及びフィリピンバタンガス市での爆発も、この［MIDAS］が原因であり、日本政府は被爆国であるフィリピン政府に対し謝罪を表明し、MIDAS事件に関与したと思われるUSN、OCU、大漢中人民共和国を激しく非難した。今後、日本政府はフィリピン政府と共に、今回の事件の発端であるMIDASの研究を凍結させる意志を明らかにした。この日本の発表に対し、OCUは一切のコメントを控えている。

これに対し、大漢中人民共和国は国内で起きた内戦が日本とUSNの謀略であり、大漢中人民共和国も［MIDAS］事件の被害国であると発表。この発表に対し、USNは事実関係を完全に否定、MIDASの開発及び実験にUSNが関与している事実は無い事を明らかにし、日本に対して徹底抗戦の構えを見せている。

各国の［MIDAS］に関する問題は混迷の様相を見せており、解決にはかなりの時間が必要と思われる。

Alisa-Flow Chart

Last Day 12月2日　大団円

和輝、沖縄瑞慶覧到着	05:11
MISSION 53＃沖縄連絡橋	**06:32**
海洋都市へ上陸	07:04
居住区へ到着	07:27
海洋都市内部へ侵入	07:47
MISSION 54＃沖縄海洋都市中層部	**07:58**
最下層へのエレベーターを失い、一旦地上へ	08:23
民間人の避難中、イマジナリーナンバー襲撃	08:43
MISSION 55＃沖縄海洋都市上層	**08:45**
和輝、コントロールルームに到着	09:14
区画、分離開始	09:23
伊佐夫よりＵＳＮ艦隊接近の通信	09:29
MISSION 56＃沖縄海洋都市伝導ユニット室	**09:52**
和輝、最下層到着	10:15
MISSION 57＃沖縄海洋都市最下層	**10:18**
ルカーヴの意図に気づく。コントロールルームへ	10:42
コントロールルームに到着。区画を沈める	10:56
大漢中軍揚陸艇に到着	11:16
MISSION 58＃沖縄海洋都市湾岸施設	**11:26**
ルカーヴ最後の抵抗。和輝奮戦	11:55
MIDAS起爆	12:01





Ema

私は生きていく限りこの悲しみを抱き続ける。この悲しみは、生きるための力になってくれるはずだもの…

国際会議場執務室

USN大統領「マスコミの状況はどうだ？」
FAI長官「MIDASの件に関しては、OCUと大漢中の対立による紛争、大漢中による新兵器の実験として発表してあります」
USN大統領「わがUSNはMIDAS開発などしておらんし、MIDASはこの世に存在しなかったということか…」
佐々木「大統領、我が日本も大漢中の新兵器実験の被害国である事をお忘れな 我々日本は、今やOCUの存続よりもかつてのアメリカと日本のような友好的な関係をUSNに求めておりますので
USN大統領「ああ、わかっている。だが、君も食えぬ男 MIDASやクーデターの件はすべて大漢中とイサオ・タケムラに押 C が弱いとみるや我々にくら替えしようとする…」
FAI長官「日本人は昔から何一つ進歩が無いよ すな
佐々木「小さな島国が生き残る為の知恵ですよ 我 昔 こうして生き残 てきた」
USN大統領「まあ、今我々も日本と事を起こすよ も 友 を結んだ方か何か 便利た 役に立つ間は利用させてもらうよ」
佐々木「ご自由に、我々もUSNを利用させてもら す
FAI長官「大統領、時間です」
USN大統領「わかった Mr.ササキ、君にもあ さ を も お 同席 くれ
佐々木「わかりました、大統領」

USN大統領「親愛なる合衆国国民の皆さん。大漢 人民 国とOCUによる紛争は全世界に多大なる被害をもたらしま わか SNは

USN上空

USN軍パイロット「こちらUSN空軍 フィリピン国 ト 告く 貴殿は領 侵犯を犯している、直ちに飛行コースを変更せよ 繰り返す 領空侵 である、直ちに飛行コースを変更せよ 警告 わない場合、撃墜 る
USN軍パイロット「[フォーク1]から管制塔へ ノ か 応答無 撃墜するか!?
管制塔「こちら管制塔、シャトルか 救難 号か る そのまま待機し、状況を報告せよ
USN軍パイロット「[フォーク1]了解 」

USN軍パイロット「 こちら[フォーク1]、 レが何かを射 た ち ては迎撃てきない！ 繰り返す、 レ 何かか射 た

国際会議場

警察官「!?」

──上空からヴァンツァーが次々と降り

亮五「あたっ！
和輝「亮五、急げよ！ 早くしな 演 終 まうぞ
警察官「先に通すな、捕まえろ 」
和輝「突入するぞ！」

USN大統領「焦らなくても大丈夫てす 警察 従 落ち着い 避難を てくたさい」
FAI長官「大統領、早く非難を！
USN大統領「私よりも観客の避難を優先しろ！

──和輝、建物内部へ突入
FAI長官「大統領、早く非難を！
USN大統領「ああ」
佐々木「バカな？ 奴等は…死んたんてはなか た !
和輝「エマ、急げ！」
エマ「ええ！」

エマ「みなさん、落ち着いて下さい！ みなさん 危害を加 るつも はありません！ 私達は真実を公表するためにここ 来た す 私はUSN科学者のエミール・クラムスコイ 今回の事件の元 な MIDASの製作者てす USNは新型の爆弾としてMIDASを開発 ま そ を日防軍によ 奪取され、今回の紛争が起きたのてす すべての責任 MIDAを開発したUSNとそれを利用しようとした人たちにあるのてす
佐々木「ざれごとをほざくな!!」
和輝「佐々木！」
佐々木「貴様達が生きていたとは誤算 た 今 そ を叩 ぬようにしてやる！」
和輝「やめろ！ 何故、お前は同じ過 を犯そう する
佐々木「日本を守るためだ！ 貴様等 よ な甘い考えて 日本 え
和輝「ばか野郎 自分の過ちに気 た 者 何かてきる んた お前には何も救う事なとてきな !!
佐々木「ガキがほざくな！」

──佐々木、和輝に敗れる
和輝「この石頭め！」
佐々木「これまてか…殺せ」
和輝「ためだ あんたはこれから自分か きた事 責任を取る た 逃げる事は許されないぞ！」
佐々木「…

エマ「MIDASはUSN、OCU、大漢中人民共和国によって奪い合いがなされ けがえの無い多くの人命を失いました。そして、この事実は公表されぬまま、闇にほうむり去られようとしています しかし、私達はこの痛ま 戦争の記憶を、心に刻み込まなければなりません。二度とこの愚かな過ちを犯さない為に 私はここにMIDAS計画と技術による情報の凍結を宣言 ます 今後、MIDASの被爆国であるフィリピン政府を中心に監視組織を結成 …再びMIDASの悪夢が起きぬよう呼びかけていくつもりてす この放送を見ている全世界の人か、この宣言の証言者となるのです」
──和輝、静かに会場を立ち去る



一年後　ラーブヌイ　オルシャ

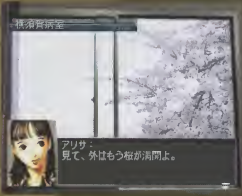
和輝「ここがアリサの…君達2人の故郷か…」
エマ「ええ…アリサと共に生まれ、育った場所。ここに残るアリサとの思い出は楽しいものばかりよ。私達は本当の家族だったわ」
和輝「本当の家族か…」
エマ「すべてが終ったら私は再びここに戻ってくるわ。家族の思い出が眠るこの場所へ」
和輝「そうだな、必ず戻ってこよう。その時は新しい家族も一緒にな」
エマ「カズキ？」
和輝「ん？」
エマ「悲しみは、いつかいやされてしまうものなのかしら…」
和輝「…」
エマ「私はきっと忘れない。私は生きていく限りこの悲しみを抱き続ける。この悲しみは、生きるための力になってくれるはずだもの…」
和輝「ああ、俺も決して忘れないよ…」

Alisa



横須賀病院

エマ　「…ん」
アリサ　「！　お、お姉ちゃん？　気がついたの!?　お兄ちゃん、お姉ちゃんが！　お姉ちゃんが！」
エマ　「…？」
和輝　「どうしたんだ、アリサ？」
アリサ　「お姉ちゃんが、意識を取り戻したの！」
和輝　「エマが？　本当か!?」
エマ　「…こ…こ・は？」
アリサ　「ここは横須賀の病院よ。お姉ちゃん、海洋都市を脱出してからずっと意識が無かったんだから…本当に心配したんだから…よかった…本当によかった…」
エマ　「…ＭＩ…Ｄ・ＡＳ？」
和輝　「心配しなくていい。MIDASは海洋都市とともに失われた。それに、日本とフィリピンを中心にMIDAS計画の永久凍結を各国に訴えているんだ」
アリサ　「そうよ、フィリピン政府との話もついて、ようやくMIDASの監視組織を設立する所まで来たの」
和輝　「海洋都市での爆発で確かにMIDASは失われた。だが、あれで終わらせては行けない。あの時が、始まりなんだ。あの悲劇を繰り返さないようにしなければならない。それが悲劇を生き残った者達の義務なんだから」



エマ　「…」
アリサ　「お姉ちゃん、起きたばかりなんだから無理をしないで。今はゆっくり休んで」
エマ　「…キ・レイ…な…ハ・ナ」
アリサ　「花？　ああ、桜ね！　見て、外はむ桜が満開よ」
和輝　「そうか、もう春なんだな…」
エマ　「サ…ク・ラ…」
アリサ　「そうだ、今度みんなでお花見しましょうよ！　お姉ちゃんの意識も戻ったんだし、お祝いしましょう」
和輝　「無茶を言うなよ、みんな忙しいんだぞ」
アリサ　「大丈夫よ、みんなそれくらいの時間は取れるわよ。あぁ、お兄ちゃん、お父さんと顔合わすの嫌なんでしょう…」
和輝　「…あいつは酒を飲むと説教くさくなるんだ。面倒くさいだけだよ」
アリサ　「お兄ちゃん、いつも怒られてるもんね。でも、ダメよ。みんな一緒じゃなきゃ意味が無いんだから」
和輝　「…わかってるよ！」
エマ　「…」

悲劇を繰り返さないようにしなければならない。
それが生き残った者の義務なんだから

オルシャ研究所

「これで今回の計画は全て終了です」

「多大な変更が必要だったがな」

「しかし結果は良好です。バールの裏切りにもけりがつきましたし、イマジナリーナンバーの精神コントロールについてのデータも入手できました」

「しかし、ミダスの入手はかなわなかった」

「その問題もいずれ解決するでしょう。新たなる子供達の成長さえ待てば…」

「そのためには、さらに予算を絞り出さなくてはならん。つらい仕事だ」

「期待してますよ。　首相」



THE END

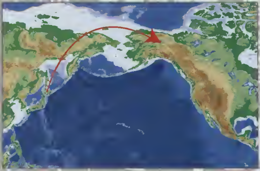
MIDAS強奪

MIDAS事件に関する最終報告

日防軍MIDAS強奪計画　全容

[ＭＩＤＡＳ強奪作戦要項]

目的1――MIDAS本体
目的2――MIDAS研究情報並びに運用機材
作戦地域――USN中央研究所、第21研究施設
作戦概要――無人設定されたWAPにて、移送予定のMIDAS本体を確保。
一時的な航空優勢を保持しつつ輸送機にて目標を運搬する。
注：現地工作員による事前準備完了確認済み
使用機材１――ＰＶＡ五式改攻撃機8機
（対地装備2・対空装備3・電子対策装備1・予備2）
PTA九式改二型強襲輸送機3機（予備1）
注：クラスター等、各種弾頭使用自由
補助作戦概要――輸送機の海上落下に備え潜水艦を待機。
作戦開始時間＋8分より0.1msecのビーコンを3度。
当該要員は機体保存よりMIDASを最優先のこと。
使用機材2――SUイ19潜　SUMイ201潜



攻略ルート

この計画実施に有利だったのは、対象目標がアラスカであった点。日本からは公海を経て部隊を展開しやすかったのだ。だが、この事実と作戦の成功から深読みすると、OCUの分裂を狙ったUSNが日本にMIDAS情報をリークし、奪取作戦をわざと成功させたと考えることも出来る。

MIDAS事件で日本が求めたもの そして得たものとは…

MIDASを奪取したのは間違いなくOCU日本であった。作戦を実行したのは日防軍であり、その行動について日本政府、いや日本政府首相が了諾していたのは事実である。では、なぜ日防軍はMIDASを確保する必要があったのだろうか。

まず日防軍は、浸透していた積極的防衛構想の一環として、核を超える抑止力としてのMIDASに着目したと考えられる。しかもOCU軍とは別に独自の防衛構想を展開するためには、絶対的な軍事力を保有するのが理想的であった。

日本政府にとっては、経済の停滞と旧来からの独自路線への移行が結びついたと考えられる。もともとUSNと同盟関係にあった日本は、生命線を押さえられた事を機にOCUへ加入している。だが国内の旧世代には今なおUSNに友好的な感情を持っている層が多かった。もしOCUから脱退し独自の政策、外交を展開できれば、USNとの協調によって経済低迷を打破できる可能性を持っていると考えたのである。そのためには外交政策を有利に進めるための武器が必要であった。そして、MIDAS奪取が成功する。しかしMIDASの確保が軍事的な優位をもたらした結果も、政治家の腐敗ぶりを露わにし、国内に理想への野心という楔を打ち込まれたのである。



■ 日本を取り巻く情勢

もともと地理的にも緊迫した地域にあった日本は、MIDAS事件を境にさらなる窮地に追い込まれていく。

横須賀爆発事件発生 MIDASを取り巻く国際情勢

日本政府並びに日防軍の誤算は、MIDASが横須賀基地で爆発したことであった。すでにこの時点でOCU中央政府をはじめ世界各国は、MIDASを日防軍が確保した事実をつかんでいる。しかし、それはあくまでも諜報活動によって得られた情報によるものであり、外交的な圧力を加えるに至る確証とはいえなかった。だが、爆発事故の発生は各国に大きなアドバンテージを与えてしまったのである。

USNをはじめ大漢中などの諸外国は諜報部員を横須賀に集中させ、情報収集から本体の奪取へと作戦を移行させていった。また、OCUは防衛上の問題と加盟国の規定を理由に、日本政府並びに日防軍に圧力をかけ、MIDASの引き渡しを強硬に要請してきた。こうして爆発事故をきっかけに、MIDASを取り巻く情勢は大きく動き始めたのである。

MIDASの移動ルート そこに秘められた意図

日防軍はOCUの圧力に屈し、MIDAS（コピー）をOCUに引き渡すことを了承する。その輸送は横須賀から厚木を経て、OCUフィリピン内のOCU軍基地へ向けて行われた。だが、このMIDAS移送の計画はあまりにもずさんであり、多方面に情報が漏れている。つまり、OCUへの移送はもとより日本の隠蔽工作の一環だったのである。

MIDAS奪取後、実行部隊は潜水艦で横須賀に帰還。その後、MIDASの本体は沖縄海洋都市へ移送され動力部の工事という名目で、民間に紛れ搬入した。また、MIDAS技術を極秘に入手するために日防軍はフィリピン襲撃を画策。もしこの作戦が失敗しても、MIDASの輸送計画をリークする事で諸外国がフィリピンのMIDASを奪取すれば、日本のオリジナル保有など疑われることはなくなるのである。

MIDASの確保 MIDAS情報の独占 そして、隠蔽工作のなかで

各国はMIDASを得ることで、国際外交における優位な立場を確保することを狙っていた。

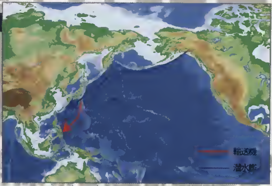
それにはMIDAS本体を確保することが第一目標であるが、その製造技術を確保するのも最優先項目であった。当然、目標の達成後は他者に同じ能力を持たせないための行動に出る。そのために各国の諜報員は複雑な動向を見せたのである。だが、沖縄でのオリジナルの爆発によってMIDASの存在が大衆に知れると、各国は自らが行った行為に対しさまざまな隠蔽工作を展開する。それはMIDASの存在の消滅どころか、国家関係の基本的な部分まで婉曲して提示されることになった。こうした動きの中、当事者たちは大国の論理に対して抗議すべく強行策も考えに入れ、さまざまな行動を展開していくのである。

MIDAS技術の凍結と 世界に残された問題

民衆や報道などのさまざまな動きによって、MIDAS技術は凍結される。しかし、この技術を凍結することで問題が解決したのだろうか。

実際、MIDAS技術の根幹である金原子核線理論は、エネルギー問題を含めさまざまな問題を解決する夢の技術である。経済格差はエネルギーの独占を経済格差に置き換えれば、現状のままで世界各国の紛争を抑えることは出来ない。

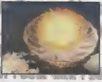
確かにMIDASは驚異的な兵器となりうるが、次世代エネルギーの理論としては人類に大きな可能性を提示してくれる。問題はその科学力を持ち得たときの人類のモラルなのではないだろうか。そのことをMIDAS事件は示唆しているのだ。



■ MIDASの所在

MIDASのオリジナルは奪取後横須賀を経て、沖縄に搬入された。その後は海洋都市の動力部に隠蔽する事で、極秘裏に保管する計画だったのである。

●ORIGINAL
沖縄海洋都市にて使用



●COPY1
フィリピンにて使用



●COPY2
横須賀日防軍基地にて爆破





■ 各国の作戦経緯

MIDASの独占が各国の目的であり、そのためには多少の犠牲も必要であると考えている。そして、確保後、もしくはその事実が大衆に露見した後は隠蔽工作に奔走する。



■ MIDAS技術を唯一理解する者

MIDAS技術を理解するのは、金原子核線理論を発表したクラムスコイ博士夫妻の子女であるエマ、アリサの姉妹のみである。

優秀人種製造プロジェクトの概要

ラーブヌイ研究施設 国家プロジェクトのなかで

ラーブヌイ共和国は世界経済が共同体を形成し、新たな発展を目指している中で特異な国家として存在していた。旧USSR時代より極秘に研究施設が建造され続けてきたラーブヌイでは、さまざまな方面における研究が行われており、その研究に各経済帯や国家から支援を受け、国家を運営していたのである。つまり、ラーブヌイでは研究施設の存在とそこで行われる研究が、産業として経済活動を担っていたのである。当然、21世紀後半になるとラーブヌイの研究施設にも、世界的冷戦の波が大きな影響を与えた。主軸の研究が、公然と軍事目的に転用されはじめたのである。もともと先進的な研究は軍事的側面も強く、ラーブヌイの場合はすべてが軍事的な研究であるといっても過言ではなかった。新兵器の開発をはじめ、工業、経済、物理、生物とその研究範囲は多方面に渡った。このような環境下、21世後半より国家プロジェクトとして、極秘裏に国営研究所で進められていた研究があった。その研究はあらゆる側面から優秀な人種を開発し、軍事、並びに政治に投入するというものであった。

微妙な利害関係の上に成り立つラーブヌイの外交

CIS（独立国家共同体）崩壊時より、旧東側の遺産を継承するザーフトラ共和国に、世界各国は注目していた。当然、社会主義の崩壊と経済的な混乱が続くザーフトラにとっても、西側の経済力は国政を安定させるためには必要なものであった。その利害関係の一致は、ザーフトラと旧西側諸国との間に協力体制を構築していった。この関係は共同体成立後も維持され、ザーフトラは世界的にも幅広い国交を持つ国となったのである。

ザーフトラと各国との関係は、共同体の枠を超えて存在していた。21世紀後半には極度の緊張の下にあったOCUとUSNとも、ザーフトラは国交を維持していたのである。そのため、ザーフトラ国内の派閥においても、利害関係の衝突は存在していた。また、研究成果の提供が各共同体に対して大きなアドバンテージとなり、ザーフトラの外交政策を有利に展開させていたといえる。



総合医療研究：ミンスク、ヤマルカ、ダボォフ各研究所
軽工業開発研究：ゴメリ、サバラフ、ビュキノスカ各研究所
重工業開発研究：ブレスト、トリエフ各研究所
政治科学研究所：ボブルイスク研究所
エネルギー・放射線研究：オルシャ研究所
投資工業研究：ゴメリ研究所

■ザーフトラ国営研究所

ザーフトラには公式非公式共に研究所か展開している。その全貌は国益の保護のために公表されていない。だが、さまざまな研究施設が存在していることは事実のようだ



■ハイレベルな施設

旧CIS時代には、前時代的な旧式施設が大半を占め、その存在意義は低下していた。しかし、西側の資本投下により、研究施設は急激に近代化し、現在は世界的に見てもハイレベルな施設となっている。



■ラーブヌイ対外関係

ラーブヌイの国際関係は複雑である。対外関係は研究施設による技術提供によって成り立つが、国際的なバランスを維持するために、平等な技術提供を国家の存続につなげている。

■各国への直行便

ラーブヌイには各国の主要都市へ直行便が就航している。そのため、敵対国などへのターミナルとしても多用され、また諜報活動の基点ともなっている。



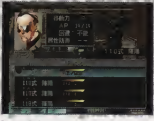
優秀人種の育成
最強の兵士の開発を目指す

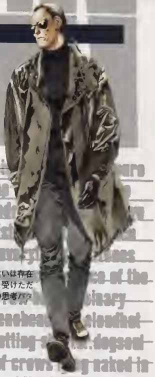
ザーフトラ共和国の国際的な環境下において、国営研究所は一つの答えを模索する。それが『優秀人種の育成』計画であった。どんな環境下においても、命令を実行できる最強の兵士。その開発が成功すれば、それはザーフトラ共和国にとって最大の産物となり得たのだ。

研究は人工的な配合と、環境の構築によるものから始まった。運動能力、並びに知能についても優秀な人材同士の配合から受精卵を生成。その後、研究所によって管理された環境下による出生、育成を経て、管理プログラムによる教育が行われた。この過程を経て育成された人種は「リアルナンバー（RN）」と呼称され、2090年代には実戦投入によるテストが行われている。

[目指す素材]

- どんな環境下でも任務を遂行できる頑強な肉体
- 情報の把握に長け、状況を明確に分析、対応できる高い知能
- 自我を持たず、組織に対しての奉仕に徹する
- 絶対的に上層部の命令に服従する





リュウ

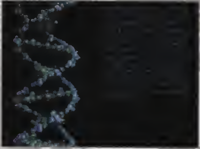
■RNの特徴

リアルナンバーと通常の人間との違いは存在しない。良血の人種が優秀な教育を受けただけであるが、教育課程の問題かその思考パターンに偏りが存在する。

配偶による制御から
遺伝子操作による製造へ

リアルナンバーは絶大的な威力を発揮するには至らなかった。確かに一般兵よりすべての能力において勝っているが、戦局を左右する程ではなかったのである。そのコストから見れば、結果は失敗であった。そこで、さらなる優良種の開発に研究は移行していったのである。研究の最大の進歩は、遺伝子の操作による配合種の生成を実現したことであった。遺伝子情報を書き換えることによって、更なる能力の向上を図った配合種は、誕生した時点ですでに人間の能力を超越したモノとなっていたのである。

この人種はイマジナリーナンバー（IN）と称され、2100年代には投入を開始。全世界にイマジナリーナンバーは展開し、世界各国の中枢にて活躍しているのである。



■遺伝子操作

遺伝子の操作は20世紀に、すでに確立していた技術である。しかし、人道的な観点から、その技術は凍結されていた。



ルカーヴ

■INの特徴

イマジナリーナンバーはすべての能力において、人類を凌駕している。しかし、遺伝子操作による後遺症により、精神的に不安部分があり、個体寿命も安定していない。

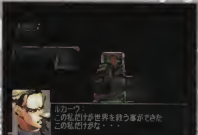
INの能力をも左右する
環境因子の影響力

イマジナリーナンバーは、遺伝子操作によって精神に支障をきたしているといわれる。そのため、独自の解釈と理念によって暴走することを、ルカーヴは示している。しかし、精神的な問題がすべて遺伝子操作によらないことを、エマとアリサは示した。ルカーヴと同じ資質であるはずの彼女たちは、優しさと人間らしさを失わなかった。

彼女たちとルカーヴの違い、それは明らかに環境の違いだったと言えよう。管理された中の機械的な養育と、養父母による愛情に満ちた養育。たとえ優良種といえど、その育つ環境によって人は変わることをエマ姉妹は実証したのである。良好な空間環境は、全てを凌駕する。イマジナリーナンバーの限界が何であるのか、それは彼ら自身が答えだったのである。

■遺伝子改造者の敗北

ルカーヴの敗北は、イマジナリーナンバーの計画に問題があったことを示している。特にその精神を構築する過程における環境に起因することが大きかった。

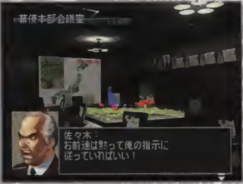




■優しさを持つ遺伝子改造者

エマとアリサはイマジナリーナンバーとして優良種的な能力を発揮した。しかし、彼女たちは優しさと人間的な人格を保ち続けた。これはすべてその育った環境によるモノであると推察される。

積極的防衛論に隠されていた意志





■軍部と外交

軍部は政府とは別に、独自の外交を展開していた。特にUSNとはいち早い国交の復活と、旧同盟国としての友好関係の回復を模索していた。

政治の腐敗と積極的防衛構想

政治家の指導力の低下は、決断の不明瞭さとともに、政治の腐敗を生んだ。その最たるものが海外へ派遣した日防軍部隊の全滅である。この政府の怠慢に対し民衆は怒りに沸き立ったが、経済中心の社会において、民主主義の基本理念は薄れて久しい。活性化されない民主主義は、政治家の腐敗を一層際立たせていった。

そんななか、軍部の右翼的思想主義派は、積極的防衛構想を展開していく。この思想は佐々木参謀長が唱える防衛構想であり、USNなどが抱えるものと同様であった。その内容は自国の防衛のためには積極的な行動、先制攻撃による危険の回避を容認するものである。つまり、武力行使による外交問題の解決、戦争行為を示唆するものなのだ。これはOCUの憲章からも否定される思想ではあるが、民主主義自体が疲弊している日本において、正面から否定する勢力は存在していなかった。逆に軍閥の政治家は佐々木の発言、行動を容認し、政治的にも積極的防衛構想に協力していくのである。



■機動強襲群

有事における初動作戦や、国内でのテロリズムに対応するための実行部隊組織。戦闘車両やヴァンツァーをはじめ、輸送機や支援ヘリコプターを配備する第一線級の組織である。



■新たな実働部隊

実働的な側面を持った機動強襲群は、その軍事規定とは別に独自の行動を取っている。強力な戦力と柔軟に対応できる組織の誕生は、軍部の大きな変化へつながる。

防衛軍の改革と参謀長の発言力の強化

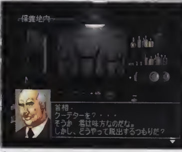
日防軍はその主流となりつつある積極的防衛論のもと、編成・改革されていった。特に政府の了承を受けて新規に導入された兵力は、戦術的な側面を強く打ち出したものであり、すでに防衛的な戦力とは言えないものである。その流れの中で日防軍の再編は着々と行われていった。特に着目するべき点は、戦術的要素が高い部隊として組織され、極秘編入された機動強襲群である。しかもこの部隊は参謀長の直属とされた。その結果、積極的防衛論者の佐々木参謀長は発言力を強化し、日防軍内での地位を強固なものとするに至っている。こうして佐々木参謀長は日防軍を掌握し、軍事的な行動を可能とする地盤を確立していった。

クーデターの目的と作戦概要

軍部を掌握した佐々木参謀長は、やがて組織をクーデターへと導いていく。それは佐々木参謀長がかねてより提唱していた積極的防衛論の、極端な具体化ともいえた。現在の政府に代わる軍部主導による支配体制の下、腐敗した政治家や官僚を一掃する…。すでに防衛軍の半数に思想的な賛同を得ていた佐々木参謀長にとって、作戦の懸念材料は実働部隊の展開のみであった。その作戦の主は、首相を拘束し国会の機能を停止するというものである。それにより国家の意思決定機関を停止させれば、クーデターは肯定されないものの、否定もされない。否定・弾圧さえされなければ、反対勢力や国外の勢力が介入することは不可能となるのである。その状況下で主要施設を制圧していくのが狙いであった。

［計画目標項目］

目標1――――――首相の身柄の拘束
目標2――――――首相官邸、国会、国家報道機関を制圧
目標3――――――首都交通管制の掌握
目標4――――――各地方司令の拘束
目標5――――――特殊放射線兵器の確保



■首相の拘束による議会の停止

首相は議会の運営を司る。首相が拘束された場合には、特別立法が国会で認証されるまで国会決議はできず、国会は運営できない。

首謀者佐々木参謀と対抗する武村大佐

クーデターの当初、日防軍は首謀者として武村大佐の名を公表した。武村大佐はかつて佐々木参謀長の右腕であったが、現在は独自の活動に移行しており、反佐々木派の急先鋒として注目されていた人物である。佐々木派は反対する勢力の頭目を、クーデターの首謀者とすることにより、その動きを封じ込めたのであった。事実、クーデターに対する勢力の対応は大幅に遅れたのである。

また、クーデター軍がその行動対象を国家組織やそれに準じる場所、並びに対抗する日防軍基地に限ったため、国民にクーデターに対する強い反抗意識が生じなかった。このこともクーデター鎮圧が遅れた原因の一つである。しかし紆余曲折を経て、最終的に反クーデター勢力は武村大佐の下に集結することになる。



■日防軍基地の動向

すべての日防軍基地がクーデター、反クーデターに分かれた訳ではない。中には国家の意思決定がなされるまで行動を凍結し、中立を保つ基地も存在した。



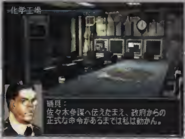
武村伊佐夫

かつては佐々木参謀長の右腕として行動していたが、現在は反佐々木派の象徴的な存在である。

大漢中の介入とクーデターの終焉

クーデターは結果として大漢中の介入を呼び込み、終結を迎えることになる。日本国内での対立は、他国のさまざまな思惑を揺り動かした。その影にMIDASの存在があり、動向に拍車をかけたのはいうまでもない。

クーデターの終結までには、思想的な歪みと対立がそこかしこに見受けられた。結局は元の鞘に収まっただけであったが、政治的にも軍事的にも大きな問題点を提示している。民主主義の根本には、軍部と政治の分離が必要だ。しかし、腐敗した民主主義は時として劇薬を求める。佐々木参謀に賛同した者たちは、軍部による制圧という劇薬を欲したのだ。日本でのクーデターは終結したが、抜本的解決がなされ、本来の意味の民主主義が立たない限り、歴史は何度でも繰り返すだろう。



■日防軍兵士の潜在資質

日防軍はあくまでも専守防衛の軍であり、国民の財産と生命の安全を守るために存在する。今回のクーデターにもその趣旨を貫き、中立的な立場を維持した兵士は少なくなかった。



■MIDASの使用

MIDASがクーデターの起因となったのは事実である。しかし、MIDASの存在が無くても、クーデターは発生しただろう。それは時代の流れであったといえる。

科学者とその責任

エミール・クラムスコイを突き動かしたものとは…

結果的にMIDAS爆弾開発の中核を担うこととなったエマ。並ならぬ執念をもってMIDAS奪取にかけた彼女の原動力となったものは、果たして何であったのだろうか。



科学者と研究
そして、研究成果の活用

科学は人々の生活をより便利に、快適にするのみではなく、生命の神秘を紐解き人間の寿命の延長をも可能にした。だがその反面、科学によって導かれた技術は自然環境に多大な影響を与え、人類を含む多くの生物の生存そのものを脅かしてもいる。このような二面性を持つ科学という活動に携わっているのが、いわゆる科学者である。

科学を行う科学者も人間である限り、そこから導き出される結果は道義的にも人類に対して有益なものでなければならないはずである。だが、科学は時に過剰殺戮を容易にする最悪の爆弾を作り出したり、科学の絞り粕が自然環境を汚染し生態系に致命的なダメージを与えたりしてきた。科学者が社会的要求やその成行きに準じて研究に専念している時、そこには明らかに人々の幸福、夢の実現といった大義を見出すことができるだろう。逆にその研究が科学者の個人的な探求欲を満足させるためのものであったとしても、そこから生み出されるのは単なる“研究成果”でしかないはずだ。問題は、その研究成果をどう活用するかというところにある。

科学者が科学から導き出した結果は、時に科学者の意思とは無関係なものへと変貌する。研究成果の価値が世界情勢や政治的背景などによって保護されているほどに、その傾向は強くなる。劇中の金原子核線理論と、これから生み出された新型爆弾MIDAS。新たなエネルギー理論として人類に無限の可能性をもたらすはずの金原子核線理論は、USNという巨大な力によって捻じ曲げられ爆弾という最悪の形態を与えられることになったのである。

科学者の責任
そして、エマの責任の取り方

科学の活用は時として「負」の結果をもたらす。科学者はこの結果に対してすべての責任を負わなければならないのだろうか。

未知なるものの解明を求め、新たな発見に歓喜するのは誰しもが持ち得る純粋な欲求であろう。研究成果がもたらした結果を分析するならばその活用法に焦点を合わせるべきであり、ゆえに科学者は常に問題意識を提示し続け、科学がもたらすであろう「負」の可能性を示唆し続ける。それが科学者が取り得る責任であり、科学者に課せられた責務なのである。

エマの研究は純粋に金原子核線の制御に関するものであった。MIDASの軍事活用にエマ自身が直接携わったかどうかは判断できないが、エマの研究が利用されていることは事実であり、それに対して研究者であるエマが責任を感じたのは、科学者としての立場はもちろんだが、それよりも彼女の個人的な感情によるところが大きい。金原子核線理論は両親の遺産であり、彼女は両親の遺志を継ぐ意味でもこの研究を完成させたかったはずだ。自らMIDASの回収作戦に志願し銃火に身を投じるという彼女の行動は、もはや単なる科学者という観点からは逸脱している。彼女の生い立ちや研究への私的な執着、そしてイマジナリーナンバーという特殊な存在であることが、彼女を突き動かしたのであろう。

エマは「エマ個人」として、MIDASに対する責任を取ろうとしたのである。





主要人物ファイル

プロフィール＆
人物誕生秘話

山田章博氏が命を吹き込んだ
魅力的なキャラクターたち
彼らの誕生にまつわる生みの親の苦労とは
そして
物語を振りかえった今
見えてくる
彼らの表情に迫る

NAME

KAZUKI TAKEMURA



武村和輝
19歳／183cm／75kg

横須賀高専に在籍するかたわら、WAP製造メーカー「霧島重工」にテストパイロットとして勤務する少年。若いながらもWAPパイロットとしての素質は衆人の認めるところで、物語の冒頭でも研究員の小池から新機種への適応の素早さを誉められるなど、いわゆる「カンの良さ」がうかがえる。

性格は「自分の信念を貫く強靭な意志の持ち主」、と言えば聞こえは良いが普段はただの「他人の意見を聞かない頑固者」と言って差しつかえない。その辺りの頑なさは父親である武村伊佐夫から受け継いでいる部分が大きいようで、2人はことあるごとに意見を衝突させ周囲を呆れさせる。だが、もう一人の家族、妹のアリサなどは慣れたもので、伊佐夫に対してすぐ感情的になる和輝をあしらう術を身に付けているようだ。また和輝自身も論理的思考で攻めてくる妹を苦手としており（亮五には「シスコン」と揶揄される）、毎度毎度彼女に言いこめられる形で騒動は決着するのである。実に武村家の平和はこのアリサの手によって保たれていると言ってもいいだろう。

そもそも、和輝の父親に対する強い反抗心は7年前の母親の病死という事件に端を発している。日防軍士官としての仕事に明け暮れ母親の臨終の瞬間にも帰って来なかった父は「母の犠牲の上でのうのうと生きる男」として和輝の中で決定付けられ、和輝は7年経った今もその頃の父を許すことができずにいるのだ。「大人」へと成長し当時の父の立場や心情が今は分かるようになってきて、なおさら父の言葉に対して「頭では分かっていつつも」つい反抗的な態度に出てしまうのである。また、母の死は和輝の心に「父への憎しみ」だけではなく、「他人を犠牲にする行為への嫌悪」を同時に芽生えさせた。物語中でも、敵味方問わず危機に瀕している人間に手を差し伸べてしまうあたりに、その思考・感情の一端をうかがうことができる。



山田章博氏が見た「和輝」

・和輝の「イメージ」

僕が大きな制約もなく自由に主人公を描くと色のイメージは「赤」ではなく「白」の印象になりがちなのですが、今回前もって「白のサマーセーター」という服装を指定されて驚きました。ただ、パイロットスーツが濃いオレンジ色なので、結果的には両方のイメージを持つことになりましたが。

・苦労したポイント

こんなにあからさまな「スポーツ系」の主人公は、正直言って今まであまり描いたことがなかったんです。サッカー選手が持っている「空気」が欲しいと思って、それ関係の雑誌を読んだ記憶があります。

戦いの中の「和輝」

和輝は2つのストーリー「エマ編」と「アリサ編」での言動に、それぞれ微妙に違った性格の一面が露出している。アリサ編での手のつけられない頑固ぶりが、エマ編では（ほんの）いくぶん形を潜め、正義感の強さや女性に対する不器用さなど、より多くの面が描かれているようである。

[アリサ編：ステージ4　横須賀三春町倉庫]

和輝「無駄だ、あいつが俺のことを助けるわけがない」
アリサ「お兄ちゃん…」
亮五「また始まった。子供を見殺しにする親がいるかよ」
和輝「あいつは日防軍のためなら平気で家族を切り捨てる。それに今回の事件だってあいつが仕組んでるかもしれない」

[エマ編：ステージ12　バロボ市]

亮五「じゃ和輝、俺とデニスはメシ食いに行くからエマのことよろしく頼むな！」
和輝「お、おい、よろしくって、どういうことだよ！？」
和輝「エ、エマはみんなと一緒のほうがいいよなぁ！？」
エマ「いえ、騒がしいのが苦手だから私は遠慮するわ」
亮五「ということだ、じゃよろしくね和輝君！」
エマ「私は一人でも構わないわよ。みんなと一緒に行ったら？」
和輝「あ、いや、その、付き合うよ。とりあえずどこ行く？」

[エマ編：ステージ49　南京]

ホアン「ここで撤退をすれば上海を落とすことができなくなる。今までの苦労を無駄にするわけにはいかん！」
和輝「ふざけるな！　人の命を何だと思ってるんだ！？」
ホアン「作戦の変更は無い、お前たちは市政府を制圧しろ！以上だ」
和輝「おい、ホアン！？　ホアン！　ばか野郎！　華蓮団も大漢中軍も一体何を考えてるんだ！？　自分の国の人間だぞ、なんでそう簡単に切り捨てるんだ！」



基本的な部分は上の決定稿と同じだが、少々線が細い（十爽やかな）印象を受ける和輝。なるほどこうして改めて比べてみると、確かに決定稿のほうが特に目元と口元あたりに「頑固さ」が滲み出ている。

NAME

EMIR KRAMSKOI



エミール・クラムスコイ
22歳／168cm／55kg

ラーブヌイ共和国、パール・ゴルボフスキイが所長を務めるオルシャ研究所で進められていた「イマジナリーナンバー計画」の中で、人為的に生み出された実験体の一人。10年前、当時研究員であった両親の下で暮らしていた彼女は、彼らに連れられて同じく実験体の一人の「妹」アリシアーナ（アリサ）とともに研究所の監視をくぐり抜け、ひとりUSNに亡命する。一足先に日本の武村伊佐夫夫妻のもとへ引き取られていったアリサは詳しい経緯を知らされていないが、エマのUSNへの渡航を目前に研究者夫妻はパールの手の者により殺害されている。そしてそれを機に彼女の性格は一変、決定付けられた。両親の死を乗り越えるため、そしてたった一人で生きるための「気丈さ」を、彼女はある種の処世術として身につけているのである。

USNへ渡ったエマはそのイマジナリーナンバー特有の卓越した頭脳で15歳の時に物理学の博士号を取得、その後も「両親の遺志を継ぐ」という使命感から物理学の研究に没頭、18歳にしてついに計り知れない可能性を秘めた「金原子核線」についての応用理論を完成させる（基礎研究は両親によりある程度完成されていた）。そしてUSN軍の科学研究員となった彼女はアラスカ研究所の所長に抜擢され、同所で金原子核線を利用した「兵器」としてMIDASを作り出してしまうのである。もっとも、彼女自身は「兵器」としてではなく、放射能汚染の除去やその他化石燃料に代わる極めて効率の良いエネルギーとしての利用を望んでいたのだが。しかし結局その願いは省みられることなく、考えうる「最悪」の形で研究は結実してしまった。研究の完成に対する喜びと、兵器を生み出したことに対する後悔・嫌悪、彼女はその相反する2つの感情の狭間で苦しむ。普段冷静に振舞っている彼女がときおり見せる不安定さは、その苦悩に由来しているのかも知れない。

戦いの中の「エマ」

アリサ編ではほとんど出番らしい出番が無いため、彼女の描写はエマ編に集約されていると言っていい。序盤は和輝と亮五の「お姉さん」的位置付けだが、終盤にかけて過去が明かになるにつれ和輝に対して心の不安定さを露呈するようになる。

[エマ編：パロポ海岸]

エマ「そうね、でも自分が作ったものだから責任は取りたいわ。それに、私は人に頼るのが嫌いな性格だから…」

和輝「確かに、気の強さはエマが一番だな」

エマ「そんなことないわ…。あのね、私の両親も科学者だったの。でも私が小さいときに2人とも死んでしまった。その後、わたしはたった一人で生きてきた。誰にも負けられないって、そう思ってがんばってきた。でも、本当は誰かに守ってもらいたかったのかもしれない。科学者になって両親の研究を引き継いだのも、お父さんとお母さんに守ってもらいたかったのかもしれない。でも、その研究がこんなことになるなんて…」

[エマ編：USN空母乗組員室]

和輝「…そうか。すべて知っていて、横須賀で俺に仕事を依頼したのか」

エマ「そうよ、私はあなたを利用しようとしたの。ひどい女、今更こんな言い訳して、見苦しいだけね…すべて私の責任なのに…。私がMIDASなんか作らなければ、誰も不幸になんかならなかったのに…」

[エマ編：武漢屋台街]

和輝「何を焦ってるんだ、らしくないぞ」

エマ「私は早くアリサを助けたいのよ！　カズキはアリサが心配じゃないの！？」

カズキ「心配に決まっている！　だがそのために仲間を犠牲にはできないだろう」

エマ「アリサを救えるなら私は死んでも構わないわ！」



エマの場合も下の決定稿とそれほど差は見られないが、こちらのほうが若干「やさしめ」に描かれている。眉毛も含めた目元が決定稿のほうではかなりすっきりし、全体的にクールなイメージが出ていると言える。



山田章博氏が見た「エマ」

・エマのイメージ

ロシアを想わせる音楽や言葉をイメージして描きました。「霧のカレリア」「休戦記念号の悲劇」「WINTER BATTLE」「MOTHER RUSSIA」などなど…。

・苦労したポイント

美人なんだけど、あまり親近感を持たれてもいけないという「微妙」なバランスでしょうか。オシャレにも疎いようなので、ヒロインとしては少々辛かったですね。

NAME

RYOGO KUSAMA

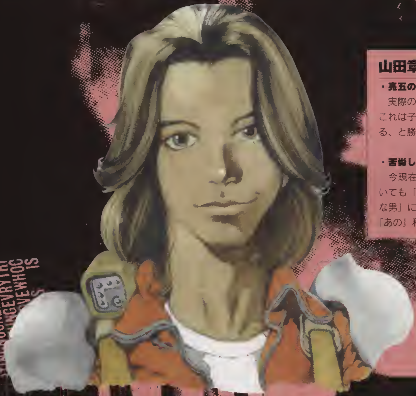


草間亮五
19歳／172cm／60kg

和輝とは中学以来の親友で、現在も同じ横須賀高専に在籍、霧島重工のテストパイロットも同様に努めている。その見た目や物腰の軽薄さから単なるおふざけキャラクターと見られてしまうきらいがあるが、その実、周囲の空気を無視してすぐに感情を暴走させる和輝を一歩引いた冷静な目でとらえ、巧みな話術によりコントロールする手腕は、単に長い付き合いだけのものとは思えないほどのあざやかさである。見方を変えればそういったスタンスはある意味「物語を傍観するプレイヤーの視点」を体現する人物という風に考えられなくもないだろう。

しかし基本的に物語中の亮五はとことん「いいかげん」で「女好き」の「お調子者」として描かれる。それは任務遂行中ちょっとしたことで音を上げたり、出会った女性にことごとく（シンディとユン、そしてアリサは例外だが）モーションをかけるあたりでうかがえる通りだ。ただし、平穏時・表面上はおちゃらけたキャラを徹底して貫いているものの、いざというポイントでその冷静さ、意外なまでの感情の昂ぶりなど、普段はついぞ垣間見る機会のない彼の素顔（生の感情）を見せることがある。

普段は自分の感情を（かなり高いレベルで）うまくコントロールしているある意味「大人」な彼だが、ただ大人なだけではない、また、ただふざけているだけではない微妙なキャラクターを、実に絶妙なバランスによって実現していると言えるのではないだろうか。そういった多少「穿った」目で見ると、いつもの冗談なのか本気なのか分からないような彼の発言・行動も、何かしら「深い意味」を持ったものに見えてくるのが不思議である。もちろん、ほとんどは正真正銘ただの「おふざけ」なのだけれども。



山田章博氏が見た「亮五」

・亮五のイメージ

実際の設定にはありませんが、彼の正面顔は少々歪んでいます。これは子供の頃に妹と一緒にヴァイオリンを習わされたせいである、と勝手に思っていたりします。

・苦労したポイント

今現在言うところの「今風の若者」が、果たして22世紀においても「今風」なのかどうか疑問ですが、ただの「頭の悪い脆弱な男」に見えないようには気をつけたつもりです。何と言っても「あの」和輝の親友が務まるくらいなんですから。

戦いの中の「亮五」

亮五の役回りは2つのストーリーにおいてさほど大きな違いがない（和輝のお守り役）。ただ、エマ編ではアリサに代わってユンが彼への「ツッコミ役」を務めるので彼女との絡みが必然的に多くなっている。

[エマ編：プールバー]

エマ「ちょっといい？」
和輝「!？　なんだい、あんた？」
亮五「おい和輝、なんだはないだろう。こんな綺麗な人に向かって。で、俺になんか用？」
エマ「あなたたち、横須賀基地の事故について調べてるみたいね」
亮五「いや、本当は君のことを知りたいんだ…」

[アリサ編：ミンドロ島野営地]

亮五「だろう、俺もいい作戦だと思ってたんだよ。大丈夫、大丈夫、俺達だけで十分だぜ！」
リュウ「ただし、タール基地は空軍部隊の基地だ。主力の空軍部隊は出撃するが、基地守備隊は残ってると見たほうがいい。決して楽な作戦ではないぞ！」
亮五「だからやめようって言ったんだ。俺達だけじゃ、無理だって！」
和輝「…亮五、いいかげんにしろよ」

[エマ編：タール基地]

亮五「シンディ！　シンディ、応答しろ！　聞こえないのか、シンディ！」
シンディ「亮五、あんたの言う通りだよ。あたい達もたいしたこと…ないね…」
和輝「ちくしょう、ふざけやがって！　ゆるさねぇ、絶対にゆるさねぇ！」
亮五「どいてろ和輝、デカブツは俺が殺る！」



決定稿とはかなり雰囲気の異なる亮五、というかこれだけ見ると正統派二枚目の主人公のようである。表情のせいもあるが、しっかりと太い眉毛からは軽薄そうな匂いがそれほど感じられない。

NAME

ALISA TAKEMURA

Alisiana Kramskoi



武村アリサ（アリシアーナ・クラムスコイ）
19歳／160cm／49kg

姉のエマ（エミール・クラムスコイ）と同じくオルシャ研究所でバールによって作られたイマジナリーナンバーの一人。幼い頃からエマ、そして両親役を務める科学者夫妻と本当の家族のように暮らしていたが、10年前両親とともにバールの手を逃れ、彼女だけ夫妻の友人であり当時から日防軍の要職にあった武村伊佐夫のもとに預けられることになった。この経緯については、伊佐夫の証言とバールの口から語られた苦し紛れの狂言ととれなくもない説明しか存在しないため、真実のところは分からない。だが、伊佐夫が「日防軍の人間」であった事実を鑑みると、これが単なる「亡命」とは少々意味合いの異なるものであるという仮定は成り立つであろう。

ともかく、OCU日本へ渡ったアリサは、そこで幸いにも伊佐夫と和輝という新たな家族を得、エマとは違う幸せな生活を続けていた。それはひとえにイマジナリーナンバーという宿命から伊佐夫が守っていてくれた結果ではあったのだが、年を重ねることに彼女はイマジナリーナンバーとしての才能を発現させていく。帝北大学に進学した彼女は、そこでの優秀さを認められ民間の放射線プロジェクトへ参加、皮肉にもここでエマと同じ道を進み始める。そしてそのプロジェクトから選抜されたメンバーで、横須賀基地に運び込まれたMIDASの解析研究のサポートをすることになるのである。その研究対象が、最愛の姉が生み出した「モノ」であることを知るよしもなく…。

普段の言動に見られるアリサの性格は、良くも悪くもエマの影響を感じさせる。優しい家族に囲まれて過ごしてはきたが、決して彼らに依存しすぎることなく、しっかり「自分」というものを持っていると言えるだろう。亮五に対する距離の取り方、また善悪に対する潔癖さなど、血はつながっていなくともエマとの間に「絆」は確かに存在しているのである。



山田章博氏の見た「アリサ」

・アリサのイメージ

エマをイメージました。これは設定上そうせざるを得なかったということもあるのですが。ただ、エマとのそれ以上に和輝達との「シンクロニシティ」を強調したかったので、当初の指定では「碧眼」となっていたものを、無理矢理「鳶（トビ）色」の瞳にしてしまいました。

・苦労したポイント

「血」ではエマと同調しながらも、「心」の部分は和輝の妹に見えなければならないというところが難しかったですね。帝北大のミスコンで彼女に投票してくれた人、どれくらいいるのかな？

戦いの中の「アリサ」

物語両編を通じて彼女のパーソナリティが変化することはない。あくまで公正な立場で物事を判断し、間違っていると思う部分にはきっちりと主張を通す。ある種の潔癖さをその言動から窺うことができる。また、時折呟くように入る亮五に対するえぐるようなツッコミは彼女の意外な一面を垣間見せている。

[アリサ編：大漢中潜水艦]

和輝「アリサ、俺はこのままMIDASを放っておくことはできない」

アリサ「わかってる。お兄ちゃん、言い出したら聞かないもんね。…あの、私も一緒に行っていい？　私、お父さんがウソをついてるとは思えない。だから…それを証明したいの」

[アリサ編：潜水艦艦橋]

亮五「なぁ、そんなに気張ってたらぶっ倒れちまうぞ。遊ぶときは遊ぶ、休むときは休む！　ってなぁ、アリサ」

アリサ「…亮五君は遊ぶか休むしかないもんね」

[アリサ編：哮天雷関医務室]

ジュ「こいつの手当てはもう必要ない。余計な手出しは無用だ」

アリサ「どういうことですか！？」

ジュ「おまえたちには関係ない、出ていってもらおう！」

アリサ「待って下さい、その子はまだ怪我をしているんですよ！」

ジュ「おい、この女を連れていけ！」

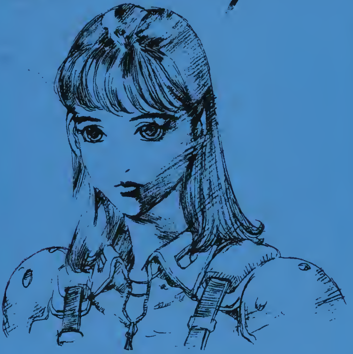
アリサ「やめて下さい。その子に手を出さないで！」

[アリサ編：仙台]

和輝「バカ親父が、どうなっても知らねぇぞ！」

メイヤー「なんだかんだ言って、結構仲がいいじゃない」

アリサ「ええ、2人とも素直じゃないんですよ。まるで子供みたい」



眉のラインが決定稿で気持ちキリッっとしている程度で、基本的には変わらない。ただ、単色で斜線による陰影の効果のせいか、こちらのほうがいくぶん「翳り」のある表情に見える。なお、アリサが着ているパイロットスーツは日防軍のものなので、和輝達のものとは デザインが異なっているのである。

NAME

DENNIS WEIKATH



デニス・ヴァイカート
35歳／180cm／75kg

USN唯一の情報組織「FAI」のエージェントとして活躍する寡黙な男。物腰は基本的に柔らかいが決して軟弱ではなく、かといって極度に他人との接触を拒む雰囲気を表に出すこともない。その辺のバランス感覚は天性のものか、はたまた情報機関のエージェントとしての経験が作り上げたものかをはっきりと断定することはできないが、時折見せる調子の外れた応対などは、おそらく天然のものであると思われる。

佐々木派によってアラスカ研究所から強奪されたMIDASが、横須賀基地で爆発事故を起こした直後、エマ、そしてFAI直属のヴァンツァー部隊「パープルヘイズ」を伴ってOCU日本へ入国、和輝たちとの接触に成功した後は行動を共にしつつ、MIDAS奪回のため和輝たちとは微妙に思惑の違う本国との連携をその手腕でこなしていく。エマ編に限って言えば最も微妙な立場に置かれている男である。

常に「仕事第一」主義を貫き、仕事に私情を挟むことを極端に嫌うデニスは、自分の本意にそぐわない裏切り行為など汚い事も「USNを守るため」という大義名分のために数限りなくこなしてきた。そして今回も、そんな過去の幾多の任務同様に、本国、そして和輝たち双方に気取られることなく平静を装い続ける。…しかし彼は悩む。敵味方の区別なく「他人を犠牲にする」ことを許さず、危険なまでに純粋に命を救うことに執着する和輝、その一方で国を守るためには犠牲を厭おうとしないUSN。そのUSNのために今まさに彼らを利用し、場合によっては「犠牲」にしようとしている自分――。
「俺は本当にこれでいいのか？」

最終的には和輝たちに与することを選ぶデニス、その厳しく自分を律する彼の生き方は今後も変わることはないのだろう。

山田章博氏が見た「デニス」

・デニスのイメージ

「実直」「地味な007」「仕立ての良いマーガレット・ハウエルのスーツ」「大人」

・苦労したポイント

このタイプの人物は割と不得手ではありません。ただ、どちらかと言えば伊達男の部類に入る男だと思うのですが、その方向性のせいで「遊び人」に見えてしまってはいけない、という縛りというか制約みたいなものはありました。



戦いの中の「デニス」

アリサ編ではパープルヘイズを率いる謎の男という程度の出番しかない彼だが、エマ編では凄腕のエージェントから和輝たちのお父さん（は言いすぎだが）的なものまで実に幅の広い表情を見せてくれる。実は最もボケのハマる男である。

[エマ編：USN空母]
和輝「愛想がないのはあんたと同じだな、デニス」
デニス「そんなことはない、私はルカーヴより友人が多い」

[エマ編：スタンリー山脈]
和輝「潜水艦の上に着陸するのか！？」
デニス「よく驚く奴等だな。…疲れないか？」
和輝「ほっとけ！」

[エマ編：シンガポール　シティ酒場]
亮五「頼むって、お前そんな大金ないだろう？」
和輝「当たり前だ、払うのはエマかデニスに決まってるだろう」
エマ「はぁ？　私は駄目よ、デニスなら必要経費で落とせるんじゃない？」
デニス「なに！？　…しかたない、私が払おう」
ユン「商談成立だね！　じゃ、明日またここに来てよ」
デニス「ちょっと待ってくれ」
ユン「なに？」
デニス「…領収書はもらえるか？」

[エマ編：グアンレイの家]
(日本に罪をなすりつければ、USNは責任を負う必要はなくなる)
デニス「しかし、本当にそれでいいのか！？」
(USNのためだ)
デニス「人をあざむき、真実を隠し続けて俺は生きていくのか！？」

ウェイ「これからも真実を隠し続けて生きていくのか？」
デニス「この世には知ってはいけない真実もある…」
ウェイ「それがお前達の傲慢だと何故気が付かん！」
デニス「国を守るためには真実を隠す必要もあるんだ！」
ウェイ「目を覚ませ！　ウソで固めた現実が本当に幸せなものか！？　自分の国が変わってしまうのがそんなに怖いのか？」



ほぼ完成形のテニスの表情。だが、これは男性（おじさん世代）に共通して言えることだが、着色の施されたイラストに比べて幾分年齢が上に見える。これは多少残っているラフな線が「シワ」の役割を果たしているからと言えなくもない。

NAME

YUN REIFA



ユン・ライファ
17歳／155cm／45kg

ユンはその業界では「マネーメイカー」という凄腕のスペンダーとして知られる少女。体を張った潜入工作技術を始めさまざまな方法で個人・企業・政府、ありとあらゆる対象からの情報の入手を生業とするスペンダーの中でも、彼女が得意とするのは最もメジャーなコンピューター端末を使用したハッキング。自ら開発した暗号解析ソフトと愛用のモバイル端末（愛称：モバちゃん）を使いこなし、「天下のユン様に不可能はない！」と豪語する。その自信から依頼相手によっては破格の報酬を要求、かなりの儲けを上げているはずなのだが、金に対する執着はまさに病的なまでに強く、場合によっては仲間を裏切ることも厭わない。

ユンのその「金への執着」は彼女が師事したスペンダーの師匠の死に起因している。幼い頃に両親を亡くし叔母の下に預けられた彼女は叔母には可愛がられていたものの、いとこたちから毎日のようにいじめられていた。叔母の家を飛び出したユンは（一部の記憶は抜け落ちているのだが）先のスペンダーの下へ行き、いつのまにか一緒に暮らしていたのだという。その師匠の口癖がこれだったのである。

「この世で信用できるのは金だけだ」

しかし、そう言ってはばからなかった彼も、ただ一度だけ友人のためにタダ働きをしたことがある。そして因果なことにそれが彼の最後の仕事になってしまったのだ。

人が何かに執着を抱くには理由がある。ユンのそれは、彼女に生きるすべを教えてくれた師匠の遺言であり、その未だ薄れぬ影響力なのだ。



山田章博氏が見た「ユン」

・ユンのイメージ

戦災孤児が持っている逞しさとでも言うのでしょうか。もっとも、彼女の両親が亡くなったのは必ずしも戦争のせいという訳ではないようですが。

・苦労したポイント

本当はもっとタンク・ガールのような「ファンキー」さが欲しかったのですが、本人（ユン）はそれなりに可愛く見られたがっているようなので……。

戦いの中の「ユン」

アリサ編でのユンはメールボムを送りつけてくるなどかなり厄介な娘に映るが、エマ編では情報収集イベントなどで活躍、また亮五との掛け合い漫才的な会話を展開するなど、極めてアピール度の高い存在として登場する。

[エマ編：ジュロン工業地帯]

ユン「子供、子供って馬鹿にするな、これでも17歳なんだぞ。それに、マネーメイカーは単なるコードネーム、本名はユン・ライファっていうの！」
亮五「なんだよ、マネーメイカーが本名じゃないの？」
ユン「こんな可愛い娘が、そんな名前なわけないじゃん！」

[エマ編：広州華蓮団本部]

ユン「ねぇねぇ、デニス。ウェイって誰なの？」
デニス「…私の学生時代の親友だった奴だ」
ユン「デニスにも学生時代があったんだ！」
デニス「当たり前だ」

[エマ編：USN大使邸]

マーカス「俺はマーカス·アレン、陸軍大尉だ。まぁ階級なんて気にする必要はねぇな。よろしく頼むぜ隊長さん！」
亮五「OK、分からないことがあったらこの俺に聞いてくれ！」
ユン「そうそう、聞いても分からないと思うけどね」
亮五「そうそう、ってうるせえよ！」

[エマ編：広州華蓮団本部]

和輝「何故だ！　何故、そんなに金に執着するんだ！？」
ユン「お金があれば、できないことはないし、手に入らないものもないんだ！」
和輝「人の命は金では買えないんだぞ！」
ユン「人の命だって買えるわ！」
和輝「ユン！」
ユン「買えるんだ！」.
和輝「なぜ、そんなことが平気で言えるんだ！」
ユン「あんたになんか一生わかんないよっ！！」



若干「可愛さ」を強く感じる線画状態のユン。それは上の着色済みの決定稿にある、極端に言うと「狡猾そうな」表情を加えられていない素の状態だからであろうか。落ちついて見える反面、年齢的には少々上に見えなくもない。

NAME

JOSE ESTRADA



ホセ・アストラーダ
32歳／180cm／75kg

OCU軍の元陸軍中尉。かつては一流の狙撃兵として数々の作戦で活躍し、彼自身もその腕の良さを自負していたが、度重なる命令無視、敵前逃亡などといった軍規違反のかどにより、営倉送りにされていた。だが、タール基地を襲撃した和輝たちのあまりの猛攻に危機を感じた司令官セマウンの、皮肉にもこれまた軍規を無視した命令により、彼は再び戦場へ呼び戻される。過去に犯した大きな過ちへの後悔、そしてその後の孤独な時間は彼から戦闘意欲はもとより生きる気力さえ奪い去りつつあったが、司令官は「除隊」「自由」という交換条件を提示することにより、再び彼に戦う意欲を呼び起こさせることに成功する。

はたしてホセをここまで打ちのめしたものは何だったのか。それを知るにはまだ彼が「国を守るために戦う」ことに何の疑問も迷いも持たなかった数年前まで遡らねばならない。当時腕利きのスナイパーとして鳴らしていたホセは、とある作戦で本人には知らされないまま周囲に「民間人」が残っている敵の拠点を彼らもろとも完膚なきまで殲滅してしまう。そしてその後、犠牲となった民間人の中に最愛の恋人がいたことを知るのである。事実を隠した軍への不信感、守るべき人を永遠に失った喪失感、そして自己批判に懊悩する日々。もともと実直な性格のホセにとって戦う気力を失うには十分の体験である。しかも戦場で鍛えられた彼の精神力は、その後の営倉での孤独な月日でも自己喪失に陥ることすら許してはくれなかった。

司令官が提示した「軍からの解放」という不確かな希望はかなえられるのか、それとも潰えるのか。ホセは最後の賭けの相手、和輝の前に立つ。

戦いの中の「ホセ」

ホセはリィ・ジャンメイ（李占梅）と共通する部分の多いキャラである。背負った過去、寡黙な態度、そして特に共通の友人の存在。大漢中の広州で登場するUSNのスパイ、グァンレイとその娘ランフォンとのエピソードなどは、ホセを仲間にしない場合はリィ絡みのものとして描かれるのである。

[エマ編：タール基地]
和輝「俺は軍人じゃない、敵も味方も関係ないさ」
ホセ「…軍人じゃないのになぜ戦っている？」
和輝「大切なものを守るのに、軍人も民間人も関係ないだろう。軍人じゃなきゃ戦えないとでも言うのか？」
ホセ「そうだ、だから俺はこの国を守るために軍人になった。この国のために戦い、そして大切な人を死なせてしまった。俺には生きている資格はない…」

[エマ編：錦香池]
ホセ「呉龍か…」
ランフォン「おじさま…」
ホセ「…大丈夫だ。心配しないでこの中に隠れていろ」
ホセ「心配するな…か、この状況でわれながらよく言う…2人ともやられてしまうかもしれんのにな」

ホセ「まず1人」
大漢中エージェント「いたぞ、あそこだ！」
ホセ「やはり無理か…こうなったら、俺が囮になってランフォンだけでも逃がすか…」
「よぉ！　ホセ、生きてるかい！　今助けるぞ！」
ホセ「カズキか！？　ばかな、錦香池には近付くなと言ったはずだぞ！」
亮五「水臭いなぁ、仲間だろう」
和輝「俺は、危険な目に会っている仲間を見捨てられるほどできた人間じゃない！」
ホセ「…おせっかいな奴だ」





全身像・バストアップともに、悲惨な過去を背負ったゆえの現世に対する「あきらめの念」のようなものが感じられる。特にバストアップのほうは遠くへ向けて無造作に投げられた視線が彼の心情を端的に語っていると言えるだろう。

山田章博氏の見た「ホセ」

・ホセのイメージ
慢性胃炎のトム・ハンクス。

・苦労したポイント
おおかたの場合、これだけ悲惨な過去が設定されている人物には「二枚目」のルックスが割り当てられるものなんですが、さすが「フロントミッション サード」のスタッフはそれを許しませんでした。その点で結構手ごわいキャラクターでしたね。

NAME

LEE JANG MAI



リィ・ジャンメイ（李　占梅）
43歳／170cm／83kg

強引に政策を推し進め各地で圧政を敷く大漢中政府と、反政府勢力狩りと称し村々で傍若無人な振る舞いを続ける大漢中軍。リィはそんな軍の暴力から人々を守るため、大陸各地を転々としながらたった1人で戦いつづけている。自身もかつては大漢中軍のエリート部隊「快速反応部隊」の一員として、反政府勢力である華蓮団を相手に戦う政府側の人間であった。そして任務として華蓮団への見せしめのためだけに村落への襲撃を行ったことなど、1度や2度のことではなかった。そんなある日、いつもと同様に行った村落への襲撃で、あろうことか彼は自分の妻と息子をその手にかけてしまう。そしてやっと自分の間違いに気づいたものの、もう全ては手遅れだった。その後大漢中軍を脱走した彼は、妻と息子、そして今まで数え切れないほど犯してきた自らの罪に対する償いのために、過去の素性上華蓮団に入ることも適わず、現在のようなたった1人での反政府行動を展開するに至っているのである。

過去に愛するものの死という悲劇に遭い、軍はもとより自分の国それ自体を信じ愛することができなくなったという点で、このリィとホセの2人は酷似している。しかし、ホセが「戦わない・戦いから離れる」ことで自分を戒めていたのに対し、リィは犠牲者をこれ以上増やさないためにあえて「戦い続ける」道を自分に課した。おそらく彼が抱える心の傷は、戦い続ける限り（命ある限り）彼を解放することはないだろう。だが多少なりとそれが軽減されることがあるとすれば、それは現ジエ政権を打倒し新たな国へ生まれ変わるときなのかも知れない。

山田章博氏が見た「リィ」

・リィのイメージ

見ていたたければ、誰たか分かりますよね。

・苦労したポイント

感情が抑制されたキャラクターなので、あまりこちらに向かってアピールしてくるところが無いという点。また、身体的な強靭さと「脱力感」が同居するポーズというのは結構難しくて、少々悩みました。



戦いの中の「リィ」

ホセが仲間にならない場合の代わりのキャラということで、関わるイベントなども共通するものが多い。しかし、グァンレイがUSNのスパイであることを知っていたりするなど、設定的なものは当然違っている。

[エマ編：鎮遠酒場]

コォワン「あなたは、勇気があるんですね」
リィ「勇気…」
コォワン「黙っていれば誰にも知られずに済んだはずです。でもそうしなかった。自分に対して責任を取ろうとしてるんですね」
リィ「そんな格好いいものではない」
コォワン「俺にはそんな勇気はないです。主席次官の息子だと言われても、どうしたらいいのか…」
リィ「これだけは言える。お前は立派な父親の血を引いている。それを生かすのも殺すのもお前次第だ。お前なら、自分の進む道を決められるはずだ」

[エマ編：仏山裏通り]

グァンレイ「お前に迷惑をかけるつもりはない」
リィ「この話を聞いた時点で十分迷惑だと思うのだが」
グァンレイ「ははは、そうだな」
リィ「笑い事か」
グァンレイ「いや、すまん。で、話と言うのは、娘を守ってもらいたい」
リィ「！」
グァンレイ「そんな顔するな。万が一の場合だ」

[エマ編：武漢補給基地]

シュイ軍長「リィよ、俺は大漢中軍の軍人だ。軍人である以上、命令には従わねばならん…」
リィ「この国のやり方は間違っている。それが分からぬお前ではあるまい」
シュイ「だとしてもだ、私は軍人としてこの国を守る！」
リィ「融通が利かんのは昔のままだな。ならば私も容赦はせぬ！」

激しさの中に、背負った過去の重さや1人戦う孤独な男の寂しさなど色々なものが詰めこまれた表情をしているリィ。特にそのいくぶん悲しげな目が全てを物語っていると言っていいだろう。



NAME

MARCUS ALLEN



マーカス・アレン
43歳／185cm／82kg

USN軍第94機動大隊第3中隊の隊長を務める陸軍大尉。入隊は18歳のとき。入隊直後からその天性の戦闘センスと陽気なキャラクターを上官から重用されていたが、典型的な右脳型人間の彼は現場の状況次第で作戦の無断変更や上官の命令無視など、本来であれば厳罰対象の行為を数え上げればキリがないほど繰り返していた。だが、それでもマーカスはその後も21歳で少尉に任官。そして現在の大尉までエリートからは程遠いにしろ、これといった処罰もなくたどり着いている。これはひとえに、幾多の戦場で所属部隊を輝かしい勝利に導いてきたその実績によるところなのである。

マーカスの性格を一言であらわすとするならば、豪放磊落、この一語に尽きる。細かいことをぐだぐだ考えるよりは行動が先、というパターンである。といっても決してただの傍若無人な無法者というわけではなく、情に厚い男である。また、これは歳の功かもしれないが、仲間の悩みや心配事を敏感に感じ取り相談に乗るという「下町のおっちゃん」的人懐っこさも見せる。悲惨な過去やひた隠しにする心の暗部などネガティヴな要素のない、物語中で最も異質（悪い意味ではなく）なキャラクターと言えるだろう。ただ一点、妻と二人の娘と現在「別居状態」であるという問題を抱えているが、幸いなことに離婚調停中の緊張関係というほどにはは発展していない。夫婦、そして親子間に少々の「しこり」はあるものの、彼らがマーカスの戦う「力」の源になっていることは間違いないだろう。

戦いの中の「マーカス」

次から次へと「わけあり」の人物が加わる傭兵部隊の中で、マーカスはあるときはムードメーカー、またあるときは気配り父さんとして貢献する。亮五やユンと一緒になってはしゃぐ様などは、実に微笑ましいものがある。

[エマ編：台北市街]
マーカス「ひどい事したと思っているのか？」
和輝「俺たちがここに来なければ、街の人たちは犠牲にならなかったはずだ…」
マーカス「だがよ、ルカーヴを捕まえなきゃ、もっと大勢の人が犠牲になるんだろ？　だったらそのことだけ考えな。余計なこと考えてると自分の命を落とすことになるぜ」

[エマ編：福台トンネル入口]
マーカス「いい度胸してるじゃねえか、リョウゴ。どうだ、1人で戦ってみるか？」
亮五「あ、やっぱさっきの無し」
マーカス「がははは、口先だけじゃ生き残れんぞ」
ユン「筋肉だけでも生き残れないと思うけど」
マーカス「がははは、そりゃそうだ！　いいかお嬢ちゃん、俺が筋肉だけじゃないって事を教えてやるぜ」

[エマ編：グァンレイの家]
デニス「…本国から作戦変更の命令がきた。これを見ろ」
マーカス「製作者の抹殺！？　デニスお前まさか本気で…」
デニス「ばか、だったらお前にこんな話をするか！　USNには偽の情報を流す。だがいずれ奴等を裏切ったことがばれるだろう」
マーカス「そうなれば、奴等はあらゆる手段で俺たちの命を狙ってくるぞ」
デニス「ああ。そうなる前に大漢中を脱出するんだ」
マーカス「お前はそれでいいのか？」
デニス「ふん、お前らを殺すと後味悪そうだからな。和輝ではないが、ここまできてあきらめてたまるか！」
マーカス「無理するな」



口元を引き絞ったいかつい表情をしているマーカス。だがその状態でも、どことなくその気さくな人柄を感じさせる雰囲気が漂っている。

山田章博氏が見た「マーカス」

・マーカスのイメージ

彼はきっとWAPのコクピットの中に、ボロボロに擦り切れた家族の写真を大事に貼っています。アメリカのパパ。

・苦労したポイント

主要な登場人物の中では彼が一番幸せなのかもしれません。その大きく頑強なイメージの図体に反して「精神の軽やかさ」みたいなものが上手く醸し出せているといいのですが。



NAME

LINEE BARILAR



リニー・バリラー
23歳／185cm／75kg

OCUインドネシアのスラウェシ島、ランテパオに広大な敷地を有するバリラー家畜実験場。地元の資産家であるバリラー家が水牛を使用した食肉、及び肥料の製品開発実験を行うこの実験場は、実は自ら「総帥」と名乗る父バーデンが長年の夢であるメタンヴァンツァー開発を勧めている研究所であり、一族の間で「バリラーコンツェルン」と呼ばれている。

一家の長男であるリニーはここで肥料の製造プラント設計から管理・運用までを一手に担いつつ、尊敬する父バーデンの開発するメタンヴァンツァーのテストパイロットとそのマーケティング（訪問営業が基本）まで、それこそ休む間もないほどの忙しい日々を送っている。だが、肥料製造の方はともかく肝心のメタンヴァンツァーの売りこみ活動に関しては、今まで努力が報われた試しがない。それでも彼はメタンヴァンツァーのすばらしさを信じて疑わず、度重なる失敗にもくじけることを知らない。その辺の一途さはおそらく父バーデン譲りのものであると思われるが、しかしその「一途さ」が結構曲者で、それらは裏を返せば単に「周囲の状況が見えていない」「人の話を聞かない」という彼のはた迷惑な一面を表す言葉でもあるのだ。

実際、それで誤解を受けるケースは多々あるのだが、そもそもが「おぼっちゃん育ち」であり、あの父の血を受け継いだリニーなので、多少の非常識かつ無神経な言動はしょうがないだろう。しかし決して彼のそれらの言動には「悪気」があるわけではない。基本的にはバーデン同様純粋で、愛すべきところの多い人物なのである。



山田章博氏が見た「リニー」

・リニーのイメージ

加山雄三の「若大将シリーズ」に登場する「青大将」です……と言って分かってもらえるかな。

・苦労したポイント

それほど思い悩むことなく、結構楽しんで描けました。むしろ、もっと極端に変な人にしたかったくらいです。

戦いの中の「リニー」

リニーはエマ編にのみ登場する人物である。その独特の性格によりトラブルを起こし「あの」和輝にすら疎まれてしまうのだが、やはりどこか憎めなく思えてしまうのは不思議だ。

[エマ編：バリラー実験場]

ターニャ「ちょっとぉ、いきなり爆発するなんて聞いてないわよぉ」
スカイナ「そんなの知らないわ、お父さんに言ってよ！」
バーデン「お父さんではない！　総帥と呼べ！」
リニー「でも、さすがダディの作ったヴァンツァーだね。すごい威力だ、建物が吹っ飛んでしまったよ」
バーデン「ダディではない！　総帥だ！」

[エマ編：黄果樹]

エミリオ「見てみろよハタリ。これでもヴァンツァーなのかよ？」
リニー「君！　このメタンヴァンツァーをバカにするつもりかい!?」
グレゴリ「それ以前の問題だぜ」
リニー「このメタンヴァンツァーの素晴らしさが理解できないとは…庶民とは、なんて悲しい生き物なんだろうね、ダディ」

[エマ編：黄果樹]

リニー「話によっては、この僕が君たちに協力してあげてもいいんだよ？」
ユン「…ねぇ、早く行こう」
和輝「ああ、そうだな」
リニー「ちょ、ちょおーっと、待ちたまえ」
亮五「まだ何かあんのか？」
リニー「僕はこれを世に広めるために日夜営業努力をして世界中をまわっているのだ」
亮五「たいへんだね、せいぜいがんばりな」
リニー「ああ、待ってくれよぉ！　僕も連れてってくれよ！！」
ユン「ついてくるなぁ！」



決定稿のほうではだいぶ、というかかなり「濃い」見た目のリニーだが、この段階（もしかしてこのカットだけかも？）の彼は意外や意外、実に爽やかな好青年のイメージである。

NAME

RYU HAI FONG



リュウ・ハイフォン（劉　海峰）
32歳／175cm／80kg

「リアルナンバー」と呼ばれる、バール・ゴルボフスキィが目指した「身体的・精神的に完全無欠のしもべ」たる人類「イマジナリーナンバー」へ至る過程での、普通の人間を素体とした一つの到達点。イマジナリーナンバーが遺伝子レベルでまさに「人為的」に作り出されるのに対し、リアルナンバーは厳選された人工受精で生まれた個体を対象とし、訓練や思想教育を中心とした成長のコントロールにより高い戦闘能力と知能、及びマスター（究極的にはバール）に対する絶対服従を大前提とした思考構造を作り上げられた人間である。

リュウはバールの命令により大漢中へ送りこまれ、軍情報部エージェントとして MIDASの確保のためOCU日本へ派遣される。そこで彼は和輝たちの信頼を得ることに成功、フィリピンでのMIDASのコピー消失後も計画を速やかに針路変更し科学者（アリサ）を無事大漢中へ連れ帰った。がしかし、ここで一つの誤算が生じる。それはリュウすなわちリアルナンバーがあくまでも「人間」であり、長く行動をともにする間に和輝たちに対する微かな「情」がわいてしまったことだ。

バールのしもべとして生まれ、バールのために生き、そして死ぬことを頭に叩き込まれて育った彼は、バールという絶対的存在を失った今、リアルナンバーとしての自分と和輝たち「不完全な人間」に影響を受け次第に変わって行こうとする自分の狭間で悩み、苦しみながらも、少しずつ当たり前の人間への道を歩き始める。



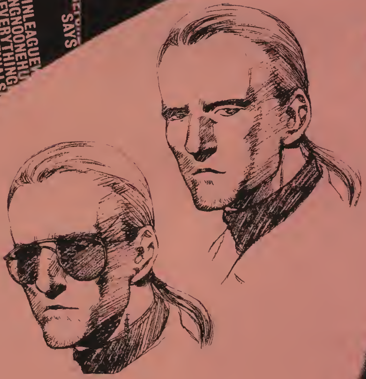
山田章博氏が見た「リュウ」

・リュウのイメージ

黒豹のような猫科の大型獣のイメージ。でも、筆を持たせたら達筆そう。意外なところで、何か妙に可愛い趣味なんか持っていそうな気もする。

・苦労したポイント

リュウに限らず、シナリオの分岐によって敵味方に分かれてしまう人物は皆、難しかったです。どちらになった場合でもある程度納得してもらえる顔をしていなければなりませんから。



穏やかな表情のリュウ。サングラスをかけているものと外しているものの2パターンの絵があるが、イメージ的に前者が「ワル」後者は「優しい」イメージで描かれたもののようだ。

戦いの中の「リュウ」

エマ編では、黒井と同様に和輝たちの行く手をさえぎるリアルナンバー部隊の隊長という敵役としての出番しかない彼も、アリサ編ではそのリアルナンバーと人間との狭間で悩む等身大の姿が描かれている。

[アリサ編：横浜三春町倉庫]

リュウ「OCUにしろUSNにしろ、奴等はMIDASを使って相手より優位に立とうとしか考えていない。だが、このMIDASはそんな生易しい兵器ではないのだ。だから第三者である我々がそれを止めに来た。MIDASを手に入れ、全世界に公表しMIDASの製造を中止させるためにな」

和輝「そんな話を信じろというのか？」

リュウ「では聞くが、今の日防軍がやっていることが正しいことなのか？　秘密を守るために民間人を平気で殺そうとする。そんな奴等が正しいとでも言うのか？」

[アリサ編：南京　海軍基地司令室]

リュウ「俺はパール様に従うためだけに生まれてきたのだ。パール様の命令が何よりも優先される」

和輝「だったらなぜ大使館で俺たちを助けた！　俺たちを捕まえるのがパールの命令だったはずだ。だが、お前は俺たちを大使館から脱出させただろう」

リュウ「それ以上くだらないことを口にするな！　俺はお前に関わるつもりはない」

和輝「1人でパールのカタキを討つつもりなのか？」

リュウ「ルカーヴをこのまま野放しにすれば、パール様の名前に傷がつく。俺は俺のやり方で奴を捕まえる！」

[アリサ編：福島酒場]

リュウ「…俺はリアルナンバーだ、人間ではないのだ。仲間など必要ないものだと思っていた」

メイヤー「生まれ方なんて関係ないわ、ようは生き方よ。あなたは人間よ。それ以上でも、それ以下でもないわ。これからどう生きるかが大切なのよ」

リュウ「そうか…そうだな…だが、ルカーヴへの復讐は果たす。パール様に育てられた恩は返さねばならん」

NAME

MIHO SHINJO



新条美穂
23歳／165cm／57kg

当初和輝たちには日本警察機構交通課・特殊車両班勤務の警察官と自分のことを説明するが、実は日防軍・状況対策課に所属する人間（黒井の部下）である。彼女は佐々木派の計画に支障を来す恐れのある和輝たちを監視する任務を黒井から命じられ、形式上は軍を除隊しわざわざ警察官というカモフラージュ用の立場まで手に入れた上で、和輝たちと接触を図ったわけである。しかし、彼らと行動した長い時間による仲間意識の発現と、その間に徐々に見えてくる自分が理解していた日防軍の理想と現実との齟齬により、彼女の中で漠然とした「任務遂行への疑問」のようなものが渦巻き始める。

美穂が黒井の部下となったのは数年前。彼女の兄がOCU軍の援助部隊として海外派遣された地で命を落としたことがきっかけとなっている。彼はかの地での戦闘行為を政府により禁止されたまま前線に送られ、満足な抵抗もできないまま死んでいったのである。それを知り、日防軍、そして日本という国自体のあり方に疑問を感じ始めた彼女の前に、1人の男が現れ政治家たちの道具に成り下がった軍の腐敗、そして今後あるべき国の姿を語った。その男こそ当時の黒井だったのである。

結局クーデターの失敗により黒井、そして兄の死という呪縛から解放された美穂。彼女は今、ようやく受け売りの思想ではない、自分の目で未来を見据えることかできるようになったのだ。



山田章博氏が見た「美穂」

・美穂のイメージ

これはもう、あの刑事ドラマの「あの」婦警さんでしょう。ゆき○さん。

・苦労したポイント

前もって頂いた設定資料で、かなり複雑な人物背景を知ってしまったために、最初のうちはなかなか可愛い顔にならなくて困りました。おかげさまで人気も高いようで、うれしい限りです。絵の力ではないと思いますが。

戦いの中の「美穂」

アリサ編のみに登場する美穂。序盤は単なる天然ボケキャラとしての役回りしかないが、ところどころ、ふとしたきっかけで、軍の情報部員の片鱗を見せる。

[アリサ編：フィリピン反政府軍本部]

和穂「これがダガト・アハスか…」
亮五「やっぱ無理じゃないの。こんなもの、沈めることなんかできねぇよ」
リュウ「いや、沈める必要はない。要は俺達が北上している間動かないでいてもらえればいいんだ」
亮五「菓子折持ってお願いでもしに行くかい？」
美穂「甘いものがいいですよぉ、でも好き嫌いがあったらどうしましょうか…」

[アリサ編：哮天雷関乗員室]

和穂「処刑を止められないんなら、あの子を逃がすだけだ」
リュウ「大漢中軍を裏切るつもりか！？　そんなことをしてみろ、俺達の命も保証できないぞ」
和穂「だからって、あんな子供を見殺しにできるか！」
美穂「私達がやったと分からなければいいんですね？」
リュウ「ばかな、お前達気は確かなのか！？　そんなことできるわけないだろう」
美穂「手はありますよ。皆さんが協力してくれるのならね」

[アリサ編：呉海軍基地病室]

美穂「政府にとって兄は、OCUでの発言力を得るための道具でしかなかったんです。本当の事を知ったとき、私はこの国のことが分からなくなりました」
藍「…」
美穂「兄を見殺しにしたこの国をなぜ守らなければならないのか？　この国は本当に正しいのか？　分からなくなったんです。そのとき、ある人が私に言ったんです。
「国を守るための軍隊が、政治家達の道具に成り下がっている。いずれ奴等によって日本は潰されるだろう。そうなる前に日本を変える必要がある。我々が守るべき日本はここにはない」



ただ可愛いだけではない、ちょっと「切れ者」っぽさを感じさせる女性というところで山田氏も苦労させられたとおいう美穂。実はこのすぐ下に、「某刑事ドラマの」「ゆき○さん」という自身によるメモが書かれていたりする。

NAME

PHAM LOUYS



ファム・ルイス
17歳／155cm／45kg

「高飛車」「世間知らず」「プライドが高い」「超ワガママ」「家からの独立心が強い」「そのわりに家の財・権力を行使することに抵抗がない」などなど…、あらゆるお嬢様気質をあまねく併せ持つという、完全無欠のハイパーお嬢様。フィリピンでも有数の富豪の一つに名を連ねる「ルイス家」（スラウェシのバリラー一家とは親類の間柄）の令嬢でありながら、持ち前の好奇心と独立心の疼くままにフィリピン自由主義党の政権獲得を支援する反政府軍に参加、スポンサーを買って出ると同時に自らもヴァンツァーに乗って戦闘へ出撃する。意外にも、反政府軍の兵士達の間での彼女の評判は、その戦闘でのカンの良さで結構な戦績を上げていることもあり上々だという。ただし、彼女の人並み外れたワガママさにだけは正直辟易しているようだ。だが軍に多額の出資をしているスポンサーの手前はっきりと忠告することもできない状況が続いている。もっとも、言ったところで彼女が素直に言うことを聞くとは到底思えないが。

ちなみに家族構成は、ルイスコンツェルン会長の父フレッド、関連数社の社長を兼任する母ジェニー、そして執事のピトエフ。ピトエフはルイス家の一人娘であるファムをことのほか心配し、戦場だろうが構わず彼女に付きまとって離れない。そんな彼をファムは少々煙たがっているが、基本的にトラブルメーカー（和輝もあわやというレベルの）である彼女にとって、その尻拭いをして回るピトエフの存在は無くてはならないものとなっているのだ。

戦いの中の「ファム」

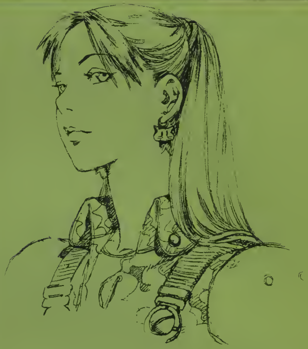
わがままお嬢様のファムはアリサ編が主な登場シナリオ。作戦中・外問わず特に和輝と意見を衝突させることになる。が、しかし意外なところでウマが合う部分も確認できるのだ。

[エマ編：パロポ市　酒場]
亮五「ねぇ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど？」
ファム「…」
亮五「なぁ、聞こえてるんだろ？」
ファム「爺、うるさいハエがいるわ、追い払ってちょうだい」

[エマ編：バリラー実験場]
ファム「バリラーおじ様、助太刀いたします！」
バーデン「おお、ファムか！　実験が嫌で逃げ出したんじゃなかったのか？」
ファム「おじ様達を見捨てて逃げ出すような、薄情な女ではありません」
バーデン「おおそうか、ではすぐにこのメタンヴァンツァーに乗り換えろ！」
ファム「嫌です！」

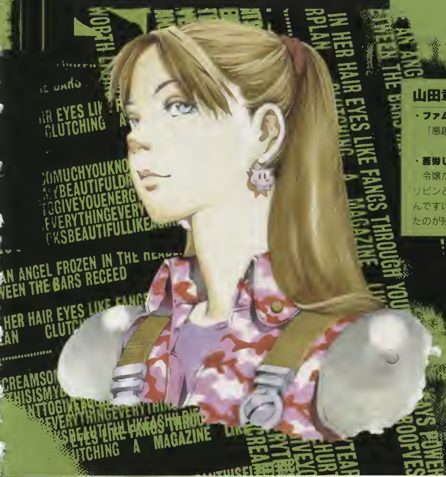
[アリサ編：大漢中潜水艦艦橋]
美穂「なんか、正面から突っ込んでMIDASを取って来いって聞こえるんですけどぉ…」
ファム「いいんじゃないの？　こそこそするのは性に合わないわ。それに、カズキにぴったしの作戦だと思うわよ！」
和輝「そうだな、俺もこそこそするのは嫌いだ」
アリサ「…お兄ちゃん、自慢できないわよ」

[アリサ編：タール基地ヘリポート]
ファム「ちょっと、カズキ！」
亮五「ムダムダ、誰にも止められないよ。こういうときは和輝の好きにさせるのが一番！」
ファム「何よそれ！？　ちょっとリュウ、あなたからも何か言ってよ！」
リュウ「仕方ないな、カズキの後に続くぞ」
ファム「ちょっと、みんなカズキに甘いんじゃないの！　ちょっと待って、私を一人にしないでよ！」



なんとも言えぬ「わがままそうな表情」がよく出ているファムの表情。よく見ると、蝶ネクタイをしたネコのイヤリング（結構少女趣味なのだ）が、ラフの方には胴体まで描かれているのが分かる。

girl jack



山田章博氏が見た「ファム」

・ファムのイメージ
「悪趣味」「そのお嬢様狂暴につき」

・苦労したポイント
令嬢だったりゲリラだったり、バリラー家の親戚だったりフィリピンと北欧のハーフだったりと、面白い設定の山ほどある人なんですけれども、それらを絵的にあまり活かすことができなかったのが残念です。これは反省点ですが。

NAME

LAN SHOU-HUA



ラン・ショウホア（藍　寿華）
34歳／182cm／63kg

大漢中軍の中でも選り抜きのエリートのみで組織された特殊部隊「快速反応部隊」で、隊長のジュ・リエインに次ぐ副長を務める。そのヴァンツァー戦における能力の高さはもちろんのこと、どんな状況に置かれても常に冷静な判断を下し、敵に対してとことん冷徹に対処することのできる精神面の強靭さを買われての抜擢である。快速反応部隊は主に反政府組織「華蓮団」の掃討に全力を上げており、彼女も華蓮団相手の戦闘ではことさらに作戦を徹底する傾向を見せていた。ただし、彼女にはただ一つ絶対に服従することのできない命令があった。それは「子供を手にかける」ことである。

数年前、彼女は子供の誕生日を祝うため、家族連れ立って街へ出かけた。そこで偶然反政府ゲリラによる政府要人の暗殺事件が発生。一気にパニックに陥った繁華街でその後の戦闘に巻き込まれ、気づいたときには彼女を残し夫と子供は息絶えていた。彼女はゲリラを心の底から憎み、彼らへ復讐する力を手に入れるため軍人への道を選んだのだった。しかし、念願の力を手に入れ復讐のための戦いをいくら繰り返したところで、結局夫と子供を失った彼女の心の空白を埋めることはできなかった。むしろ虚しさが大きくなっていくばかりであった。

そんな彼女の人生も今、和輝たち、そして華蓮団リーダーのミン・コォワンと出会って大きく変わりつつある。復讐に生きた数年に犯した過ちの償い、そしてコォワンとの新たな絆。今度は政府軍から追われる身となったランだが、復讐ではついに得られなかった「生きる意味」を、手に入れたのである。



鋭さと同時に、虚しさを漂わせた物憂げな目元が実に印象的なランの表情。その辺の雰囲気は決定稿にあたって多少薄れてはいるが、どこか悲しげな深い色の瞳が、彼女の辛い過去を匂わせる仕上がりとなっている。

戦いの中の「ラン」

エマ編では華蓮団への攻撃に執着する快速反応部隊副長の顔しか見えないが、アリサ編ではミン・コォワンとの出会いから徐々にその母性的な一面が顕著になっていく。

[アリサ編：万安補給基地]

ラン「ウェイという男を捜している。大人しく渡してもらおうか」
ユエ「最近物覚えが悪くてな…誰のことかわからんよ」
ラン「そうか」（発砲）
和輝「ひでぇことしやがる…」
ラン「村を潰しても構わん、ウェイを探し出せ！」

[アリサ編：哮天雷関独房]

兵士「入れ！」
コォワン「うぐっ」
ラン「相手は怪我人だぞ、やめないか！」
兵士「ラン副長、あなたには今指揮権がない。我々に命令することはできないんですよ」
ラン「私の事などどうでもいい。捕虜は丁寧に扱えといっているんだ！」
兵士「構いやしませんよ、どうせもうすぐ処刑されるんです。それまで心臓が動いていればいいだけです」
ラン「処刑？　こんな子供をか！？」
兵士「こんな子供でも、華蓮団のリーダーですからね」
ラン「ミン・コォワンだと？　まさかこんな子供だったのか…」

[アリサ編：鎮遠]

コォワン「ランさんはこれからどうするんですか？」
ラン「恐らく私にも大漢中軍の追っ手がかかる。しばらくは逃亡の身だな」
コォワン「だったら僕と一緒に暮らしませんか…」
ラン「それはできない。私といればお前も危険な目に遭う。それに、私は償いをしなければならない。どうしたらいいかはまだ分からないがな」
コォワン「ランさん…」
ラン「ここでさよならだ」

山田章博氏が見た「ラン」

・ランのイメージ

エイリアンと戦っていた「あの人」。あるいはヴァンツァーに乗り換えた馬賊の姉御といったところでしょうか。

・苦労したポイント

ただ強いだけではなく、母性的な要素（我が子に対してだけというのではなく）の多い人だと思っています。その分、少々穏やかさが強調されているきらいはありますね。単純に「母親＝優しさ」とは考えていないんですけれど。



NAME

MAYER EDWARD



メイヤー・エドワード
28歳／176cm／65kg

OCUが有する、連合最大の情報機関CIUのエージェント。その仕事ぶりは大胆にして細心。その陽気で人当たりのいい性格と、彼女はそれを明確に自覚しているかどうか怪しいが明るさの中に漂う大人の色気を最大限に活かして目標への接触を図るのが、彼女の捜査スタイルとして確立されている。ただ、ときおりその「大胆さ」が度を過ぎることもあったが（特に好きなお酒がからんだときなど）、彼女に対する諜報員としての上層部の評価は総じて高いものである。

メイヤーは佐々木派の画策したクーデターが徐々に本格化しようとする中で、OCU日本のどこかに日防軍が隠した「正真正銘オリジナルのMIDAS」が存在するという情報により派遣される。そしてルカーヴの行方を見失った和輝たちに接触、クーデターやMIDAS、そしてルカーヴの情報を提供して彼らを日本へと導く。日本上陸後も彼らとともに佐々木派勢力と戦いながら、MIDASの捜索およびその完全凍結へ向けて奔走する。それはもちろんCIUエージェントとしての任務の効率を配慮してということもあるが、それとはまた別に彼女の個人的な「日本への執着」による動機も存在している。

外見からはほとんど判別することはできないが、メイヤーはオーストラリア人の父と日本人の母を両親に持つハーフである。幼い頃は母親と一緒にしばらく日本で暮らしていた時期もあった。そして母親が死に、父の国オーストラリアへ移り住んだ後も、彼女の中には「母との想い出の国」として日本はずっとあり続けていたのである。母の愛した国日本が今、MIDASという「力」とそれを手に入れようとする一部の人間たちによって、彼女の想い出ごと踏みにじられようとしている。ひょっとしたら、彼女にとってそれが最も許せなかったのかもしれない。

山田章博氏の見た「メイヤー」

・メイヤーのイメージ

ジュリアン・マクドナルドやマーク・ウィタカー風のエッジなロンドン・ファッションにしようか、ヒップ・ホップ系にしようか最後まで迷ったんですが、結局その時期よく聴いていた音楽から後者に決定しました。

・苦労したポイント

衣装のメインカラーを決めるのに難儀した覚えがあります。ちなみに、カーゴ・パンツからのぞいているストレッチ素材のショーツに書かれているのは、ブランド名ではありません。



戦いの中の「メイヤー」

迫り来る三十路に怯える彼女ではあるが、ゲーム中ではそれを微塵も感じさせない明るさで、和輝たちの「お姉さん」的な位置におさまる。その一方で頑ななリュウを説得してしまうなど大人としての魅力あふれる女性振りも発揮するのである。

[アリサ編：上海　酒場]

和輝「あんな親父の事なんて知るか！　俺はあいつとは何の関係もない。あんたに付き合って日本に行くのなんかゴメンだ」

メイヤー「クーデター軍がMIDASを持っているって言ってもだめかしら？」

アリサ「！？」

和輝「ふざけるな、オリジナルのMIDASはフィリピンで爆発してしまったんだぞ。なんで日本なんかにMIDASがあるんだ！？」

メイヤー「フィリピンで爆発したのも、日防軍が作ったコピーだとしたら？」

[アリサ編：名古屋　化学工場]

磯貝「ああ、私は政府の命令でのみ動く。それが今の政府でもクーデター軍の新政府でもだ。それまでは動くつもりはない」

メイヤー「わかりました」

和輝「これでいいのかよ？」

メイヤー「ええ、彼の本心が聞けたんですもの。それだけでも十分に意味はあるわ」

[アリサ編：福島　酒場]

メイヤー「私は自分の思い出を守るために戦ってるの。ルカーヴなんていう変な外国人に、私の想い出を荒らされたくないからね」

リュウ「とりあえず、目的は同じというわけか」

メイヤー「ええ、仲間よ」

リュウ「仲間か…」

メイヤー「元気が出たなら、付き合いなさいよ。しっかり私の相手をしてもらいますからね！」

リュウ「…お前、結構怖い女だな」

メイヤー「あら、今ごろ気がついたの？」



顔の個々のパーツが大きく、モテルと言っても十分通用しそうなメイヤー。父親譲りのフルーグレイの瞳とブロンドの髪のせいもあって、それほどハーフということを意識させない。

NAME

LUKAV MINAEV



ルカーヴ・ミナエフ
28歳／185cm／78kg

バール・ゴルボフスキイが自らの「最高傑作」と言ってはばからない、イマジナリーナンバーの一人。バールの命を受けUSNに渡ったルカーヴは、オーレン大学政治学部卒業後FAIに入局。そこでもイマジナリーナンバーとしての能力を遺憾なく発揮し、エージェントの中で群を抜いた功績を上げる。そして数年前に起きた「メキシコ危機」での功を認められ、異例の若さで「太平洋方面課」主任に就任した彼は、その後も的確な判断で完璧に任務を遂行し現在の太平洋方面課課長に推された。そこではデニスの上司でもあり、今回の「MIDAS奪回作戦」の陣頭指揮を執っている。

バールはそんな彼を完璧に操っているつもりで、いずれはMIDASを手に入れ世界での大きな影響力をその手に握ることを妄想していたであろう。だが、バールはイマジナリーナンバーを甘く見ていた。彼らはあまりにも「優秀過ぎた」のである。ルカーヴを始めとするイマジナリーナンバー達が持つ「人間を超えた存在」という自らに対する共通認識。それが誰よりも強かったルカーヴは、表面上バールに従いつつ、MIDASを我が物にしイマジナリーナンバーが世界を支配する未来を実現させようと考えていた。そしてそれは日防軍のクーデターまではほぼ予定通りに進んでいたのだ。

結局、すんでのところで彼の計画は阻まれた。だが、MIDASの凍結宣言を余所に、イマジナリーナンバー計画はほとんど省みられることなく今後も密かに続けられていく。その新たな「子供達」は、志半ばにして倒れたルカーヴという男のことを知ったとき、はたして何を思うのか。

もしかしたら、今度は別の結末が待っているのかもしれない。



表情など、決定稿とほとんど変わるところのないルカーヴだが、カラーのほうは目元に漂っていた「静かな狂気」のような部分が抑えられ、クールなイメージにまとまったような感を受ける。また、ラフでは外されている襟のボタンが、決定稿ではちゃんとかけられているのが面白い。

戦いの中の「ルカーヴ」

アリサ編だけを見ると単なる冷血な男としか映らないが、エマ編では和輝たちと行動をともにするしばらくの間に、（それがたとえ演技にしろ）人間らしい感情を見せる場面がある。

[エマ編：タール基地　排水溝出口]

和輝「ルカーヴ、アリサ達を頼む。俺達はこのままパープルヘイズの援護に向かう！」

ルカーヴ「了解だ。エマ、お前も一緒に来い。お前も科学者だ。これ以上戦闘に参加する必要はない」

エマ「いいえ、まだMIDASを取り返したわけじゃない。私は最後まで残るわ…」

ルカーヴ「…そうか。和輝、あのときなぜ私を見捨てなかったのだ？」

和輝「仲間だろ、見捨てられるかよ」

ルカーヴ「お前はお人好し過ぎる。いずれ後悔するぞ」

[エマ編：ラーブヌイ大使館]

ルカーヴ「バール、所詮あなたもできそこないの人間なのだ。あなたの利用価値はすでに失われた」

バール「ルカーヴ？どうしたんだ…お前は私の最高傑作なのだ。お前は完璧なのだぞ。何故そんな事を言うんだ！？」

ルカーヴ「そう、私は完璧だ。私は選ばれ、この世を統べるために生まれた人間なのだ」

[エマ編：沖縄海洋都市　プライマリィブロック最下層]

和輝「おやじー！」

ルカーヴ「許さん、断じて許さんぞ！　ムシケラの分際でここまで私を愚弄するとは！　貴様らの命で償ってもらおう！」

和輝「…手加減なしだ。手を抜けばお前が死ぬことになるぞ。本気で来い！」

ルカーヴ「ばかが…MIDASがある限り、人間は愚かな行為を繰り返す。そうなればいずれ世界は滅ぶのだ。この私だけが世界を救うことができた。この私だけがな…」

山田章博氏が見た「ルカーヴ」

・ルカーヴのイメージ

指定には「細い」「怖い」「冷たい」「頭が切れる」「人形」などの言葉が書き連ねられています。

・苦労したポイント

こういう設定の人物は、得てして精神性に勝った魔術師的なキャラクターになりがちなんですが、できるだけマテリアルな質量を持たせるようにしました。エマもそうなんですが、シンプルな造作なので「メリハリ」がつけづらいキャラでした。



NAME

YUJI KUROI



黒井優二
32歳／180cm／75kg

己の主張を持たず、USNやザーフトラ　さらに同じOCU内のオーストラリアなどの大国に対しても常に顔色ばかりをうかがい、迎合するしか能のない現在の政権、そしてそんな国策しか執る事のできない政治家達のパワーゲームの道具に成り下がってしまった日防軍の内情を憂い、立ち上がる憂国の志士。陸軍士官学校卒業後、国防陸軍独立機動軍第一独立軽機甲兵旅団に配属された彼は、クーデター後のOCUアロルデシュへの派遣を始めさまざまな任務を成功に導いていった。そしてそれらの功績を手土産に、今度は国防総合軍司令部下の機動強襲群・状況対策課へ異動、ここで佐々木参謀長の腹心として働き始める。

佐々木が提唱する「世界での発言力を持つための武力の強化」という強兵論に呼応した「佐々木派」のメンバーにより、水面下で密かに進められてきた日防軍クーデター計画。黒井はその実行部隊のリーダーとして、アラスカのUSN軍施設からのMIDAS強奪に始まる一連の作戦の指揮を執っていた。しかしフィリピンでの2つ目のMIDASコピー投下後、本格化するクーデター計画の中で、彼が信じた「新たなるOCU日本」への理想は徐々に変容していった。ルカーヴの裏切り、そして和輝たちの活躍による佐々木の失脚。結局黒井たちの計画は腐敗したシビリアン・コントロールの前に敗北する。

確固たる信念と力を備えた指導者と、それによるOCU日本の未来を最後まで夢見、己の理想を追い続けた黒井。ひょっとすると彼が本当に求めたのは権力でもMIDASでもなく、軍人として命を賭して守るに足る国、国民、言いかえれば彼の軍人としての揺るぎない「存在意義」だったのではないのだろうか。



山田章博氏が見た「黒井」

・黒井のイメージ

「黒装束」「憂国の忍者」。実は少年っぽい男だと思っています。

・苦労したポイント

その言葉・行動の冷徹さは、他者への無関心に由来するのではなく、一途な性格やもてあまし気味の「歪み」から来ていると僕は考えています。だから、あえてただの二枚目にせず、多少奇妙な印象を与えるような外見にしたつもりです。

戦いの中の「黒井」

両編でそれほど役回りに違いのない黒井。だが、アリサ編のほうがエマ編よりも日本へ戻ってから若干黒井の内面が細かく描かれている。

[エマ編：釜利谷ジャンクション]

黒井「見つけたぞネズミめ。爆発の秘密を知られた以上見逃すわけにはいかん。いいか、捕獲が難しければ殺しても構わん。ここで奴等を押さえろ！」

兵士「はっ！」

[アリサ編：幕僚本部作戦室]

黒井「どういうつもりだルカーヴ！　海田基地へのミサイル攻撃など許可した覚えはないぞ！」

ルカーヴ「作戦の目的は基地の制圧だ。何も問題はない。作戦は成功した」

黒井「成功だと？　これだけの犠牲を出して何が成功だ！」

[アリサ編：厚木基地滑走路]

岡野「佐々木参謀を放っておかれるのですか？」

黒井「構うことはない。彼は欲のために自分の理想をすてたのだ。我々とは進む道が違う。私は理想をすてたりはせん」

岡野「これからどうなさいますか？」

黒井「まずはルカーヴを仕留める。奴を野放しにしておけば、必ず我々の障害になる。その後MIDASを切り札に革命を成功させる。お前達に強制はせん。ついて来たい者だけここに残れ」

岡野「我々は全員少佐の命令に従います」

黒井「…すまない。全員輸送機へ搭乗、作戦を開始する！」

[アリサ編：阿蘇山麓]

和輝「黒井、あんたは力の使い方を間違っている。この力は支配するための力ではない、守るための力だ！」

黒井「…腐った政治家も、気の抜けた国民も、守る価値などない！　何もしない、何もできない、そんな奴等がこの国を駄目にするのだ！　ならば、力のある者がこの国を導く必要がある！」



決定稿と比べて、幾分がっちりとした顔の作りになっている黒井。山田氏は武村伊佐夫とイメージかかぶってしまうことを気にしていたらしく、脇に「前髪上げる」「伊佐夫とかぶる」などのメモが書かれている。

NAME

ISAO TAKEMURA

武村伊佐夫
42歳／175cm／74kg

「かなり古いタイプの日本の父親」という表現がぴったりくる人物。アリサの素性を含めたイマジナリーナンバー計画、佐々木派のクーデター、それらを知りまたは予想した上で、あくまで父であり（日防軍の）軍人であることにこだわり続けた。そんな父親の態度に、何事も「はっきり」していなければ気が済まない和輝などは反発を覚えるが、それ以外の性格的な要素はまさに和輝と瓜二つで、これと決めた後の行動力においてはそれ以上にも思えるほどである。



決定稿のほうがいくらか細面で目つきも厳しげに描かれている。そのせいか、性格的なものがよく伝わってくるように思える。某ダ○エーホークスの監督に似ているような気もするが…。





山田章博氏が見た「伊佐夫」

・伊佐夫のイメージ

「侍」「厳父」「休日は着物」

・苦労したポイント

実を言うと僕と同い年なんです。描いている自分がしっかりしていないもんだから、どうしても貫禄のある「日本の父」にならず、数回描き直しました。

戦いの中の「伊佐夫」

日本人どうしが戦うことを何よりも嫌っていた伊佐夫。しかしクーデターも終盤、和輝も驚くほどの行動力を発揮する。

[エマ編：沖縄海洋都市]

和輝「おい、何考えてんだよ！？」
伊佐夫「無茶の一つもしなければ、MIDASにたどり着くことはできん。行くぞ！」
ユン「やっぱり親子だね！」
和輝「何がだよ！？」
ユン「行動がカズキにそっくり」

NAME

RUDOLF KEIZAH

ルドルフ・カイザー
40歳／188cm／70kg

国籍不明（ネットワークフォーラムはECにある）の傭兵組織「呉龍」の隊長。国に所属する軍隊ではない彼等の戦う理由は、ずばり「金」と「戦闘行為そのもの」にある。かつてはEC陸軍少佐だったらしいが、除隊した詳しい理由などは不明。だが、結局は戦争屋として生きていくことしかできない、不器用な男である。しかししかといって寡黙なだけの男ではなく、戦場においても気の効いたジョークを飛ばす精神的余裕と、一般人に対してやわらかな物腰で接する常識も持ちあわせている。





決定稿は「微笑」を浮かべているようにすら見えるのに対し、こちらはかなり感情を押さえた表情をしている。ほぼ同じ絵柄なのに、極端に印象が違って見える2枚である。



山田章博氏が見た「ルドルフ」

・ルドルフのイメージ

「ロイ・バティ（映画ブレード・ランナーでルトガー・ハウアーが演じた戦闘用レプリカント）」「戦争請負人」「騎士くずれ」

・苦労したポイント

先に決まっていたパイロットスーツに合わせて考えました。呉龍のスーツは、例えばハタリやレベッカには似合うのですが、ゲルマン系のルドルフには鮮やか過ぎたので、絵に描くとき彩度を抑えて対処しました。

戦いの中の「ルドルフ」

エマ編では敵として、アリサ編では味方として登場する呉龍の面々。たが、基本的に彼等のノリが変わることはない。

[エマ編：玉堀付近]

レベッカ「傭兵のくせに私達を知らないなんてな」
ルドルフ「モグリもいいところだな。俺はルドルフ」
レベッカ「私はレベッカ」
ルドルフ「俺達は、」
レベッカ「私達は、」
ルドルフ＆レベッカ「傭兵部隊「呉龍」だ！」

NAME

REBECCA CYDNZ

髪もベリーショートにし、女性的外見を極力抑えこんでいる風に見えるレベッカ。しかし、唯一髪のカラーリングに、その女性としてのおしゃれ心の名残が窺える。



レベッカ・シドンズ
29歳

呉龍の中で唯一従軍経験を持たないにもかかわらず、部隊の副長と作戦担当という重責を担う。その天性の鋭いカンを活かした作戦立案能力と天才的な狙撃の腕は、数年前に赴いたアロルデシュの地において今でも「ブリティ・リッチー」という名で恐れられるほどである。

彼女は18歳のときに起きたアフリカの内戦で両親を失い、その時助けてくれたルドルフに頼み傭兵となった。

NAME

HATALI KAUTILIYA

その柔和な性格が全体に現れたハタリの表情。しかし、その中でも目だけは数々の戦場を潜り抜けてきた人間だけが持つ複雑な思いがたたえられている。





ハタリ・カウティリヤ
41歳

EC軍情報部の中央アジア現地活動員としてインドに赴任していた元情報将校。11年前、当時同じくEC陸軍にいたルドルフとともに退役し、アフリカ某国の独立戦争で「呉龍」としての活動を開始させた。最年長らしく部隊の和を事のほか重んじ、彼女の資質と部隊全体のバランスを考えレベッカを副長に推したのは実はこのハタリである。ルドルフとは長い付き合いということもあり、ほとんど言葉も必要ないくらいの仲。決して派手に目立つことはないが、陰で呉龍を支えているのはこの男なのである。

EMIRIO GUSLLY

NAME

若さゆえの「調子に乗った部分」がよく現れているエミリオ。服装には気を遣うタイプのようで、パイロットスーツの着こなしも他のメンバーとは一線を隔している。



エミリオ・グスリー
17歳

「遺伝子にWAPのOSを書きこまれて生まれてきた」という冗談のような噂が、単なる笑い話としてではなく語られるほど天才的なWAP操縦の才能を持つ少年。

ECイタリアで衣料商社を営む家に生まれ、かなり甘やかされた環境で育った。そのためか将来の自分の人生の目標を見出すことができず、EC軍に入隊するも、組織になじむことができずに除隊。そして各国の傭兵部隊を転々とした後呉龍へ流れ着いた。その口の悪さはアウトローの集まる傭兵部隊でも随一。それに関しては常にハタリにたしなめられている。

GREGORY HENGEL

NAME

グレゴリ・ヘンゲル
33歳

元USN軍上級曹長。その深浅はともかく、何事においても「頭を使って考える」という行為自体が嫌いで、逆に自分の身体能力を総動員して戦うことが何よりも好きだという、非常に分かりやすい筋金入りの戦闘人間。しかもその強靭な肉体と、難しいことを考えない思考回路は、最前線における、ときに絶望的なまでの混乱と恐慌の中にあって、自分、そして部隊そのものの能力を最大限に活かすと言われている。

あらためて説明するまでもなく、格闘武器による白兵戦を最も得意とし、内戦下のアフリカで「ヴィンデ・ノワール（黒い暴風）」の異名を取るほどの活躍を見せている。





決定稿ではあごのラインを始め全体的にもう一歩「ごつい」顔に仕上がった感がある。また、両耳に確認できるピアスはラフの方では見られない。

NAME

JOE PAKER



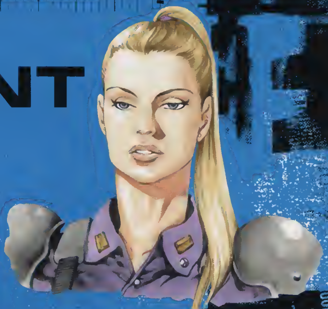
ジョー・ベーカー
32歳

FAI直属の実行部隊「パープルヘイズ」の隊長を務める、気さくでいつも陽気なアメリカ人。その突き抜けた明るさは戦場においてもなんら変わることがなく、ときに変な目で見られることもあるが、彼自身は相手を「いまいちノリの悪いヤツ」ぐらいに思う程度で、まるで意に介す風を見せない。しかし、彼のそのキャラクターは、極度の緊張が支配する戦場で恐怖心に捕らわれることなく任務を遂行する上で、この上ない効果を発揮する。

ちなみにパープルヘイズは全部で8人のメンバーで構成されているが、今回のMIDAS奪回作戦に参加しているのはジョーを含めた3人だけである。

NAME

CINDY PEASANT



シンディ・ペザント
26歳

鍛え上げられた大柄で筋肉質のパワフルボディを、軍人として誇らしく思っている反面、女性としてはコンプレックスを抱いている。少々粗雑な中にも意外に女性らしい部分を備えた「姉御肌」の性格は特に亮五とウマが合うらしく、戦場においてもその軽口の飛ばしあいが止むことはない。

スピード重視の軽装WAPに乗り、チームのスナイパーを務めている。

NAME

GASTOR MERSA



ガストール・マーザ
31歳

政治学の博士号を取得しているという、少々変り種のインテリ軍人。実は人事部の方には内勤を希望していたらしいが、何の手違いかパープルヘイズへ配属が決まってしまったらしい。ジョーの啓蒙により最近になってようやく任務遂行にも慣れてきたが、もともと染み付いた「腰の低さ」だけはなかなか抜けきらない。それが悩みといえば悩みかも知れない。



設定原画ギャラリー

知られざる
front mission 3の世界

開発段階の試行錯誤の中で

消えていき

あるいは逞しく生き残ったイメージ

キャラクター

スーツ・兵器

それぞれにまだ荒削りながらも

パワーと輝きを放つ

「作品」たちに触れる





私服：全身・顔

左は服装のバリエーション、上は表情のテストとして描かれた私服の和輝のイラスト。どうやら和輝はわりとルーズっぽい服装がお好みのようだ（まぁ、バイカーズスタイルやモード系スーツを着た和輝というのも想像しづらいものがあるが）。また、両方とも私服のリラックスした雰囲気がよく表現されている。

N A M E
Kazuki Takemura

武村和輝

パイロットスーツ：全身・顔

霧島重工のパイロットスーツに身を包んだ和輝。このパイロットスーツに関してはかなり初期の段階で設定が固まっていたらしく、この時点ですでにディテールは割と細部まで完成している。







私服：顔②

和輝の表情テストその②。ゲーム中では見られることのなかった「不適な笑みを浮かべた」（と見えてしまう時点でかなり偏見が入っているが）ものである。

エミール・クラムスコイ

NAME
Emir Kramskoi



白衣：全身

「研究所へ出勤直後、あわただしく着替えながら研究室へ向かう」というシーンイメージであろうか。なかなか新鮮な印象を受けるスタイルだ(表情は硬いけれど)。手に眼鏡を持っていることに注目。と、いうことは普段はコンタクトをしているということだろうか。



パイロットスーツ：バストアップ

パイロットスーツ姿のエマ。心なしか最終的なものより髪の量（長さ？）が多いようにも見える。また、細かい事ではあるが、襟元のスカーフの処理がこちらではまだ完成されていない。



私服：顔

珍しくリラックスした表情のエマ。服装のほうも部屋着に近いリラックスできるものを着ているようである。と、ここで重大発見。やっぱりエマには黒が似合います。ゲーム中であまり服装のバリエーションが見られなかったことが、今更ながらに残念である。



パイロットスーツ：顔

霧島重工のパイロット用スーツを着た亮五、の表情バリエーション。テスト場のブースの向こうに女性でもいるのか、少々かっこよくキメた表情を作っている。



パイロットスーツ：全身

パイロットスーツでのポーズ集、という位置付けのものであろうか。ファスナーをだらしなく開けているところが、いかにも亮五らしい。



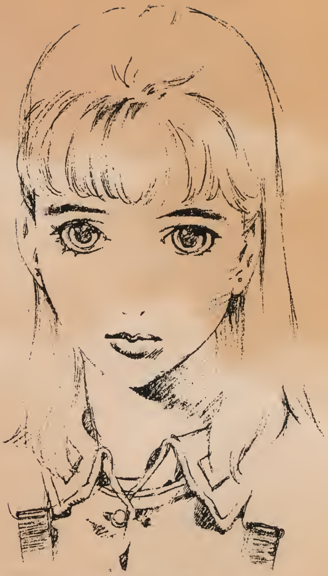
私服：全身

完全休日モードの私服でまとめた亮五君。サングラスなど小物も使う辺り、今日はナンパであろうか、といらぬ詮索までしてしまいそうになるほど、彼の日常を的確に表した一枚。

草間亮五

NAME
Ryogo Kusama





パイロットスーツ：顔

アリサの表情バリエーション。これは、普段は意外に見る機会の少ない正面からのもの。ちなみに、少々分かりづらいが着ているのはパイロットスーツである。

NAME
Alisa Takemura

武村アリサ

私服：全身

アリサの服装、もしくはポーズのバリエーション集から。彼女のイメージにしては珍しい割と活動的な服装である。帝北大学のキャンパスを覗けばこんな彼女に出会えるのかもしれない。

デニス・ヴァイカート

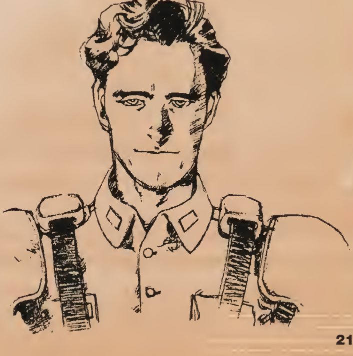
NAME
Dennis Weikath





私服：全身・顔

ロングコートでビシっと決めたデニス。情報機関のエージェントというよりは、ハードボイルドの世界、もしくはギャング映画のスクリーンから抜け出してきたキャラクターのようでもある。ちょっとユーモアのセンスに欠けるところが問題だが。



パイロットスーツ：バストアップ

USN軍のパイロットスーツに身を包んだデニス。彼にはこういった制服モノのほうが似合って見えるような気がするのは、やはり偏見だろうか。

NAME
Yun Reifa

ユン・ライファ



タイトル：「モバちゃんと一緒」

特に制服というものを持たないユンなので、当然ながらイラストは私服（？）が多い。これはデニムの上下にスカーフのワンポイントでまとめている。横にあるのは相棒の「モバちゃん」。ステッカーだらけのモバイルケースの中央に貼ってあるのは「天地無用」だったりするのだろうか。



タイトル：「ほおづえ」

ユンの表情バリエーション。彼女は実にこの手の「悪戯っぽい」微笑みが似合う女の子である。関係ないが、精一杯胸元の開いたこの服装は普段「子供子供」とバカにされることへの反発であろうか？

ホセ・アストラーダ

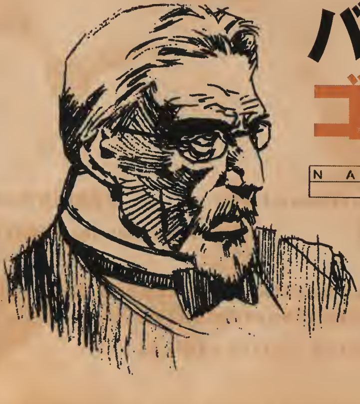
NAME
Jose Estrada





パイロットスーツ：全身・顔

人生に絶望し、あきらめてしまった男ホセ。その全身の脱力感と、疲れ切った表情が印象的である。その疲弊感を出しすぎたためか、かなり年齢がかさんで見える。



バール・ゴルボフスキィ

NAME
Var Gorbovskii

バール：表情

「老猾な政治家」「世界制服をたくらむマッド・サイエンティスト」といったようなイメージで描かれたバール。山田氏は当初精力的な人物像を表すため、体型を絞ったデザインにしていたとか。



パイロットスーツ：全身

とても40を越えている風には見えない、ビルドアップされた肉体を誇るマーカス。その魅力（？）が遺憾なく発揮された一枚である。

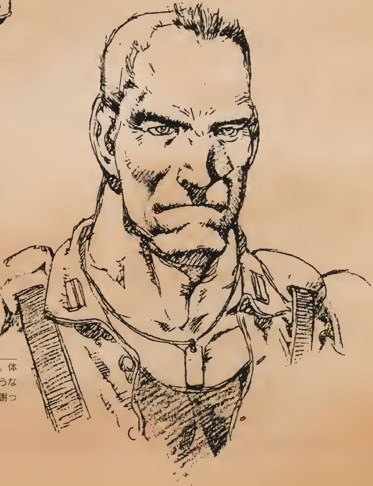


くわえ煙草：横顔

残念ながら銘柄などは不明。リラックスした空気の中、加えタバコで仲間たちと他愛のない会話に笑い合う、そんな姿が目に浮かんでくる。

N A M E
Marcus Allen

マーカス・アレン



パイロットスーツ：バストアップ

パイロットスーツの上着を着た状態のバストアップ。体の大きさのせいばかりではない、なにか「質量」のようなものを感じる。彼にこんな顔で威圧されたら、思わず謝ってしまいそうである。

制服：全身

日防軍の士官服姿の伊佐夫。その肩と襟には陸軍大佐の階級章が縫い付けられている（実は決定稿の同じ構図のモノには描かれていない）。またよく見ると、丈の割に極端に上にまとめられた三つボタンなど、デザイン的な面白さも確認できる。





制服：顔

伊佐夫の表情バリエーション。これはかなり初期段階のものか、見た目が若く描かれていて一見「野心的な若手将校」という風に見えなくもない。

NAME
Isao Takemura

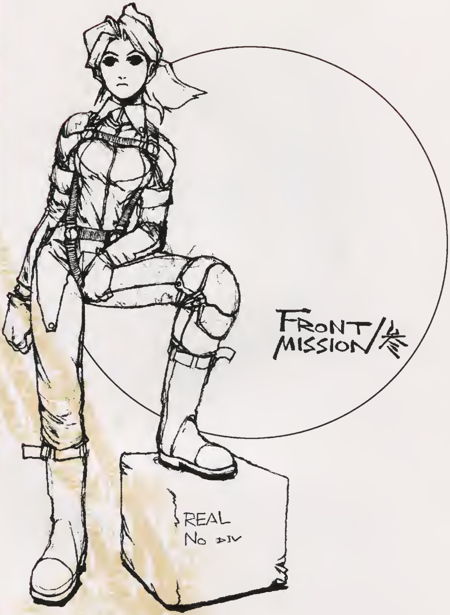
武村伊佐夫

未公開

設定原画

Not Released to The public

「フロントミッション　サード」では、開発の過程で軍装備や兵器に関する膨大な量の設定が作られている。ここでは、本編で掲載しきれなかったそれらのイラストを、2パートに分けて可能な限り紹介していく。



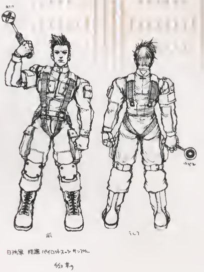
1 部隊別パイロットスーツコレクション

ゲーム中ではその全体に触れられることのない、各部隊のパイロットスーツ。メインどころはもちろん、大漢中軍の集団軍などのマイナー部隊まで、ついにその全貌が明らかになる。ちなみにイラストは開発チームの草野氏がほとんど一人で描いている。



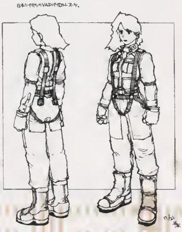
日防軍　陸軍パイロットスーツ

日防軍では最もポピュラーなスーツで、横に倒れた状態の胸ポケットが特徴。これとまったく同じデザインで色がもっと黒っぽいグリーンのものが、特殊部隊用（黒井などが着ている）になる。

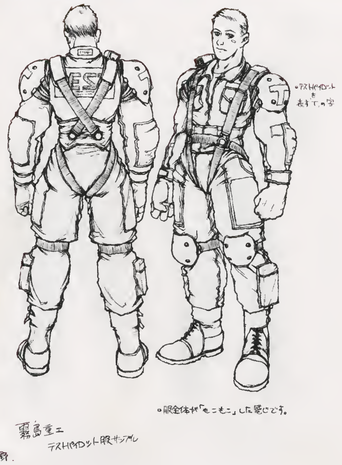


日本警察機構パイロットスーツ

新条美穂が着ているパイロットスーツが、これ。軍の物に比べやや軽装で、加えて野暮な印象をうける。しかし、そこは青と白を基調としたお馴染みのカラーパターンでうまくまとめている。







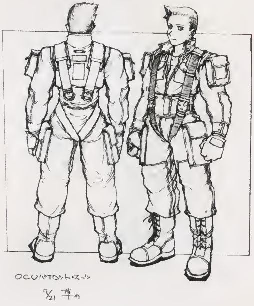
霧島重工 テストパイロット用スーツ

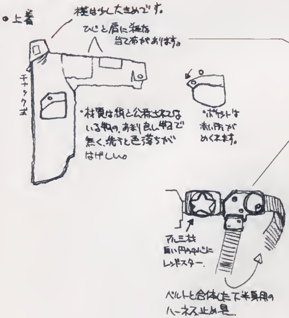
ゲーム中で和輝と亮五が着ている、霧島重工のテストパイロット用スーツ。オレンジを基調とし、上着の背中に「TEST」、そして肩パットに同義の「T」のプリントが施されている。



OCU国防軍 パイロットスーツ

ちょっとカラーは異なるが、ホセが着ているスーツがちょうどこれにあたる。よく見ると分かるが、イラストでホセは手袋もちゃんと持っている。

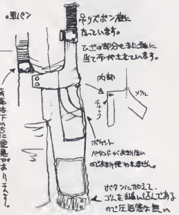






大漢中軍
集団軍パイロットスーツ

実は、ゲームには「集団軍」という名前のものは存在しない。彼らは「常強軍」と名前に変更を受け、台湾以降の大漢中編において登場している。

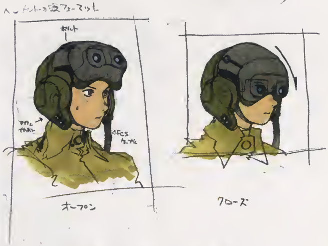




大漢中軍
パイロットヘルメット

常強軍を始めとする大漢中の一般的な部隊で使用される、コストダウンを第一の課題として作られたパイロット用ヘルメット。そのためかなり重いらしい。





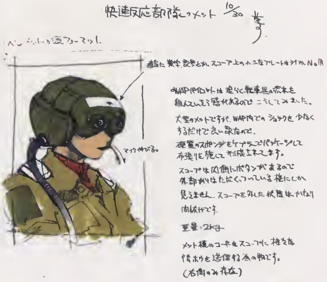
大漢中軍　緊急展開軍パイロットスーツ

武漢周辺での会話にのみ登場する、ちょっとマイナーな大漢中軍の「緊急展開軍」で採用されているパイロットスーツ。ベースは常強軍のもので、それに肩パットなどの小物が追加されている。



大漢中軍
快速反応部隊パイロットスーツ

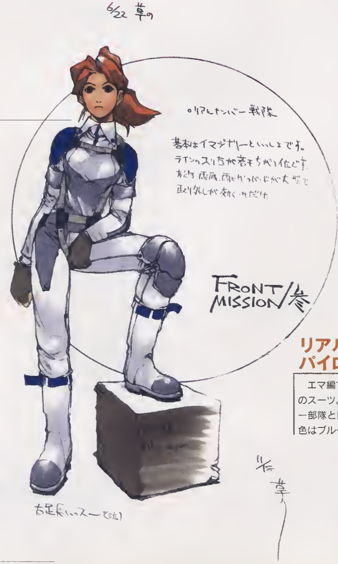
ランが副隊長を務める「快速反応部隊」のパイロットスーツ。そしてその横にあるのが部隊専用のヘルメットである。さすがは大漢中軍のエリート部隊だけあって、装備も充実している。





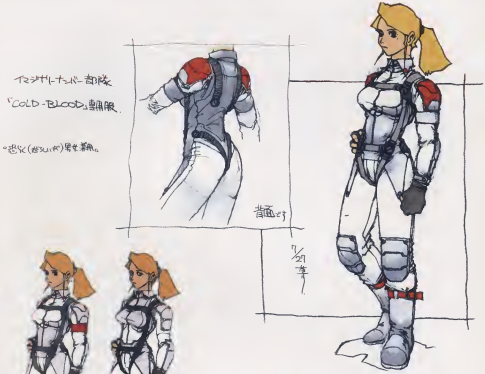


デザインの一番の特徴はやはりこの襟。角のボタンダウン風のワンポイントも効いている。



リアルナンバー部隊
パイロットスーツ

エマ編でリュウが率いる「リアルナンバー部隊」のスーツ。基本は右ページのイマジナリーナンバー部隊と同じで、パーツは一番左の②を採用し、色はブルーが基調。結構おしゃれなデザイン。



大漢中軍　イマジナリーナンバー部隊専用スーツ

リアルナンバー部隊との相違点は、肩パットとブーツのベルトが赤いのと、上着の胴部分のグレーが薄めであるところ。ジオールやロザヴィアが着た物だ。

パーツ＆カラーパターン案

イマジナリーナンバー部隊用スーツ設定用に描かれた、カラー＆パーツパターンサンプル。

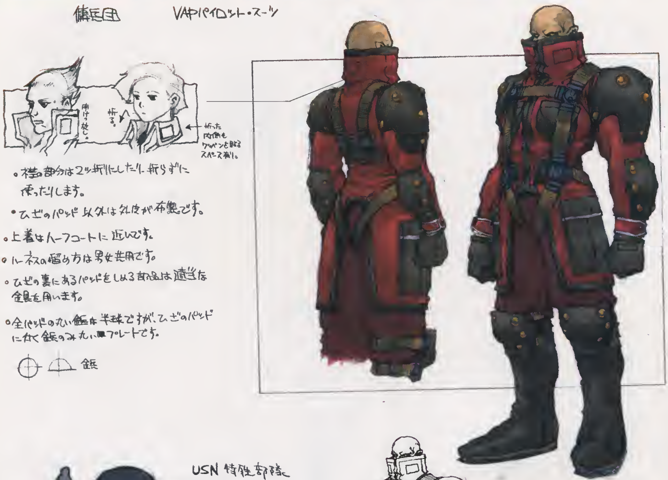


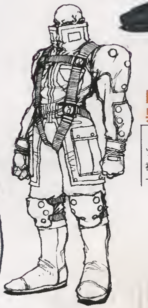
イマジナリーナンバー部隊用カラーバリエーション案

少々前に描かれた、イマジナリーナンバー部隊用のスーツ案。デザイン自体がまだ快速反応部隊のものに近い。またカラーも「〜風」というところから入っているのが面白い。









EC傭兵部隊 呉龍 パイロットスーツ

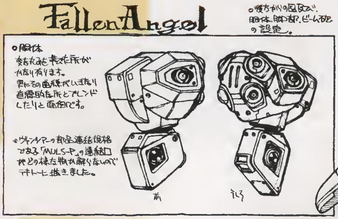
ルドルフ率いる「呉龍」の個性的なスーツの設定。素材や各パーツのディテール、襟のアレンジ方法までこと細かく指定されている。

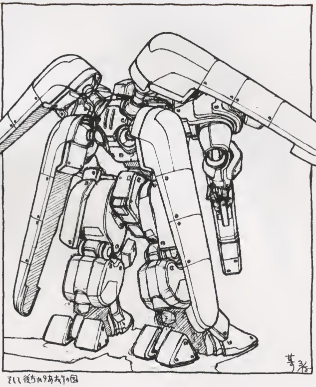


USN国防軍 特殊部隊パイロットスーツ

パープルヘイズの3名が着ているのが、ちょうどこのタイプにあたる。実際ジョーたちが防弾用のボディアーマーまでつけていたかどうかは不明だが。





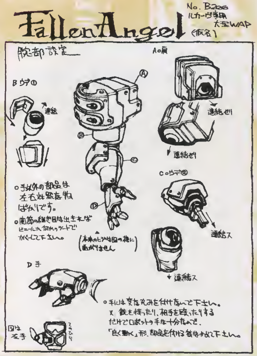


未公開 設定原画

2 戦う乗りもの大集合

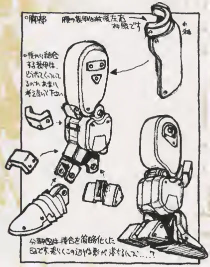
ここからはWAPを中心に、兵器の設定をゲームには登場しない「お蔵入り機体」まで含めて紹介していく。細部にわたる細かい指定から、まるで冗談のようなWAPまで、バリエーション豊かなその世界を楽しんで欲しい。



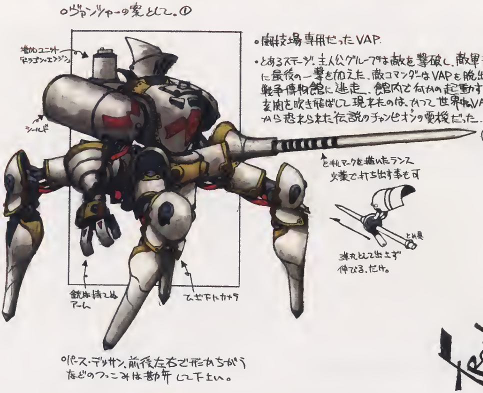


ルカーヴ専用大型WAP

沖縄海洋都市においてルカーヴが乗っていた、ビーム兵器搭載のオレンジ色の大型 WAPがコレ。見えない部分まで細かい設定が及んでいるのが分かる。主力兵装は「全力ビーム砲」（笑）。









ボス(?)WAP案その①

馬上の騎士を連想させる、かなり趣味に走っているWAP。ちゃんとランス（パイルバンカータイプ）の解説までされているところが細かい。

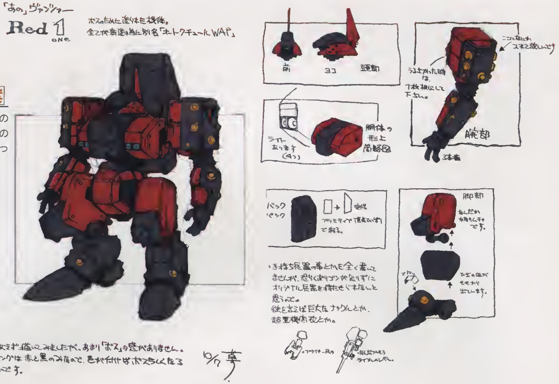


正体不明WAPイメージ

おそらく前ページの［Fallen Angel］の基となったと思われる機体。手に剣を持っていたりするなど、設定にはかなり相違はありそうだが。

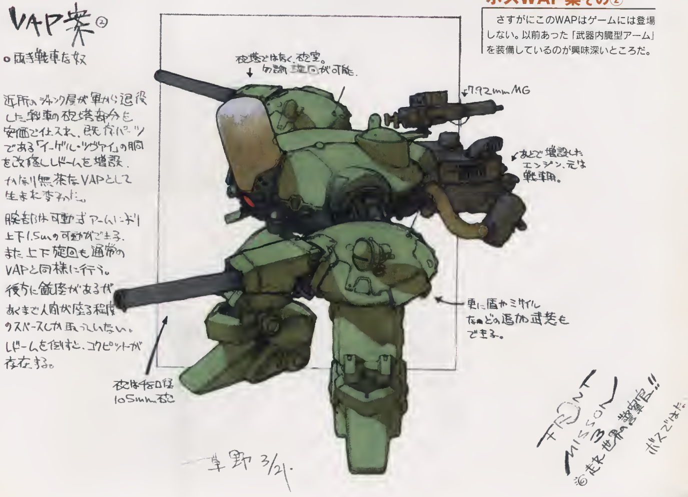
ボス専用WAP「Red1」案

これは呉龍のルドルフの愛機、シュネッケ社製の「グリレゼクス」の基となったものである。



ボスWAP案その②

さすがにこのWAPはゲームには登場しない。以前あった「武器内臓型アーム」を装備しているのが興味深いところだ。



イマジナリーナンバー部隊カスタムWAP

もう全身武器だらけで何やらスゴイことになっている、イマジナリーナンバー専用機。当然未登場。実は無茶な設定その他が面白かつたりする。



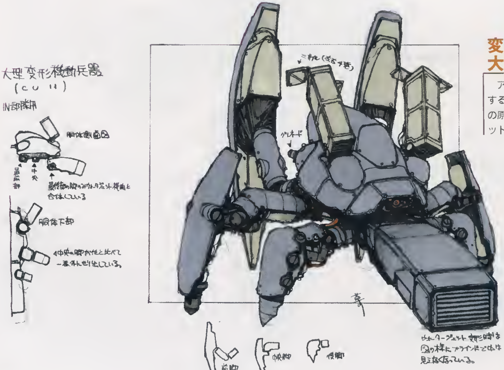
重装甲車typeWAP

これが装甲車や戦車でない証拠に、よく見ると真中あたりにちゃんとボディと頭部（ダミー）が見え隠れしている。未登場。



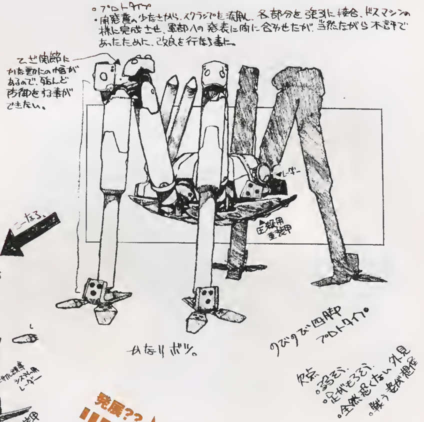
変形機構搭載大型機動兵器

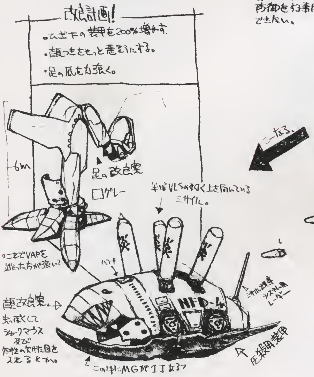
アリサ編の沖縄海洋都市にて登場する、上海鋼鉄公司の「香魚2型」の原形と思われる。ウォータージェットで水中移動も軽くこなす。



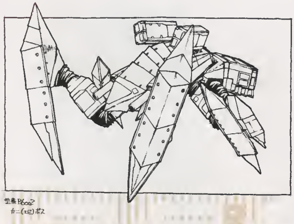
四脚大型機動兵器（プロトタイプ）

これは右下の「壁虎1型」の原型と思われる機体。設定にはただ「プロトタイプ」とあるのみ。ボディの顔や圧殺用装甲に名残が窺えるが…。



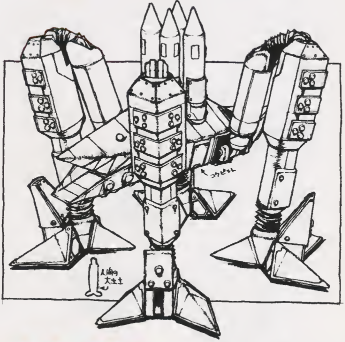


発展??



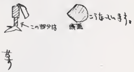
カニ型（エビ？）ボス

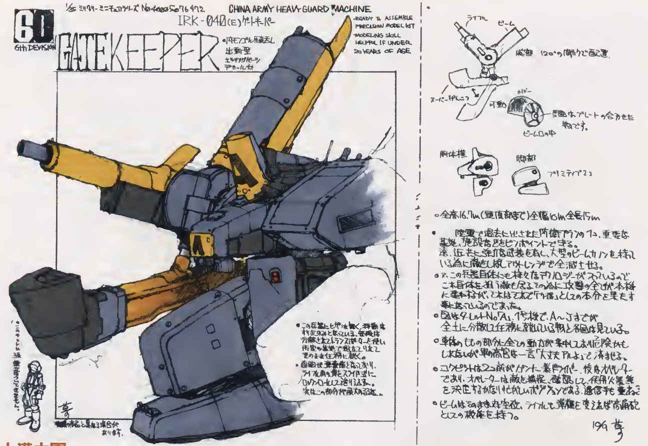
「カニ（エビ）ボスと名づけられた、プロトタイプ機体。とにかく、4足型のアイデアはたくさん作られたようだ。



大漢中軍「壁虎1型」

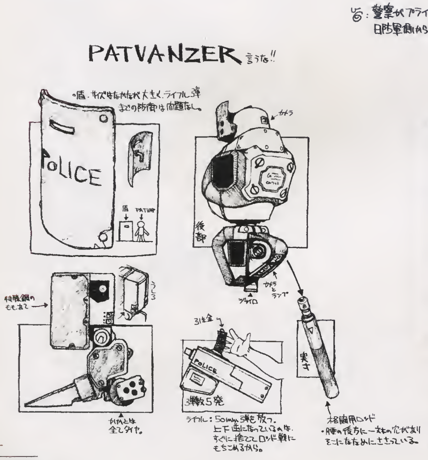
そしてこれがほぼ決定稿の「壁虎1型」。脚部の断面図が実はこんなことになっていたり、新たな発見がある。

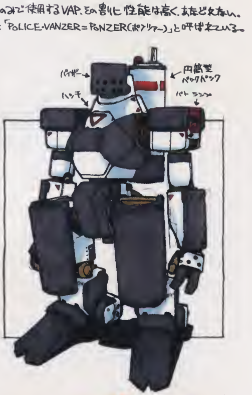




大漢中軍
大型機動兵器「黒洞3型」

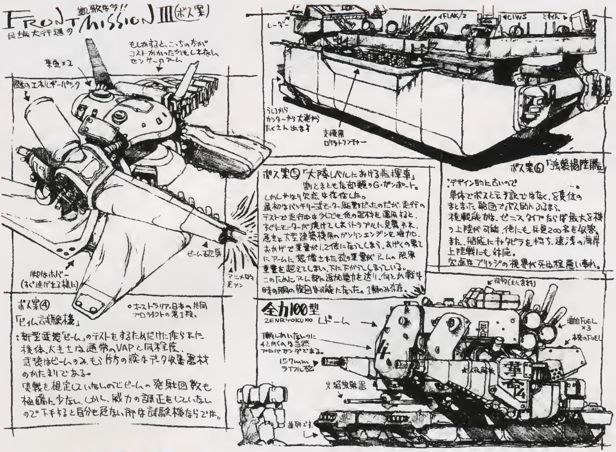
上海の街で和輝たちを出迎えた、鉄武帝公司社製「黒洞3型」の元設定。プラモデルのパッケージ風解説が面白い。





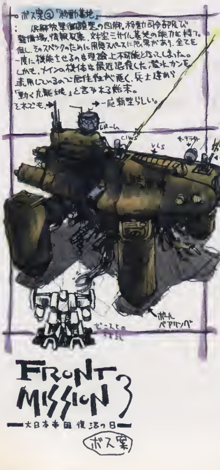
イグチ「108式強警」プロトタイプ

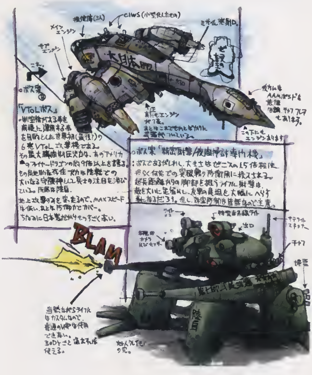
美穂が乗っていた日本警察仕様「108式強警」の基になっている機体。しかし、「ポンツアー」って…。



ボス案（超高密度版）6点

最後に趣味度MAXのボス設定をまとめて放出。この偏執的なまでの描（書）きこみをお楽しみ下さい。どうも草野氏は特に大漢中軍と日防軍に思い入れがあったのか、割と両者についての「濃い」設定が多く存在する。…気のせいでしょうか、草野さん。





front mission3

DEVELOPMENT PLATOON

フロントミッションサード　開発小隊

開発スタッフより

フロントミッション サード開発陣から
未来の戦場をかけ抜けた
全てのヴァンツァー乗りへ

名　前
担当
NAME
開発時のエピソード

ユーザーへのメッセージ

土田俊郎　ディレクター
TOSHIRO TSUCHIDA



「サード」は、準備段階でスタッフに対し意欲的に前作までの流れと異なるアイデアを求めました。ゲームとして完成させていくプロセスで隠れてしまったり、消えてしまった要素もありますが、その意欲を感じていただける作品にはなったかと思います。

結果的にかなりのボリュームになったので、多少詰めの甘い部分も今にして思えばあるのですが、それもこれも合わせて、触れてくれた皆さんがこの変化を「良し」と感じてくれればと思っています。

米坂典彦　シナリオ
NORIHIKO YONESAKA



「サード」は2本のシナリオで構成されていて、ボリュームたっぷりの作りになっています。そして、こんなにボリュームがあるのに、シナリオに書ききれなかったエピソードが実はまだたくさんあるんです。

あんなキャラの過去や、こんなキャラの思いなど、それはもう山ほど。調子に乗って長くなったため、泣く泣くカットしたエピソードもあります。でも、そのすべてを見せようと思ったら、それはもう、ものすごいことになってしまうでしょう。

だから、あとは皆さんの想像にお任せすることにします。どうぞ皆さんで「サード」の世界を広げていってください。

だって、物語は一つではないのですから。

岩崎秀雄　世界観設定／ゲームバランス調整
HIDEO IWASAKI



「セカンド」の開発中に直接床の上で眠ることを覚え、「サード」の開発でイスに座ったまま寝ることを覚えました。枕が変わると眠れなくなる私にとっては大きな進歩です。仕事中急に意識がなくなっていく感覚は、意外と気持ちの良いものでした。

でも、そんな眠りで見る夢は、ほとんど仕事の夢なんですけどね。やっぱり睡眠は自宅で取るに限ります。

「ハード」と言われがちな「フロントミッション」ですが、ゲームとしては極端に難易度が高いというわけではありませんので、気楽にプレイしてください。

堂本篤史　WAPデザイン／モデリング
ATSUSHI DOMOTO



今回は戦闘へのロード時間を短くするため、ポリゴンをかなり減らしたのですが、前回よりも絵的に落ちないようにするのに苦労しました。「セカンド」のヴァンツァーは頭部のないデザインばかりで地味過ぎると言われたので、今回は今までのテイストを残しながらアニメチックなラインを取り入れてみましたが、どうだったでしょうか？

ボリュームのあるゲームなので作業量は多かったですが、デザインなど結構好き勝手にやらせてもらえたので楽しい開発でした。

いろんな所にいろんな工夫をしています。ぜひとも「エマ編」「アリサ編」とも最後までやってみて欲しいですね。

草野裕朗　メカニカルデザイン全般
HIROAKI KUSANO



デザインを行うときに参考にする本が、大体の場合洋書なのでかなりお金がかかりました（自腹）。開発中に購入した資料本だけで月に数万円というお金が財布から消えていったので、インターネットをとうとう始めました。

財布からお金が消えるのがストップしましたが、銀行の口座からお金が消えるようになりました。

結果として「それほど」嘘はついていない兵器を考えたかな？　とは思っています。

普通に遊んではいけません。イカすセットアップにイカすスキルを組み合わせてください。ゲーム中に語られるストーリー以外に、自分の中できっとドラマが生まれますから。

仲井慎悟　サブキャラクターデザイン
SHINGO NAKAI



自分の力量以上の仕事を頂いたため、ディレクターの土田さんやグラフィックチーフの堂本さん、それに一緒に仕事をしてくれた石渡さんに本当に迷惑をかけてしまいました。

なんでも根性で越えられるものではないな、と感じています。

プレイしてくださって本当にありがとうございました。ネットなどでも皆様の反応を目にすることがありますが、びっくりすりような攻略方法や発想があって驚きます。

これからも、どうかよろしくお願いいたします。

佐藤光

ゲームシステム設計
KOU SATO



私が眠っていると、ほとんど行き倒れているように見えるそうです。ただ寝ているだけなので、ほっといてください（必要なときだけ起こしてくれればよろしい）。
　今回は例のすごいおやつがなかったわけですが、あのような素晴らしいシステムは復活させるべきでしょう。あと、修羅場になってから出社時間を早めるのはやめてください。

長すぎてごめんなさい。

佐藤泰弘

バトルシステム設計
YASUHIRO SATO



最近のゲームは絵に重点を置きがちですが、比重がそこになると読み込みが遅くなったり、爽快さが犠牲になります。このゲームは、ユーザーだけでなく開発者達にもプレイしていただきたいです。部屋から部屋へ移動で1秒…戦闘に入って2秒……パッド投げますよね？このゲームから何か伝わってもらえれば幸いです。
　最後に…、このゲームにはいろいろな思いが詰まっています。この思いはきっと届いたと信じています。

ゲームばっかりしてお母さんを怒らせちゃダメです。
　外で遊ぼう。外の世界も楽しいことで溢れているんだよ。

窪洋一

マップグラフィック
YOICHI KUBO



悶死者続出！
1つのマップでシミュレーション、バトル、イベントを動かすため、バトル部分の修正をすればイベント屋さんの悲鳴、イベント部分の修正をすればマップ屋さんの絶叫、といったぐあいに、開発初期はまさに阿鼻叫喚！　酒池肉林地獄！？
「サード」のアクションゲームばりのハイテンポなゲーム展開は、これら多大なる犠牲の上に築かれたのです…。合掌！

お買い上げ下さった皆様、本当にありがとうございます！　まだの皆様、敬遠されている皆様、これを遊ばずして2000年を迎えることはできませんよぉーっ！

小山田衛

WAP関連プログラム
MAMORU OYAMADA



「セカンド」まではマップや敵の思考の方を担当していましたが、「サード」でも担当を決めるとき…「小山田君は戦闘担当だよね」他のプログラマー達が、当然のことのように言い出した。「そんなー、一番文句が来るところだし、死んじゃうよー。アンタやれば？」と、小心者の私は心の中で泣き叫びつつ、引き受けてしまった。
　しかし、人間やればできるもので、なぜか完成してしまったようです。

まるで嫌味のごとく速くなった戦闘シーンばかり強調されていますが、ゲーム自体もシリーズ中最高の出来だと思います。
　色々な遊び方を見つけて楽しんでください。

赤座清敬

ネットワーク部分のプログラム
KIYOTAKA AKAZA



ネットワークはゲーム中あまり重要な意味はなく、まったく無視してもゲームをクリアすることができます。このようなおまけ要素をここまで作り込んでいるゲームも珍しいのではないでしょうか？　フォーラムの数だけでも100を超えてしまうくらいのボリュームなので、イベントデータを作っていた人たちはよく泊り込みで作業をしていました。
　開発中は他の人には別のゲームを作っているように見えていたと思います。私自身「フロントミッション サード」を作っている気がしませんでした（笑）。

今回のネットワークは、すべて見ようとするとかなりの時間がかかると思いますが、面白いフォーラムなどもあるのでがんばって見てみてください。

海老原信顕

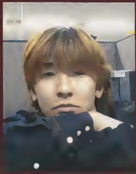
CGムービー
NOBUAKI EBIHARA



「セカンド」に引き続いて「サード」でもCGムービーを担当しました。今回も「フロントミッション」カラーというか「彩度」を追求し、ゲームの架空の世界を少しでもリアルに表現するために個々のモデルの質感、量感、スケール感にもことさら気を使いました。
　また、ムービー中のすべての物のレイアウトとライティングは、カット毎に相違が出ないように統一しました。地味な作業ですが、効果は確実に出ていると思っています。
　全体的に、絵的な見栄えの良さを損なわずに「リアルさ」をかもし出すことができたのではないかと思います。
　ユーザーの皆様、CGチーム全員の努力の結晶です。ムービーは飛ばさずに…。

越智光進

CGムービー
MITSUNOBU OCHI



こんにちは。今回CGムービーの製作を担当していた越智です。僕にとって今回のムービー製作は、初めてということもあって思えば思考錯誤の連続だったような気がします。
　主に僕が担当したのは、ヴァンツァーや背景などのモデリングとテクスチャ、任されたカットのレイアウトやパーティクルといった作業です。一応すべてにこだわりを持って製作したつもりですが、特にオープニングやエマが森を駆けて行くシーンなどは、僕の中で気に入っているところです。
　ユーザーの皆さん、先に進みたい気持ちは分かりますが、ぜひムービーのほうもじっくりゆっくりご覧になってみてください！

太田嘉彦

CGムービー
YOSHIHIKO OTA



プライベートを捨てて仕事をしたからでしょうか？　常に会社にいないと落ち着かない、そう「お前は社畜なのだ」そんな感じでした。
　また、辛いときにはマスターアップ前でも酒を飲みに行ってくれる特攻野郎ナイスガイが（たくさん）いたので楽しかったです。たとえ偉い人達と鉢合わせたとしても…。

とにかくがんばりました。ぜひ、たくさんの人に遊んでもらいたいです。
　ムービーも見てくださいね。

front mission 3
スクウェア公式 フロントミッションサード 設定資料集
PERFECT WORKS



STAFF

Editor in Chief
垣貫真和

Editor
青木基至
小林卓
木村輝彦

Editorial Staff
芳賀浩樹

Proofreeder
松本智春
佐藤治男
越塚正典

Product Menager
中村寛文

Writing
鳴沢猛司
下山繁

Design&Leyout
有限会社エストール
福永将行
石川朝臣

Cover Image Finishing
株式会社インタニヤ

Cheracter Illuatration
山田章博

Superviser
株式会社スクウェア
羽入田新
河本亜矢子

1999年11月20日　初版
発行人　染野正道
編集人　横田洋文
発行所　株式会社デジキューブ
東京都渋谷区広尾1−13−7　恵比寿イーストビル
TEL　03−3444−5765
FAX　03−3444−5940

印刷　大日本印刷株式会社

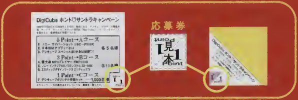
ISBN−4−925075−66−7　C0076

応募方法

キャンペーン期間中に発売される対象商品の書籍表紙カバー、サウンドトラック内アンケートはがきについている応募券を商品同梱のアンケートはがきまたは、官製はがきに貼付してコース名および希望商品名・住所・氏名・年齢・性別・職業・電話番号を記入の上応募ください。

*応募券のついた当社書籍および雑誌（月刊Play Online）・サントラが対象商品です。
*期間中、お一人様何口でもご応募いただけます。但し、はがき1枚につき1口の応募とさせていただきます。
*商品の色の指定はできません。
*このキャンペーンの当選者は、同時期に実施されている同製品を対象とした他のキャンペーンおよび、このキャンペーンでの複数の賞の重複当選はできませんので、あらかじめご了承ください。

サントラおよび書籍についているこの応募券を貼付してください。



発表

商品の発送をもって当選の発表とします。抽選・商品発送は2月下旬となります。

宛先

〒150-8681 東京都渋谷郵便局留め「DigiCubeホント♥サントラキャンペーン係」まで

お問い合わせ先

☎03-3444-5771 （月〜金 11:00〜17:00 祝祭日はのぞく）（ゲーム攻略についてのお問い合わせは、ご遠慮ください。）

発売予定対象商品

FITHOS LUSEC WECOS VINOSEC ファイナルファンタジーVIII オーケストラ・バージョン
11月20日発売
価格/2,718円（税別） 2ポイント



ファイナルファンタジーVIII ペーパークラフトブック
11月20日発売
本体価格/2,500円（税別） 2ポイント



デュープリズム オリジナル・サウンドトラック
11月20日発売
価格/2,718円（税別） 2ポイント



フロントミッション サード パーフェクトワークス
11月20日発売
本体価格/3,500円（税別） 3ポイント



月刊Play Online 1月号
11月24日発売
定価/980円（税込） 1ポイント

クロノ・クロス ポスターブック
12月初旬発売予定

クロノ・クロス オリジナル・サウンドトラック
12月18日発売
価格/3,204円（税別） 3ポイント

クロノ・トリガー オリジナル・サウンドトラック
12月18日発売
価格/1,942円（税別） 2ポイント

パラサイト・イヴ2 オリジナル・サウンドトラック
12月18日発売
価格/2,718円（税別） 2ポイント

チョコボスタリオン 攻略本（仮称）
12月発売予定

チョコボコレクション 攻略本（仮称）
12月発売予定

クロノ・クロス 設定資料集（仮称）
12月24日発売予定

月刊Play Online 2月号
12月24日発売
定価/980円（税込） 1ポイント

パラサイト・イヴ2 完璧攻略本（仮称）
1月27日発売予定

月刊Play Online 3月号
1月24日発売
定価/980円（税込） 1ポイント

クロノ・クロス アルティマニア
1月31日発売予定